

山岳時報

時 報

No. 9

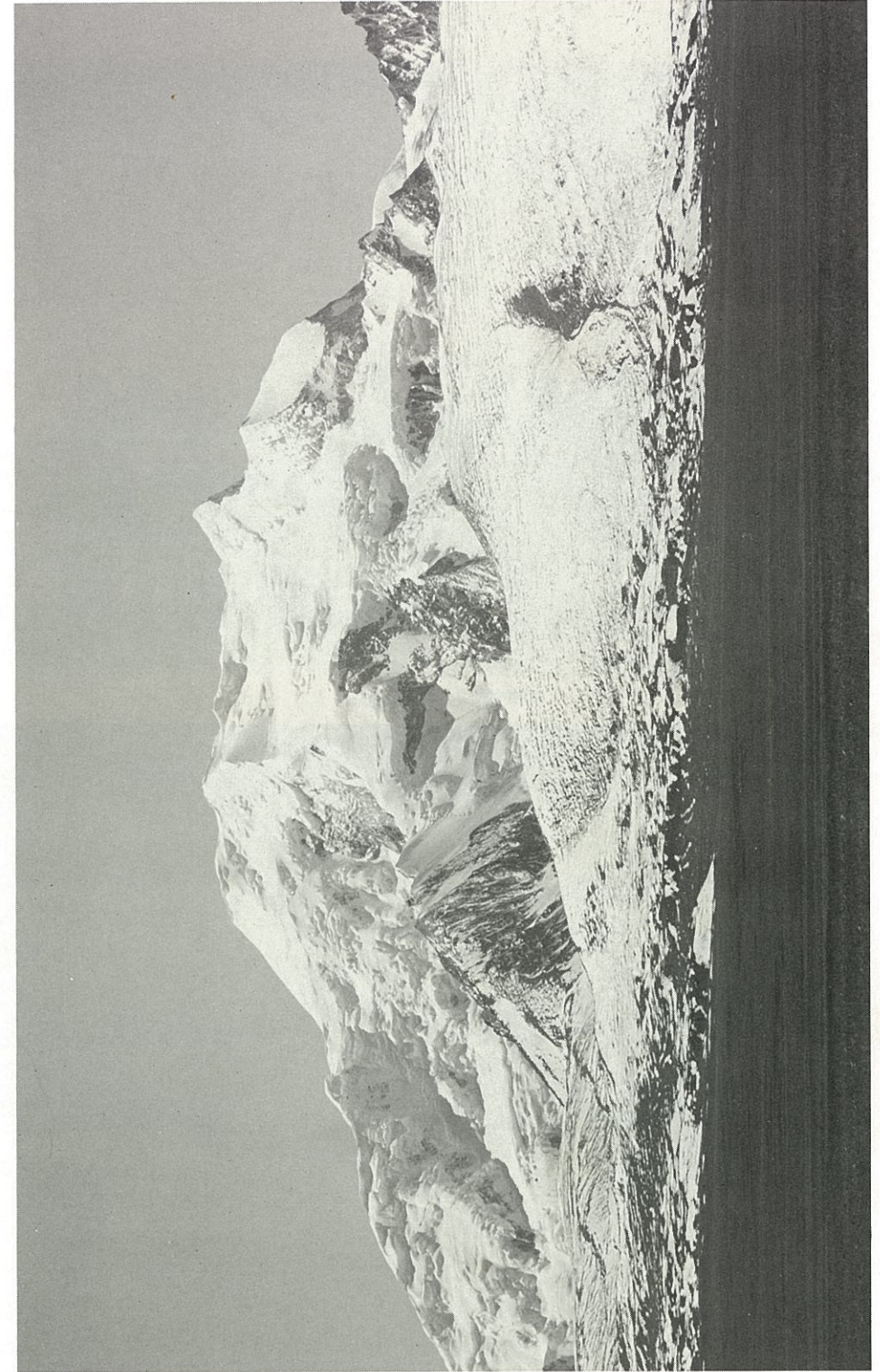
1982年9月

京都大学学士山岳会

目 次

巻頭言ー50周年に続くもの	近藤 良夫	1
AACKの動きーヤルンカンからカンペンチンまで	酒井 敏明	2
AACK 50周年「物故会員追悼式」,「記念祝賀パーティ」報告		9
京都大学学士山岳会チベット高原学術登山隊 カンペンチン(康彭欽)峰初登頂報告		10
Ⅰ チベット高原学術登山隊の成立	西山 孝	11
Ⅱ カンペンチン峰初登頂記録	森本陸世, 人見五郎	15
Ⅲ 装備報告	近藤 裕史	26
Ⅳ 食糧報告	中川 潔	38
Ⅴ 輸送報告	幸島 司郎	41
Ⅵ 中国登山の経費交渉について	牛田 一成	44
Ⅶ 通訳所感	陳 介臣	45
Ⅷ 医療報告	松林 公蔵	46
Ⅸ 気象中間報告	陳 介臣	50
ランタン・リと蘭塔山	横山宏太郎	57
チョモランマ登山をふりかえって	斎藤 惇生	65
ビスン・ピーク登頂 ー1980年京都大学山岳部ネパールヒマラヤトレッキング チームに参加して	太田 岳史	73
22回目の南極観測	井上 治郎	81
日本ブータン友好協会の成立をめぐる ーAACK会員とブータンとの交流の歴史	栗田 靖之	88
日本登山医学研究会の紹介	中島 道郎	91
ゴアテックスについて	安田 武	94

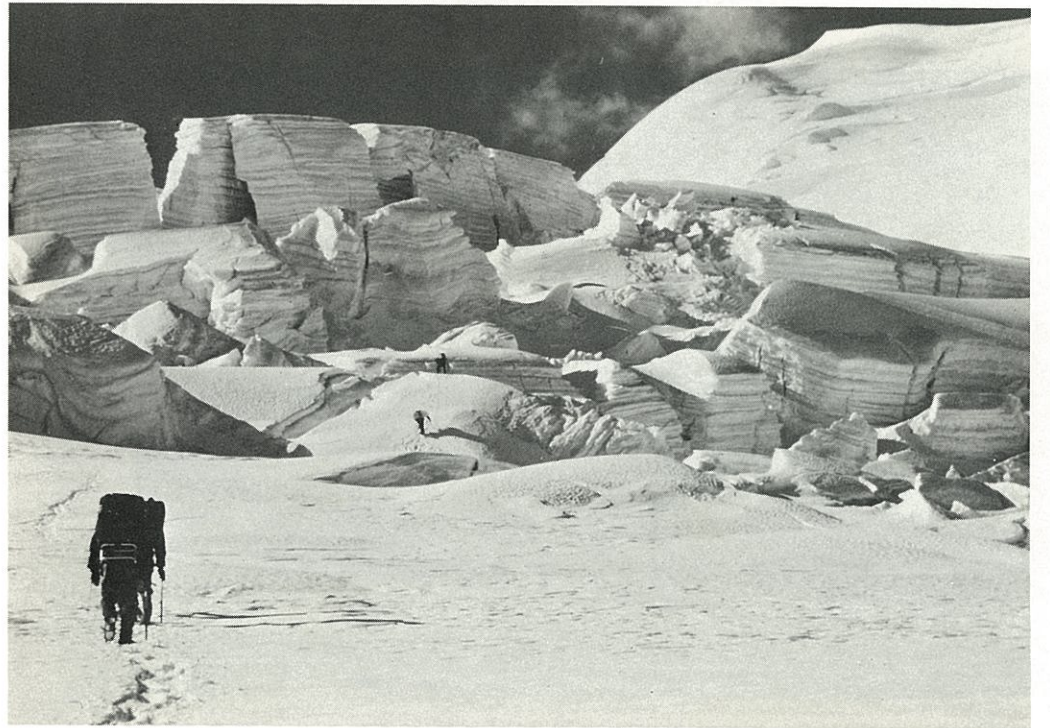
ーこの表紙の“AACK”の文字はカスティラオによってイタリア語に訳され、セビリアにて1503年に出版されたマルコポーロ著「東方見聞録」より採写したものである。
ー京都大学図書館蔵ー



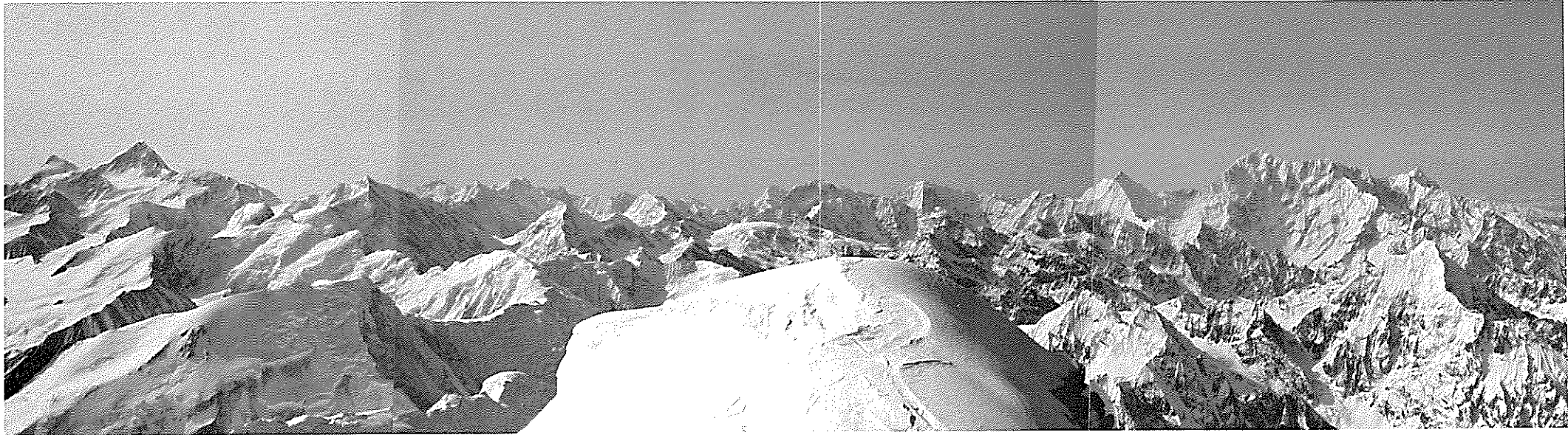
カンペンチン(康彭欽)峰 7281m



カンペンチン峰登山隊員と中国側隊員（ベースキャンプにて）



C1よりセラック帯を行く 右上が頂上



モラメンチン
シシャパンマ

ランタン・リ

頂上よりヒマラヤ山脈を臨む

キムシコン

ランタン・リルン



頂上よりチベット高原を臨む(中央がペグ湖)

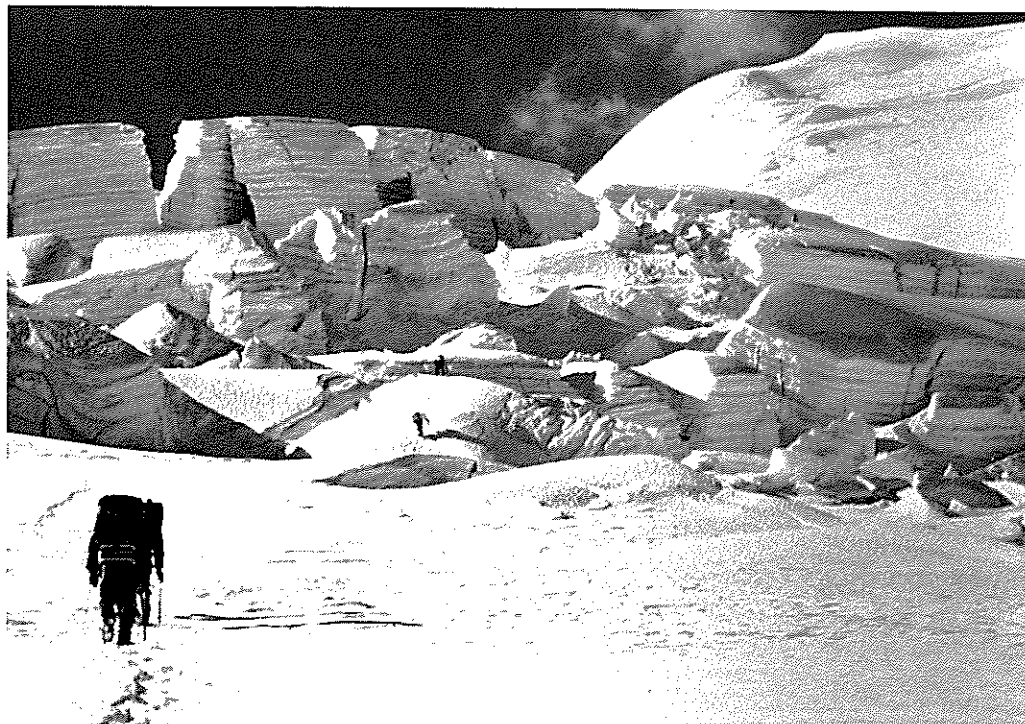
↑
BC (矢印の交点)



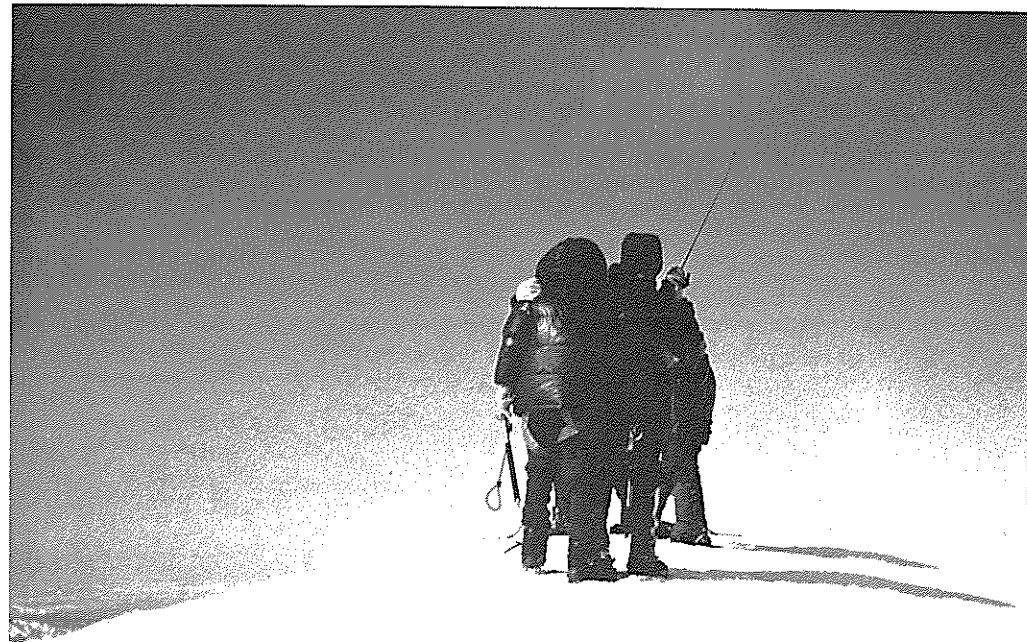
カンペンチン峰登山隊員と中国側隊員（ベースキャンプにて）



7100 mのサポートキャンプ（左端）



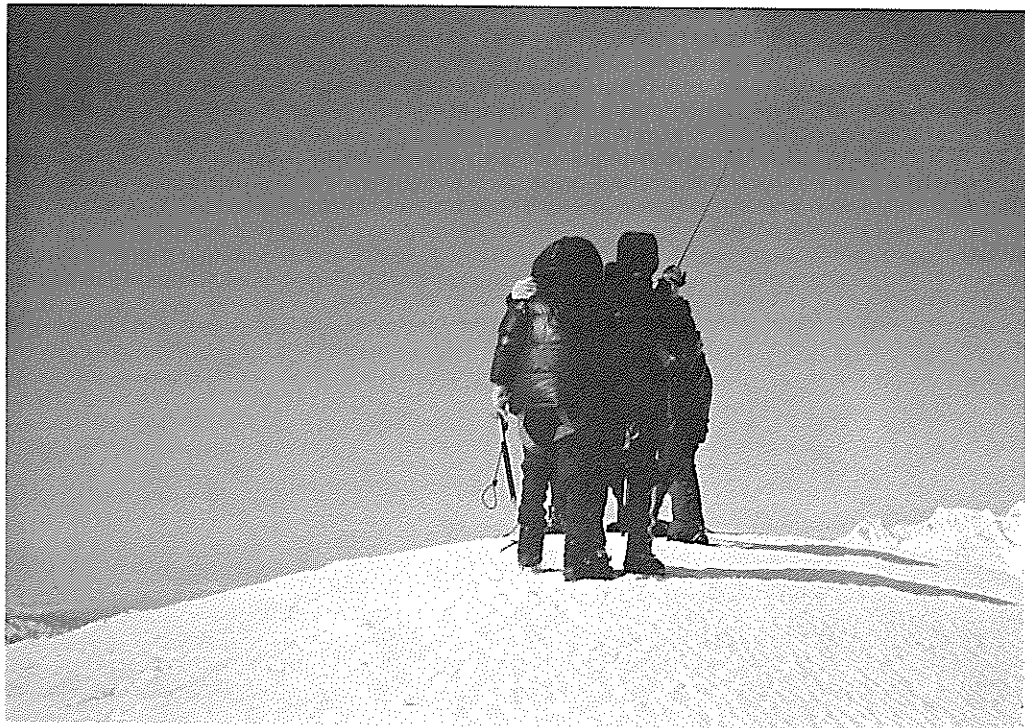
C1よりセラック帯を行く 右上が頂上



頂上より初登頂の報告をする第一次登頂隊員

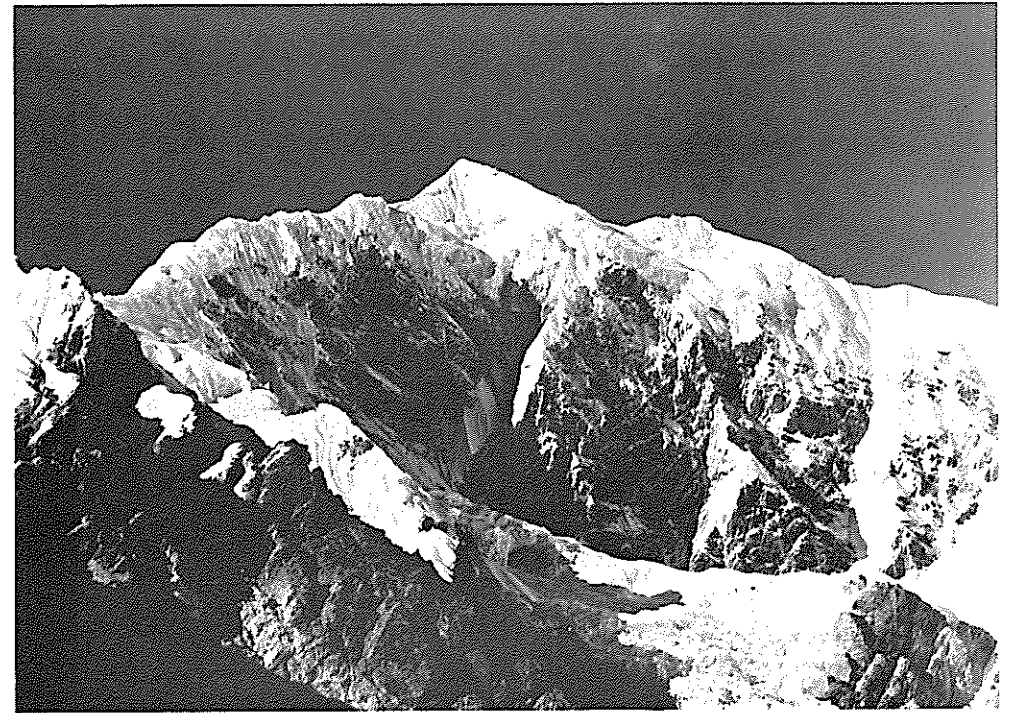


7100 mのサポートキャンプ(左端)

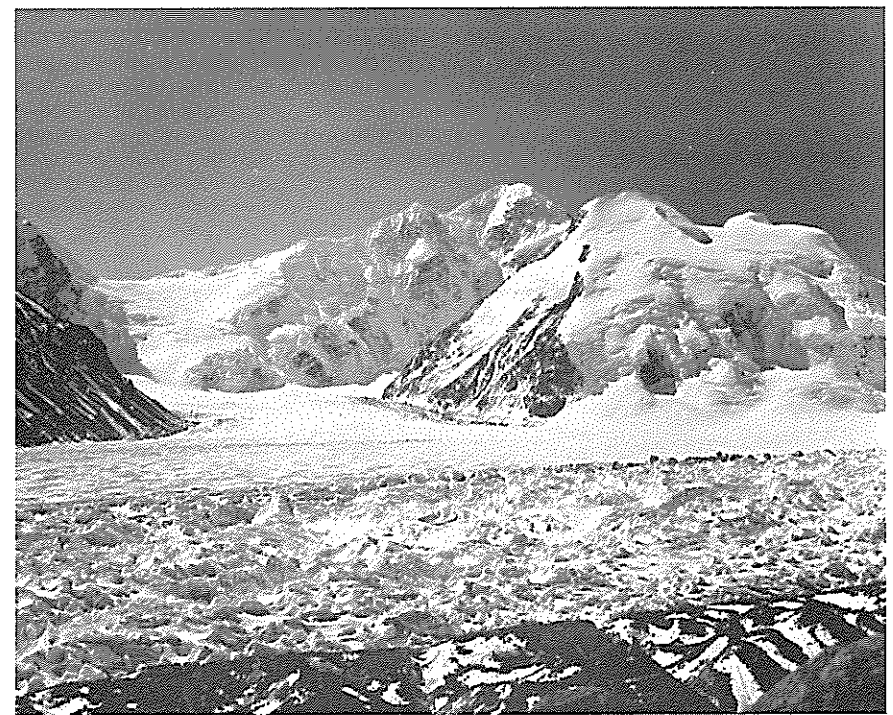


頂上より初登頂の報告をする第一次登頂隊員

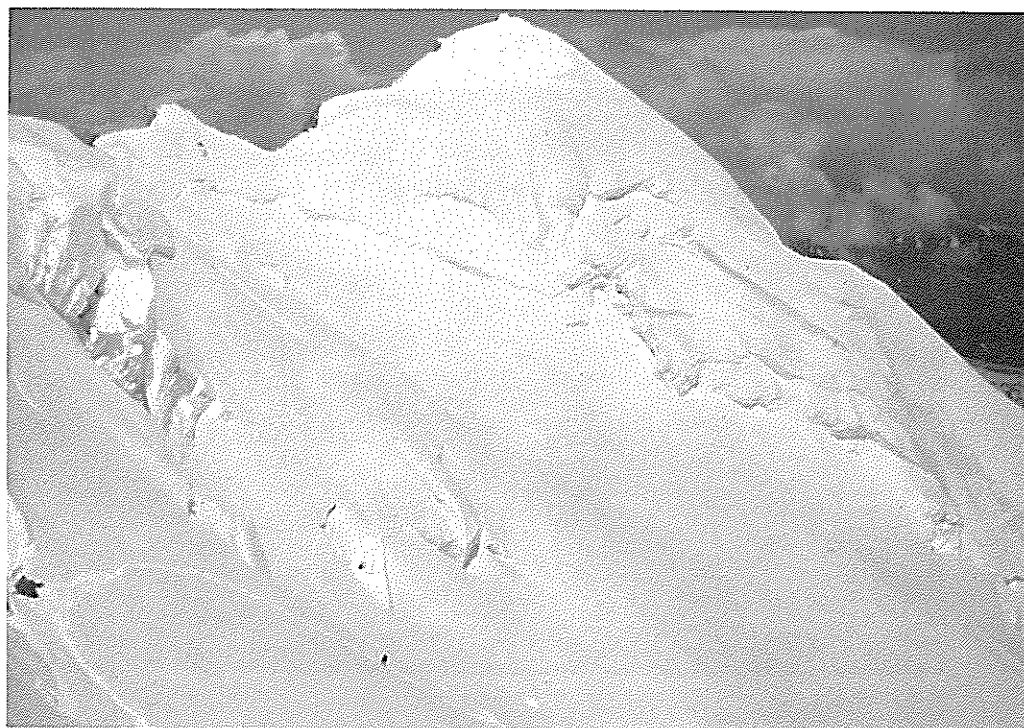
「ランタン・リと蘭塔山」より



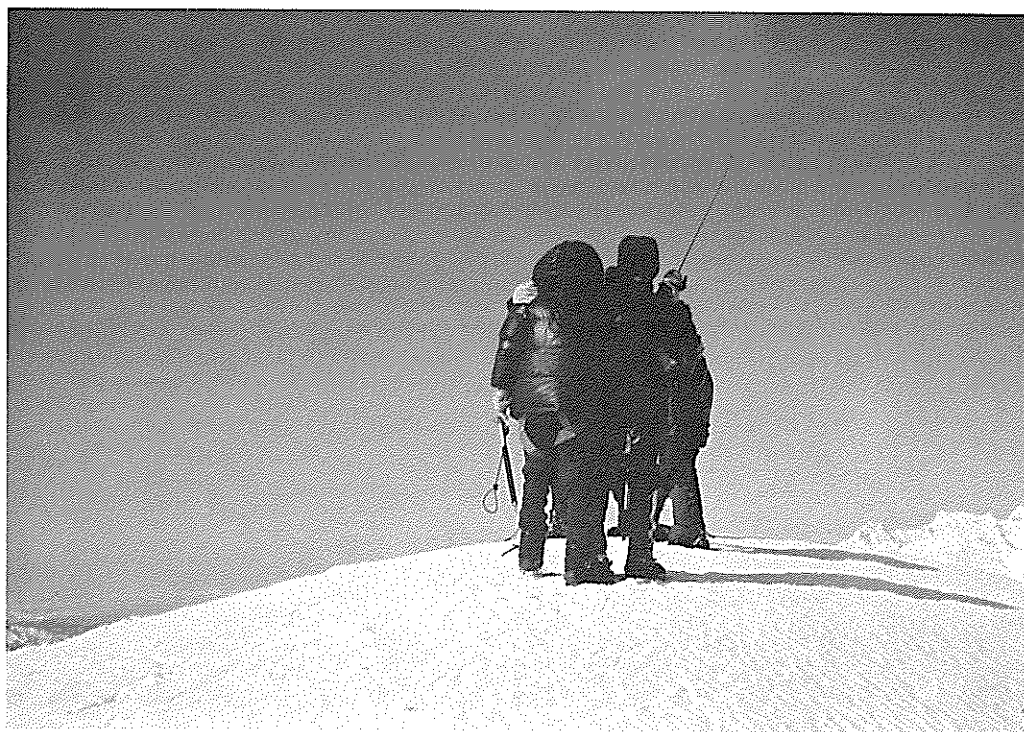
ネパール側からのランタン・リ(ランタン氷河約5000 m地点より)
左が南西稜、右が東稜



チベット側からのランタン・リ(蘭塔山)
(ダジ氷河左岸約5600 m地点より)

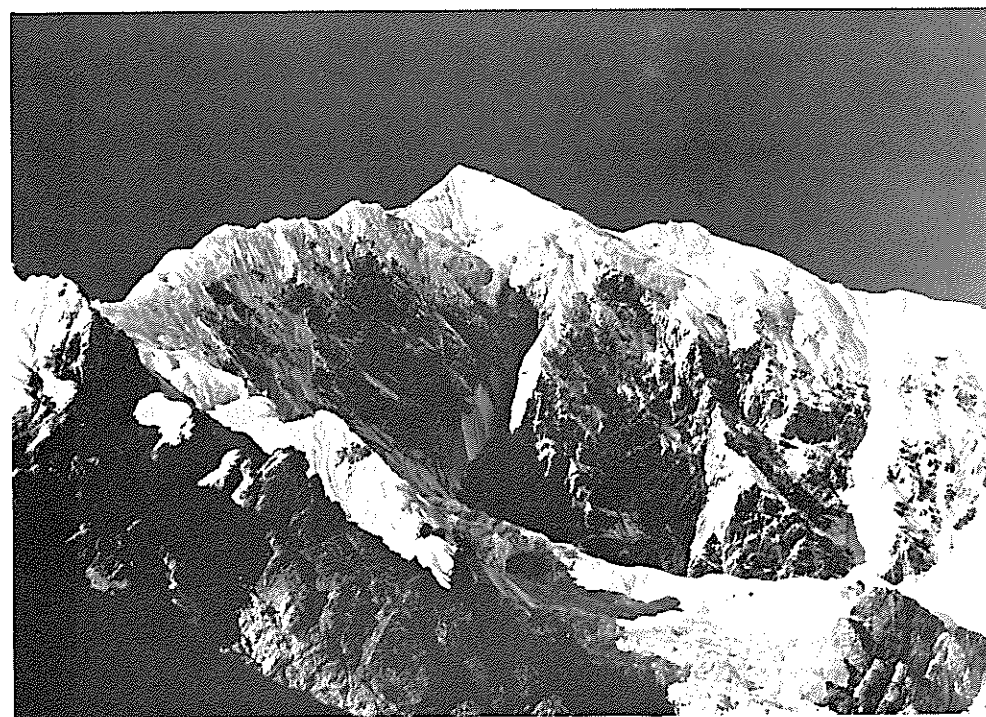


7100 mのサポートキャンプ(左端)

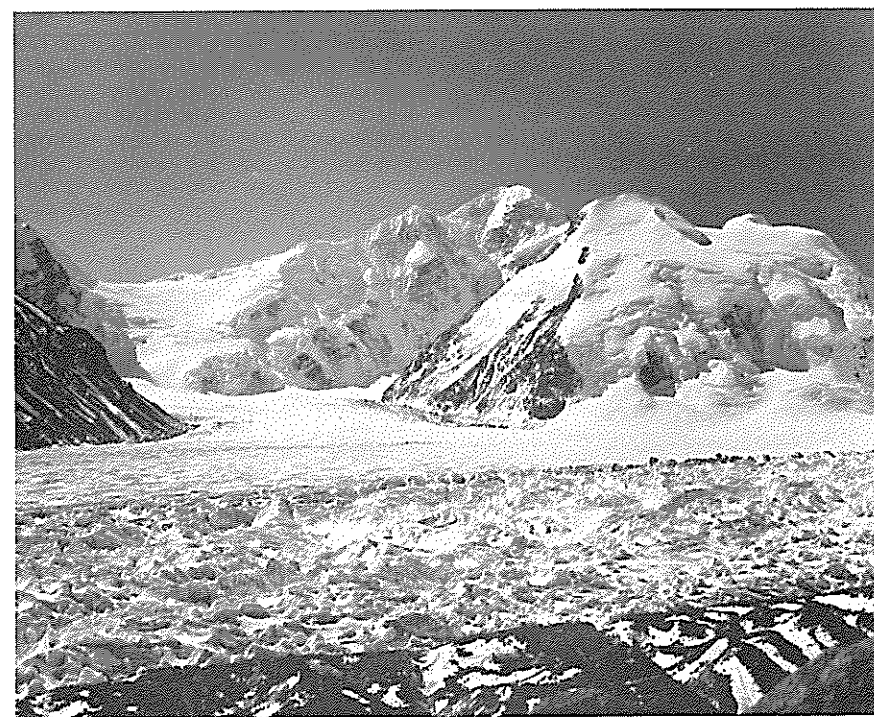


頂上より初登頂の報告をする第一次登頂隊員

「ランタン・リと蘭塔山」より



ネパール側からのランタン・リ(ランタン氷河約5000 m地点より)
左が南西稜、右が東稜



チベット側からのランタン・リ(蘭塔山)
(ダジ氷河左岸約5600 m地点より)



やまと山脈を行く旅行隊



みずほ基地に集結した雪上車

— 巻頭言 —

50周年に続くもの

京都大学学士山岳会

会長 近藤 良夫

四手井綱英前会長の後を継いで、創立以来の輝かしい伝統をもつ本会の会長を勤めることになったのは、1975年春の総会においてであった。以前から今西錦司大先輩には「近藤には長丁場を歩いてもらわなければならない」と指導を渡されてはいたが、今日まであまりなすことなく、7年間にわたって会長の席をけがしている。

会長就任の当時は、AACK創立以来はじめてと言ってもよいヤルンカンに続くK12隊の遭難直後であったので、会長の第一の仕事はこの事態を收拾するための徹底的な事故原因の究明とその対策にあてられた。さっそく事故調査委員会が編成され、若い会員諸君を中心とする献身的な努力によって、これらの検討結果は1975年9月に会員諸氏に配布された「K12事故調査報告書」にまとめられている。この報告書は今後のAACKのすべての遠征にあたって頂門の一針となすべきものである。

その当時は学生部委員会委員などで多忙を極めたが、その忙しさはさらに工学部選出の評議員などの数年間へと続いた。

AACKは1980年に創立50年を迎えた。その記念事業として会員諸氏からも種々の提案があり、これらについて理事会で検討した結果、次のような事業を行うこととした。

1. 物故会員の慰霊祭と創立50周年記念パーティの開催
2. AACK 50年史の編集出版
3. 中国チベット高原学術登山隊の派遣

これらのうち、1.は1980年11月16日の午後には御遺族を迎えて慰霊祭が楽友会館で、また同日の夕刻には京都ロイヤルホテルで記念パーティがJAC会長三田幸夫氏ほか多数の来賓を交えて盛大に挙行された。また2.については会員の斉藤清明、酒井敏明、平井一正の3君によって準備が進められつつある。

さて、AACKは1974年のK12峰遠征以来、海外へ大きい遠征隊を送っていない。さきに述べたように遭難があったとはいえ、このことは従来AACKとしては異例のことである。またそのため、かつての遠征経験者は年とともに高齢化しつつある。このような壁を打ち破るために、われわれはチベット高原への遠征隊の派遣を数年前から真剣に検討しはじめた。

最初にわれわれが目標としたのはチベット自治区南西部にそびえる未踏峰グルマンダータであり、登山班と学術班から成る遠征隊を派遣しようという計画をたて、その実現に努力を注いだ。もっとも文化大革命が終息したとはいえ、中国側のこの計画に対する受入れ体制は整わず、この計画の実現までにはなお数年を要すると判断された。しかし、われわれは漫然と手をこまぬいてこの数年を待つわけにはいかない。すでに開放されたチベット高原の奥深くにまでは行きたい。

このような配慮から、われわれはチベット自治区開放地域のうち、もっとも西に位置する未踏峰カンペンチン(康彭欽、7281m)を選び、同峰の登頂とその周辺地域における学術調査を中国登山協会に申請し、その好意によって許可を得ることができた。こうしてチベット高原学術登山隊は1982年3月14日に日本を発ち、幸いにも同4月21日、22日の2日間にわたって延べ11名の登頂に成功し、さらに同地域において種々の学術調査を行った。それらの成果は近く報告書にくわしく述べられる予定である。

さきに述べたように、この学術登山隊は本会から最初にチベット高原へ派遣された隊であり、グルマンダータへの道を拓くためのものでもあった。今回この学術登山隊に関係された多くの若い会員の絶えざる努力によって、AACKの今後の計画が着実に実現されるように心から希望したい。

1982年6月

ヤルンカンからカンペンチンまで

酒井敏明

1. 五十年史編集のために

本誌創刊号は1962年3月に刊行された。当時はAACKが会創立30年を迎え、チョゴリザ・ノシャック両峰初登頂のあとをうけ、サルトロカンリ遠征隊を送り出していた時であった。北村泰一「AACKの30年—その1」はこの創刊号にあり、平井一正「同—その2」が第3号に、岩坪五郎「同—その3」が第5号(66年6月刊)に続いた。その後20年の歳月が経過し、本会は一昨1980年に創立50年の歴史を祝い、記念集会と祝賀会を催したのである。記念山行の計画は幾分形を変えて、今年4月の中国チベット高原カンペンチン初登頂となって実を結んでいる。『学士山岳会五十年史』(仮称)発行の企画もまた数年前に樹てられた。準備の会合は数回おこなわれ、構想もある程度固まっているのに、実際の進行がおこなわれていることについては、編集責任の一端をになう私は各位に対して深くお詫びしなくてはならない。ここには、前記各稿に続くヤルンカン以降の時期における会の動きを略述し、現在にいたるチベット計画の経緯を記しておきたい。

本会半世紀の記念出版は次の内容を含む歴史叙述を主体とし、これに写真・年表・地図・文献リストを添える予定である。

A AACKの創立まで 会創設の原動力となり、結成に直接参画した先輩たちの学生時代からの活動と、創設の経緯を記すもの。三高山岳部や京大旅行部の動きを含めて、その一端は前掲北村や平井によって描かれている。

B 創立から第二次大戦まで カブルー計画(1932年)とK2計画(1937年を予定)はともに日の目を見るに到らなかったが、極地法による積雪季富士山登頂や白頭山遠征(1934年)がおこなわれた。国内外の情勢はヒマラヤ、カラコルムへの道を閉ざしたが、この時代に会員たちの足跡は、樺太、北千島、モンゴリア、大興安嶺、ポナベ島などの各地に及び、独創的な踏査や学術的価値の高い調査を生みだすことになった。前掲平井はその大要を記している。

C 再建と雌伏の時代 戦中から敗戦にかけての混乱

はもちろん日本全体のものであったが、多くの会員をとりまいた社会環境もきびしいものがあり、会自体は一種の休眠状態に陥って、言うに足る業績を残していない。学制改革によって京都帝国大学は京都大学となり、そこに創設された山岳部は閉店休業のAACKに若い活力を注入した。経済の復興と講和条約の締結を背景に、FFの誕生(1950年)や西堀栄三郎のネパール入国(51年)があり、戦前と戦後の二つの世代の会員が力を合わせて、次の開花を準備することになる。前掲岩坪がのべるところである。

D ヒマラヤ・カラコルム・ヒンズークシュ遠征 マナスル計画が日本山岳会に移譲されたのち、1953年に本会最初のヒマラヤ遠征隊はアンナプルナ山群を目指した。アンナプルナⅣの頂上は不運にも逸したが、その経験を踏まえた会員たちの企画と実行力は5年後にカラコルムのチョゴリザ初登頂となって花を開いた。ノシャックとサルトロカンの初登頂があいついでかちとられた。5年間に初登頂3座に成功という成果は、他の山岳会に見られないのではないのか。次の遠征の目標は、おのずから8000m級の、しかももちろん未踏峰に求められることになった。そして、カンチェンジュンガ山群にあり、高度世界第4位のヤルンカン8505mに取組むことが決定された。同峰の許可は1964年に与えられ、ただちに65年プレモンスーンの遠征隊が準備されたが、事情あって取消された。ついに1973年にヤルンカン初登頂に成功したが、登頂隊員1名を失うという大きな犠牲を強いられる結果となった。

E 中国の山、そしてその先 未登の山の初登頂とその山城の学術調査、これは本会創立以来かわらぬ目的であった。世界中の登山者が初登頂を目指してあいついで遠征隊を繰りだし、盛況をきわめたこの30年である。AACKにとって好個の目標を見出すことはますます容易でなくなっている。永年にわたって外国人に閉鎖されてきた中国の山が舞台の前面に登場してきたのは、自然のなりゆきであろう。理事会はあらたに発足させたチベット委員会の建議にもとずき、50周年記念行事の一環として、グルマングータ計画を樹てるにいたったのであ

る。本会の許可申請に対し、中国当局は現在のところ未開放の山であり、許可することはできないという。外国隊に対し開放山群を徐々にふやしていこうとする中国には、今や諸外国から登山の希望が殺到している。AACKとしてもグルマングータの解禁を無為のうちに待つことはできないので、当面の目標を急速ランタンリ、次いでカンペンチンに設定した。昨秋の偵察隊に引き続き、今春学術登山隊を送ったのである。グルマングータの許可取得は容易ではなく、その努力は今後も続けられるであろうが、AACKの進むべき道をいかに考えればよいのであろうか。

F 会員の広く多彩な活動を追って AACKが主催したものではなく他の組織体が立案し実施した各種事業において、個々の会員が重要な役割を演じ、あるいは独創的多彩な活動を繰りひろげてきたこと、これは特記しておく必要があろう。学術探検の系譜に入るものに、カラコルム・ヒンズークシ(1955年)、南極観測(56年～)、プータン(58年)、西イリアン(63年)など、登山に力点が置かれたものに、インドラサン(62年)、ガネッシュ(64年)、K12(74年)など、多くの例がある。アフリカ学術調査(58年～)、東南アジア学術調査(61年～64年)、ヒマラヤの氷河調査(74年～)などは、本会会員を除外してその成果を論ずることは、むずかしいのではないだろうか。わが五十年史は、個々の会員が会の外側においてなした活動を、細大もらさず収録することはできないであろう。その主要なものは、しかしながら、これを包括し、適切な評価を与え、記録に留めておくことが望ましい。

2. ヤルンカンとそれ以後

サルトロカンリ遠征終了後次の計画の検討をはじめたわれわれの前に、未登の最高峰、カンチェンジュンガ西峰の名で知られていたヤルンカンが姿を現わした。64年春にネパール政府に許可申請、同年8月65年プレモンスーン季の許可取得という幸先の良いスタートは、幸事魔多しというのか、2カ月後に許可が取消されるという予期せぬ事態にたまずいた。詳細は『ヤルンカン』の記述にゆずるが、あらゆる機会をとらえて許可取得のためにネパール政府当局と粘り強い交渉を続け、67年には樋口明生と松田隆雄が登頂ルートの偵察、輸送事情の調査のために、ヤルン氷河に入った。ついに71年10月に許可書の交付を受ける。アプローチの長い山であった。

西堀栄三郎隊長以下15名のヤルンカン遠征隊は73年3月27日ベースキャンプを建設、5つの高所キャンプを経て、ようやく5月14日松田隆雄と上田豊は困難な登高の末頂上に立つことができた。しかし、ビバーク後下山

の途中松田は行方不明となり、必死の捜索救助活動も空しく、われわれは仲間の中から尊い犠牲者を出すことになったのである。

翌74年6月岩坪五郎は京都市山岳部カラコルム遠征隊を指揮し、K12峰に向かった。ヤルンカンにおいても高所で活躍した高木真一は山岳部員伊藤勤とともに、8月30日7473mのK12の頂上を初めて踏んだが、帰途2人は行方不明となった。K12隊はAACKの弟分ともいべき京大山岳部が派遣したものであるが、隊長をはじめ会員3人が参加している。67年の偵察隊や長期にわたった準備全般に人一倍の頑張りを見せた松田が、ヤルンカン登頂後に不帰の人となった事故のあとをうけ、かれの鎮魂のための山行という意味をもつ、K12遠征であった。

この2年連続の遭難が会員のあいだに相当重度の後遺症を残したことは、理解できるであろう。事故の分析と原因の究明がおこなわれ、対応策と研究課題が論ぜられたことはいうまでもない。

このあとしばらくのあいだAACKの活動はある程度停滞せざるを得なかったし、確固たる目標を定めることができなかつた。若手会員のあいだから気運がようやく盛りあがってくると、接近が比較的容易で経費も安く、登攀の対象としても手頃な7000m級未踏峰が論議された。一方で、現役山岳部員が独自に遠征登山を構想する場合には、会員は積極的に協力すべきであるとされた。AACKが一定の活力を保持するためには、若い海外遠征経験者を継続して養成することが是非とも必要である、ということになる。このような事情を背景としてネパール中央部のランタンリ7239m計画が浮上し、許可申請することに決定したのは1976年である。ただしこの山は中国との国境線上に位置し、登山禁止地区に入っていた。

3. チベット計画をめぐる

中国内陸にある未踏の山群はずっと以前からわれわれの関心を引きつけてきたところである。すでに1955年という早い時期に、桑原武夫が日本学術会議代表団の一員として中国を訪問した際、郭沫若氏宛の手紙の中で本会のこの強い希望を表明し配慮を要請したことは、その一つのあらわれであろう。ただ、当時から20年近くもの長期にわたり、中国の国内情勢も中国をとりまく国際環境も、われわれの夢を現実のものとするには厳しすぎたのである。72年に日中国交正常化が成ったのちは、遙かなる憧憬に留まっていた中国の山は実在感をもってわれわれに迫ってきたし、日中平和条約(78年締結)が議事日程にのぼってくると、両国の学術団体相互間に代表

団の交換もはじまり、機運もますます高まってきた。中国の山をわれわれが本格的に話題にのぼらせはじめたのは、77年ころからであろうか。

ある旅行会社からの示唆もあって、駐日大使館を訪れたり、中国科学院、中国登山協会(CMA)に手紙を出して、先方の対応を探り情報を集めていった。桑原武夫、近藤良夫など幾人も会員がさまざまな資格で訪中団に参加した折には、遠征隊派遣のための手続を尋ね、許可のための支援を依頼した。一方、京都を訪問する中国の学術研究者代表団には努めて接触した。例えば施雅風、蘭州冰川凍土研究所長の京都来訪に際しては、歓迎会を催し意見の交換をした。

最初の許可申請書は79年1月に大使館に提出した。対象地域として具体的に記したのは、イ. 瓜拉曼達塔山(グルマンダータ) 7728 m, ロ. 鳥魯木孜塔格山(ウルグムスターグ) 7742 m, ハ. 庫拉山(クーラカンリ) 7553 m など6座である。その後対象をグルマンダータにしぼり、隊の構成は隊長近藤良夫他25名とし、学術調査の分野を明記したものに改め、80年5月1日付で再提出している。

外国隊に中国の山を開放する第一弾として中国登山協会が日本山岳協会を通じて日本山岳会(JAC)にチョモランマ登山を許可することに決定したのは79年7月であった。JAC 会長西堀栄三郎の推薦で、同年秋の偵察隊に斉藤惇生、横山宏太郎の2名の参加が決まった。かれらは登路偵察の使命を完うしたことはないが、物資の調達・輸送や高所協力隊員など中国の登山事情を正確に理解し、CMAの幹部の面識を得ることができたのは、われわれにとり大きな収穫であった。80年の本隊には西堀総隊長のほか、斉藤、横山、甲斐邦男の4人が参加した。JACのチョモランマ遠征のことはここでは割愛させていただくが、AACKとしてはわれわれの計画実現に大きな一歩を踏み出すことができた。

同年9月中国登山友好代表団として喬加欽団長、史占春副団長ら6氏が訪日されたが、一夕京都で歓迎会を催し、今後の末永い友誼を祈念した。席上グルマンダータの許可について一層の配慮を煩わしたい旨、直接希望する機会があったのは申すまでもない。

CMAは79年9月20日付で外国の登山家に次の8山群を開放した。

イ. 珠穆朗瑪峰	8848 m	エヴェレスト
ロ. 希夏邦馬峰	8012 m	ゴサインタン
ハ. 幕士塔格山	7546 m	ムスターグアタ
ニ. 公格尔山	7719 m	コングール
ホ. 公格尔九別峰	7595 m	コングールチュピエ
ヘ. 博格達峰	5445 m	ボグダ

ト. 阿尼瑪卿峰	6282 m	アムネマチン
チ. 貢嘎山	7255 m	ミネアコンガ
リ. 喬戈里峰	8611 m	チョゴリ・K2
ス. 布洛阿特峰	8047 m	ブロードピーク
ル. 加舒尔布魯木山	8068 m	ガッシャーブルムⅠ
ヲ. 加舒尔布魯木第二峰	8034 m	ガッシャーブルムⅡ
ワ. 四姑娘山	6250 m	スークーニャン

『日中文化交流』314号(82年2月5日)の記事によると、81年に中国を訪れた外国登山隊は29、トレッキング隊は34を数えたという。今年は日本からの9隊を含め登山隊30、トレッキング隊52が予定されているという盛況である。

グルマンダータが開放できないのは輸送・宿泊施設など受入態勢が未整備なため、このような山群は態勢が整えば順次開放する、というのがCMAの方針とされている。ただし、先の数字が示すように、「世界のアルピニストがねらう中国の山々」である以上、開放の暁に必ずAACKが許可されるという保証は今のところない。事実、他の日本隊が同峰の許可を申請しているのである。とにかく、絶えず中国と接触を保ち、良い関係をつくっておく必要がある。

8座開放という新しい事態を迎え、確実に許可の得られる山を選んでこれに実際登頂することによって、CMAに対する実績をつくるとともに、若手の経験者をふやしておきたい。なるべく早い時期に学術登山隊を送り出そうという結論が出たのである。コングールやミニヤコンカの案も出なかったわけではないが、最終的にはシヤパンマ山群のランタンリ(蘭塔山)に目標を定めて交渉することになった。同峰に対するネパール政府からの許可、岳人長井隊によるネパールからの同峰初登頂成功など、途中であった迂余曲折は西山、横山の別稿にくわしいが、結局のところ、81年9月に蘭塔山へ3名の偵察隊を送り、今年の本隊はカンペンチン峰の初登頂を果したということになる。

4. 今後進むべき道は?

未登の高峰の初登頂と周辺山城の学術調査という伝統的なAACKの目標は、いつまでもこれを掲げ続けることができる種類のものであろうか。

ヒマラヤでは初登頂を目指す大遠征隊が踵を接して続くという黄金時代はすでに過去のものとなり、空白に近い地域が広く残されていた中国には、今や世界中から大小の登山隊が殺到しているのである。恰好の対象は年とともに減少する一方というのが冷厳な事実であろう。AACKの目標となり得る山は、多くの場合許可取得が困

難な地域に位置している。国籍のいかに問はず何百、何千、いや何万の目が、一生けんめい好適な山を探し求めているのだから、入山容易な山は忽ちにして登られてしまう宿命にあるといってよい。われわれもまたいかに頑張っても、隊を毎年送り出すことはできないのだから。また、われわれと同様に尋常一様の相手では物足らぬとし、厳選した対象に辛棒強く努力を続ける何百の目をも忘れてはならない。

そうすると、一定の学問研究における水準や登山の力量のほかに、群を抜いた政治的・外交的な能力をわれわれはもつことが要請されるのであろうか。単純には手中にできない許可のための交渉に継続して努力を払うことを惜しむものではないが、時がたてばAACKをとりまく社会環境が変化することは避けられない。このことはとりわけ遠征資金の調達に不安な要素を残すことになる。さらに重要なことは、会の活性化の維持に直接はつながらないことである。先に「AACKが一定の活力を保持するためには、若い海外遠征経験者を継続的に養成することが、是非とも必要である」とのべた所以である。

ヒマラヤにおいては、より困難なルートによる登山、無酸素登山、単独登山、厳冬季登山への志向が、すでに十数年前からあらわれている。探検的色彩が薄まればスポーツとしての登山がより強く主張されるのは当然であろう。エヴェレストの厳冬季無酸素登山を狙うメスナーのような「鉄の男」が登場している。現在この文章を書いている時に、日本山岳協会隊はK2北稜の無酸素全員登頂を目指して行動中と報道されている。

AACK 会員による外地遠征記録(その2)

番号	年次	場所	参加会員名	業績	資料その他
1	1965.8~12	中部ネパール	薬師義美、(他2名)	チリチヨ登路偵察	泊山岳会ヒマラヤ遠征隊に参加
2	1965.7~8	アラビア	本多勝一、(他1名)	ベドウィンの調査	朝日新聞社より派遣本多、アラビア遊牧民、朝日、昭41
3	1965.7~10	アフリカ	伊谷純一郎	人類学調査	京大第4次アフリカ学術調査隊に参加
4	1965.8~1966.3	アフリカ	富川盛道	人類学調査	同上
5	1965.11~1966.4	南極大陸(夏隊)	西山 孝		第7次南極観測隊に参加京大山岳部報告14号:80~83
6	1965.11~1967.3	南極大陸(越冬)	前小屋端		第7次南極観測隊に参加AACK時報6号:2~7
7	1966.8~1967.10	アフリカ	和崎洋一、伊谷純一郎	人類学調査	京大第5次アフリカ学術調査隊に参加

「鉄の時代」に入ったヒマラヤであるが、この期に及んでわれわれがスポーツとしての登山を標榜することにはおそろくならないであろう。AACK半世紀の歴史をふりかえる時、われわれの伝統はこれをかたく守ることがますます困難となっていることを痛いほど感ずるのは私だけではあるまい。われわれはAACKの進むべき道をどの方向に見出そうとするのであろうか。

本稿は、創立五十年記念出版計画の宣伝と遅延のお詫び、ヤルカン初登頂と事故、チベット計画の展開、将来への模索、の4項に分けて取急ぎしたためのものである。個人的感想や見解はあまり出さないように努め、その責めは当然負うが、事実の認識に誤りがあるやも知れないことを恐れている。ご叱正くだされば幸いです。文中、敬称は省略させていただいた。

以下には、時報第5号掲載の「AACK会員による外地遠征記録」(平井一正氏作成)の続篇として、1965年以後現在に至るものを表にして示す。先に事務局が1980年夏現在で作成していたものにもとずき、若干の追加をしたものである。平井氏の「こういう記録は表の中から、抹消することは容易だが挿入することはなかなか困難であるということから、適当でないものや、不確実なものも、2,3表の中に入れた」をそのまま方針としては踏襲している。いわゆる先進国における調査研究は収録しない。商業ベースに乗った旅行は省略するが、先駆的記念的な意義をもつ場合には記録しておく。採否の判断に苦しむものもある。

8	1967.4~6	東部ネパール	樋口明生, 松田隆雄	ヤルンカン登路偵察	本会より派遣
9	1967.6~8	南アメリカ	山本良三, (他7名)	コロンビア・アンデス	静岡大学山岳会遠征隊に参加 山岳68年:184~197
10	1967.7~ 1968.3	アフリカ	和崎洋一, 富川盛道 田中二郎, 伊谷純一郎	人類学調査	京大第6次アフリカ学術調査隊に参加
11	1967.10~ 1968.5	アフリカ	浅井東一, 中尾佐助 梅棹忠夫, 土倉九三 谷 泰	人類学, 農学, 医学の調査	京大サハラ学術探検隊に参加
12	1968.1 6	ブータン	小野寺幸之進, 上田 豊, 市川光雄		京大山岳部隊に参加 京大山岳部報告15:9~30
13	1968.7	アフガニスタン	酒戸弥二郎, 酒井敏 明, (他5名)		北アフガニスタン栄養学調査隊に参加(事故で中途帰国)
14	1968.11~ 1970.3	南極大陸 (越冬)	上田 豊	内陸調査	第10次南極観測隊に参加 AACK時報7号:61~65
15	1968.12~ 1969.3	パタゴニア	中島暢太郎, 寺本徹 井上治郎, (他3名)	気象, 氷河調査	京大探検部パタゴニア遠征隊に参加 AACK時報7号:15~18
16	1969.3~7	アフリカ	和崎洋一	タンザニアの人類学調査	
17	1969.8~11	中部ネパール	薬師義美, 金山清一	グルジャヒマール初登頂	富山隊に参加
18	1969.10~11	ブータン	桑原武夫, 松尾 稔 笹谷哲也, 吉野照道 松田隆雄, 山本清司 米本昌平, 田中達吉	人類学, 農学などの研究	京大ブータン学術調査隊に参加 桑原編, ブータン横断紀行 (講談社)昭53
19	1969.9~	東ネパール	井上治郎	エヴェレスト偵察	JACエヴェレスト偵察隊に参加
20	1969.11~ 1970.4	南極大陸 (夏隊)	高野共平		第11次南極観測隊に参加
21	1969.9~ 1970.3	アフリカ	富川盛道	人類学調査	アフリカ大サバンナ地帯学術調査隊に参加
22	1970.3~5	東ネパール	松方三郎, 中島道郎 神山義明, 井上治郎	エヴェレスト登頂に貢献	JACエヴェレスト遠征隊に参加
23	1970.2~5	東ネパール	伊藤洋平	マカルー登頂に貢献	JAC東海支部マカルー遠征隊に参加
24	1970.3~4	中部ネパール	野村哲也, (他7名)	ダウラギリ6峰登頂の指揮	関西登高会ダウラギリ6峰隊に参加 山岳66年:122~132
25	1970.8~10	中部ネパール	山本良三, (他5名)	チューレンヒマール主峰, 中央峰の初登頂	静岡大学山岳会遠征隊に参加 山岳66年:109~121
26	1970.8~ 1971.2	南アメリカ	山本紀夫, (他7名)	コルディエラ・リアルとア タカマ高地	アタカマ高地調査隊に参加 山岳67年:67~88
27	1970.9~	東南アジア	吉良竜夫	マレーシア生物相調査	大阪市大第6次東南アジア調査隊に参加
28	1970.10	ブータン	栗田靖之, (他1名)	人類学調査	
29	1970.11~ 1972.3	南極大陸 (越冬)	中尾正義	雪氷調査	第12次南極観測隊に参加
30	1971.4~7	アフリカ	伊谷純一郎, (他1名)	タンザニアの人類学調査	

31	1971.9	ブータン	西山 孝, (他1名)	地質調査	
32	1971.	北極圏	宮木靖雅		東海大北極圏調査隊に参加 (行方不明)
33	1971.5~ 1972.8	アフリカ	田中二郎	人類学調査	ハーバード大学カラハリ砂漠調査隊に参加
34	1971.9~ 1972.3	アフリカ	和崎洋一, 富川盛道	人類学調査	アフリカ大サバンナ地帯学術調査隊に参加
35	1971.	南 米	高村奉樹, 山本紀夫	アンデス栽培植物調査	京大中南米栽培植物調査隊に参加
36	1972.11~ 1974.3	南極大陸 (越冬)	横山宏太郎	雪氷調査	第14次南極観測隊に参加
37	1973.2~5	東ネパール	西堀栄三郎, 樋口明 生, 斉藤惇生, 田附 重夫, 富田幸次郎, 吉野照道, 松田隆雄 神山義明, 上田 豊 浅野 潔, 井上治郎 甲斐邦男, 森本陸世 高木真一, 松沢哲郎	ヤルンカン(8505m)初 登頂	AACK, ヤルンカン (朝日新聞社)昭50 樋口, ヤルンカン初登頂 山岳68年:1~19 上田, 残照のヤルンカン (中央新書)昭54
38	1973.5~9	南アメリカ	山本良三	アマゾン河源流域	奥アマゾン探検隊第1次隊 に参加
39	1973.	東ネパール	井上治郎	気象, 氷河調査	
40	1974.	東ネパール	中島暢太郎, 樋口明 生, 樋口敏二, 上田 豊, 井上治郎, 中尾 正義, 坂中徹雄	気象, 氷河調査	ネパールヒマラヤ学術調査 隊に参加
41	1974.6~9	カラコルム	岩坪五郎, 金山清一 高木真一, 伊藤 勤 奥 哲, 能田 成 (他2名)	K12(7473m)初登頂	京大山岳部ヒマラヤ遠征隊 に参加 岩坪, K12峰遠征記(中央 公論社)昭51
42	1974.	アフリカ	田中二郎	人類学調査	京大霊長類研究所より派遣
43	1974.6~ 1975.4	南アメリカ	山本紀夫	アマゾン河源流域	奥アマゾン探検隊第2次隊 に参加
44	1974.11~ 1975.2	南極大陸	西山 孝	鉱物調査	ドライバレー掘削調査隊に 参加
45	1975.3~5	中部ネパール	野村哲也, (他15名)	ダウラギリⅣ峰の登頂の指 揮	大阪府山岳連盟登山隊に参 加 山岳70年:126~138
46	1975.7~9	アフリカ	谷 泰	イタリア中部とリビアの人 類学調査	
47	1975.8~10	カラコルム	横山宏太郎		JAC東海支部ラトック峰 登山隊に参加
48	1976.	東ネパール	上田 豊, 井上治郎 中島暢太郎, 樋口敏 二, 樋口明生, 横山 宏太郎	気象, 氷河調査	ネパールヒマラヤ氷河学術 調査隊に参加
49	1976.5~8	カラコルム	平井一正, (他9名)	シェルピカンリ(7380m) 初登頂の指揮	神戸大遠征隊に参加 平井, コンダスの女王「シ ェルピカンリ」(神戸新聞 出版センター)昭53
50	1977.5~6	中 国	木原 均, 中尾佐助	小麦の育種関係調査	
51	1977.5~6	中 国	藤田和夫, (他7名)	雲南省の地震調査	

52	1977.7~9	アフガニスタン	谷 泰	ルーマニア・ユーゴスラビア・アフガニスタンの人類学調査	
53	1977.9~11	中部ネパール	横山宏太郎, 今井一郎, 佐治与志也	ランタンリ偵察	ネパールヒマラヤ氷河学術調査隊に参加
54	1977~	マレーシア	吉井良三	サバ州の動物学調査	
55	1977.8~1978.2	アフリカ	和崎洋一	タンザニアの人類学調査	
56	1978.	東ネパール	上田 豊, 井上治郎 樋口明生	気象, 氷河調査	ネパールヒマラヤ氷河学術調査隊に参加
57	1978.6~11	アフガニスタン	谷 泰	遊牧民調査	京大西南ユーラシア調査隊に参加
58	1978.10~	フンザ	原田直彦	カラコルムハイウェー初踏査	山と溪谷 496:135~143 (山と溪谷社)
59	1978.9~1979.3	南 米	山本紀夫	中央アンデス農牧社会調査	民族学博物館より派遣
60	1978.	アフリカ	田中二郎	ケニアの人類学調査	
61	1978.11~1980.3	南極大陸 (越冬)	山岸久雄		第20次南極観測隊に参加
62	1979.1~3	ビルマ	高村奉樹	栽培稲の調査	京大調査隊に参加
63	1979.	東ネパール	上田 豊	気象, 氷河調査	
64	1979.5~7	カラコルム	松林公蔵		関学大シアピーク遠征隊に参加
65	1979.9~11	チベット	斉藤惇生, 横山宏太郎	チョモランマ偵察	JAC チョモランマ偵察隊に参加
66	1979.11~12	中 国	梅棹忠夫	四川・雲南・貴州地区訪問	日本民族学者訪中団に参加
67	1980.2~6	チベット	西堀栄三郎, 斉藤惇生, 横山宏太郎, 甲斐邦男	チョモランマ登山に貢献	JAC チョモランマ登山隊に参加
68	1980.3~4	中部ネパール	太田岳史, (他4名)	ピサンピーク登山	京大山岳部チームに参加
69	1980.	東南アジア	川村俊蔵, 荻野和彦	南スマトラ自然環境調査	スマトラ自然研究計画に参加
70	1980.11~1982.3	南極大陸 (越冬)	井上治郎		第22次南極観測隊に参加
71	1980.	アフリカ	田中二郎, 今井一郎		
72	1981.5~10	南 米	山本紀夫	中央アンデス農牧社会調査	民族学博物館より派遣
73	1981.	中 国	樋口敬二	国際氷河学会議	帰路チベットからネパールへ
74	1981.7~8	中部ネパール	吉野照道	野性種サトイモ調査	
75	1981.8	新 疆	上田 豊	天山博格ダ周辺調査	
76	1981.9	チベット	横山宏太郎, 中川潔 牛田一成	ランタンリとカンペンチン登路偵察	本会より派遣
77	1981.10	ブータン	桑原武夫, 西堀栄三郎, 中尾佐助, 松尾稔, 笹谷哲也, 栗田靖之, (他10名)		日本ブータン友好協会

78	1981.	東南アジア	川村俊蔵, 荻野和彦	南スマトラ自然環境調査	スマトラ自然研究計画に参加
79	1981.12~1982.1	ポリネシア	中尾佐助, 栗田靖之	フィジー島など農学, 人類学調査	
80	1982.3~5	チベット	近藤良夫, 上尾庄一郎, 西山 孝, 陳介臣, 森本陸世, 松林公蔵, 牛田一成, 幸島司郎, 森戸隆男, 中川 潔, 近藤裕史, 人見五郎, 斎藤清明	カンペンチン (7281m) 初登頂	本会より派遣

追記 記念出版刊行のための資料収集には努力しておりますが、われわれの能力には限界があり、どうしても、会員の皆様のお力添をいただかねばなりません。資料提供にご協力くださいますよう、この場を借りてお願いいたします。

全会員の皆様宛後日調査用紙をお送りいたします。皆様の海外における活動の概要を、期間、地域、派遣主体

の組織名と隊の構成、主要業績、公刊記録その他の資料の各項について、これに記入し、回答をお寄せください。このほか、参考資料として文書記録や写真類のお手持の有無などについても、あわせてお考えがたいです。ご支援、ご協力くださいますよう重ねてお願いいたします。

AACK 50周年

「物故会員追悼式」、「記念祝賀パーティー」報告

1930年結成以来50年を迎えたAACKはその記念事業の一つとして、1980年11月16日に「物故会員追悼式」および、「創立50周年記念祝賀パーティー」を開催した。

「物故会員追悼式」は京都大学楽友会館大ホールにおいて午後3時よりとり行われた。会場正面は菊花に飾られ、36名の物故会員の氏名が並ぶ。会員ならびに御遺族の方約100名が参列し、木村雅昭氏の司会で開会。近藤良夫会長のあいさつと、全員黙禱。つづいて36名の物故会員個々の簡単な略歴、山歴が紹介された。同時にその遺影が正面スクリーンに映写され、故人のありし日々をしのんだ。そのあと、参列者一同献花し追悼式を終えた。

同日、場所を京都ロイヤルホテルに移し、午後6時より「創立50周年記念祝賀パーティー」が催された。来賓に日本山岳会会長三田幸夫氏、京都大学総長沢田敏男氏を迎え、小島栄、今西錦司、桑原武夫、西堀栄三郎の各名誉会員をはじめ、一般会

員および物故会員の御遺族など88名がつどった。

近藤良夫会長のあいさつで開会。三田幸夫、沢田敏男両氏より祝詞を賜ったあと、最高令の名誉会員小島栄氏の音頭で乾杯。なごやかな記念の宴が始まる。祝電の披露のあと、上尾庄一郎氏の軽妙な司会で、各世代の代表が舞台に立ち、50年の歩みを思い出話でつづった。また故高橋健治氏の夫人ローゼレッサさんが、彼の遺作の英詩を朗読するなど宴は最高潮になり、むすびは雪山賛歌の大合唱でAACKのさらなる発展を祈った。



(左)京都大学山岳会創立五十周年記念 昭和55年11月16日 京都ロイヤルホテル

京都大学学士山岳会
チベット高原学術登山隊

カンペンチン(康彭欽)峰初登頂報告

隊員

隊長	近藤良夫 (57才)	京都大学教授 工学博士
副隊長	上尾庄一郎 (43才)	塩野義製薬研究所主任研究員, 薬学博士
秘書長	西山孝 (42才)	京都大学助手(地質鉱床学専攻) 工学博士
通訳	陳介臣 (39才)	(財)日本気象協会関西本部調査部課長
登攀隊長	森本陸世 (33才)	(財)日本気象協会研究所研究員
登攀・医師	松林公蔵 (31才)	今給黎総合病院医師
登攀・会計	牛田一成 (27才)	京都大学農学部大学院学生(家畜栄養学専攻)
登攀・輸送	幸島司郎 (26才)	京都大学理学部大学院学生(動物学専攻)
登攀・総務	森戸隆男 (25才)	京都大学農学部大学院学生(農業工学専攻)
登攀・記録	人見五郎 (26才)	京都大学農学部大学院学生(農林経済専攻)
登攀・食糧	中川潔 (24才)	京都大学文学部学生
登攀・装備	近藤裕史 (24才)	京都大学工学部学生

中国側隊員

連絡官	張俊岩
コック	タ・トー(達東)(47才), コック助手 コー(呉金)(41才)
高所協力員	ガザンピンツォ(26才), ツーレントーチ(26才) ジャプー(22才), テンジン(20才)

(当登山隊の正式報告書は毎日新聞社より出版される予定です)

I チベット高原学術登山隊の成立

西山 孝

1. 中国登山計画と50周年記念事業

AAACKは1980年に創立50周年を迎えるにあたって、記念事業をおこなうことになった。この事業にふさわしい行事は、会が総力をあげてあたるにたる計画で、この50年の間にきずかれた輝かしい登山活動をさらに発展させるものでなければならない。

ヒマラヤ山脈南面に、AAACKは5回の遠征隊(1953年アンナプルナⅣ, 1958年チョゴリザ, 1960年ノジャック, 1962年サルトロ・カンリ, 1973年ヤルンカン)を送ったが、いまや高峰の大半はすでに登られてしまっている。ネパールやパキスタンには、バイオニア的な登山・探検のできる場所は少ない。残された未知の世界として、チベットかブータンがもっとも魅力的である。しかし両地域とも外国人の登山は禁止されているところであった。

ちょうど記念事業が話題になり始めた頃から、日中友好親善関係は緊密の度を加えていた。AAACK会員は早くから中国の人たちとの交流に努力をかさねている。記念事業の対象は次第に中国の山にしぼられていった。

登りたい山はすぐに行くかあげることができる。AAACK創設当時から話題になっているグルマングータ、ナムチェ・バルワ、クーラ・カンリ、コンロン山脈のウルグムスターグ、ニエンチェンタングラ山脈のニエンチェンタングラなどである。

一方、中国の登山計画をすすめるにあたって、AAACKの内部の状況は、必ずしも十分な態勢がととのっているとはいえなかった。ヤルンカン、K₁₂とつづいた遭難からようやく立ち直り始めていたものの、AAACKの若がりは一向にすすんでいなかった。会議に集まってくる会員は35歳を越えたものが多かった。

しかし、もちろんヒマラヤ遠征に熱心な会員もおり、すでに1976年次の遠征目標をランタンリ(7239m)とし、ネパール国に登山申請をしていた。この山はネパールと中国の国境線上にある未開放地帯にあり、もちろん未踏峰であったが、残念ながらこの遠征隊でもって50周年記念事業とするには、やや不十分の観があった。

2. 中国側の窓口

AAACKの遠征では、これまで登山とともに学術調査をおこなってきた。中国との交渉の窓口は、登山に重きをおくと中国登山協会になり、学術に重点をおくと中国科学院になる。中国登山協会は、チョモランマの2回の登頂をはじめ、シシャパンマやその他の高峰に登頂した実力をもっている。科学院は文字どおり中国の学術研究のかなめであり、この組織は登山協会に比べるとはるかに大きい。しかし、この2つの組織の間にはあまり連絡がないようである。

とにかくあらゆる機会を通して、登山協会と科学院の両方へ接触をはかることにした。従って遠征のスタイルも、AAACKの単独登山、中国との合同登山、場合によっては学術のみが先行し登山は後回しになることも考えられた。AAACKとしてはどのような形になっても対処できるような心構えが必要であった。

中国旅行にはもう1つ他の国の旅行とは異なる事情がある。中国を訪問するためには、中国側から招待される形でなければならない。このため日中友好団体や旅行社が両国間の橋渡しをおこない人的交流をスムーズにしている。その頃、地震の研究者グループが雲南地方で現地調査をしており、さらに青海での調査を計画していた。この雲南の調査実現には某旅行社の力が大きかった。1978年7月、同じ旅行社を通して、我々の計画を登山協会および科学院へ伝えてもらうことにした。

3. 隊長の決定と計画書の作成

1978年最初の計画書を作成した。目標とする山には、グルマングータ、ナムチェ・バルワ、ウルグムスターグ、クーラ・カンリ、ニエンチェンタングラの5つをあげ、中国登山協会、体育総会、科学院、大使館などへ提出し、また訪日した中国科学院の人々、中国を訪問する人々に、チベット高原学術登山の実現のための力添えを依頼した。しかしながら、登山を希望する地域はすべて、いわゆる未開放地域であり、早期に有望な回答を得ることはできなかった。

隊長は、いままでのAAACKの大きな遠征の多くがそ

うであったように、京大教官であることが望ましいという結論になり、どうしても近藤良夫会長に引き受けてもらう以外に方法はなかった。1979年1月の会議で遂に近藤会長の隊長就任が決まり、計画は大きく前進した。

やがて、旅行社を通じ最初の中国側の反応が伝えられた。学術調査の内容、隊員に関するくわしい資料をほしい、山も1つにしばった方が考えやすいとのことであった。急拠、検討の結果、チベットの奥深くインダス川とブラプートラ川の源頭に位置するグルマンダータ峰に決った。標高7766mで、そのゆったりした山容より、登頂の可能性は大きい。隊長以外の隊員は、慣例により公募の手順をふむ必要があり、この段階では決めることができない。一応、山口克副隊長、中島暢太郎学術班長他約25名の隊員構成で、業績目録、AACKの海外遠征出版目録を別冊として添付し、中国関係機関に提出することを旅行社に依頼した。

1979年3月杜甫文学研究者放華団に参加した桑原武夫、斉藤惇生は、中国登山協会を訪問し、計画書を提出し、グルマンダータ学術登山の許可実現のための努力を要請した。この時史占春中国登山協会副主席は、すでにAACKの計画はよく知っていたが、チベットは外国人に開放されていないという返事しかもらえなかった。同年3月、京都自然科学者友好訪中団に参加した柘弓紘、西山孝は、北京で科学院崔泰山外事局アジア・アフリカ処長に面会し、AACKの計画を説明した。以前からこの計画は知っているが、登山が主目的ならば登山協会が窓口であろうとの返事で、学術登山あるいは合同学術調査に対して、賛同は得られなかった。

4. チベット委員会の設立

1979年春に中国・イラン合同で、チョモランマ登山をおこなうとの発表（後にイランの政変で中止）につづき、自費で独自に行動のできる登山隊に対して、中国は近いうちに許可を出すであろうというウワサが国内で流れ、さらに防衛大学校が中国と合同でチョモランマへ行くという新聞発表等がでて、周囲が騒がしくなってきた。組織は、大きくなるにしたがって小回りがきかなくなってくる。AACKも決定は理事会がすることになっており、理事会の招集には最低2週間を要する。外部の変化にすばやく対応できる状態とはいいいにくい。また時代の趨勢を反映して、若い世代も含め会員が日常の仕事におわれていることも、この傾向を増長させていた。そのなかで、いつ許可がくるかわからない計画を押しすすめるのは容易ではなかった。これらの点を反省し、とにかくあらゆる事態に少しでも早く対応できるよう、AACK理事会はチベット委員会（委員長近藤良夫）を設け、

中国登山についての決定の権限を委員会に託した。発足は1979年1月25日であった。

5. JACへのチョモランマ登山許可と8山群の開放

1979年7月、JACにチョモランマ登山許可の通知が届いた。この登山隊は日中合同登山ではなく、JAC単独の登山隊であった。この許可の取得にあたって、日中文化交流協会の貢献が大きかったといわれる。

遠征隊派遣の交渉はいつも複雑で、しばしばやっかいな問題が起ることもある。しかし辛抱強く、熱意をもってあたれば何とかなるであろうと思っていただけに、JACに先を越されたことは、AACKにとって少なからずショックであった。

しかし、チベットならどこでもよいというものではない。AACKのいままでの歴史のなかにつちかわれてきた精神を生かし、さらに発展させるものでなければならぬ。AACKは未踏峰主義を標榜し、周辺地域の学術調査をおこなうことを特徴としている。この点ではチョモランマはAACK向きの山ではなかった。逆にグルマンダータの開放も近いのではないかと期待をいだかせた。

とにかくこの機会に中国の登山状況を知るためにも、チョモランマ遠征隊にAACKからできる限り多くの隊員を参加させるべく働きかけることにした。その結果、偵察隊に斉藤惇生、横山宏太郎が、本隊には当時JAC会長西堀栄三郎の他、甲斐邦男と、偵察隊の斉藤、横山が参加することになった。1979年10月、2人の偵察隊員が持ち帰った報告では、予想されていたとはいえ中国遠征は経費的にかなり高くつくこと、グルマンダータの開放時期はまだ先になるであろうとのことであった。

9月近藤良夫の訪中、10月蘭州氷河凍土研究所長らの訪日、11月梅棹忠夫の訪中などあらゆる機会を通して、グルマンダータ計画のアピールをつづけた。

突然、10月31日に中国登山協会が、外国隊に8つの山を開放するとのニュースが伝わってきた。そのなかには、クングルⅡ峰(7719m)、とボグダ峰(5445m)の2つの未踏峰が含まれていた。とくにクングルⅡ峰は、AACKにとって心ひかれた。しかし、AACKは氷の間グルマンダータを目標に交渉してきている。いまさら山を変えるのは好ましくない。この山への登山希望は内外から殺到するであろうなどの意見が出て、目標の山をグルマンダータからクングルⅡ峰に変えるべきかどうか結論を出せないでいた。そのうちに、クングルⅡ峰の登山許可は、当時会長が折よく北京を訪れていた京都カラコラムクラブ、それにイギリスのポニントン隊の2隊におりてしまった。

6. ミニャコンガ峰学術調査隊

JACのチョモランマ峰登山本隊は、1980年2月に出発した。先発隊に加わっていた横山が成都から、中国登山協会は、AACKにミニャコンガ(7590m)を許可する用意があるとの連絡をしてきた。すぐにチベット委員会で検討され、いろいろな意見がでた。ミニャコンガは未踏峰ではないので、AACK向きの山ではない。しかし動物、植物など科学的な興味は深い。そこで、ミニャコンガ周辺の学術調査に重点をおき、同時に6000m級の未踏峰にも登るという計画がでてきた。しかし、8山群の開放を知った内外の山岳団体は、活発に中国登山協会と接触していた。AACKがミニャコンガ学術調査隊をまとめているうちに、北海道山岳連盟があっさりミニャコンガの登山許可をとってしまった。AACKの対応の遅れと中国の山に対する不勉強が目立った。

つづいて、西ドイツおよび女子登攀クラブのシシャパンマ峰、オーストリアのメスナーのチョモランマ峰単独登攀など次々に発表された。何年かかってもグルマンダータをやるべしと考えていても、5年も10年も待つべきかどうか不安であった。

5月に入って、中国大使館からグルマンダータに関して、もっと具体的な計画を知りたいという連絡があった。さっそく補足説明の形で計画書説明資料を作成し、AACK海外活動記録を添えて中国大使館に提出し、それと同時に関係方面へ送った。9月には中国登山友好代表団が2週間余りの予定で日本を訪れ、京都にも立ち寄った。中国登山協会の要人から直接グルマンダータ計画について意見を聞くことができた。しかし現在はグルマンダータの開放は考えておりませんという返事で、これまでのものと変りはなかった。

7. 雲南学術調査計画

京都大学の教官を中心に構成された京都日中学術交流懇談会という組織がある。この会はかねてから科学院と学術交流をすすめ、訪中団を組織したり、中国の学者を招待したりしていた。その活動の一環として、雲南地方の淡水魚の研究調査計画が具体化していた。調査地域には雲南地方のよく知られていない奥地の地域が多く含まれており、探検的要素が多く、登山も可能だという。同懇談会からAACKとの協力という話がもち上がった。AACKの会員が個人の資格で参加することに協力を惜しまないということになった。具体的には、四手井綱英を隊長にし、動物、植物などを主体とする調査をおこない、高さは低くとも未踏峰をあわせて登るという計画が立てられ交渉が始まった。しばらくして、科学院の都合によりこの計画は当面延期したい旨連絡してきた。やむ

なく静観することとなった。

8. 平井の訪中

1981年冬は近年にない豪雪で、各地で山岳遭難が起った。不幸にして、京大山岳部でも、赤谷尾根で2名が行方不明になった。若い会員の間にも動揺がみられた。そのうち1名は雲南計画の中心的存在であった。

搜索活動が一段落した頃、4月29日中国を訪問していた平井一正から電話がかかった。ネパール国に申請をだしているランタンリに対して、中国登山協会がチベット側からの登山許可を出す可能性がある。AACKはチベット側から登る積りはないかという。平井の帰国までに返答しなければならない。ネパール側からのランタンリの許可はなかなかとれない。グルマンダータもしばらく許可が出そうにない。つなぎとして中国側からランタンリ(蘭塔山)をやろうではないか。この登山を通してさらに中国登山協会とも親しくなることができるといのが大勢の意見であった。またこの地域は中国によりある程度科学調査がすすんでいるので、隊員構成は学術班を縮小して10名余りの登攀隊員を中心にしようということでもとまった。さっそく平井へその旨電話し、さらに計画の詳細な打合せをするために、5月末に斉藤惇生を中国登山協会へ派遣したい旨伝えた。

9. ネパール国からのランタンリ登山許可と斉藤・西山の訪中

いよいよ中国登山に踏み出した矢先に、今度はネパールから同じランタンリを日ネ合同登山という条件で許可する旨の電報が届いた。1976年から待ち望んでいたランタンリ登山許可が2つもきてしまった。思い切って同じ時期に両側から登ってはどうか。初登頂を目標にしているのだから登りやすい方から登るべきではないか。ネパールとの長いつきあいを考えるとネパールをとらざるを得ないのではないかと、将来のことを考えれば中国であるなどの意見があり、深夜におよぶ議論が繰り返された。まず1981年ポストモンスーンにネパール側からランタンリを登る。1982年プレモンスーンには、コンロンの山、ニエンチェンタングラ、ラプツェガン、カンペンチンなど他の山城あるいは他の山の許可がとれるように努力をつづけるというのが大体の主旨であった。

ネパールへは1981年秋の合同登山に同意する旨打電した。

もう一つの問題は、この決定を中国登山協会に伝えることであった。そのためにすでに決定している斉藤に、西山孝が加わり5月末に中国へ向った。北京での会談第1日目は、ネパールとAACKとの深いつながりはわか

った。ネパール側からランタナリを登ることについては問題はない。我々は老朋友である、という返事がかえってきてホッとした。しかし翌日になってやっかいな問題がもちあがった。中国登山協会で調べたところ、我々が登攀ルートとして予定している西南稜は、国境線上の尾根ではなくて中国領である。ネパール側から登るとすれば東尾根しかないということであった。しかし、東尾根から登れそうなルートはない。困ったことになった。とにかく、1982年と1983年はAACKのために蘭塔山（ランタナリ）をあけておくとの約束をとりつけ、ラプツェガン、コンロン山などに来年転進することは不可能であるという判断のもとに斉藤・西山は帰国した。

10. 中国側からの蘭塔山（ランタナリ）登山の決定と偵察隊の出発

斉藤・西山の持ち帰った報告をもとに、チベット委員会が善後策を相談した。まず中国登山協会が中国領といっている限り、ティルマンの科尔（西南稜）から登ることはできない。国際問題にまきこまれるのはゴメンである。東尾根からのルートは目下のところでは不可能である。やむなく、ネパールへはことわりの電報を打ち、日山協へも連絡した。

こうして、チベット側からの蘭塔山学術登山は、1981年秋偵察隊、1982年春本隊出発ということで本格的に動き出した。それにとまって急に仕事が増えた。隊長以外の隊員の決定、偵察隊の構成、それにもっとも難問は5,500万円という必要経費であった。

6月22日のチベット委員会では、副隊長に上尾庄一郎他2名、秘書長に西山孝、登攀隊長に森本陸世他1名、通訳に陳介臣、医師に松林公蔵などを候補として、あらかじめ近藤隊長が意向を打診することとなった。他の隊員は公募することになるが、何人位の会員が立候補してくるかも心配であった。秋にせまっている偵察隊については、チベット遠征の経験を2回もつ横山宏太郎に偵察隊長を引き受けてもらうしかなかった。さらに隊員に牛田一成（農、D-1）、中川潔（文、3）を加え、3名で組織し、9月末から約1ヶ月間の予定で出かけることになった。

募金については後援会を設立し、沢田敏男総長に後援会長を引き受けてもらった。趣旨書も新しく作りなおし、作戦をねった。この頃から3月の出発まで、隊長と事務局は募金にあげ、募金にくれる日がつづいた。

偵察隊の準備は、登山協会との交渉、装備・食料の購入、荷物の発送と順調にすすみ、9月24日蘭塔山およびその周辺へ出かけていった。

偵察隊が出発する前、7月末に岳人長井（山形県）が、1981年秋にネパールと合同でランタナリを登るとい

ニュースが伝わってきた。内心おだやかではなかったが、計画は予定通りすすめた。

11. カンペンチン峰への転進

偵察隊が北京-成都-ラサールシガツェーシガールを通り、蘭塔山の試登およびその周辺の写真撮影をおこなっていた頃、京都にはネパールからニュースが飛び込んでいた。岳人長井がランタナリの初登頂に成功したという。AACKは初登頂主義を守ってきており、この旗を降ろす気はない。とあって、すでに募金活動をはじめ、動き出している遠征を止めるわけにはいかない。新しい未登峰に転進したい。前回の交渉結果から考えて、他の山群で登山許可が得られそうなところはない。唯一の可能性は同じ山群にあり、蘭塔山の北西にあるカンペンチン峰である。この山はかねてより神戸大学が、もし1982年に登頂されなければという条件で登山申請がなされていた。1982年春にはどこの隊にも許可が下りていなかった。これらのことをふまえて偵察隊の出迎えをかねて、斉藤惇生、上尾庄一郎が北京におもむき、カンペンチン峰への転進について交渉することになった。

北京の前門飯店でおこなわれた登山協会との折衝では、AACKの初登頂主義、カンペンチン峰への転進の希望を理解し、再度1982年春の登山申請がないことを確認した上で、AACKにカンペンチン峰の登山許可を出してくれた。我々の希望はかなえられた。

10月29日、斉藤、上尾と偵察隊3名は一緒に戻ってきた。偵察隊はカンペンチン峰の写真もとっており、登攀ルートの検討が始まった。

12. 隊員の決定

偵察隊の報告をもとに、カンペンチン峰の登攀ルート、日程、タクティクスが検討された。高さにおいても、難易度においても、蘭塔山とカンペンチン峰とは甲乙がつけがたい。そこで、蘭塔山に関して計画された隊員構成、登攀期間、食料、装備などは、そのまま踏しゅうすることになった。

隊員の選出は、慣例に従い、公募案内を全会員に配布し、山岳部にもその旨伝えた。11月22日に開かれた隊員選考委員会では、以前より決定していた近藤隊長、上尾副隊長、西山秘書長に加えて、森本登攀隊長、陳通訳、松林医師は問題なく決った。登攀隊員として立候補のあった会員6名のなかから5名を選び、さらに現役4名の立候補のなかから1名と補欠1名が決った。

選考にあたって、隊員12人は多いという意見もあったが、将来を考えて若い会員にできるだけヒマラヤの経験をしてもらおうという配慮がなされた。隊の平均年令

は32.5歳で若い隊ではないが、計画の始まった頃に比べると、新しい会員が加わり、すっきりした隊のように感じられた。

後に、1名が個人的な事情から隊員を辞退し、代って補欠が隊員となり、登攀隊員は、牛田一成、幸島司郎、中川潔、森戸隆男、近藤裕史、人見五郎の6名になった。

報道は、毎日新聞110周年記念事業の一つとして、毎日新聞社がAACKのチベット遠征を後援することになり、同社の記者で、会員でもある斉藤清明が、隊員として追加され、京都大学学士山岳会チベット高原学術登山隊は全隊員が揃った。

13. 学術調査

これまでのAACKの遠征隊と同様に、チベット遠征隊も登頂を第1目標とするが、同時にできるかぎり各自の専門の学術研究をおこなうことになった。気象水文学

II カンペンチン峰初登頂記録

森本陸世・人見五郎

はじめに

1982年3月14日、近藤隊長以下13名の隊員は、大阪国際空港をあとに北京に向った。

1973年のヤルカン以来9年振りの海外遠征である。AACK創立50年にして初めてのチベット遠征でもあった。

途中、近藤隊長が体調をくずし帰国するという不運もあったが、登山活動は順調にすすみ4月21日、22日の両日にわたって、のべ11人の隊員が登頂に成功した。また、学術調査もその目的の大半を達成することができた。

正式な報告書は今後発刊の予定であるが、それに先立ち、遠征の概要をここに報告する。

また文中の時刻は、北京時間であり日本との時差1時間、カンペンチン付近ではさらに2時間ほどの差がある。（例）カンペンチンの北京時刻午前8時の太陽の高さは、日本での6時頃に相当する。

I. 日本からBCへ

3月14日 大阪～北京
大阪空港にて盛大な見送りをうけ一路北京へ。北京空

（陳、森本）、動物学（幸島）、微生物学（上尾）、高所医学（松林）、古地磁気学（西山）、地球化学（西山）、畜産学（牛田）、文化人類学（中川、斉藤）、太陽電池（森戸）、測量（中川）の研究項目があげられた。それぞれ担当の隊員が研究資材を調達、準備した。そのなかには液体窒素、気象ファクス、ゴムボート、ヘリウム・ボンベなどが観測のためどうしても必要となり、梱包や輸送に特別の注意を払った。

12月に入っていよいよ忙しくなってきたが、選ばれた隊員のほとんどは準備段階からこの計画に加わっていたので、各自の役割に従って準備をすすめた。8年前のヤルカンの記録をひもとき募品に走り回った。これらの経緯については別の報告にみるとおりである。年が明け全隊員のビザ取得。3月14日の出発も決定し、ここにわがAACK績年の夢、チベット遠征が実現することとなった。（文中敬称略）

港では今回の遠征の連絡官となる張俊岩氏らの出迎えをうける。北京は冬枯れはしているものの気温は比較的暖い。天壇公園の近くの北緯飯店に宿泊。

3月15日 北京滞在

午前中中国登山協会（CMA）と打ち合わせを行う。中国での受け入れ準備はほぼ整っているとのこと。昼食前に日本大使館へ全員で挨拶に行き、その後松林らは学術用の液体チツを購入に出かける。夕方史占春、許競両CMA副主席、王富州氏らと会談、夕食を共にする。夜はサーカス見物。

3月16日 北京滞在

市内見物（万里の長城、十三陵）。

3月17日 北京～成都

夕方の飛行機のために午前中市内にある故宮を見物。北京空港で早い夕食ののち成都へ向け飛び立つ。成都空港では四川省CMAの出迎えをうけ、成都市最大のホテル錦江賓館へ。

3月18日 成都滞在

市内見物（杜甫草堂、武侯祠）。

3月19日 成都～ラサ

4時起床、朝もやに霞む成都をあとにいよいよチベッ

トである。機上からは朝日に輝く高峰群がすばらしい。ラサ空港はヤルツァンボ川ぞいの草原にあり、そこからチベットCMAのマイクロバスでラサ市へ。空港からラサ市まで約100km。ジャリ道は砂けむりがすごい。ラサでの宿舎は市郊外にあり非常に気持ちのよい所である。ただ急に3700mのラサに来たため体がだるく動くとき息が切れる。

3月20日 ラサ滞在

まずチベットCMAの倉庫へ行き隊荷の確認を行う。非常に良好な状態で運ばれていた。

その後ラマ教寺院であるジョカン寺(大照寺)を見物。寺内は撮影禁止で中はヤクバターの臭いでむせかえりそうである。ついでポタラ宮殿へ。さすがに立派である。

3月21日 ラサ滞在

午前中松林以下5名でCMA倉庫で隊荷の整理を行う。昼食後チベットCMA事務長ラー氏の訪問をうける。氏はチョモランマの登頂者である。その後、宿舎の裏山へ高度順化のトレーニングに出かける。チベットの遠征はBCまで車で入るためこのような形でのトレーニングが必要なのである。

3月22日 ラサ～シガツェ

本日からいよいよキャラバン開始である。マイクロバスとジープに分乗しシガツェへ向う。途中4800mの峠よりクーラカンリやブータン山々が見渡せ、また7000級の山(レンリカンサン)の真横を車が走るなど退屈しない。

3月23日 シガツェ滞在

朝より近藤隊長の容態が思わしくなく、松林、陳につきそわれてシガツェ人民医院へ診察をうける。レントゲンによると高度障害により肺炎をおこしておりそのまま入院。今後の行動を検討した結果、隊長の体を第一に考えしばらく入院治療し日本へ帰国してもらうこととした。又、その間松林、陳がつきそい、他の隊員は予定どおりBCへ向けて行動することとした。(近藤隊長らの行動は後述)

この日、荷上げをしてもらう協力員と合流する。チョモランマ、シシャパンマの遠征経験がありたのしい協力員達だ。

3月24日 シガツェ～シガール

近藤隊長、松林、陳を残し出発。4500m、5220mの峠を越えるが、途中まだ雪の残っている所もありマイクロバスは苦勞する。シガールは最近ティンリー(定日)より行政府が移された町であるが、宿舎は非常に簡素で料理もすべて缶詰である。

3月25日 シガール滞在

午前中シガール山(約4800m)へ順化トレーニングに

行く。頂上にはアンモナイトの化石があり古代このあたりが海であったことを彷彿とさせられる。午後、隊荷を乗せたトラック3台が到着し隊長に使ってもらう酸素ボンベ、薬品を取り出すことができた。

3月26日 シガール滞在

トラックの荷物を整理し隊員、中国人、協力員に装備の一部を支給する。シガツェへ帰るマイクロバスに酸素ボンベ、薬品を乗せ送り出したあと、各自思い思いにすごす。西山、幸島、森戸は近くへ学術調査。斉藤、中川は日本でのチベット語教師の知り合い宅へ出かける。

隊長、松林、陳の行動

3月23日 入院。

3月23日～26日 入院 治療。

3月27日 シガールよりのマイクロバスに乗りラサへ。

3月28日 休養。

3月29日 ラサ空港より隊長単身成都へ向け帰国の途につく。松林、陳はおり返しBCへ向けシガツェへ直行。

3月30日 シガツェよりシガールへ。

3月31日 シガールよりBCへ。本隊の車のわだちを探しつつBCに入る。

II. 登攀活動

1. BC建設

3月27日 快晴

午前8時30分(北京時間)シガールを出発する。トラック3台、ジープ1台である。

ジープは先行し、トラックがそれに続く。

トラックの荷台には、若手の隊員が乗り、ジープには、中国側連絡官とコック、森本、中川が乗る。トラックの助手席に上尾、西山、斉藤が乗車した。

途中、ティンリー付近からは、車からマカルー、チョモランマ、ギャチュンカン、チョーオユウが目前に見え、さらに西に目をうつすと、未踏のラプツェガンなどの峰々がそびえている。

ネパールへ続く公路からわかれて、キールン(吉隆)に向う公路に入る。このあたりから、急に道が悪くなる。途中、凍結した河を難渋しながらわたり、カンペンチン目ざして進む。張連絡官、コックの達東(チベット語通訳も兼ねている)が、ヤクを雇う予定のセルン村に下交渉のために寄る。セルン村をすぎると、シシャパンマ、ポーロン・リ、ランタン・リが見えはじめ、雪原の向うにはひときわ大きくカンペンチンがそびえている。予想以上に積雪が多く、トラック、ジープは時々雪の中で立往生する。カンペンチン北峰が正面に見え、凍結したベ

グ湖を確認したあたりで、14時30分になった。ここから、カンペンチン目がけて進路をとり、ジープが先行してルートをさがす。トランシーバーで交信しあって雪の少ないところをさがし、右に左にルートをとり、15時30分大きな河の岸に到達した。雪の状態、時間、地形等から判断してこれ以上の前進を断念して、水も十分とれるこの河岸をBCに決定した。

3月28日 快晴

BCの整備に一日かける。BCの高度は4650m。激しい行動をすると高度順化が不十分なため、息がくるしい。協力員にテントの建て方を教えながら、全テントの点検をする。また、装備係の近藤(裕)を中心に、共同装備、個人装備を点検し各自に配布する。

気象Faxを設置しアンテナをたてる。期待していた日本、北京の放送は、全く受信できず、最後の頼みであるニューデリーが鮮明に受信できほっとする。500mb(約5000m)、300mb(約7000m)の等圧面天気図(実況)を受信する。発電機も快調である。

BCからはカンペンチンの東方にモラメンチン、シシャパンマ、ポーロン・リ、ランタン・リが一望のもとに見わたせる。

2. ABC建設

3月29日 快晴のち晴

ABCへのルート偵察を開始する。牛田、人見パーティーが先行しルートを定め、高所協力員が15kg+αの荷物を持って続く。

目的地は、カンペンチンの前山の5200m地点である。

出発に先だって、中国国旗、日本国旗、AACK旗の掲揚をする。西山、森本、幸島、森戸は、高度順化を兼ね牛田達のトレースをたどる。真白い大平原で、距離感覚は狂い最初の目標とする前山はいつまでたっても近づかない。ラッセルは、くるぶしからひざ下ぐらいである。14時に牛田パーティーは、デポ地を決定したものの、前山には取付けず高度はBCと同じ4650mであった。西山達は、デポ地横の小山に登る。4800m弱であった。頂上からBCの位置を同定すると、当初予定していたBC位置より一つ東側の河の岸が現在のBCらしい。18時に全員BC着。上尾、森本、張の3人で、ランドサットの衛星写真、地図により再度BC位置の同定を行った。やはり、現在のBCは、一つ東側の河岸にある事が明らかになった。しかし、積雪状態から考えて他に適当な場所もなく、BC位置の変更は不可能である。

登攀ルートは、上部氷河に向け前山をまっすぐに登るルートをとる事にした。これが最短ルートである。前山

の上(5700～5800m)にABCが建設できれば、理想的だと考えた。

3月30日 快晴

スピードアップをはかるため、スキーを使う事にした。牛田、人見が先行し、できるだけ高度をかせぎ、その最高到達点に幸島、森戸が泊り、翌日上部偵察をする計画をたてる。スキーの効果は素晴らしく、前日の倍近いスピードで牛田パーティーは行動した。最高到達点は5000mであった。

前山の尾根状のところは、所々土がはじめており、ルートを適当に選べばヤクは5000mまでは確実に上ることがわかった。

3月31日 快晴のち晴のち地ふぶき(風強し)

幸島パーティーは、8時に上部偵察に出発した。目標は、前山の上から氷河の下り口を見つけることである。スキーを使う。快調なピッチで進み、15時5700m地点に到達した。この頃から、上部は地ふぶきが激しくなりはじめ視界が極めて悪くなった。

一方、BCからは、西山、森本が14時に5000mキャンプに入った。

15時30分頃、地ふぶきは激しくなり、氷河の下り口を見ることができないまま幸島パーティーは下降に入った。旗ザオも良く見えずルートをしばしば失いながら5000mキャンプを目ざした。日没直前の20時30分頃、西山、森本の待つテントに帰着。2人の報告によれば、5000～5200m間が最も積雪が多く、ヤクの登りに苦勞するであろう。それ以上は、スキーがなくてもルートを選べば大丈夫であるということであった。

12時間におよぶ、きびしい偵察であったがABCへのルートの目処がたった。

この日、BCにはラサに近藤隊長を送った陳、松林が入った。2人の到着を心配していたが、予定より1日早くBCに入った。これでパーティー構成にもゆとりができ、一安心である。

4月1日 快晴

前日の偵察結果と、当初のタクティクスから考えて、5200m地点にテントを移動しBC～5200mのルート作りが重要であると判断した。5200m地点に6人用テントを設営するために、西山、森本、幸島、森戸が荷上げする。また、BCから牛田、人見が5200mキャンプに向けて出発した。

午前中に5200m地点の設営は終わった。14時30分、牛田パーティーは5000m地点に達し、16時40分5200

mキャンプに入った。BCには、夕方、セルン村のヤク11頭が到着した。

4月2日 快晴のち地ふぶき

牛田、人見は、上部偵察の予定であったが、5200mより上は、地ふぶきのため出発後ひきかえす。また、5000mにキャンプがあるとヤク工は、荷物をそこにデポする恐れがあるので、5000mキャンプを撤収することにした。西山、森本、幸島、森戸、牛田、人見がこれにあたる。ダブルポッカになった。協力員も5200mまで登る予定であったが、連絡が悪く5000mにテントを張ってしまった。翌日5200mに上げることにする。ヤクは、BCから前山の登り口まで到達した。

4月3日 快晴

5000mに泊った協力員は、森本、幸島、森戸の指示で午前中に5200mに上った。5000mには、全く何ものこらず5200mが前進キャンプとなった。牛田、人見は、幸島、森戸がはたせなかった、氷河下り口の偵察に出た。14時30分5850mのゴルに達し、そこから氷河に容易に取付けることを確認して、18時30分5200mキャンプに帰着。

ヤクは、5000~5200m間で予想どおり難渋し、5200m地点到着が17時すぎであった。

高所協力員とトランシーバーでの達東(コック)の説得により、ヤクは5200mに泊り明日できるだけ上に登るということになった。

松林、近藤(裕)は5200mキャンプに入った。

4月4日 快晴

荷上げで最も重要な日である。ABCの位置が決定すれば、そこが今後のタクティクスの根拠地となるからである。隊員はより確実な登攀のため、協力員は自分達の荷上げ量を少しでも減らせるために全力をあげてヤクのルート作業を行った。先行し、ケルンを積み、トランシーバーを駆使してルート指示を行った。5700m直下の雪面では、隊員、協力員が一体となって、雪面にヤクの道を作った。その結果、前山の上にある池(凍結)のそばの平地にABCを建設することができた。

この日、森本、松林、近藤は5850mの前山最上部のゴルに達し、氷河上のルートを検討し、氷河左岸のルートが有望だと判断して帰って来た。

5200mキャンプには、第2陣のヤク10頭が到着し、荷上げを終えたヤクと合わせて21頭のヤクと6人のヤク工が泊ることになった。

牛田、人見、幸島、森戸の4人がABCに入った。

4月5日 晴のち曇(風強し)

ABCの4人は、連日の行動と高所の影響で体調が悪く、上部偵察をとりやめ休養日とした。西山、森本、松林、近藤は、ABC入り。ヤクは、協力員の誘導により昨日のルートを使ってABCに13時に到着した。

一部の個人装備をのぞいて、ほぼ予定量(1.2t)の荷物がABCに荷上げされた。ABCの位置からは、C1へのルートと頂上までが目前に見える。夕方、カンペンチンは、雪煙をあげていた。

3. C1建設

4月6日 曇のち雪

BC入りして以来初の悪天でカンペンチン上部は雪の中でほとんど見えない。氷河の上部がかすんで見える。天候があまりよくないので、無理をしないで高所順応を兼ねて氷河へおりて見るつもりで、森本、幸島、森戸、人見の4人は、上部に向った。牛田は腹痛、西山、松林、近藤は休養。

氷河取付は、偵察どおりトラバース気味に高度をほとんど下げないで行けた。氷河は、500m位下流で急傾斜となっている。

上部は、左岸ぞいに行けば比較的容易に氷河上のゴルに出られそうである。入山以来はじめてのアレザイレンで、全員緊張気味で、疲れは感じない。ワンアットタイムとコンティニューアスをとりまぜて氷河上のゴルに達した。

6300mあたりが、雲底で頂上への斜面は見えないが、その手前のアイスフォールは見える。

これは、思った程荒れていない。良いルートファインディングとフィックス工作によって確実にルートはひらかれると感じた。6050mあたりで、13時になり視界も悪くなったので、下降を開始。途中、氷河上で2~3ヶ所クレバスを発見した。氷の出ている急斜面に80m、40mのフィックスロープを張りABCに帰った。

これで、京都以来見ることでできなかった部分すべてを観察したことになる。そのいずれも、大きな問題はなないことを確信した。あとは、天候と高所順応にかかっている。

この時点で、より多くの人間が頂上に立つタクティクスを考えはじめた。協力員もABC入りした。中川も入った。これで、登攀隊員がすべてABCに集まり、体制が整った。

4月7日 晴(風強)のち雪

BCの陳からのFax情報によれば、気圧の谷からはなれた低気圧が、今夜から明日にかけて通過するというこ

とであった。松林、牛田、中川、近藤は、昨日のルートを確認するためのルート工作と、さらに上部の状態を偵察するため9時に出発した。13時にゴルに到着。ゴルは強風で耐風姿勢が必要なほどであった。前進を断念して下降をはじめたが、上部アイスフォールは容易そうであること、その先は大雪山が頂上につづいていることを確認してきた。夜9時すぎから風が弱くなると同時に雪がしんと降り出した。

4月8日 快晴のち地ふぶきのち快晴

前夜の雪は止み、微風快晴である。予定では、荷上げ開始日であるが、入山以来初めての積雪で深いところは30cm近くあるので、慎重を期して様子を見るため休養日とする。中川と近藤が、昨日BCから5200mテントに入っている予定の上尾パーティーを確認のため下る。11時頃、ABCに向う上尾パーティーを確認したと交信してきた。13時頃から風が出はじめ、モーレツな地ふぶきとなった。風速は、20~30m/sぐらいで、地ふぶきの高さは3~5mぐらいである。真上を見れば青い空がかすかに見えるが、横方向には、全く視界がなくなった。時々、カンペンチン、ペグ湖がかすかに見える。中川、近藤と上尾、斉藤、陳の3名は合流し、地ふぶきのなか苦勞してABCに到達した。3人は、ABC往復の予定であったが、時間的に帰るのは無理なので、ABC泊となる。シガツェで、近藤、松林、陳と別れて以来初めての全員集合となった。ただ近藤隊長の姿がないのが残念である。

夜、風はやみ満月にカンペンチンが青白く光っていた。

4月9日 快晴

久しぶりのおだやかな快晴である。隊員9名、協力員4名で荷上げとルート作業をする。牛田、人見が先行しルートをつけ、他の隊員は12~15kgの荷を持ち、協力員は15kgの荷をかつぐ。昨日の雪でひざぐらいのラッセルが続くが、雪は安定している。しかし初めての荷上げでペースは上らない。15時30分牛田、人見はアイスフォール帯(6250m)のフィックス作業を終えた。予定では、ここを突破するつもりであったが、時間切れとなった。6200m地点に荷物をデポし下る。ここは、高度、地形とともにC1予定地として有力である。少し移動すればABCとの交信も可能のように思えた。

その先のアイスフォールは、主なフィックスロープは張り終えたが、もう一本張るとさらに確実なルートとなる。

上尾、斉藤は5200mへ個人装備をとり帰った。この夜、張連絡官、コックの達東がBCからABCに

陣中見舞に訪れた。2人は朝7時にBCを出てほぼ12時間でABCに到達した。驚異的な体力である。協力員は大喜びである。

4月10日 快晴

C1建設日。森本、松林、牛田、人見、協力員4人で荷上げする。幸島、森戸はC1に入り、翌日上部偵察の予定である。C1は、昨日のデポ地に決定する。高度は6200m。6人用1張を設営し、トランシーバーの交信状態をチェックする。ABCとはまあまあ聞きとれる。

この日、ABC~C1間のルート工作と整備は完了し、安定したルートになった。

C1からは、もうピークが真近である。

上尾、西山、斉藤は、ヤクが5450m地点に残した荷物の一部を回収してABCに帰ってきた。

4. C2建設

4月11日 晴のち曇のち曇

幸島、森戸は予定通りC2へのルート偵察に8時に出発。C1のすぐ上にあるアイスフォール帯にさらにフィックスロープを張る。

中川、近藤はC1に入る。他の隊員は休養日である。隊員の休養は基本的に3日行動1日休みのパターンとする。協力員のみで荷上げをする。協力員の行動パターンは、3日荷上げ1日休みである。

森本、松林、牛田、人見は5450mにヤクが残した荷物を回収する。

偵察の2人は、アイスフォール帯をぬけたのち斜面をトラバースし雪面の中央に出ようとしたが、クレバス帯となっていて時間をくった。14時30分6450m地点に到達し下降を開始する。この頃から、急に天候が変化し雲がかかり雪が降り始める。ホワイトアウトになりルートを見失なう。ワンアットタイムで慎重にクレバスを避けて17時すぎ中川と近藤の待つC1に帰着した。荷上げ手順が狂い旗ザオが十分なかったことも下降に苦勞した一因であった。この偵察によりアイスフォール帯の通過はルート上問題はなくなった。また、上部雪面下部のトラバースはクレバスが大きくその数も多く不利であることがわかった。

天候の日変化は激しく30分程の内に快晴から完全なホワイトアウトにまで変化する。特に、午後13~14時頃からの天候のくずれには十分注意が必要である。

4月12日 快晴

昨日の偵察ルートを検討した結果、C2へのルートは、アイスフォールをぬけたのち頂上に向って登る直上ルー

トの方が良さそうだと判断する。中川、近藤はC1を9時に出発し、快調なピッチで登った。このルートには、ほとんどクレバスはなかったが、ラッセルがヒザ下ぐらいあって、苦勞した。14時に、2人は6550mの傾斜のゆるい雪面に到達。その先は、高度差150m程の急な雪面があり、その上かあるいはゆるい雪面がC2候補地となると判断して下降を開始し15時すぎにC1に帰着した。

西山、森本、松林、牛田、人見はC1入り。

幸島は、雪目と連日の行動の疲勞で調子をくずす。幸島パーティーはこのC1で休養した。しかし、松林の診断と今後の登攀を考えて、幸島はABCに下って休養することにした。

4月13日 快晴

C2建設は、昨日の偵察の結果6700m地点に上げることにした。8時、中川、近藤が先行し、ルート上に細かく旗をたてラッセルした。森本、松林、牛田、人見、森戸が、テント一張、フィックスバー、ザイル等を荷上げする。途中、森戸は調子が悪く、松林が付添ってC1に下り、C1からはABCへ協力員と下った。ジャブー、テムジンの2人が先行し、ツーレントーチ、ガサンピンゾーが森戸をささむようにしてABCに到着した。

予定通り、6700m地点に中川、近藤(裕)が到達し、大雪面中央のクレバスの端の小さな台地に適当なテント地を見つけた。テント等をデポし、下った。

4月14日 快晴

C2の位置も決定し、荷上げの目処もたったので全員休日とする。ABCから協力員は、スケジュール通り荷上げをする。

京都以来懸案であったポイントの通過が終了したので、タクティクスを再度検討し、荷上げ量の最終チェックを行なう。C2に200kg、最終キャンプに50kgはほぼ確実に荷上げできそうである。これにしたがえば、4人2回の頂上アタックは可能になる。さらに、C2に2人用テントを追加する。C2に8人泊る可能性があることと、北峰が高かった場合、再アタックが必要でありその前進キャンプにするためである。

4月15日 快晴

C2建設日である。牛田、人見がC2に入り、翌日の上部偵察にそなえる。森本、松林、中川、近藤の4人でC2の食料、装備などの荷上げを行なう。C2には6人用ウィンパー1張を設置する。C1、C2間のルートは、C1の上のアイスフォール帯を通過した後は、単調な大

雪面を登りC2直下の急斜面に入る。その急斜面の上がC2である。もし降雪が30cm以上あった場合には、斜面のいたるところから雪崩そうである。今後は天候の把握が成功への鍵となる。幸島、森戸は調子を整えてC1に再び入った。この日C1の最低気温は-25.2°Cを記録した。

5. 7100m テント地設定とアタック計画変更

4月16日 快晴のち雪のち晴

牛田、人見はC2を9時に上部偵察のため出発。少くとも7000mを越えることを目標にする。雪面の中央部を直上し、頂上方向へは遠まわりとなるが、途中雪面の端から端にわたる大クレバスを迂回し、右よりのルートをとる。やはり、大雪面の中で2人は距離感がおかしく頂上からはなれていることをABCの斉藤の指摘で知った。

14時、7030mの急斜面の途中で天候の悪化と疲勞のため下降を始め15時30分にC2に帰った。最高到達点(7030m)の上部に急斜面が続く、その上に2ヶ所ほどクレバスがあることがわかった。その上の7100m地点が最終キャンプの第一候補である。森本、松林、中川、近藤がC2に入る。幸島、森戸はC1からC2への荷上げをする。協力員も、予定から行けば休日だが、頂上アタック真近ということを理解して休日返上でC1、C2間の荷上げをがんばってくれる。

4月17日 快晴

偵察後、牛田の体調が悪くなり38~39°Cの発熱、松林の処置で熱は下がったが、C1に下って休養することにした。森本、松林、中川、近藤、人見の5名は、ザイル、フィックスバー、テント(4人用ウィンパー)を持って最終キャンプへの荷上げを行なう。途中7050m付近のクレバスと、急斜面にルート工作を行なう。

松林、人見パーティーが先行しラッセルとルート整理をする。12時、頂上直下の7100mキャンプ予定地に到達した。天候も安定しているので、頂上試登を試みることにする。その時、中川の持っていたテントの本体が雪面を落下。中川が止めようとしたが止まらず、クレバスを飛び越えて約200m下の雪面にひっかかった。幸いにも登りのトレースの近くで帰路に回収可能である。大クレバス横の比較的平坦な場所を整地してテントサイトとし、残った荷物をそこにデポする。クレバスを渡る場所は、斜面に向って、左に200~300mトラバースした地点が有望そうである。頂上に続く上部斜面は、思ったより傾斜が強くザイルなしには登攀は危険であるので、試登は中止して下降にうつった。

4月18日 晴のち雪

頂上アタックの目算もたち、最終キャンプの予定地も決定した。また、連日の行動からくる疲れと、慣れからケアレスミスが出始めたので、この日は完全休養日とする。上尾副隊長、斉藤隊員は高度順化のためC2に向け出発した。

C2において、上尾、森本は、アタックルート、全員の調子、17日の試登結果を検討した。その結果「初登頂のチャンスは1回しかない。」という上尾副隊長の言葉のもとに、19日の天候が良ければ、4人2回の最終キャンプを使ったアタック計画を変更し、C2にいる7人全員でC2から頂上をアタックすることに決定した。

用意した最終キャンプは、アタックのサポートキャンプとし、C2から12人日分の食料、燃料、炊事用具をアタック日に最終キャンプに予備として荷上げすることにした。

4月19日 雪のち曇

BCの陳の予想通り、低圧部の接近による雪と風のためにアタックは中止した。

C1で調整した牛田は、この日C2入り。これで、C2には登攀隊員全員が集結した。明20日に、天候を見てC2から全員でアタックをかけることにする。また、計画時より懸案であった北峰、中央峰のどちらが高いかハッキリしていないので、中央峰アタックののち、再び北峰をアタックする可能性も残っている。食料、日程から計算しても20日のアタックが最良だ。

6. 頂上アタック(第1次 第2次)

4月20日 曇のち晴のち雪

夜明け前から朝食をとり、出発準備を行なう。天候は雲が低い、19日よりはずっと回復しているようである。しかし、絶好のアタック日よりではない。連日の停滞で、全員の調子も落ち気味であり、体調の調整という意味もあって、出発を決定した。8時30分出発。

さすがにアタック日だけあって全員快調なペースだ。7100mには11時45分に到達した。12時30分トラバースを開始する。森本・松林、牛田・人見、幸島・森戸、中川・近藤の4パーティーで、各々、ワンアットアタイムで頂上へ向け登ろうとした。しかし、最後の斜面は勾配が強く、フィックスの方が効率良さそうなので急拠フィックスに変更し、ザイルをつなぐ。牛田が先頭でルート工作、所々氷壁となっており、アイゼン、ピッケル、アイスパイルで、慎重に登る。80mいっぱいフィックスしたところで、天候が悪化する。さらに上にフィックスが必要なので、松林にその工作をまかせる。松林

は60mザイルを1本持って登る。

この頃(13時30分頃)から天候はさらに悪化し風が強くなり、降雪も始まった。ときおり吹く強風で雪が舞いあがり視界がほとんどなくなることもある。フィックスの下にいた森本は慎重を期して撤退を決定し、トランシーバーを通じて下降を指示した。一方、先頭に立っていた松林は、頂上直下20~30mあたりの主稜線に到達していたが、視界がほとんどなく自から下降を開始していた。

こうして、第1回のアタックは失敗に終わった。14時30分全員7100mのテント地にもどる。小休止ののちC2に下るべく下降を開始するが、ホワイトアウトがさらに激しくなり危険なので7100m地点にもどりテントを張り天候の回復を待つことにした。

4人用テントに8人は狭いが、ツェルトよりははるかに快適である。C1からは燃料、食料12人日分荷上げし、さらに炊事用具等もあるので、茶をわかして天候の回復を待つ。しかし、19時になっても視界は10m前後で雪がちらついている。

夕食を作り本格的にビヴァークすることに決定した。全員比較的体調は良いが、森戸はかなり息ぐるしそうである。9時30分の交信を最後に、10時に全員横になって眠る。

2時頃、寒さと窮屈さで目がさめ、再び茶をわかし、ブタンランプをつけたまま思い思いのかっこうで眠る。

4月21日 快晴

目がさめると6時であった。全員かなりよく眠った。外は快晴。空が白み始めるとともに、ベグ湖、BCのあるポーロン高原がうかびあがる。真白である。昨夜はこの地域全体にかなりの降雪があったようである。

朝食ののち、8時30分勇躍テントをあとにアタックを再開する。

牛田、人見パーティーをトップに中川、近藤、幸島、森戸、松林、森本の順にフィックスに入る。

10時15分、最後の森本がフィックスをぬけ主稜線に出ると、先に上った全員が待っていた。

森本を先頭に頂上に向かって歩き出す。一つ目の雪のピークの上に立つとその先にさらに10m程高い雪のピークが見えた。アイゼンをきかしながら登る。そこから先は、ストーンと切れて南峰につながっている。

ここが頂上であった。10時30分。

互いに固い握手をかわす。気温は、たいへん低く-30°Cぐらいであると思われた。

ピッケルに中国国旗、日本国旗、AACK旗をつけ写真をとる。互いに記念写真をとりあう。BCから単眼鏡

で登頂の一部始終を見ていた陳、C1の上尾と次々に交信する。張連絡官の祝辞も陳を通じて頂上に入ってきた。

問題の中央峰と北峰との比較は、中川がハンドレベルで北峰をのぞき、我々のいる中央峰が北峰より高い事を確認した。

頂上からの360°のパノラマは全く素晴らしい。東にシシヤパンマ、そのはるか彼方にチョモランマ、少し右にポーロンリ、ランタンリと続く。ランタン谷の周辺の山々でひととき立派なピラミッドがランタン・リルンである。さらに南西に目をうつすとガネッシュの山々、そのはるか彼方にマナスルP 29、ヒマルチュリが見える。チベット側に目をうつせば、眼下にペグ湖が見える。チベット高原は波のようにうねる山なみが雲の彼方まで続いている。

こうして頂上に立つと、9年前のヤルンカン、8年前のK12の事故が鮮明に思い出され、感慨ひとしおである。

11時頂上をあとに下降を始め12時すぎに全員7100mテント地にもどった。荷物をまとめC2に向け下った。

14時30分、登頂隊全員がC2に帰着した。

上尾、西山、斉藤は登頂確認後C2に向け登る。16時頃、3名はC2に到着した。

中川、人見、近藤の3名は、入れかわってC1に下った。

中央峰が北峰より高い事が確認され、また隊員の体調も限界に近いので、北峰のアタックを中止する事にした。一方、上尾、西山、斉藤は、C2までは調子が良いので、明日、今日のルートを使って行けるところまで行くことにする。

4月22日 快晴のち雪

9時出発。快晴。上尾、西山、斉藤に森本、牛田、幸島がサポートとしてつく。松林はC2にとどまる。森戸はC1に向け下る。

上部に向ったパーティーは、途中幸島の調子が悪く1人で引き返しC1に下る。また、斉藤は登頂記事を日本に送るため途中からC1に向け下った。牛田も連日の行動の疲労から調子があがらずおくれる。

上尾、森本は7100mテント地に12時15分に到着した。西山、牛田はかなりおくられている。2人を待っていると天候の変化のため上部に行けなくなる可能性がある。上尾、森本は、昨日のルートで、頂上に向う。上尾が最初の80mのフィックスを通過したところで、西山が7100mに到着。牛田は、7100mテント直下の最後のフィックスをおえたあたりで休んでいる。森本が手まねきすると西山はトラバースを開始してフィックスに向っ

てきた。

上尾、森本、西山の順にフィックスを通過し、14時00分3人は頂上に立った。近藤隊長、通訳の陳、報道の斉藤をのぞく全員がカンペンチンの頂上に立ったわけだ。東から南西にかけて、雲が発生し、視界は全くきかなくなった。西山は頂上で寝ころんでいる。3人で互いに握手をし記念写真を撮る。身体中に満足感と安堵感と疲労とが入りまじったものがわいてくる。30分程頂上において下降を開始した。15時30分牛田の待つ7100m地点のテントに、3人は帰着した。交信ごとにC2の松林は、西山の心臓を心配している。この頃から、C2以上は雲につつまれ、降雪が始まりホワイトアウトとなった。しかし、登りのトレースがかすかに確認できるので、牛田を先頭に慎重にC2に下る。

17時30分C2帰着。テント地に着くといままでの疲労が一度にどっと出てきた。BCからほぼ3週間で、のべ11人がカンペンチンの頂上に立つことができた。

7. BCへ

4月23日～27日

上部キャンプをすべて撤収し、ABCからはヤク6頭で荷物をおろした。BCを出発してちょうど1ヶ月たった27日には、全員BCに帰着。この夜は、羊のバーベキュー、ビールで乾杯。夜おそくまで飲み笑う声がBCにひびいた。

4月28日～5月3日

BC付近で、岩石、水、動・植物の採集など学術調査を行なった。また、斉藤、中川、人見はセルン村に2泊3日で宿泊し、チベット人と生活をともにし村の構成、放牧形式などを調査し成果をあげた。

Ⅱ. BCから日本へ

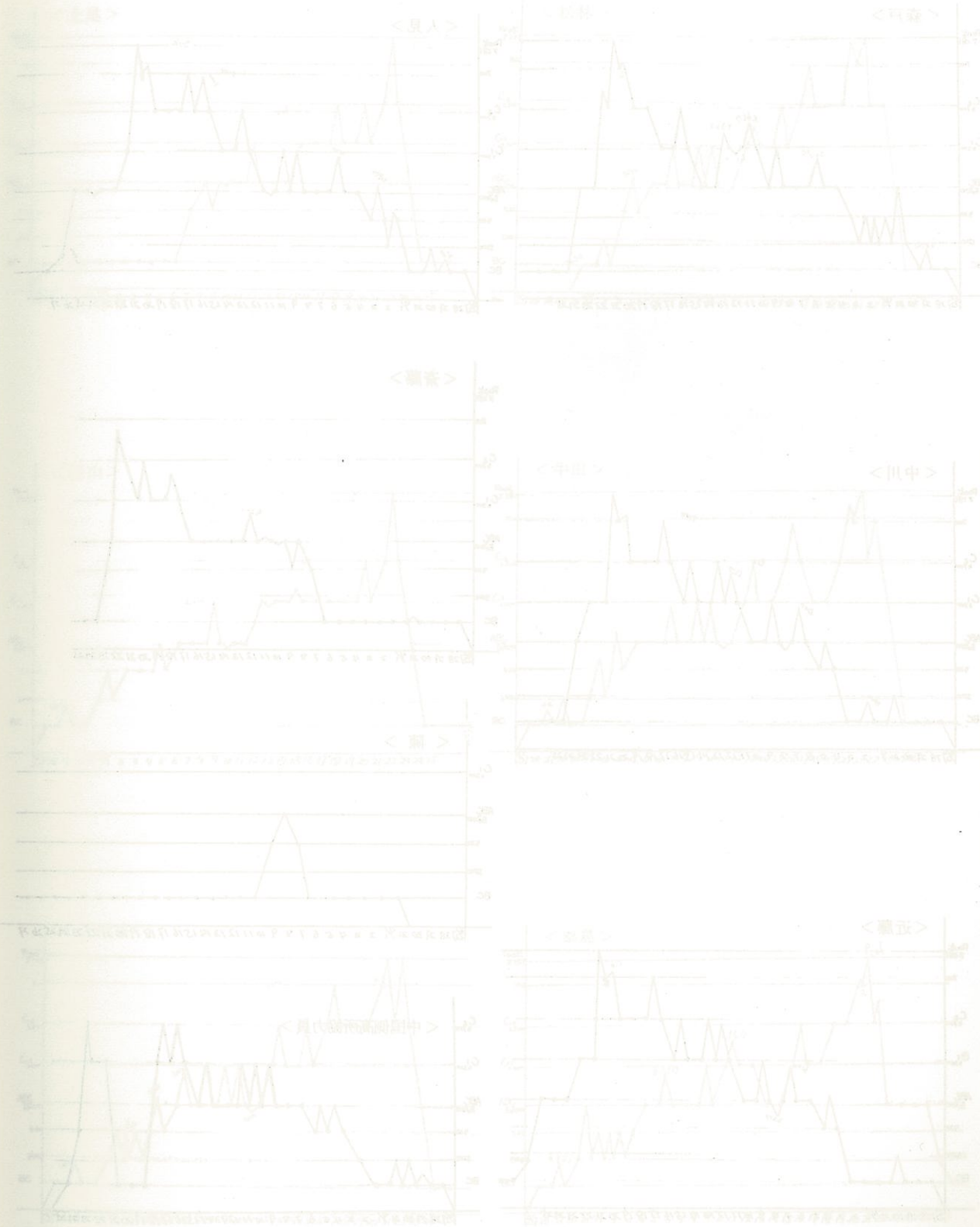
5月4日 BC～シガール

7時起床。テントを撤収し大勢のチベット人の見送る中BCを後にする。西山、森戸は帰路岩石採集を行うためラサまでジープで先行する。他の隊員はマイクロバス。日々仰ぎ見たカンペンチンはこの日雲にかくれて見えない。

5月5日 シガール～シガツェ

途中、サキヤ寺へ立ちよる。ここは河口慧海ら数名が戦前に訪れただけで戦後日本人は誰も行ってない寺である。遠く日本から来たということで特別に見学を許可してもらう。非常に立派な寺であるが僧侶は十数名とかでさびれている様子である。

<行動表>



< 行動表 >

14時00
 報道の斉
 こわけた。
 大きな
 いに握手
 と疲労と
 上において下
 地点のテ
 松林は、西
 人は雲に
 った。しか
 ら、牛田を

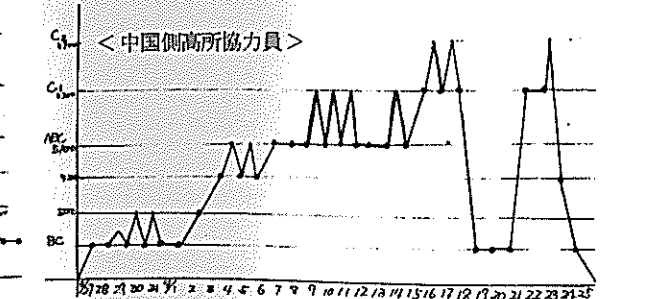
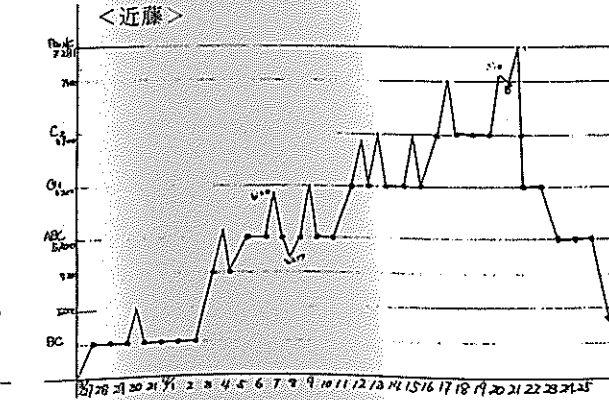
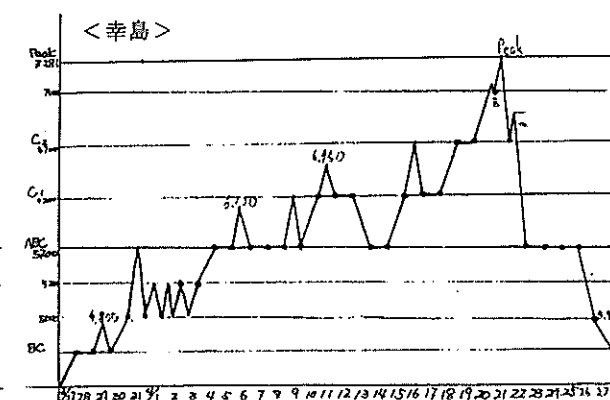
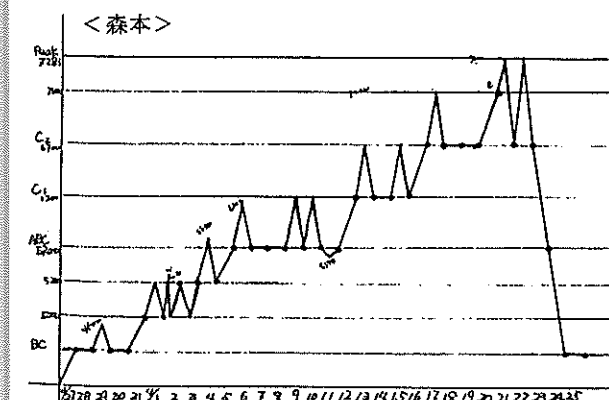
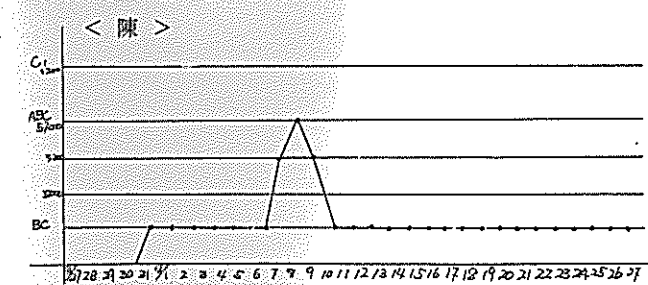
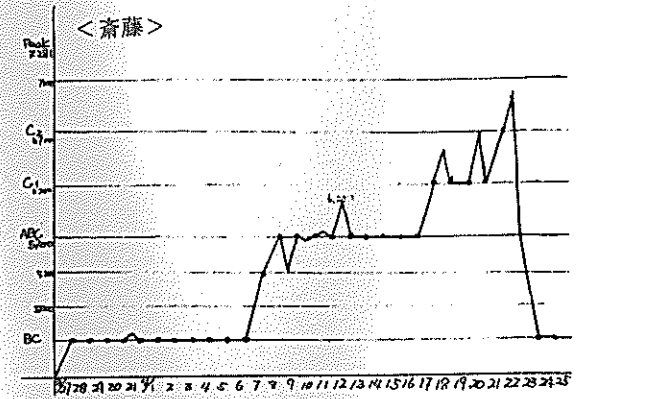
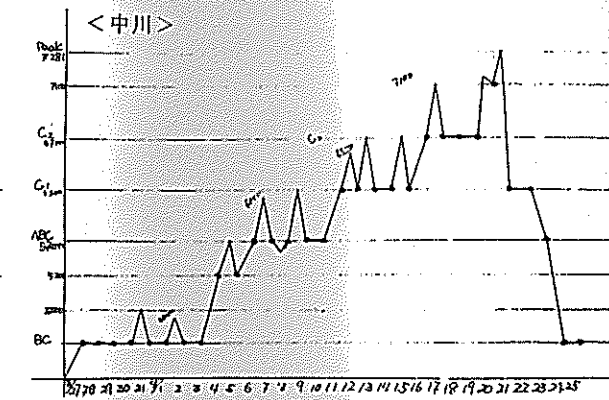
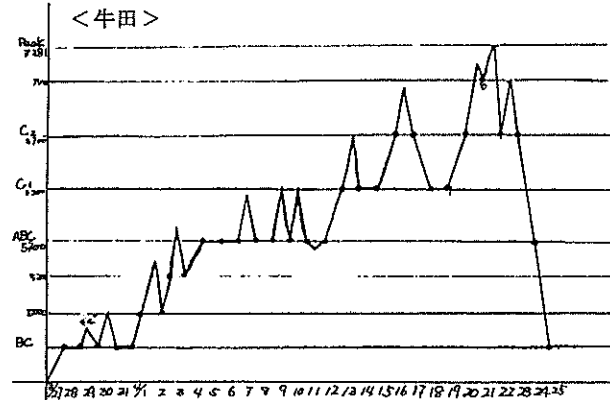
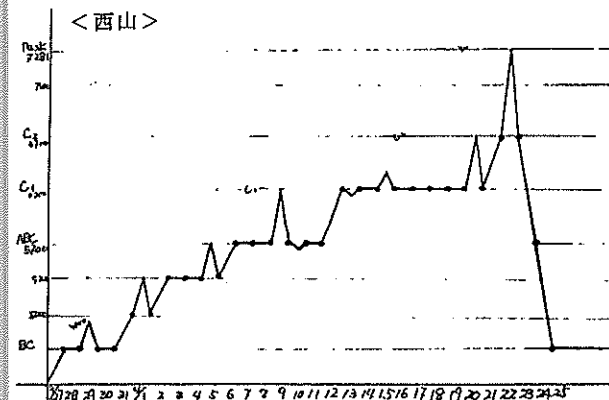
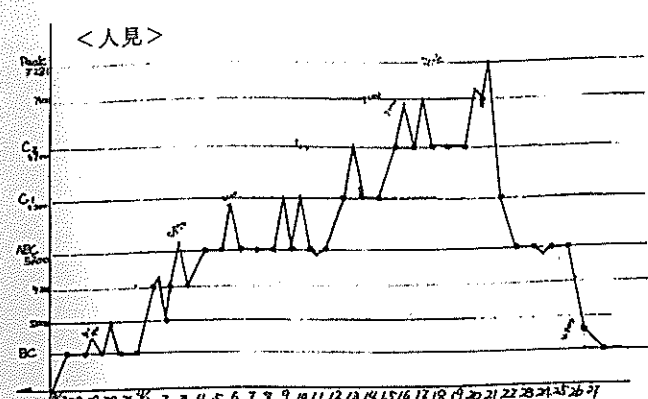
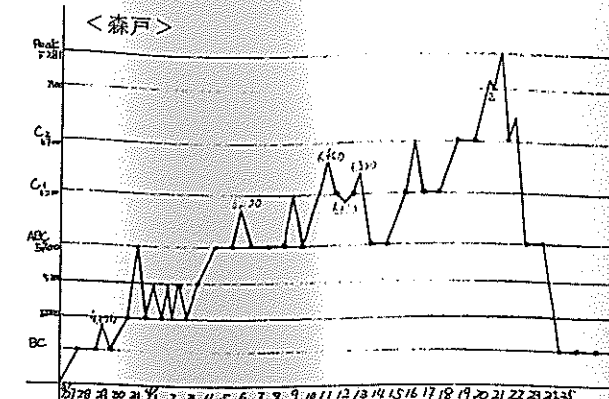
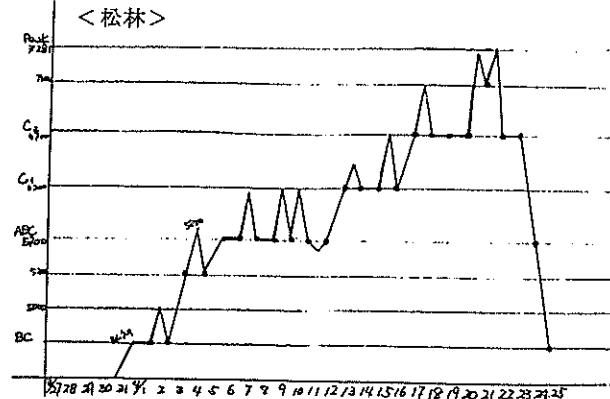
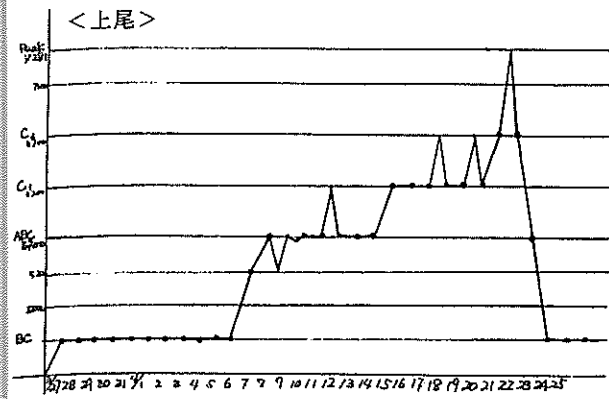
までの疲
 弱間で、の
 きた。

はやく6頭
 ケ月たっ
 どのパーベ
 声がBC

学術調査
 村に2泊
 付の構成

の見送る
 を行うた
 クロパス。
 して見えな

ら数名が
 ない寺で
 学を許可
 数名とか



< 表 録 計 >

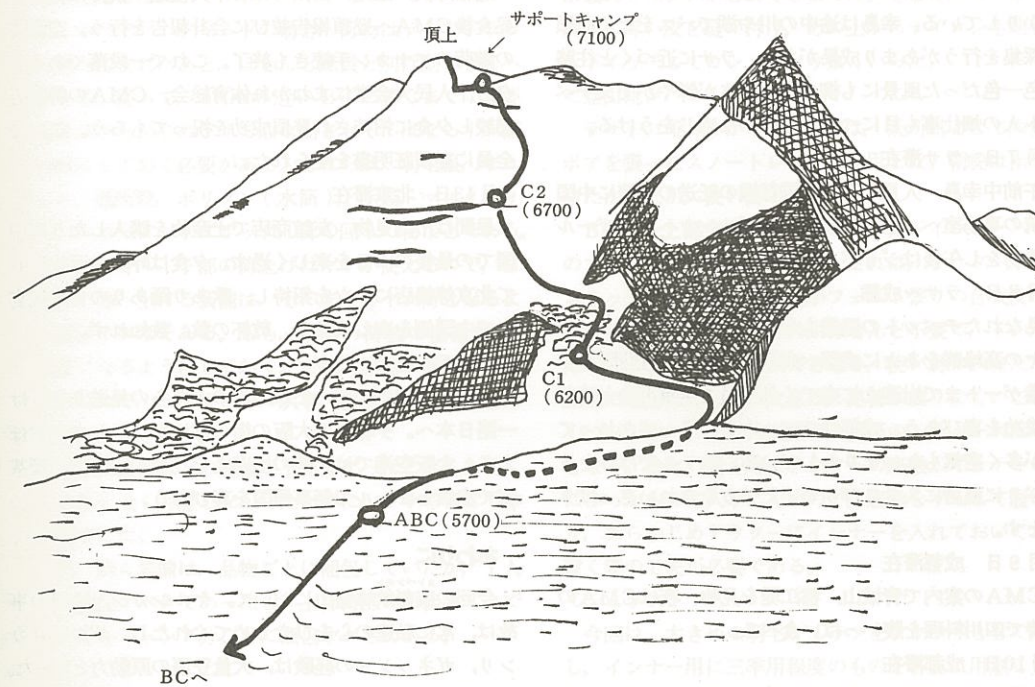
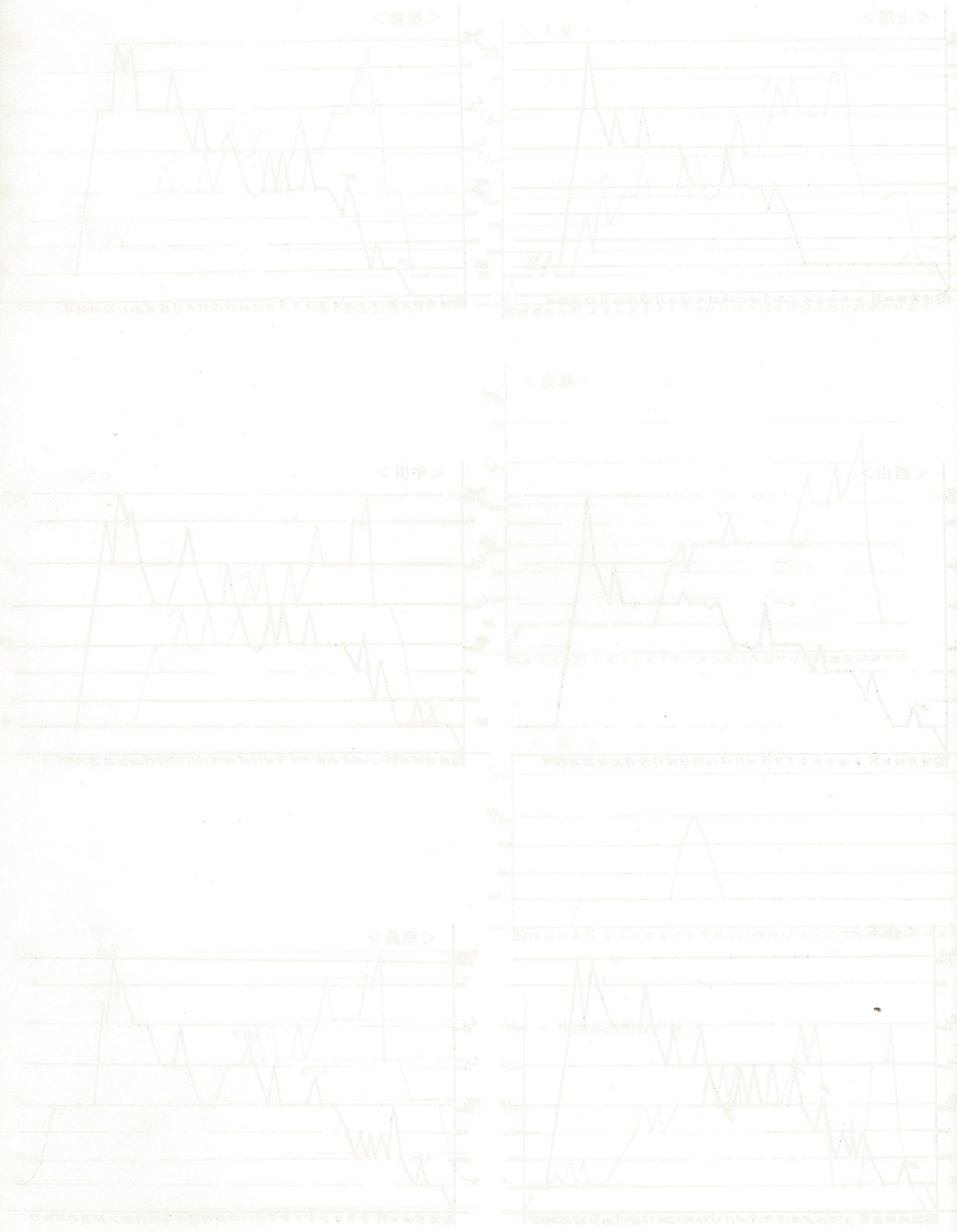


図1. 登攀ルート

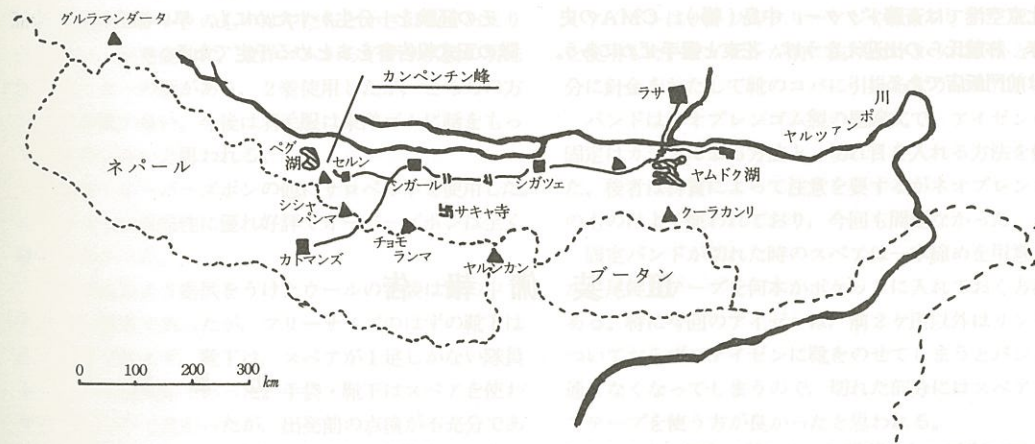


図2. チベット自治区

5月6日 シガツェ～ラサ

キャラバン最終日、隊員はみな疲れているのか居眠りばかりしている。幸島は途中の川や湖でバスを止め魚類の採集を行うがあまり成果がない。ラサに近づくと往路土色一色だった風景にも柳の葉の青さが鮮やかで又チベット人の畑仕事も目につきなごやかな感じをうける。

5月7日 ラサ滞在

午前中幸島、人見、近藤で飛行機の託送の手續に中国民航の事務室へ。他の隊員はノルブリンカへ。バザールで買物をし午後はジョバン寺見物。

5月8日 ラサ～成都

見なれたチベットの風景も今日が見納めである。ヒマラヤの高峰群をあとに成都へ向う。成都では近藤隊長が空港ゲートまで出迎えに来てくれ全員で無事再会と遠征の成功を喜びあう。成都はチベットとはうってかわって緑が多く空気もしっとりとしている。ホテルではひと月半ぶりに風呂に入りこびりついたアカをきれいさっぱり落とす。

5月9日 成都滞在

CMAの案内で青城山、都江堰を見物。夜はCMAの招待で四川料理を腹いっぱい食べる。

5月10日 成都滞在

昼間は市内見物など各自思い思いに過す。夕食はこちらの招待でCMA、それに四川大学で日本語を教えている京大文学部院生の大平夫妻をまねき歓談する。

5月11日 成都～北京

北京空港では斎藤ドクター、中島(暢)、CMAの史占春、許競氏らの出迎えをうけ、花束と握手せめにあう。宿は前門飯店である。

III 装 備 報 告

近 藤 裕 史

今回の遠征では、装備のことで特に支障をきたすようなことはなかった。しかし、準備段階で試作品のテントのフレームが折れ、当初の方針を変更せざるをえなくなるなど、今後研究を重ねていかねばならない点も多く、また、中国での登山は、これまでの遠征とはスタイルが異なっており、梱包などに不手際があった。

以下、主なものについて説明する。

5月12日 北京滞在

近藤隊長、上尾、西山らは日本大使館へ挨拶に行き、昼食後CMAへ登頂報告並びに会計報告を行う。空港での隊荷のアナカン手続きも終了。これで一段落である。夕方、人民大会堂にまねかれ体育総会、CMAの幹部と懇談し夕食に招待され登頂成功を祝ってもらう。ここで全員に登頂証明書を配られた。

5月13日 北京滞在

昼間は市内見物、友誼商店で土産物を購入したりで中国での最後の一日を楽しく過す。夕食は昨晚の返礼として北京焼鴨店にみなを招待し、歌あり踊りありの日本式宴会で中国側を楽しませる。乾杯の数、数知れず。

5月14日 北京～日本

14時すぎ世話になったCMAの人たちの見送りをうけ一路日本へ。夕暮れの大阪の街の灯になつかしさをおぼえる。大阪空港では大勢の出迎えをうけ、空港内の喫茶室で赤飯とビールで無事帰国を喜びあう。

おわりに

今回の^{キャンペン}康彭欽峰登山において、ヤルンカン、K12の事故は、常に私達の心をひきしめてくれたし、サルトロカンリ、ガネッシュの経験は、大量登頂の原動力となった。

一方、この遠征では、今までのAACKの海外遠征と異なる部分が数多くあった。今後AACKが、グルラマングータ、コンロンなど山城は異なるけれど、中国の山々に行く場合に、有用な経験も多いと思う。

その経験を十分生かすためにも、早い機会にこの遠征隊の正式報告書をまとめる予定である。

なお、装備係は当初太田岳史がやっていたが、彼が隊員を辞退したため、途中から私が引き継いだ。

1. 梱包・輸送について

輸送について、中国での登山の大きな特徴は、

①BCまで車で入る。

②下部の荷上げにヤクが使える。

ことである。従って、このことを考慮に入れて梱包をしなければならない。

①について、チベットの場合、荷物はラサでトラックに積みこまれたあと、ほとんど隊員と別行動でBCへ運ばれる。従って、5000m近いBCに着くまでに必要な装備はあらかじめラサで取り出さなくてはならず、梱包は別にしておく必要がある。それらは、羽绒服、サロペット、低所靴、ポリタン(水筒)、手袋、マスク、リヒト、スカーフ、サブザック、身の回りの物などである。

②について、下部の荷上げはヤクが使えるので、BCより上部へ上げる装備は、そのままでヤク荷となるように梱包すべきである。即ち、1個の荷物の重量が25kg前後になるようにしておく。また、途中の偵察の可能性があるので、2～3日分の炊事・生活用具一式を別に梱包しておくとうまい。

今回は、偵察隊との連絡が不十分だったこともあり、以上の点を全く考慮しなかったために、ラサやBCで非常に苦労した。

また、個人装備は、品物ごとに梱包していたが、1人分ずつ梱包すべきであったし、上部荷上げ用装備も、できるだけ各キャンプごとに梱包すべきである。

2. 個人装備について(隊員用)

<衣類>

衣類は、今回用意したもので丁度良いぐらいと思われる。

羽绒服は、サレワのものはやたらとかさばってあまり良くない。出発直前に、東洋ゴムからイタリア製の羽绒服のモニターの話があり、2着使用したが、こちらの方がかなり質が良い。今後は羽绒服は東洋ゴムに話をもっていくのが良いと思われる。

ヤッケ・オーバーズボン他にサロペットを使用した。サロペットは保温性に優れ好評でオーバーズボンは全く使われなかった。

タカダ貿易より提供をうけたウールの手袋は雪の中でも非常に優秀であったが、フリーサイズのはずの靴下は小さすぎて使えず、靴下は、スペアが1足しかない隊員もおり、不足気味であった。手袋・靴下はスペアを使わずにすんだので良かったが、出発前の点検が不十分であったと反省している。またスキー用手袋は低所では便利であったが、なくてもさしつかえない。しかし岩混りのルートには有効であるという他隊の報告もある。

ロングスパッツは、今回使用した高所靴がかなり大きく、市販されているままでは足の裏に回すゴムバンドが届かない。そこで、新たに尾錠式の皮バンドをスパッツの両側に外側から取り付けた。この際、始めは直接スパ

ッツにカシメたが、冬山で試したところ、ナイロン生地が破れてカシメがとれてしまった。そこで、スパッツの内側に薄い皮を縫い付け、その上からナイロン生地をサンドイッチしてカシメるとうまくいった。

<登山靴>

ラサ(or北京)からBCまでは、低所靴として内側にボアを張ったスノートレックを使用した。朝晩は指先が冷たかったが、使い易い。

BCより上部では、高所靴として西ドイツローバー社のブロードピークを使用した。これは、アウトターがプラスチック、インナーは内側がフェルト張りの合成皮革の2重靴。アウトターは手入れがほとんど不要で、インナーはそのままテントシューズとなり、使い易い。また、保温性にも秀れている。欠点は、足首が曲りにくいことで、12本爪のアイゼンが必要で、斜面のトラバースは不利となる。また、履く時にアウトターの底敷がインナーの底にひっかかって入りにくいので、底敷をずらして履いたり、あらかじめアウトターにインナーを入れておいてから履く等の工夫が必要である。

<シュラフ>

今回は、大きめの羽毛シュラフをアウトターとして用意し、インナー用に三季用程度のものを各自に用意してもらった。人によって使い方は様々であったが、持ち運びが非常にかさばるので、羽绒服やセーターの利用も考えて保温力の秀れた大きめのシュラフがあれば充分だろう。

<アイゼン・アイゼンバンド>

アイゼンはサレワのフリーアジヤストタイプの12本爪を使用した。アイゼンが前に抜けないようにかかどの部分に針金をわたして靴のコバに引掛るようにした。

バンドはネオプレンゴム製の尾錠式で、アイゼンへの固定はカシメによる方法と、切れ目を入れる方法を使った。後者は材質によって注意を要するがネオプレンゴムのものはよく使われており、今回も問題なかった。

固定バンドが切れた時のスペアは一本締めを用意したが、尾錠とテープを何本かポケットに入れておく方法もある。特に今回のアイゼンは、前2ヶ所以外はリングがついておらず、アイゼンに靴をのせてしまうとバンドを通せなくなってしまいますので、切れた部分にはスペアとしてテープを使う方が良かったと思われる。

<ザック・ショイコ>

個人装備入れと荷上げの両方の役割りを最小限のもので果せるように、ショイコと、これに簡単に付け外しのできるナイロン製のザックを用意した。

ザックは、ショイコに合わせて、80cm×36cm×18cmの大きさにし、荷上げ用のダンボールの小箱を置いたときはその上に、ダンボールを背負わないときはザックだ

けをショイコに付けられるように、底と背中側2ヶ所に各々左右2個ずつのバンドを付けた。外側に大きめのポケットをつけ、開閉はひもでしぼるようにした。ショイコから外して使う時は、柔らかいナイロン製の割には大きいのでまくパッキングしないと後ろに引かれて背負いにくい、ショイコと合せて使うと荷上げの如何にかかわらず使い易かった。

<テルモス・ポリタン>

水筒としては、1.5ℓのポリタンと0.5ℓのテルモスを用意したが、高所では水分を多く摂る必要もあり、テルモスだけでは少なすぎるがポリタンに1.5ℓ入れるには多すぎるという中途半端な組合せであった。テルモスはやはり必要であるので、1.0ℓ用のテルモスが丁度良いと思われる。

小便用ポリタンは、使い道は言うまでもないが、吹雪の時や夜中以外でも非常に便利であった。個人差はあるが、入口はなるべく大きい方が使い易い。

<衛生ぬれナプキン>

これは、注射をうつ時の消毒用から、汗ふき、用便後の手入れや、痔の手当てまで広く使えて便利であった。大正製薬のものが大判で使い易い。

今回、横山宏太郎氏の考案で、これまでどのような気象条件のときに、あるいはどのような時期にどのような地域で、何を身につけていてどれ程有効であったかというデータがあまりないので、この様な蓄積を積む第1歩として服装アンケートを実施することにした(右図参照)。隊員に用紙を配って日を決めて記入してもらったり、全員が集まった機会に用紙を配ってその場で記入してもらったりしたが、1つは毎日の服装があまり変わらないため、また煩雑なために思うようにデータが集まらなかった。やはり、こういう記録は係の者がその都度残していかなければ集まらないようである。

得られたデータの中から標準的な服装を再現すると、行動中は上半身は、ウールの登山シャツ、その上にヤッケか羽毛服、そして厚手の手袋とスカーフ、高所では高所帽にオーバー手袋。下半身は、

ウールのパッチが登山ズボン、その上にサロペット(or オーバートレンカー)、靴下は一足、オーバーシューズはやはりロングスパツより有効である。睡眠時のシュラフの使い方は人様々であるが、ダブルで使用している場合は羽毛服を着用していない。

名前 _____ 月 _____ 日 _____

BC-ABC-C1-C2-C3-C4-Smt

() 行動, 滞在, 睡眠

5, 3, 2本指
ウール厚手
うす手
絹
スキー用
オーバー手
()

高所帽, サマター
目出帽, ()

スカーフ, マフラー, ()

羽毛服, 羽毛チョッキ, ヤッケ
セーター, 登山シャツ, 毛下着
トレーニングウェア, ()

サロペット, オーバズボン
登山ズボン, ウールズボン下
パンツ(綿, 毛), ()

高所靴, オーバーゲイター
毛靴下()枚
羽毛テントシューズ
()

睡眠時
寝袋 {アウター
インナー}

○ 充分
△ まあまあ
× 寒い

図 服装アンケート用紙
〔着用しているものを○で囲む。上記以外のものは()内へ記入する。絵の各部には、良し悪しを○, △, ×で記入する。〕

3. 登攀用具

登攀用具は、下部で氷河に沿って右から回り込めない場合、また北峰アタックの場合を考えて準備していたが、どちらも不必要となったため、ほとんどの登攀具が使うことなく終った。

<ザイル>

今回用意したものはすべてヨリザイルであったが、アンザイレン用には、性能や扱いの点から編みザイルの方が良いと思われる。また、φ12ミリは不要であった。(φ9ミリまたはφ11ミリで必要量を揃えればよかった。)

<スノーバー・スノーアンカー>

スノーバーは使い易く、今回は65cmで充分であった。スノーアンカーは、実際の経験がないと使いにくく、国内山行での研究・蓄積が必要と思われる。

<赤旗>

今回用意したものはオレンジ色の細長いものであったが見にくかった。色は赤が適当と考えられ、大きさは、20cm×40cmが必要である。赤袋に雪をつめて地面に伏せておく方法も利用できたが、降雪や地形の起伏を考えると、やはり上記の赤旗が一番有効である。

<スキー>

何回も行う荷上げのためのトレース付けや地形条件を考えれば、スキーの利用はかなり限られるが、今回は下部(ABCまで)の偵察に有効であった。

4. 幕営用具

<BC用テント>

集会用メステントとして、外ポールのエステルスパン生地をBC, ABC用に2張り用意した。しかし、ABCでは特に必要なく思われたのでBCに2張り張った。居住性・強度共に秀れていたが、組立てが少々煩雑であり、また入口のチャックが2つ共大砂塵のためにすぐにこわれて閉らなくなった。

他に、隊長等のための個人用テント2張り与中国側BC要員用に1張り用意した。医療用テントは必要に応じて4人用ウインパーテントを回す予定であったが、特に専用のものの必要はないと思われたので用意しなかった。

<高所用テント>

当初、軽量化を考えて、ウインパー型テントと共に、4人用ドーム型テントを使用する予定であった。しかし、試作品を11月に使用してみたところフレームが折れてしまったため、4人用・6人用ウインパー型、2人用ドーム型を使用することにした。

ウインパー型の4人用と6人用とは、今回は全く違う寸法にしたが、ポール・フレームの区別が非常に煩雑であるので、高さや幅(ポール・フレームの長さ)は揃え

て、長さだけに差をつけるべきである。

4人用ドーム型は、フレームを新しくしてBCで使ってみたが、目撃者がいないので詳しいことはわからないものの、またはフレームが折れてしまった。また、2人用ドーム型は使用に差支えなかったが、無人になった時に、たとえ降雪があっても強風が吹いても持ちこたえられるかどうかが問題であろう。ドーム型テントの長所を生かすためには、このことを始めとして今後の研究・蓄積が必要不可欠と思われる。

内張りはすべてナイロンツイルを使用した。吸湿性がないため、水分が表面に付着して夜間に凍りつき、朝の炊事時にポタポタとかなり垂れて不快である。すべて羽二重を使用するのが一番良いがかなり高価なので、上部3分の1程度に羽二重、下部をナイロンにするのが良いであろう。

<ノコ・スコップ>

今回用意したノコは、雪を切るのは問題なかったが、氷にも使えるかどうかは疑問である。氷屋さんが使うようなノコを用意した方が良いと思われる。

スコップは、いずれもすぐに壊れてしまい使い物にならなかった。やはり、多少重くてもがっちりしたスコップが必要である。

5. 炊事用具

<ガソリンコンロ>

BC用とABC用にホエーブス625を用意した。BCではホエーブス2台と中国製の大きなコンロ(ホエーブス2台分ぐらい)ですべてまかなっていた。中国製のコンロは熱効率が悪く、また日々の手入れが大変そうであった。ホエーブスは、火力は充分であるが、ガソリンを入れるのが面倒なうえ、大きなナベをかけても不安定にならないように、頑丈なナベ台が必要である。

BC用のコンロとしては、バーベキュー用の大きなコンロや、輸送に問題がなければプロパンガスの方が、はるかに便利であろう。

ABC用にもホエーブスを用意したが、取り扱い等を考えれば、多少燃料費がかさむが次に記すブタンガスコンロの方が使い易い。

<ブタンガスコンロ>

C1以上では、EPIのブタンガスコンロを使用した。これは、プレヒートしたりじょうごを使って燃料を入れたりする必要がないので使い易く、7000mでも火力も充分であり、非常に良かった。ガスヘッドを2個ずつ用意しておけば、必要に応じて2個同時に使って時間を節約でき、またナベをのせた時の安定も良いので有効である。

ブタンガスポンベは、2～3人なら1日2個、5～6人なら1日3個、ガスヘッド2個に対してはこの1.5倍程度用意すれば良いであろう。

熱効率を上げるために、アルミ製天ぷらガードでまわりを取り囲んだが、非常に有効であった。また、ランプも同じガスポンベで併用できるものを用意しておく、残り少なくなって圧力の落ちたものはランプに回せるので、効率が良い。

<ナベ>

今回は、エバニューのコッヘルセットを使ったが、Lサイズのものでも小さすぎて水を一度に必要量作れない。

最終キャンプなどは別としても、ズッペ用や水用のナベは少くとも5～6ℓは必要である。入口の大きなヤカンがあれば、テルモスへ注ぐのも楽だし有効かもしれない。

<その他>

今回はテント用のテルモス(2ℓぐらい入るもの)を用意しなかったが、前夜水を作っておいて朝食を短時間で済ますためには必要である。個人用のテルモスが、1.0ℓ用のものであればこれで代用できないこともない。

BC, ABC用に、2ℓぐらいのテルモスを用意しておけば大変有効であったらう。なおこのような大きなテルモスは、ラサやシガツェでも丁度良いものが手に入る。

また、雪袋は、いわゆるビニールのゴミ袋では弱いので、例えばビニール製の大きな買物袋などを用意した方が良い。

6. 生活用具

<トランシーバー>

今回は、松下電産の出力500mmWのものを3機種用意した。ややパワー不足という感じであったが、地形的条件も良かったので、ほとんど全域にわたって利用できた。わずかに、小さな尾根の陰にあるC1、やや窪地状にへこんだ所にあるABCで通じにくい時があった。

RJ 580はBC, ABCで使用した。RJ 480は各キャンプ用、軽量のRJ 330は個人用にと考えていたが、パーティー数も多くなかったので行動中もほとんどRJ 480を使用した。この機種は使い易かった。

また、RJ 480で低温処置をしていないものが、処置済のものと比較するために1台含まれていたが、気温3℃ぐらいで両者を比較テストしたところ、性能の違いはほとんど認められなかった。より低温での性能の違いは、テストする機会がなくわからなかった。

<ブタンガスランプ>

非常に明るく扱いも簡単である。前述のようにコンロ

とコンビで使用するのが良い。

<ランタン>

ガスランプの数が限られていたためランプのないテント用に用意したが、最初の2～3日BCで使っただけである。炊事をするテント以外は、ヘッドランプで間に合った。

<酸素>

今回は医療用にフランス製のボンベ10本を用意した。行動中なら毎分2ℓで8時間、睡眠中なら毎分0.5～0.6ℓでまる1日使える。

BC以上では使用しなかったが、医療用として本格的に考えるのなら10本では少なく、またより大型のボンベも1本は必要である。急場をしのぐ(低所または最終部落に下ろすまで)ためだけなら、5本もあれば充分であろう。ただ漠然と10本にしたが、非常に高価なものもあり、登山の内容や使用目的をよく考える必要がある。

また、チベットのよう5000mもの峠を車で越えながらBC入りする場合、BC以前でも酸素の必要性が考えられるので、この点も考慮せねばならない。

日本製のボンベは、フランス製に比べて性能は落ちるがかなり安価なので、検討に値する。また、火災現場や炭坑事故用の酸素発生機の利用も考えたが、持続時間が長いものでも80分程度であるので、今回は利用しなかった。

<工具>

すぐに散逸しがちなので、専用の工具箱に揃える方が良い。

<ポリチューブ類>

今回ポリチューブを上部に上げなかったのは失敗であった。

ゴミ袋は多目に用意しておく方が良い。

また、黒いビニール袋があれば、朝出発する時に雪をつめて放り出しておけば、昼すぎにはかなり溶けているので、各キャンプにこれを用意しておくとう有効である。発泡スチロールなどの断熱水槽と組合せて、テントに帰ってくればひと風呂浴びれるぐらいになれば言うことはないのだが。

<ナイフ>

「肥後の神」は良くない。缶切りもついたスイスアーミーナイフが良い。

7. 高所協力隊

レギュレーションに定められているものを中心に、身の回りの雑品や、高所協力員のC1での生活や荷上げに必要な装備を支給した。

今回も例にもれず、靴のサイズがわからず、大きめの

ものを用意したが、連絡官の張俊岩氏は用意したものは小さすぎて、かなり予定が狂ってしまった。

特に注意を要することは、協力員用の燃料である。まず、扱いが難しい。ABCで、ガソリン用ポリタンやホエーブスのふたを必ず開っ放しにしている、かなりのガソリンがチベットの大地にしみ込んでしまった。相当口やかましく注意しなくてはならない。また、テントに帰ってから寝るまでの間、ほとんどホエーブスをつけっ放しにしてお茶を作っている。一担沸けば弱火にし、一杯二杯と飲んで少し量が減れば雪を放り込んで強火にするといった具合である。従ってガソリンの消費量が多く、最初は、多いことを見込んだ上で1人1日250cc与えたが、これでも足りず、結局1人1日333ccのラインで折

り合いが合った。国内の冬山では1人1日120cc前後であることを考えると、なんと3倍弱である。250ccしか与えられないと言うと、お茶が飲めないで動けないと言ってくる。ある程度は必要経費と考えておかなければならないだろう。思わぬところでシェルパやポーターを相手にするのに似た苦勞を味わった。

ヤク工は、自分たちの天窓のあいた優秀なテントを使うので、レギュレーションには定められているが、支給の必要はなかった。

最後に、御援助賜った各関係会社、関係諸氏に厚くお礼申し上げます。

A. 個人装備 (隊員用)

品 目	規 格	数 量	購 入 先	備 考
羽 毛 服	サレワ製 イタリア チェセピウミニ製	13	ムラカミ	
	シンサレート使用	2	東洋ゴム(借用)	
サロベット	ナイロン中綿	11	アシックス	
オーパートルンカー	ナイロン	2	〃 *	
ヤッケ(上・下)		13	イチザワ	個人負担
登山シャツ		13		〃
登山ズボン		13		
肌 着	ウール、シャツ・パッチ	13	東亜紡織*	
セーター	ウール厚手、V首	13	タカダ貿易	
高 所 帽	表ナイロン、裏ウール	13	ムラカミ	あごの部分にマジックテープを縫い付けた。
オーバー手袋	ナイロン、3本指	13	〃	
オーバーシューズ	ナイロン、編み上げ	13	〃	
ロングスパッツ	ナイロン、前チャック	13	〃	
手 袋	5本指、ウール厚手、ハンガロン	13	〃	
	〃、〃	2×13	タカダ貿易	
	〃、絹	13	〃	
	〃、スキー用	13	アシックス*	
靴 下	ウール厚手、ゴールドウィン	2×13	ムラカミ	
	〃 薄手	2×13	タカダ貿易	小さすぎて使えなかった。
サマター	ウール、幼児用腹巻	13		個人負担
スカーフ		13		
高 所 靴	プラスチック製2重靴 ローパー「ブロードピーク」	13	タカダ貿易	
	スノートレッカー	13		
低 所 靴		13	アシックス*	
くつひも予備		13	ムラカミ	
シュラフ	羽毛「ジャンボシュラフ」 羽毛、チェセピウミニ社 インナー用	13	ザンター	
		4	東洋ゴム(借用)	個人負担
		13	〃	
ピッケル		13		
アイゼン	12本爪、フリーアジャストタイプ サレワ「エベレスト」	13	リーベルマン・ ウェルシュリー	
アイゼンバンド	固定式、ネオプレンゴム尾錠式 一本締め、ナイロン尾錠式 めがね使用可能	13	ムラカミ	
		13	〃	
ゴーグル		13	〃	個人負担
サングラス		13		
ショイコ	カリマー「ヨーロトレッカー」	11	丸紅ニチレイ	

品目	規格	数量	購入先	備考
ザック	ナイロン, ショイコ取付け用 80cm×36cm×18cm	13	イチザワ	
パッキングゴム	2本1組, フック付き タイヤチューブ	2×11 11	ムラカミ	
ゼルプスト カラビナ	トロール「シットハーネス」 変形D型「ボナッティ」	13 4×13	ムラカミ リーベルマン・ ウェルシュリー	
個人装備袋	D型安全環付 ナイロン 50cm×70cm " 35cm×50cm " 25cm×35cm	13 13 2×13 4×13	" イチザワ " "	ゼルプスト用
ポリタン	1.5ℓ 水用 1.0ℓ 小使用	13 13	エバニュー	1つは薬品袋に使用
テルモス	0.5ℓ	13	ムラカミ	
ヘッドランプ	単1-3本用	13		
ペンシルライト	単3-2本用	13		
食器	アルマイト 6食器	13	エバニュー	
スプーンセット	ハン付	13	"	
ナイフ	「肥後の神」	13		
ライター	使い捨て	3×13		
マッチ	小箱	4×13		
ローソク	長さ10cm(ランタン用のもの)	2×13	エバニュー	
スイスメタ		13	渡辺化学*	
ウレタンマット	50cm×60cm×1cm	2×13	太陽テント*	
さいほうセット	つめ切り付	13		
タオル		2×13		
野帖		10×13	京大生協	
衛生ぬれナプキン	19cm×27cm	40×13	大正製薬*	多目的に使えて便利。
薬品セット		13		
				*は寄贈 (以下同様)

B. 共同装備 (中国側隊員も含む)
(1) 登攀用具

品目	規格	単位重量 kg	数量	使用量 (BC以上)				備考
				BC→ ABC	→C1	→C2	→Peak	
ザイル	ナイロンヨリ, φ9mm×40m " , φ9mm×60m " , φ12mm×40m " , φ8mm×80m " , φ6mm " , "	2.0 3.0 3.0 3.3 0.3/10m 0.3/10m	9 2 2 30 210m 210m 210m	1 (fix)	2 5 7 7	2 5m 2 11	1 (fix) 2 3 8 1 (支点)	アンザイレ用 fix用
ステナワ	変形D型「ボナッティ」	0.08	26					
シュリンゲ	アレワ	1.0	4					
カラビナ	ラップラウド「マルトービオレ」	1.5	5					
アイスハンマー	パイプスクリュー	0.2	15					
アイスパイル	スクリュー	0.1	10					
アイスハーケン	タテ型, ヨコ型	0.05	15					
ロックハーカー	リング付	0.04	10					
ボルト	65cm	0.2	3					
ジャンピング	75cm	0.31	95					
スノーバー	20cm×20cm, 厚さ3mm	0.34	60					
スノーアンカー	25cm×10m	0.35	21					
ワイヤーバシゴ	50cm×1.2m	2.0	1					
ジュラバシゴ	プラステック製	3.0	18					
滑車	3段	0.02	2					
アブミ	ナイロン, 10cm×50cm, オレンジ色	0.2	10					
ユマール	2m, オレンジ着色	0.2	19					
エイトカン		0.3	13					
赤旗		0.2	470					
アルミポール	LEK1 テレスコプ(伸縮自在)	0.02	220					
スキー	貼り付け用	5.0	4					
ストック	固定バンド付	0.5	9					
シールン		0.3	4					
双眼鏡		0.5	4					
高度計		0.5	6					
アイゼン締め具	5000m用	0.1	4					
アイゼン調節用	アイゼン調節用		4					
セット			6					
カンメセット	アイゼン固定バンドカシメ予備		6					

品目	規格	重量	数量	購入先	備考
文具	一式				
旗	AACK旗 日本国旗 中国国旗 200気圧 フランス製 レギュレーター、マスク、エ コノマイザー、帽子		2		ホワイトボード、ボードマーカー、ボード磁石、マゼック、ボール ペン、鉛筆、けしゴム、ノート
O ₂ ボンベ レギュレーター		7.0 1.5	10 3	C M A 重広氏より借用	医療用、BC以上では使用せず。 "
ポリチューブ ポリ袋					

C. 中国隊員用装備 (○印：レギュレーションに定められたもの、☆印：隊員用と同じ)

品目	規格	数		量		購入先	備考
		連絡官(1)	BC要員(3)	高所協力員(4)	()内は人数 ヤク工(8)		
○羽毛シユラフ		1	3	4	—	C M A	
○羽毛服		1	3	4	—	"	
○羽毛ズボン		1	3	4	—	"	
○ビッケル		—	—	4	—	ムラカミ	
○ビッケルバンド		—	—	4	—	"	
○アイゼン		—	—	4	—	☆	
○カラビナ		—	—	4	—	☆	
○ゼルプスト	(安全環ナシ) (安全環付)	—	—	4	—	☆	
○ウレタンマット	履用、ダックス製	—	—	4	—	☆	
○テント	(6人用ウインパー)	2×1	2×3	4	—	ラクザン	
○ヤッケ(上・下)		1	3	1	—	☆	
○登山シャツ		1	3	4	—	☆	
○トレニングウェア(上・下)		1	3	4	—	☆	
○高所帽		—	—	4	—	ムラカミ	
○高所靴		—	—	4	—	アンタックス*	
○低所靴		—	—	4	—	☆	
○肌着	キャラバンシユーズ	1	—	—	4	ムラカミ	
○靴	皮製の靴	1	3	4	—	C M A	
○手袋	(厚手) (薄手)	1	3	4	—	☆	
○手袋	パイナル	1	3	4	—	☆	
○手袋	(5本指ウール厚手) (5本指スキー用)	1	3	4	—	C M A	

品目	規格	数		量		購入先	備考
		連絡官(1)	BC要員(3)	高所協力員(4)	()内は人数 ヤク工(8)		
オーバースーツ		—	—	—	—	☆	
○サンダル	☆ エバニュー 「スノーグラス」	1	3	4	—	ムラカミ	
○ゴータン	☆ (1.5ℓ水用)	—	—	4	—	☆	
○ポリタン	☆	1	3	4	—	☆	
○ヘッドランプ	☆	—	—	4	—	イチザワ	
○サブザック	☆ ナイロン小型	—	—	4	—	☆	
○シヨイコ	☆	—	—	4	—	☆	
○パッキングゴム	☆	—	—	4	—	☆	
○個人装備袋	☆	1	3	4	—	ムラカミ	
○シユラフ	☆	—	—	4	—	☆	
セーター	☆	1	3	—	8	☆	
オーバースーツ	☆	—	—	4	—	☆	
ロンガスバツ	☆	—	—	4	—	☆	
テルモス	☆	—	—	4	—	☆	
登山ズボン	☆	—	—	4	—	☆	
ライタチ	☆	—	—	4	—	☆	
マツセット	☆	—	—	4	—	☆	
薬品セット	☆	—	—	4	—	☆	
電池	☆	—	—	4	—	☆	
ガソリンコンロ	☆	—	—	4	—	☆	
じょうご	☆	—	—	4	—	☆	
ガソリン	☆	—	—	4	—	☆	
ランタン	☆	—	—	4	—	☆	
ローソク(小)	☆	—	—	4	—	☆	
ロッヘルセット(M)	☆	—	—	4	—	☆	
スイスメタ	☆	—	—	4	—	☆	
コンロ台	☆	—	—	4	—	☆	
雪用スコップ(大)	☆	—	—	4	—	☆	
マツチ(大)	☆	—	—	4	—	☆	
ザイ	☆	—	—	4	—	☆	

IV 食糧報告

中川 潔

ネパールヒマラヤあるいはカラコルムのアプローチでは数週間にも及ぶキャラバンが続く。ところが中国チベットでは多くの場合車がベースキャンプまで入る。今回もその例外ではなく4650mのベースキャンプまでジープとトラックが入りキャラバンの必要はなかった。当然のことながら食糧係もキャラバンの食糧を考えなくて済み、ただ登攀期間中の食糧計画を作成するだけで事足りて、過去の遠征の話の中でよく聞くあの食糧係の苦しみは今回かなり軽減された。

またベースキャンプではサーカス小屋のような大きなテントが中国側の手によって張られ、その中ではチベット人コックが生活していて我々の朝食・夕食を用意してくれる。食糧係の仕事は米・調味料・スープの類をそのテントに運び、昼になれば簡単な軽食を作ること、それだけである。

以上の2点が、食糧係にとって今回の遠征における特色点である。

1. カンペンチン食糧計画と実際

表1が食糧リストである。ほとんどの食糧を日本でそろえ船で送った。中国側で用意してもらったのは果物(みかんとパイナップル)の缶詰と羊の肉だけである。当初生野菜も欲しいと申請していたのだが時期が悪く現地では手に入らなかった。成都で日もちのする野菜を購入することも可能であったが手ちがいでできずに終わった。以下食糧計画区分別に概要を記する。

BC食

1人1日3食として68人日分用意した。主食は朝食・夕食が米で昼食はビスケット・クラッカーと計画したのだが、朝夕に炊いた米が余り気味で昼食はそれをよく利用した。米は「クリスタルライス」と呼ばれている学校給食用の乾燥米で、これは圧力鍋で炊くとかなり美味しく食べられる。米の量は1人1食180gとして計算して用意したが最後には不足気味になってしまった。ベースキャンプでは前述のとおりコックに一任していて、彼は毎回少し使いすぎていたようだ。また中国人も共に食べるのでこれからは米は少し余裕をもって用意すべきであろう。

その他副食・調味料・飲物等用意したが、あまり使わ

なかった。それらのもので中国側コックに提供したものは、調味料全部、スープの素、砂糖ぐらいである。昼食用として用意したレトルト食品及び菓子は隊員に好評であった。また特筆すべきものとして「うなぎの蒲焼」の真空パックがあげられる。栄養もあるし風味も良いということでこれにはかなりの人気が集った。

基本的にチベット人コックが中国風の味付をして副食を作ってくれたのだが、その中でも特に美味しかったのはバーベキューである。近くのチベット人部落から羊を買ってきてベースキャンプでつぶしその肉を串にさして焼いてくれるのである。これを数回夕食に出してくれた。特に登頂後、祝賀晩餐会でのバーベキューの味は今でも忘れられない。

ABC食

128人日分用意した。計画の概要はBC食とほとんど変わらない。だがBCとちがってABCでは当然のことながら自分達で作らねばならない。BCではコックの工夫でバラエティに富んだものが食べれたが、ABCではそうはいかない。やはりバラエティの無さ=マンネリズムに批判が集中したようだ。主食で言えば米以外にそば、うどん、スパゲティ等の麺類をもっと用意すべきであったらうし、また副食ではカレー、ビーフシチュー、クリームシチューというおなじみの3種だけでなく、他の新種に登場願うべきであったらう。ABCでは精神的にも時間的にもまた空間的にも余裕がある。例えば「手作りほんとうふ」であるとか「水で作るチーズケーキ」などの手作り品は、その製造過程も含めてなかなか好評であった。余裕を活かして作って食べられるものが今回は少なかった。

その他のもので余ったものは菓子、ジフィーズ、インスタントスープ等である。菓子は行動食として用意したのだが甘いものが多すぎたせいかかなり残ってしまった。ジフィーズは種類によって売れ行きに極端な差がでた。とり肉、にんじん、じゃがいも等一度戻して使ってもなお臭いが残るものは売れ残ってしまったが、逆に牛肉、たまねぎ、ほうれん草はよく使い撤収時には1袋もなくなっていた。

高所食

計画段階ではC4まで想定し、それぞれC1・40人日分、

C2・32人日分、C3・16人日分、C4・4人日分用意したが、実際はC1用、C2用、及びサポートキャンプ用としてC3用の一部を使用するに留まった。

主食は夕食が米で、朝食は米ともちラーメンを半分づつ用意し、行動食にはクラッカー・ビスケットを使った。BC、ABCでは「クリスタルライス」を使ったがクリスタルライスは圧力鍋で炊かないと美味しくできないので圧力鍋で上げられないC1以上は「アルファ米」を使用した。クリスタルライスに比べるとどうしても味が落ちるが、それでも山の中でなら充分だと思う。さらに工夫をすればしたら、美味しい米を工場に持って行きアルファ化してもらう手があるだろう。朝食ではもちラーメンをほとんど食べず、また米も新しく炊かず、毎日前の日に食べ残した米を使っておじやばかり食べていた。荷上げの不手際でラーメンをあまり上げなかったこと、夕食の1人1回の米の量が160gで少し多過ぎ毎日炊きすぎていることが理由としてあげられる。もっともおじやは早く調理でき、さらにもちをいくつか放り込み、味付けをうまくすれば結構いけるもので「朝からラーメン」よりは結果的に良かったのではないかと思う。

行動食としてはクラッカー、ビスケットの他に乳製品及び菓子の類を用意したが、好評だったものはスライスチーズ、レーズンバター、ミルクキャラメル、一口ようかん、一口チョコレート等である。汗はそれほどかかないがとにかく乾燥しているので水分が不足し、水気のないものは敬遠されがちであった。全体に行動食の消費は少なかった。これは隊員の食欲が低下していたからであるが、やはり最低限必要なカロリーを摂取させることは食糧係の使命だろう。その点で今回は行動食のパッキングに問題があったように思う。朝キャンプを出発する時、好きなものを隊員に取ってもらっていたのだが、やはり1人1日これだけという量を1つつつバックして持ってもらう方がカロリー摂取の面でベターであろう。管理強化も時と場合に応じては必要なのである。

副食としてはカレー、ビーフシチュー、クリームシチューの3種類を上げて繰り返し使用し隊員は飽きていたようだが、高所においては、敏速性、簡便性、軽量が要求され多少のマンネリは仕方ないと思う。一方うなぎの真空パックは高所における食糧の条件をそなえていて、かつ風味も良いということで隊員各自が自発的に荷上げしてよく使われていた。日持ちの点で少々問題があるが、優れた栄養と使いやすさで今後の活躍が期待される一品である。その他の問題点としては、タンパク質が少なかったことだろう。特注したベーコンを持って行ったのだが、「重すぎる」ということでABC以上には上げず、結局、肉の類は乾燥牛肉だけになってしまった。

今後の工夫が必要である。

飲物は、コーヒー、紅茶、日本茶、ココア、スポーツドリンク、スキムミルク、砂糖を用意したが、この中で目新しいものはスポーツドリンクである。水でも湯でも使えて飲みやすく、行動中あるいはキャンプ帰着時に重宝がられた。

その他、特別食として表のような食品を持って行った。マロングラッセ、ヨックモックのクッキー、貝の佃煮等、高級食品を最後に少々買い足して持って行ったが、これらのものは食糧係に対する批難抑制剤として、やはり有効であった。缶詰は重いということで、C1以上にはほとんど上げなかったが、果物の缶詰は行動食として、もう少し利用すべきであったらう。特に中国のみかん、桃、梨の缶詰は、あまり甘くなく、日本のそれよりもはるかに使い道が多いように思われる。

2. 梱包

図1のようなカートンボックスを作って、それぞれ使用場所別に梱包した。総計でBC用5箱、ABC用8箱、予備用10箱、高所用7箱(いずれも大カートンでの箱数)となった。BC用、ABC用、予備用は使用用途別にまとめて梱包し、C1からC2までの高所用はレーションシステムを採用して梱包した。使用用途別の梱包は特に問題はなかったが、高所用レーションシステムはうまく機能しなかった。というのは飲物、調味料、特別食をレーションからはずしてそれぞれ独立した箱を作ってしまったからである。当初調味料等は、まとめて各テントに置いておけば使い易いということでそのようにしたのだが、実際現場では、例えば新しい上部キャンプを設営した日など、荷上げ能力が少なくレーションボックスしか上っていない、飲物、調味料が無いという現象も表われてしまった。表2が以上の準レーションシステムの一例である。現場での計画変更に対し、即座に対応できるようにする為には、やはりあらゆる食品を人日分にまとめた完全レーションシステムを採るべきであろう。

実際の梱包方法は、小カートンにビニールの防水袋を入れ、その中に食品を詰め、ガムテープで蓋を閉める。そしてその小カートン2個を大カートンの中に詰め、テープで蓋をしてからP.P.バンドをかけるという方法をとった。雨の心配もあまりなく、梱包方法としてはこれで充分であった。

3. 反省

前述した他に、食糧係の失敗としてあげられるのは以下のことである。

ラサからベースキャンプまでは各宿泊所で食事を用意

表1. 食糧リスト

品名	品名	重量 (g)	品名	重量 (g)	
主食	アルファ米	130,000	調味料	ラー油	660 ml
	赤飯	21,800		ラー油	12,000
	おかゆ	1,500		サラダ油	
	牛飯	6,240		ゴマ油	4,000
	チキンライス	5,720		焼肉のたれ	9,600
	ラーメン	16,020	焼飯の素	240	
	切もち	4,500	バター	22,950	
	コーンフレーク	8,160	行動食	ハネー	15,000
	マッシュポテト	32,000		サラミ	9,600
	オートミール	38,400		スライスサラミ	1,000
	ビスケット・クラッカー	40,640		スライスチーズ	30,000
	副食	カレーウ		6,150	プロセスチーズ
クリームシチュー		2,660		レーズンバター	6,000
ビーフシチュー		2,660		マヨネーズ	9,000
ハヤシルウ		2,400	ジャム	4,050	
インスタントスープ		6,840	マーマレード	4,050	
粉末みそ		4,760	飲物	砂糖	
牛丼の具		13,650		紅茶(ティーバック)	
ほんとうふ		2,600		緑茶	
レトルト調味料		9,800		コーヒー	
レトルトカレー				スキムミルク	50,000
レトルトシチュー			育児用ミルク	19,200	
乾燥食品			コンデンスミルク	33,390	
玉ネギ	680	スポーツドリンク			
ニンジン	1,720	特別食	チョコレート		
ジャガイモ	1,500		ゼリー	4,140	
ネギ	864		キャラメル		
ホウレン草	1,272		チーズケーキ	4,000	
鶏肉	1,500		プリン	2,400	
牛肉	1,800		あられ		
卵	2,910		サラダ	9,440	
しょう油	4,900		まぐろ油漬	19,080	
レトルとうなぎ	100食		焼肉	8,160	
調味料	塩			さんま蒲焼	5,000
	からし(チューブ)		600	さば水煮	9,600
	にんにく()		600	赤貝味付	8,160
	しょうが()	600	ウィンナー	2,760	
	わさび()	600	マロングラッセ		
	こしょう	300	佃煮		
	ほんだし	1,800			
	コンソメ				

表2. 12人日分レーションリスト

品名	重量 (g)
アルファ米	2,080
赤飯	720
ラーメン	360
もち	360
クラッカー・ビスケット	1,080
スライスチーズ	240
ドライビーフ	120
カレー・シチュー	390
粉末みそ汁	60
ハネー	90
マヨネーズ	90
レーズンバター	30
チョコレート	
ようかん	
キャラメル	
豆菓子	
ジャム	

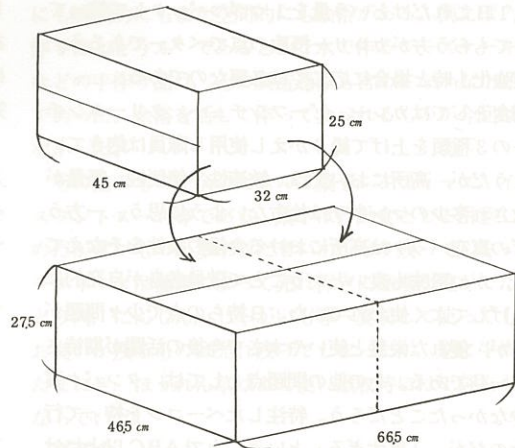


図1. カートンボックス

してくれる。だがチベットの奥へ入るほど宿泊所の食事は主に缶詰を使ったものになり、どうしても単調になってしまう。無論、日本人の味覚感覚から言えば、美味しいなど言えないものばかりである。とくに、今回はトレーニングの為4日間シガールに滞在したため、隊員から不満の声が聞かれた。偵察の経験を活かして、大事な登攀前の食事にも配慮すべきであったらう。

ベースキャンプでは主たる材料を中国側に渡せば、す

べて料理してくれる事、たんばく質源としてチベットの羊を使う事、レーションシステムの失敗、アプローチにおける食事への配慮等、これらはすべて過去のAAC Kの経験、チョモランマ・シシャパンマ等日本隊の経験、そして我々の偵察の経験を十分に知識として吸収していれば、適切な対応ができ、あるいは失敗を防げうことである。事前の情報収集の欠如、そして注意力の不足を反省する次第である。

V 輸送報告

幸島司郎

中国への登山遠征が、ネパールやカラコルムへの遠征と大きく異なる点の一つは、ベースキャンプまでの物質の輸送のほとんどすべてが、中国登山協会という中国の国家機関によって行なわれるということである。中国では、我々のような外国からの登山隊も、基本的には他の外国人旅行者と同様「お客様」であり、移動、宿泊、荷物の輸送のすべてを国際旅行社と登山協会が、定められたスケジュール通り世話することになっている。

したがって、北京～BC間の往復では、我々はバックツアーのお客のように、荷物の輸送もなにもかも、ほとんど登山協会まかせというシステムになっている。とくに今回の遠征ではキャラバンがなく、BCまで直接車で行くことができたこと、中国側の荷物管理が予想以上にしっかりしていて、荷物紛失の恐れがほとんどなかったこと等から、多くのポーターを使った長いキャラバンを強いられるネパール側からのヒマラヤ登山に比べて、輸送係の負担は格段に少なかったと言える。インド国内やキャラバン中の荷物管理やポーターとの交渉のむずかしさ等、これまでの遠征隊の苦勞話を何度も聞かされている者にとっては少々ものたりなく感じるほどであった。

しかし、中国登山協会との交渉や、ラサ～BC間のトラックによる長距離輸送、ヤクや高所協力員の利用等については、これまでAAC Kの遠征隊が経験したことがなく、将来グルマンダータ等への遠征において重要な要素になると思われる経験も多かった。以下、順を追って報告する。

1. 京都一北京一成都一ラサ

登山協会の規定では、外国登山隊の荷物は入国の2カ

月前までに北京に着いていなければならない。また、そのリストは入国の3カ月前までに登山協会に提出することになっている。

本隊の荷物の場合、船便は81年12月27日に大阪港出港、航空便は82年2月6日に大阪空港発で、ほぼこの規定を満すことができた。しかし、パッキングリストは荷物発送の直前まで完成せず、発送と同時に送ることになった。また、偵察隊の荷物の発送とパッキングリストの提出は、議定書の交換と出発予定日までの時間が短かったため、出発の1カ月前になった。

このように登山協会の規定は必ずしも厳格なものではなく、交渉しだいでかなり融通がきく。

発送した荷物はラサで隊と合流するわけだが、北京一成都一ラサ間すべて空路を利用すれば、荷物の北京着から1カ月くらい見ておけば、隊のラサ着に十分間に合う。

ただ、荷物の量が多い場合(1～2t以上)、すべて空輸することはむずかしく、陸路を利用することになるのでやはり2カ月近く見ておいた方がよい。ちなみに、中国国内では、陸路をとろうと、空路をとろうと輸送費用はほとんど変わらない。どちらにするかは、荷物の北京着時に登山協会が判断して決める。

本隊の荷物のうち81年12月に大阪港からコンテナ船で出した約2.3tはすべて鉄道とトラックで、82年2月6日に航空便で出した800kgは一部の危険品を除いてすべて空路でラサまで輸送された。

一部の危険品とは、学術用のヘリウムボンベとバッテリーの電解液である。この2つはどちらも日航指定の危険品用梱包をしてあったにもかかわらず、民航でも鉄道でも拒否された。それでも電解液の方はなんとかのみ

こんで鉄道に乗せることができたものの、ヘリウムボンベの方はどちらにも乗せてもらえなかった。運よく、連絡官の友人に北京からラサへ新車を運ぶ人がいたので便乗させてもらうことができたが、隊員のラサ出発までに到着せず、結局使用できなかった。

中国では、鉄道や航空機に乗せる危険品に関する規定がまだはっきりしていないようで、現場の人間の適当な判断にまかされているのが現状のようだ。たとえば、隊員の入国時に持込んだ高所医学用の液体チソタンク2つは、日航では危険品扱いで、がんじょうな木箱に入れねばならなかったのに、民航では貨物扱いでは乗せてくれないが、箱から出して機内持込みにするなら良いという変なことになった。

食料・装備の大部分は、ダンボール箱とプラスチックコンテナで梱包し、その他の大型テント、スキー等はキャンバスバックで梱包した。

ダンボール箱はワックスをしみ込ませた耐水ダンボールを使って、25cm×45cm×32cmの小箱、小箱が2つ入る中箱、3つ入る大箱の3種つくった(食料報告、図1参照)。当初はプラスチックダンボールを使う予定であったが、在庫がなかったため、耐水ダンボールを採用した。チベットでは雨の心配はまずなく、キャラバンもないので強度的にはこれで十分であった。ただ、トラックに積む際、ロープでこすれて角が切れやすいこと、ガムテープをはがれ易いこと、少し重くなるのが難点であった。

プラスチックコンテナはセキスイの72ℓフタ付コンテナで、こわれ易いものや、計器類の入れ物として、また、机やイス代りにもなり非常に便利であった。

今回の遠征では、船による輸送にはコンテナ船を使用したため、これらすべての荷物は、普通貨物船で送る場合必要な輸出用梱包(木わく)をかける必要がなく、すべてそのままバラバラの状態ですられた。輸送中の荷物紛失の危険性を考えれば、木わくで数個口にまとめた形でラサまで送った方が安全であるが、中国ではインド、ネパール等で考えられるほどの危険性はなく、事実一個の紛失も破損もなくラサで受けとることができた。そのうえ、輸出用梱包のための費用を数10万円も節約することができた。ただ、中国向けコンテナ船はまだ数がないので、いつも利用できるとはかぎらないようだ。

2月の航空便に間に合わなかった共同装備はなるべく隊員の個人装備といっしょに、機内持込みと托送手荷物で送ることにした。

大阪～北京間の日航はさすがにきびしく、エクセス料金をかなりとられたが、北京～成都、成都～ラサ間の民航は機内持込が非常にラフで、前述した液体チソタン

ク2本を含めて、すべて機内持込みと托送手荷物で運ぶことができた。登山隊の荷物にはとくに寛大なようである。

2. ラサーBC

3月21日にラサのチベット登山協会の倉庫で荷物を受けとり、数の確認と梱包の点検等を行なう。どの荷物も砂ぼこりで真白になっていた。

ここで中国側が用意した酸素ボンベ、BC用食料、大型テント等約1tが合流し、日本からの荷物約3.5tと合わせて合計4.5tを中国製2tトラック3台に積み込んだ。中国側の食料品類が予想以上に多く、かなり重くなってしまった。

トラックへの積み込みはすべて登山協会の人が行ない、我々はラサ見物。翌3月22日、シガツェに向け出発。我々が乗るマイクロバスには、身の回り品と液体チソタンクだけ積み込んだ。トラック3台はマイクロバスより2日ほどおくれてラサを発ち、それぞれバラバラに進んでシガールで合流することになる。

ラサで荷物整理をした時には、トラックはマイクロバスと行動を共にするものと思っていたため、途中で使用する可能性があるものとして医療品と学術用サンプル採集用具等をトラックの最後部に積むように指示しておいたのであるが、これらはシガールまで手に入らなかった。

最大の失敗は、酸素ボンベとレギュレーターを途中で使用する可能性をまったく考慮に入れていなかったため、シガツェで近藤隊長が高度障害から肺浮腫をおこされた時、別行動しているトラックをつかまえ、酸素ボンベと薬品をとり出すのに非常に手間どってしまったことである。5000m以上ある峠をいくつも越えてゆくのであるから、酸素ボンベと医療品は多少無理してもマイクロバスか、シガツェで合流するトラックに積んでおくべきであった。

シガールからは隊員もトラックの荷台とジープに分乗して3月27日にBC予定地に向かった。BC予定地付近の大草原には30cmほど積雪があり、ジープもトラックも時々雪の深い所や凍結した河にはまり込んで立往生をくり返した。そのたびに他のトラックで引っぱり出したり、他のルートをさがしたりをくり返して切り抜ける。このような場所では、自動車の単独行動は非常に危険だ。複数の車が、あまりはなれずに走り、たがいに協力し合う必要がある。

3. BC—ABC

BCからABCへは26頭のヤクを使用しておよそ1.2tの荷上げを行なった。ヤクによる荷上げは3回に分けて

行なわれ、第1回目、2回目はそれぞれ11頭、3回目は4頭のヤクを使用した。

第1回目、2回目の11頭の内、各1頭は、ヤク工のテント、食料の輸送に使われ、隊の荷物は運んでないので、1頭当たり平均50kgの荷上げをしたことになる。

登山規定では1頭につき60kgまで運ばせることができることになっているが、現地での交渉では40kgまでということになった。しかし、後になるほどたくさん積んでくれるようになり、最終的には1頭当たり60kgくらい運んでいた。

ヤクとヤク工の調達は、BCに行く途中にあるセルンという集落で、連絡官が行なった。こちらはヤクの頭数と使用する日数を指定するだけで良い。

議定書であらかじめ予約した数は20頭であったが、頭数、日程等は現地での交渉しだいで変更可能である。

ヤク工は3頭につき1人と決められているが、ヤクへの荷物積み込みには最低2人必要なので、ヤクが8頭以下でも2人雇うことになる。

BC～ABC間のルートは、10数kmの平原と、ゆるやかな前山の登り坂で、前山の登りには深さ70cmくらいの大きな雪田が、巾数mから数100mのバンド状に残っており、この雪田を突破して、どのくらい高所までヤクを追い上げることができるかが、今回の登山の成否を決する重大な課題であった。

ヤクは当初考えていたよりずっと雪に弱く、とくにウインドクラストした雪田ではクラスト面をふみ抜いて4足とも抜けなくなり、もがき苦しむばかりというさけないことになる。しかし、やわらかい雪なら気にせず進んでゆくと、岩だらけの急斜面にも非常に強かった。

ヤク工はヤクを追い上げるのに手がいっぱい、ルートファインディングまで手が回らない。とくに雪のある高所でのルートファインディングは不得手な上、苦勞してなるべく高くまで上ろうとも思っていないので、決められた日数内であるべく高所まで荷上げするためには、隊員が必ず数人ついて、ルートの指示をする必要がある。

3回目の荷上げでは、隊員がつかなかったため、天気が悪いこともあってABCの手前で荷物を放り出して帰ってしまった。ABC予定地の5700mの地まで初めてヤクを上げた日には、隊員8人と高所協力員4人が総がかりでトランシーバーを活用しつつ、雪の少ない所をさがし、どうしても横断せねばならない雪田では、ラッセルしたりピッケルで掘ったりして「ヤク様」の通る道づくりまでした。

BC～ABC間は荷をつけたヤクの足で3日行程であった。初めの契約では2日で帰ることになっていたが、2日では5200mの中継キャンプまで着くのがせい

ばいだったので、現地での直接交渉により1日のばすことになった。

日程の変更はヤク工さえ承知すれば可能である。日程をのばす条件として、宿泊地にヤクの食べる草があること、ヤク工に食料を与えることが必要であった。

ヤクの雇い方としては、今回のように多くのヤクを短期間雇って、一度に荷上げする方法以外に、少数のヤクを長期間雇って何度も荷上げをくり返す方法があると思う。今回は26頭をほぼ同時に使って一度でABCを建設した後はBC～ABC間の荷上げはほとんどなかったが、後者の方法ならば、たとえば新鮮な肉類の補給も可能であったろう。ただ前者の方法では、悪天等のために十分な高度まで荷上げができない危険性もある。

4. ABC—C1

今回の遠征では高所協力員による輸送はC2(6700m)まで行なった。高所協力員はシガツェから4人雇った。いずれもシガツェ近郊の農民の息子で、年齢は21～26才。歌と賭事が好きな楽しい連中であった。

4人のうちの2人、ガザンピンツォとツォレントーチは日本山岳会チョモランマ北壁隊に参加、7700mまで上った。1人はシシャバンマ女子隊で田辺井さんと登頂したジャブー。もう1人は新人のテンジンであった。4人とも登山技術は素人に近いが、さすがに高度には強く、体力は抜群だった。

1人当りの荷上げ重量はBC～ABC間では20kg、ABC以上では15kgであったが、10kgの荷物でヒーヒー言っている隊員よりずっと早くテントに帰ってきて、歌をうたったり、賭事をしていることが多かった。

大食漢ぞろい、コックのタ・トーが21日分の食料として渡したツェンパとヒツジの肉を10日ほどで食いつくし、C1で食料がないので帰ると言い出し、BCまで取りに下ったこともあった。

協力員を雇った場合、本来なら協力員の管理をする管理員を雇わねばならないが、今回は連絡官の張氏が管理員をかねた形になっていた。そのために協力員の食料消費を現場で管理する人間が居らず、このようなことが起ったと思う。彼らには先のことを考えて食料を消費するなどという計画性はまるっきりないようだ。

4人ともチベット語しか話せないため、上部キャンプにいる時は、毎日トランシーバーを通じてコック兼通訳のタ・トーがリーダー格のガザンピンツォと連絡し翌日の仕事の確認をする必要があった。

5. 帰りの輸送

登頂後、隊員と協力員が2日かかりで上部キャンプの

装備をABCまで下ろし、ABCからはヤク6頭を使用しておよそ300kgの荷物をBCまで持ち帰った。BCからラサへ持ち帰った荷物は約2tで2tトラック1台分。ラサで中国側の荷物と寄贈したテント等を下ろして、約1.4tを北京へ空輸した。

帰りの輸送も登山協会がすべてめんどうを見てくれる。まかせきりにしておいても、紛失等の危険はまずないが、料金的に非常に割高になることがあるので、めんどうでも細かくチェックする必要がある。たとえば、登山協会にすべてをまかせると、ラサー成都ー北京間の空輸荷物が全部貨物扱いになって、本来無料で運べる隊員の托送手荷物分の重量が差引かれていなかったりする。また中

VI 中国登山の経費交渉について

牛 田 一 成

中国における遠征が、ネパール、パキスタンのそれと比べて大きく異なる点は、遠征隊が現金を手にキャラバンをしないという点につきる。中国登山協会による仕事の代行は、ホテル、飛行機の手配に始まり、現地での雇用人員の確保、物資のベースキャンプまでの輸送、はては日本から送った物資の入関手続きまでに至り、隊側としては先発隊を派遣することもなく、ただ隊員全員がベースキャンプまでバックツアーの団体のように振る舞ってゆけばよいのである。さて、こうしたバックツアーのはてに登山協会会計係と精算が行なわれる。ここで中国登山の支払いシステムについて若干説明をしておくと、登山隊は議定書をかわした1ヶ月以内に登山料を支払う。6ヶ月以内に、登山隊自らが立てた予算の5分の1を支払い、そして隊が北京に到着する時に残りの5分の4を支払う。登山の終了後に、実際の支出と照らし合わせ、不足分を帰国後に支払う、というシステムである。このようなシステムでは、現場での支払状況を隊側が把握することが難しく、ことに中国側人員に関する支払について、それこそ開けてびっくり玉手箱といった状況が現出する場合もある。中国では未だ契約の概念があいまいであるとは中国を相手に仕事をしている人間がよくもらす言葉であるが、登山隊の場合も、余計なトラブルを減らすためにどんな些細なことでも必ずその要求するところを明らかにし、そして必ず承諾したかどうかの返事を受けとらねばならない。また常に問題となる中国側人員の

国にはアナカン（別送手荷物）の制度がないので、北京ー大阪間の空輸貨物も普通貨物扱いにされてしまい料金が2倍近くになる。

北京から大阪へは、日航のアナカンで送ったのであるが、日航の貨物の窓口を民航が代行しているので、アナカンや危険品（液体チソタンク）の手続きがまったく理解されておらず、ひどく手こずった。結局、日航の人に直接来てもらってやっと話がつくという有様だった。中国国内に入ってから輸送係の仕事のほとんどは、このように登山協会の処置をチェックすることであったと言っても良いだろう。

装備、食糧の量及び輸送費用についても、できるだけ明らかにさせるように努力せねばならない。ところが、こうした作業を全て手紙ないしは電報による極めて間接的な方法でしか行ない得なかった点に、今回も若干の問題が生じた理由があると思われる。中国側人員の装備などの輸送費用について数度問い合わせたにも拘らず遂に返答がなかった事や、隊側が借用を申し入れ、そのまま返答がなかった装備が、実は購入装備になっていたことなど議定書において取り決めない細かい事での行き違いがあったのである。こうしたトラブルも数が少いうちはそれ程大事には至らないが、数が増えればそののんびりと構えておるわけにもいなくなり、結果として北京での精算交渉が複雑化することとなる。但し、登山協会の責任と思われる事項についての交渉はそれ程複雑な事にはならないが、他の役所に関わる問題での交渉はややめんどうな事となる。

特に大きなトラブルが予想されるのは中国民航がからむ場合である。民航がらみのトラブルで最大のもはラサに飛行機がこない場合である。というのは、ラサの宿泊費用は1人1泊約3万円で、例えば日曜、水曜の休航日の前日に成都へ戻るようにしていた時に欠航されるとあれよあれよというまにラサの宿泊費が増えていくのである。こうした際の宿泊費を民航が持つことはないらしく、結局北京で登山協会にねじ込むしか手がないのである。偵察時にこのトラブルに出くわしたが結局、北京並

みの宿泊料まで値下げさせるとどまり、全額負担させることはできなかった。こうした登山協会の責任でない事まで、登山協会に押しつけるのは気がひけるが、相手が彼等しかないのだからしょうがないであろう。むしろ、こういうトラブルについてどう取り扱うかについてもある程度の事前協議が必要な場合もあるかもしれない。

さて今回の遠征で、中国側に支払った金額は約2800万円で、予算の2300万円とかなり隔りがあった。これは隊員が一人増えたことや近藤隊長の移動費用が増えたことなどが主な理由であるが、帰路の荷物の輸送費用が多くなったことも一因である。帰路の輸送に関しては、これを全て飛行機で行なったが、その理由は、陸路で運ぶのとほとんど運賃が変わらないことによる。

支出各項目のうち、この輸送及び車輻費が約40%を占め、次いで滞在費の23%が多く、その次ぎは人件費、関税、雑費などの8%台まで減少する。これらの数字を見ると、輸送及び車輻費を減らせばかなりの節約となることがわかるが、この出費を切り縮めるには、装備の量を減らすなどせねばならずあまり簡単な事ではないようである。次に大きい出費であるところの滞在費を削るのが最も妥当な所であろう。今回我々は、学生に対してのみ、経済団体並みの扱いとなったが、平均して約3割程

VII 通 訳 所 感

陳 介 臣

この度の遠征隊に通訳として加わりました。通訳の訓練を特に受けたことがなかったので、任に堪えるかどうか心配でならなかったのですが、極力自信ありげに装うことにしていました。頼りないという印象を与えてしまうと実力以下の通訳になりさがってしまう、と信じていたからです。みえを張っていたといえればそれまでですが、任務を果すためには多少実力を過大に評価して貰っている方が都合がよかったです。ですから遠征中は意識的に背伸びをし続けていました。勿論長期にわたることなのでいずれ化けの皮が剥げることは覚悟の上ではありましたが、この緊張感が体調維持にはよい影響を与えてくれたようにも思えます。

さて、通訳をして感じた事柄をいくつか書きとめておきたいと思います。

御承知のとおり、中国では北京語を基本にした「普通

度安くなったに過ぎない。例えば北京、成都など宿泊費が90元を請求されるところが50元になり、ラサで240元のところ180元になるといった按配であるが、北京など1泊20元程度の安い宿舎はいくらでもある筈で、事実そういう旅館に泊まって旅をしているアメリカ人などもあるのである。また、ラサなどでも一応テント泊りも可能だということなので、このように高いホテルに宿泊しなくても済ませられるかもしれない。しかし、宿泊の問題は登山協会側からみれば、登山隊の取り扱いに関係してくるので容易にこちらの思惑通りにはならないだろう。但し、おし着せを拒否するための交渉を行なうためには、北京や成都などの宿舎についても少し情報を集める必要があると思われる。結果は今のところだめにしろ、隊の側から宿を指定することができるくらいにならないと交渉にさえならないだろう。

現在まで、かなりの数の登山隊が中国に入ったと思われるが、こうした面の「冒険」を試みた隊はまだないようである。しかし、今後経費を節約していこうとするとこの種の「冒険」が必要になっていくのは明らかである。従って、このような情報交換の必要性がますます増しているものと思われる。

話が一応の共通語になっており、これが中国語です。むろん、広大な国ですので当然地方によって日常語は多岐にわたっており、同じ漢字圏であっても発音等が全く違うために通じなくなるのもめずらしくありません。しかし基本的には普通語を話せば、一定の教育を受けた相手には通じます。ところがチベット自治区に入ると普通語で用が足せないことが多くなります。特に現地の一般住民との会話はチベット語を介して行う必要が生じます。いわゆる中国語のほかには現地語を習っておくと現場で役立つことが多いといえます。今回の場合も、あらかじめチベット語を習った隊員が現地で大いに活躍しました。

中国登山では、中国登山協会がほぼ全面的に隊の世話を請負う形態をとるので、重要な交渉は隊と登山協会の間で行われることとなります。この交渉における言語面での障害を除去するのが通訳の主任務ともいえます。会

話の一言一句をそのニュアンスも含めて完全に翻訳できれば問題はないのですが、これは至難のわざに思えます。筆者如きにはとてもかなわないことなので次善の手段として双方の意図をできるだけ正確に伝えるという努力をしました。通訳としては邪道であろうが、この方が目的を達しやすい面もありました。幸いにして、隊長はじめ隊員の皆さんが日常的に隊の意図するところを説明してくれていたし、中国登山協会の方々も機会あるごとに事情を説明してくれましたので、大すじを誤まらずに伝達できたものと思っています。一般論からいえば通訳にそこまで説明しておく必要はないことですが、通訳の立場からすると大変ありがたいことでした。もし全く新しい事柄をいきなり言葉の翻訳だけで伝えるやり方をとっていたら困っていたらと思う。もっとも、このために通訳としての筆者の個性が交渉に反映したきらいがあり、反省しております。

VIII 医療報告

松 林 公 蔵

はじめに

京大学士山岳会にとって、遠征隊として中国チベット地域に踏み入ることは、初めての経験である。キャラバンを経ずして、空路標高3700mのラサに入り、以後車で5000m程度の峠を越え直接BCに入るのが中国側ヒマラヤ登山の常法となっている。従って、高所順化の方法にある程度の制限が加えられ、例えばラサ付近で順化に失敗すると、現実的に登山は困難な状態となってくる。これに対する医療の側の対応策は一つのポイントとなるであろう。又中国登山の特徴として、ネパールやカラコルム地域の如く、キャラバン中の施療が不要なので、これに要する医薬品は考慮しなくてもよい。更にシガツェには酸素やレントゲンを備えた医療施設が存在するので、必要な時はこれを利用することが可能である。更に、直接BCまで車で入山することになるので、必要であればかなりの大型医療機器や計測器をもちこめることは、中国登山に於ける医療にとって一つの利点であると思われる。

今回のカンペンチン遠征では、BCに至るまでに隊長が肺炎と肺水腫を併発し帰国の止むなきに至ったが、他の隊員は全登攀期間中を通してほぼ健康であり、特に医

次に通訳を介して一般会話をする場合のテクニックで気付いたことをひとつ。話をするときには会話の相手を見すえて、相手にも自分に話しかけていることが判るようにすること。通訳が介在するといきおい通訳に向って話しがちになりますが、極力それはさけたほうが正常な会話ができるように思います。言葉は解らなくても表情で対話できることも多いものです。

遠征中の通訳がどの程度役立ったかは気になるところではありますが、他隊員の判断にゆだねられるべきものと思います。その判断をある程度一般化できるようにするため、筆者の言語歴を最後に簡単に書き添えておきます。——神戸生まれ、現在に至るまで日常会話は日本語。小・中学校の9年間神戸の中華学校にて中国語による教育を受ける。この間校内では原則として中国語。高校以降は日本の一般教育コース。なお、高校まで家庭内では一部台湾語、大学時に時折中国語を自習する——

療行為の対象とならなかったことは幸いである。多かれ少かれ伴うべき高度障害の個々の症状に対しては対症療法のみで充分であった。

本学術登山隊の医療部門に於ける研究テーマは下記の如くである。

- (1) 高所滞在時に於ける血中及び尿中カテコールアミンの変動について。
- (2) 高度障害と心電図との関係について。
- (3) チベット地域に於ける地理病理学的特徴について。

以下、本遠征隊の医療に関して、個々の面から報告する。

1. 遠征期間中に於ける隊員の健康状態一般

隊長の病状に関しては後述するので、ここでは他の隊員を中心に述べる。

ラサ到着時は全員浮揚感を訴えていたが、頭痛、嘔吐をきたした者はなかった。ラサ滞在中、軽度の頭痛、食思不振、咽頭痛などがみられ、急激に運動すると動悸を覚える者もあったが、全て2～3日中に軽快している。やや高度に対して神経質になっていた点は否めない。

ラサからBCに入るまでに、5000m前後の峠をいく

つか越え又途中の町シガツェ、シガールで高所順化のための小登行などを行ったが、この間特に自他覚的異変を訴えた者はいなかった。唯全員に軽度の全身倦怠感は認められる。BC(4650m)までの順化は問題なく終了した。

BCでは下痢をきたす者や痔疾の悪化が認められたが、いずれも対症療法のみにて、数日間で軽快している。

ABC(5700m)前後で、多かれ少かれ全員に頭痛、軽度の顔面浮腫、乏尿傾向、睡眠時呼吸異常がみられたが、いずれも鎮痛剤や利尿剤少量を適宜使用したり、休息することによって寛解し、全体としての行動自体に支障はなかった。

C1(6200m)～C2(6700m)にかけては、熱発をみたり、行動力低下、注意力散漫をきたした者が数名出たが、対症療法やキャンプを一つ降りて一兩日休養をとる程度で充分であり、登頂時は全員普段の行動力を発揮することができた。登頂前後に於て、一過性の異常呼吸や軽度の指南力低下をきたした者もあったが、これは主として疲労によるものと思われ、その後の行動自体に支障はみられていない。

又登頂時に一瞬素手となった為に手指に凍傷をきたした者が2名あり、二度～三度の凍傷であったが、物理的損傷をさけ、ユベラ軟膏塗布、ビタミンE錠の内服等で、約一ヶ月後にはほぼ常態に復している。

以上の如く、BC入山から登攀活動期間及び下山まで、一般隊員の健康状態は概して良好で、積極的に医療の対象となるような事態がなかったことは幸いである。高度障害のパターン等をあらかじめ熟知し、それに見合わせたタクティクスを組むことによって順化はある程度支障なく達成し得ると考えられる。

従って、充分な予備知識と経験に基づいて余裕あるタクティクスを組み、care-less mistakeによる外傷などをさけるために慎重なる行動をとることによって、遠征期間中の健康保持は一定程度可能であると思われる。

しかし、限界状況に於ける人間の身体である以上、不測の事態と言うものはあり得、それを医療の面から如何に予防し得るかと言う点で、今後検討の余地を残しているのが、次に述べる近藤隊長の発病である。

2. 隊長の発病

本隊は今回、登攀隊員全員の初登頂に成功し無事遠征を終了したが、その当初に於いて、隊長が肺炎並びに肺水腫を併発するに到り、残念ながら中途より帰国の止むなきに至った。その症状経過を、反省点をふまえながら報告する。

隊長は、58歳男性。現在まで特に著患を識らず頑健

であるが、heavy smokerである。その職責上、出発の直前まで激務に追われ、出発4～5日前に感冒症状と8°台の熱発をみたが、この際は対症療法のみにて軽快した。

本隊は3月14日大阪を出発、北京で3日、成都で2日間の公式行事を滞りなくすませ3月19日ラサ入り。皆と同様の身体浮揚感、軽度の労作時動悸を覚えていたが食思良好で著変を認めなかった。脈拍、血圧に異常なく、自覚的にも特に苦訴はない。3日間ラサ滞在、市内見物、3月21日夜間睡眠時、呼吸が荒いことに同室者が気付いている。

3月22日、マイクロバスで4500mと4800mの峠を越え、シガツェに至る車中10時間の行動である。車外よりのほこりが強く喉を刺激し、日差しも強い。昼食時、隊長は余り食思なく、車内ではうとうとしていることが多かった。シガツェ到着時はかなり疲労の色が濃く、軽く夕食とビールを喫し就眠。夜間の呼吸は速く不規則である。

3月23日、朝食時起きてこれらぬ為、暫時そのまま様子をみたが、傾眠傾向が強いため、異常と判断し詳しく診察した。意識は、ゆりおこせば答えるが、すぐに傾眠し、指南力の低下もみられる。脈拍120/分、呼吸40/分と速迫で、体温は7度1分。顔面は浮腫と頸静脈の怒張、胸部全体のバリバリ音があり軽度の心不全を認める。右側胸下部に強い異常呼吸音が聴取される。眼底にも異常所見があり、肺水腫、脳浮腫が疑われたため、できれば胸部写真がとりたい。同日午後、連絡官の紹介を得、人民病院で胸部レントゲンを撮影するために搬送したが、この時はO₂なしでの行動は困難であり独歩は不能であった。レントゲン撮影の結果、肺全体にうっ血があり、右肺下部に肺炎様のかげがある。肺水腫をベースとした肺炎と考え、持続的にO₂が必要であるため、人民病院の医師とも話し合い入院させてもらうこととする。この際、中国側の治療行為を拒まないが、こちら側も独自の治療をさせてもらいたい旨話し院長の同意を得た。隊長の状況を隊に持ち帰り説明して、とにかく数日間で、単独行動可能となるまで全身状態を改善せしめ、ラサまで見送り、以降は単身帰国の上、日本で全快を期すと言う方針で隊意を得、陳氏と私がその看護にあたり、本隊は予定通り先へ進むと言う決定が上尾副隊長の下でなされた。

3月24日、依然として、傾眠傾向強く、状態の改善傾向は余りみとめられない。O₂は間歇的に続行している。陳氏のおかげで、病院側との意志疎通も良好で、色々な要求が可能となってきた。

3月25日、相変わらずの傾眠状態で、呼吸は速迫失調

性である。ゆりおこせば目ざめるが指南力は軽度低下しており話しながらも傾眠してしまう。かなりの水分補給にもかかわらず尿傾向があり、脈拍も速い。肺水腫による軽度の心不全、それに脳浮腫が前景に出ている。

トラックで別送中の隊医薬品を受けとることができたため、積極的な加療を開始する。肺水腫、肺脳腫に対して、利尿剤とステロイド大量短期間使用、並びに肺炎に対して抗生剤療法を強力に行い経過を追った。やや利尿がつきはじめ、夜間の呼吸が安定してくる。

3月26日、利尿剤とステロイドによく反応し、大量の利尿がみられるのと併行して、意識状態は著明に改善をみせ始め、指南力もほぼ常態に復し通常の会話が可能となる。昼間覚醒時間もかなり長くなってきた。但し未だに全身倦怠は強く、労作時には動悸、息切れが著明である。心不全は二次的なものであるため強心剤であるジギタリスは使用しなかった。隊長の一般状態からみて、この時点でラサへ搬送することが可能と判断された。

3月27日、マイクロバスでラサへ向かうこととする。朝出発前、隊長は身の回りの整理を独力で実行されている。独歩も安定している。念の為に、車中にベッドを用意し、O₂もスタンバイしたが、隊長はかなり元気で、終始座居のままござされ、昼食も中等度食し、O₂も使用しなかった。まだ咳は強いが、一般状態はますますの態でラサに到着。ラサ到着後、一時間程O₂を2l/minで吸入。夕食は約100m程離れた食堂まで独歩可能であり、夕食もますますの量を摂取後就眠。一旦利尿剤は切り、ステロイドはもう一両日、抗生剤は継続している。

3月28日、咳、全身の倦怠感に残るものの、表面的に一般状態良好で、ほぼ入山前の状態と変わらない。胸部ラッセルは持続している。午前から午後にかけて隊長は、隊及び隊員、連絡官あたりに長文の手紙を数通かかれ、文章や字体に乱れはない。ほぼ6~7時間の作業である。

この段階で、成都を経て単身帰国可能と確信をもった。3月29日、早朝宿を出てクンガ空港へ向かう。全身状態良好となったためか、しきりに山への未練を訴えられるが、ここは止むを得ない。抗生剤と鎮痛解熱剤等を携行していただき、機内搭乗まで見送って、陳、松林の両名は本隊に合流すべくとって返した。

以後、隊長は成都~北京に至ったが、この頃より熱発し始め、全身倦怠が増してきている。しかし行動力は保たれている。病変が完全には寛解していないことと、短期強力療法のreboundと思われる。熱発とかなりの消耗状態で大阪空港に到着。そのまま新川端病院に入院。以後約一ヶ月に亘り、斉藤・中島両医師の下に検索、加療を受け、ほぼ完治した状態で、5月初旬再度中国に入り、本隊を成都まで迎えられ、以後数日に亘る登頂終

了後の公式行事を元気にとどこうりなくこなされた。本隊と共に帰国された後の胸部写真を始めとする一般再検査では、血液中の酸素濃度がやや低いが、他に異常は認めしていない。

以上が今回の隊長発病の症状概要経過であるが、次のような点が問題点としてクローズアップされてくる。

- 1) 隊長の発病は偶発的なものであるのか。
- 2) 空路一足飛びに3700mまで入ることによる順化失敗に基くものであるのか。
- 3) 今回のような状況が事前に予測予防可能であるのか否か。
- 4) 今回隊として又医師としてとった措置の適否如何。
- 5) 次回よりの中国遠征における対策。

以上の問題点を念頭におきつつ、今回の事態を色々な観点から総括してみたいと考える。隊長の今回の状態を結論的に言うと、出発前の激務が感冒を呼び、この際の気管支炎が十分に根治されていなかった。この潜在的気管支炎が、肺のcapacityを落としているために、O₂不足に順化し得ず、高度障害をきたし易くして肺水腫を結果した。更にこの肺水腫がひとつのひきがねとなって、肺の炎症性変化を増悪させ肺炎の合併をもたらしたものと考える。そして肺水腫自体は加療によってある程度軽快し、主として肺水腫による一般症状は消失したが、根底に存在する肺炎はその完治にほぼ一ヶ月間を要している。この加療を現地で行うことは必ずしも不可能ではないとしても、このために隊長が現地に踏み止まるメリットは少く、又隊付医師もほぼはりつけとなるので隊全体の力を落とすことにつながり、今回の一旦帰国した上での加療を図ると言う方針は止む得ぬものであったと考えられる。

又一方隊長は、数十年来のheavy smokerであり、慢性の気管支炎の存在も考えられ、肺機能一般は同年令者と比べて低下しており、O₂不足に対するイキ値が低い可能性を否認しない。この点に関して、入山前に全隊員に対して、一般健康診断に加えて、肺機能検査並びに血液ガス分析を施行しておくことが、その対策上極めて参考となるので、今後は是非実行しておくことが望まれる。一般にある人間が、高度に対して強いか否かを決め得るdataは現在、体験してみること以外に存在しない。そして、1回や2回の実験にせよ、その再現性に関しては、まだまだ問題がある。現在の処、多くのdataを徐々に集積してゆく以外に方途はなかるうと思われる。

今回のような事態への対策として、絶対的な解決法は現在見出し得ないが、上記のような肺機能のcheckを行った上で、問題がありそうな人には特別の配慮が必要であるかも知れない。例えば今回の隊長のような場合、ラ

サ以降は隊長用のO₂を用意し、日程も本隊とは別に考慮しつつ順化を図ることによって、防止し得たかも知れない。しかし最終的には、その場その場での状況に即応した判断と、flexibilityを持った措置に頼る以外に完全な解決法はないように思われる。

今回の隊長の発病は極めて残念なことではあったが、今後の中国遠征にとっては、貴重な教訓となり得たと考えられる。

3. チベットの医療施設

中国一般の医療状況を考察するには、十分な資料をもちあわせていないため、今回は、私達が数日滞在したチベット自治区シガツェ地域の人民病院で見聞したことを中心に述べる。

病床は約100床近く存在しているが、常時入院患者はその1/4程度で、外傷が多い。医師は3~4名、看護婦十数名、その他医療従事者数十名で、簡易X線装置、心電計を装備している。問診並びに簡単な理学的診断が主で、血液検査等の内科的検査設備はない。外来患者も外傷や感染症が中心であるため、入院施設は保養所と言った趣き強い。医師も外科的素養に偏り、一般内科的知識はさ程深くないため、原因療法と言うよりもむしろ対症的に処置している。抗生剤は西洋医薬の中国製品が普及しているが、非感染症に対しては、その症状に対する漢方的処方を重視している。私達日本人が一般に、万国共通と考えている病名や、その状態を呼称する用語が必ずしも通用するわけではなく、例えば「脳疾」と呼んでいるものの中には、脳卒中や脳腫瘍、精神病等の病気が含まれ、治療は原因にかかわらず、患者の呈した症状にみあった漢方処方なされているようである。外科的疾患については、かなり西洋医学の知識や流儀が普及している。看護婦は、大部分経験的教育が成されており、衛生観念は身につけているが、疾患に対する知識は殆どもち合わせていない。しかし彼女らの患者に対する態度はかなりヒューマンである。

漢方の知識を十分に持ち合わせていない私にとって、肺水腫や脳浮腫と言った緊急処置を要する状態に接して、全面的に漢方療法に任じきる勇氣はないが、肝炎や狭心症の如き症状に対しては漢方のみでかなり成果をあげているように印象された。又高度障害に関しては、地域の特殊性もあり、経験的知識はかなり普及している。病誌は大体漢語で統一してきているようである。英名、ラテン名は一切使用されていないし通用もしない。

一般に、中国全体からみれば、シガツェ地区は僻地でも言うべき地域であろうが、この点を考慮すると病院の整備はかなりととのっていると思われる。ヒマラヤ山

麓ベースキャンプから、約車で一日の距離にレントゲンと収容施設を装備した病院が存在すること自体、中国登山の歓迎すべき特殊事情であろう。

4. 学術研究

(1) 高所滞在時に於ける血中及び尿中カテコールアミンの変動について

カテコールアミン(以下C.A.)はアドレナリン、ノルアドレナリン、ドーパミン等のカテコール基を有するアミンでその生物学的役割は多岐に亘っている。近年これらは所謂神経伝達物質として注目され、神経系内部での情報伝達や、神経と血管或いは他の組織との間のメッセンジャーとして重要な働きをなしている。ストレス状態では血中C.A.が上昇していたり、その他さまざまな病態でのC.A.の変動が知らされている。

高度障害の結果としてあらわれる肺水腫や脳浮腫は、血管の透過性に変化がおこり、血液中の液性成分が血管外に漏出しておこるもので、その成因メカニズムは未だに不明であるが、このような病的状態にC.A.が関与している可能性がある。

以上のような視点に立つて、今回高所に於ける血中及び尿中のC.A.並びにその代謝産物を測定し、高度障害発症の病態を考える際の一つの資料としたいと考えた。C.A.は代謝半減期が極めて速いため、採血後直ちに血清分離を行い凍結保存する必要がある。このため遠心分離器を持参し、約二ヶ月間の凍結を確保するために液体チッ素を用意し蒸発消耗を考慮して北京での補充を行った。尿検体は、やはり凍結検体と自然放置検体の両者を比較検討することにした。

結果的には当初の予定と異なり、遠心分離器が最初の分離操作で原因不明の爆発をおこし、破壊してしまった為、血清検体は採取不能となり、尿検体のみでの測定を行わざるを得なくなった。尿検体は、各キャンプで高度別に採取し、液体クロマトグラフィー法にて現在測定中である。

(2) 高度障害と心電図との関係について

当会では、1962年のサルトロカニリ遠征以来、中島、斉藤の両医師によって、高所における心電図変化の解析がなされ、多くのデータから、現在では高所における心電図変化のパターンはほぼ明らかにされてきている。その結果として、心電図の上から高度順応の程度を推測し、高度障害をチェックすることが可能であり、研究面もさることながら、現在では実用診察機器として多大の力を発揮している。

本学術登山隊でも、このfollow up studyを継続し、又隊員の健康状態を管理するために二台の軽量心電計を

携行し、各高度のキャンプごとに心電図を記録した。

今回、頻脈、電気軸の回転は多かれ少かれ全体に認められたが、高度障害の一つの徴候となるST低下やT陰性化などは、登頂直後にC2で記録した時一人の隊員に一度認められたのみで、他には殆どみられなかった。ベースキャンプ以前で、肺水腫をきたした隊長の心電図所見は、著明な右室負荷とST低下、T逆転と言った典型的なパターンであった。

各高度で、心電図チェックを行ないながら順化を図っていくことは、有力な方法と考えられる。

(3) チベット地域に於ける地理病理学的特徴について当初から予想されたことではあるが、言語上の問題やその他交流するうえでの困難な点も多く、客観的な調査は不可能であったので、印象に留める。

チベット人の体格、顔貌、眼髪の色はおおよそ日本人

と相似している。医療施設でキャッチする疾患は外傷と感染症が多く、所謂成人病と言われるものは、余り目立たない。日常動物性脂肪を多量に摂取しているが、肥満傾向にある者は殆ど認められなかった。一見年齢より10~20年老けて見え、女性に特にこの傾向が強いが、シガツェ人民病院の病誌をみる限り60~70歳台の間もかなり存在している。ヒマラヤ山脈南面やカラコルムの奥地でよく散見される甲状腺腫を認めることは殆どなかった。ネパールやカラコルムに比べてヨード摂取量が特に多いとは考えられず、地方性甲状腺腫がヨード欠乏のみで説明し得るのか否か疑問である。カテコールアミン測定に御協力をいただいているBML丸山部長以下関係各位、心電計の便宜をお借りいただいたフクダ電子(KK)、立石電気(KK)に深甚の謝意を申し上げます。

IX 気象中間報告

陳 介 臣

気象は大別して二つの目標をもって調査しました。ひとつはカンペンチン峰登山活動のために有効な気象情報を提供すること、そしてもうひとつは従来不足勝ちな気象データを取得して、同地域の気象現象解明の一助とすることでした。

この二つの目標は、筆者にとっても荷の重すぎるものであることは察しがついていましたが、「できる限りのことをやれば何とかかならずだ」と勝手な理屈をつけて挑戦を試みました。今振り返ってみると、当初の目標はどこへやら、確実に実現したのはもっぱら「チベット高原の気象に肌で触れてみたい」という個人的な体験にとどまっています。それにしても気象担当として何を考え、何を調査したかをまとめておくのは義務でもあるうし、後の参考になるものと思われまので、ここに報告致します。

1. 登山活動のための気象情報

(1) 気象ファックスの利用

東アジア地区では図1に示す局から気象ファックスが発信されている。現地では受画できれば最新の天気図等を直接利用できるのが気象情報提供の有効な手段となる。

今回の遠征隊は受画装置を持参しその利用を試みた。

現地(BCは東経約85.7度、北緯約28.7度、標高約4650m)で実際に受画できたのはインドのニューデリー局の気象ファックスであった。ニューデリー局の発信仕様および放送スケジュールは表1のとおりである。

われわれの利用能力や作業時間等を考慮して、当初は500mb(標高約5000m)と300mb(同7000m)の実況解析天気図を受画し、天気図パターンと現地の気象状態との対応関係の把握に努めることとし、登頂時期が近づいた時点で同高度の予想天気図も合せて受画することによって、気象状態の予測を行うよう計画した。

受画天気図は図2に1例を示したとおり、鮮明な画像であり十分利用できるものであった。しかし残念なことに約半月が経過した時点で電源供給にトラブルが生じたため、登頂期の受画は行えなかった。このため予想図の利用は実現しなかったものの、それまでに受画した天気図を気象情報提供の強力な武器として利用できたのは幸いであった。

(2) 現地データの利用

先にも触れたとおり、天気図パターンと現地の天気状態との対応関係を把握する必要性もあったため、気象観測の早期実施による現地データ取得が不可欠であった。現地では主としてBCにおいて観測を実施した。気温・

湿度、風速、日射量等は計器による自動連続記録を行い、天気、雲量・雲形、風向、気圧等は筆者が昼間3時間毎の観測を行った。結果の詳細は次項にとりまとめて報告するが、ここでは気象予測情報提供にあたって、特に気圧変化傾向の監視が役立つことを強調しておきたい。図3は毎日午前8時(北京時間)の気圧と当日の天気等との対応関係を示したものである。全体として、期間中

天気の大きくずれはなかったものの、図に見らえるとおり、気圧上昇期の天気は比較的良く、気圧下降期は比較的曇りやすい傾向が認められる。更に着目すべきは、気圧が降下した後、急上昇を始めたその日の天気が特に良好である点である。短期間ではあったが、現地データによって多少なりとも法則性を見出したことは心強いものであった。

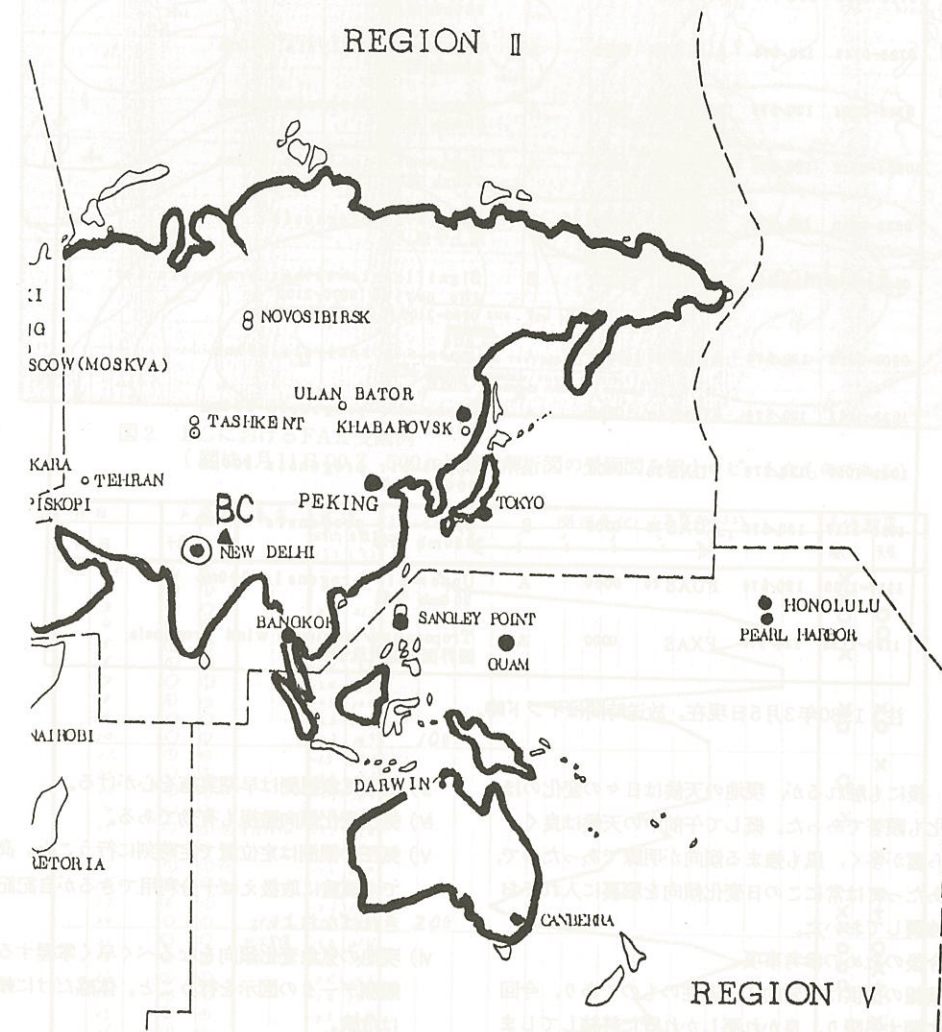


図1. 東アジア地区の主要なFAX放送センター

表1. インドニューデリー局のFAX放送スケジュール

放送時間	回転数/ 協働係数	冒頭符	天気図 時刻	放送図 範囲	内 容	(注)
0011-0029	120/576	ASAS	1800	A	Sea level analysis 地上解析	↑
0124-0142	120/576	FBAS	1800	B	Significant weather prognosis for the period 0300-1500 0300-1500 に対する悪天予想	
0620-0638	120/576	ASAS	0000	A	Sea level analysis 地上解析	↑
0710-0728	120/576	AUAS85	0000	A	Upper-air analysis 850mb 850mb 解析	
0729-0746	120/576	AUAS70	0000	A	Upper-air analysis 700mb 700mb 解析	
0746-0804	120/576	AUAS50	0000	A	Upper-air analysis 500mb 500mb 解析	
0804-0822	120/576	AUAS30	0000	A	Upper-air analysis 300mb 300mb 解析	
0822-0840	120/576	FSAS	0000	A	Sea level prognosis 地上予想	↑
0840-0858	120/576	FBAS	0000	B	Significant weather prognosis for the period 0900-2100 0900-2100 に対する悪天予想	
0900-0918	120/576	AUAS20	0000	A	Upper-air analysis 200mb 200mb 解析	
1023-1041	120/576	FUAS50	0000	A	Upper-air prognosis 500mb 500mb 予想	
1041-1059	120/576	FUAS30	0000	A	Upper-air prognosis 300mb 300mb 予想	
1059-1117	120/576	FUAS25	0000	B	Upper-air prognosis 250mb 250mb 予想	
1117-1135	120/576	FUAS20	0000	A	Upper-air prognosis 200mb 200mb 予想	
1135-1153	120/576	FXAS	0000	A	Tropopause/maximum wind prognosis 圏界面/極大風予想	

注) 1980年3月5日現在。放送時間はインド時。

なお、後にも触れるが、現地の天候は日々の変化のほか日変化も顕著であった。概して午前中の天候は良く、午後から雲が多く、風も強まる傾向が明瞭であったので、行動にあたっては常にこの日変化傾向を脳裏に入れておくよう強調しておいた。

(3) 今後のための参考事項

気象情報の提供は本質的に一過性のものであり、今回の遠征に関する限り、良かれ悪しかれ既に終結してしまったといえるが、ここに今回の経験から今後の遠征の参考になると思われる事項を列挙しておきたい。

- i) 気象ファックスは利用価値大である。
- ii) 装置の電源まわり、消耗品まわりに充分留意して準備すること。

iii) 現地気象観測は早期実施を心がける。

iv) 気圧変化傾向監視も有効である。

v) 気圧の観測は定位置で定時刻に行うこと。高度計でも慎重に取扱えば十分利用できるが日記記録できればなおよい。

vi) 現地の気象変化傾向をなるべく早く掌握するため観測データの図示を行うこと。体感だけに頼るのは危険。

vii) 登山ルート上の気象状態にも留意し、極力メモをとること。

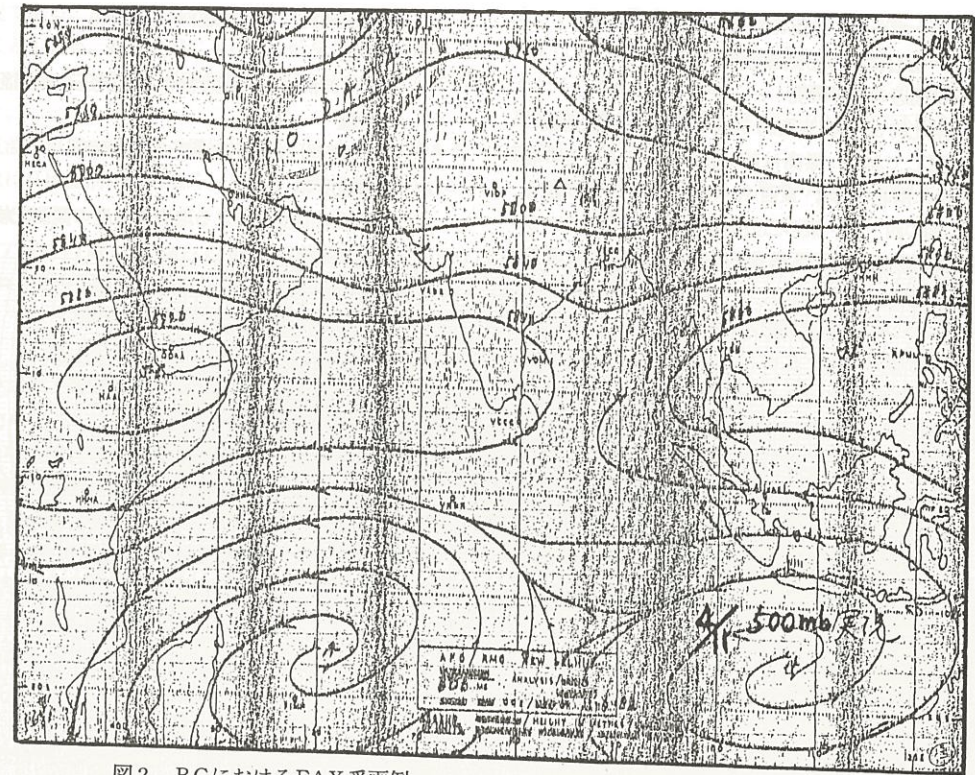


図2. BCにおけるFAX受画例
(図は4月11日00Z 500mb実況解析図の受画図を縮小コピーしたものである)

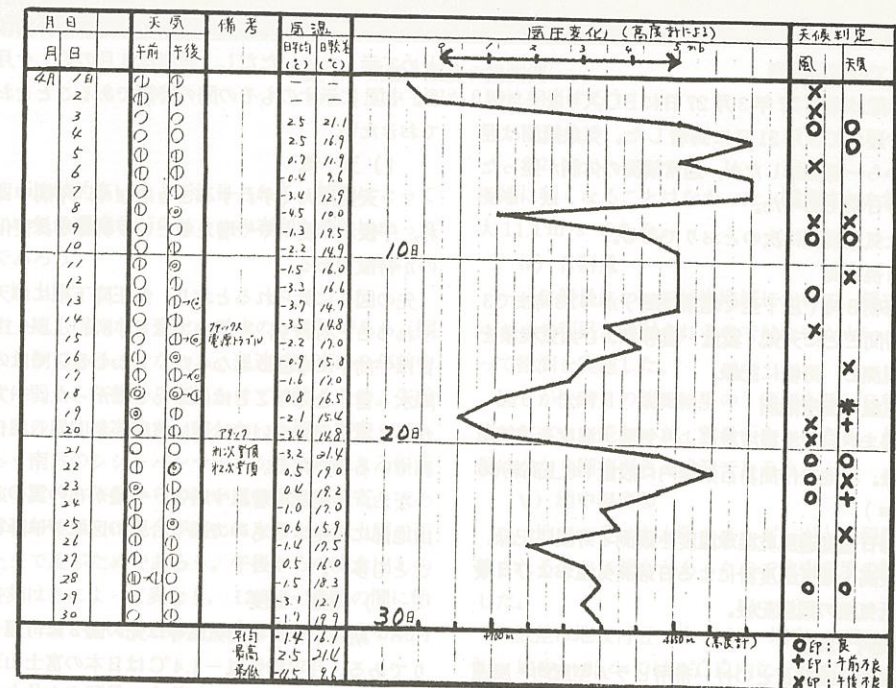


図3. 天候と気圧変化との関係

2. チベットポーロン地区の気象

—BCにおける気象観測—

(1) BC周辺の地形環境

BCは南北約30 km、東西約50 kmの高原盆地状地域の西部に位置しており、標高は約4650 mである。その北東約10 kmに南北20 km、東西10 km余りのペグ湖が控えており、湖の西・北・東の三方には山地が連なっている。一方BCの西約20 kmから南東約40 kmにかけては標高6000 m以上の山群が連なり、そのうち南々西約20 kmのカンペンチン峰と南南東約40 kmのシシャパンマ峰の山すそ斜面が盆地南側に広がっている。またBC東方には小さな丘がいくつかあるが概して平坦で、約40 km隔てて東に延びる山地があって盆地を南北に分断する形となっている。

ちなみにBCから周辺山頂を見通す高度角を示すと、南方ではカンペンチン峰の6.8度が最も大きく、シシャパンマは4.3度であった。北方では最大で2.7度、東は近くの丘の4.4度が最大であったが盆地周辺山地は遙かに小さい。西方も同じく3度以下であった。これでもわかるとおり、BCは盆地状地域内にはあるが周辺山地はそれほどせまっておらず、平原に近い感じのする場所に位置している。

現地ではこの地区をポーロンと呼んでいたが、われわれが滞在した期間内では当初盆地内でも雪におおわれている所が多かったが約1週間程度で融け、草原(ただし枯草で所々裸地あり)となった。

(2) BCでの気象観測

遠征隊本隊は昭和57年3月27日にBC入りをしたが、筆者はやや遅れて3月31日に到着した。気象観測は翌4月1日から一部開始したが、通常観測の体制が整ったのは4月3日頃であった。

実施した気象観測は次のとおりである。

ア. 目視観測

毎朝8時(以下全て北京時間)から23時まで3時間ごとに天気、雲量・雲形および大気現象を観測し、野帳に記録。

イ. 気温・湿度観測

週まき自記温度湿度計により気温・湿度を連続記録。現地工作簡易百葉箱内に設置(地上高約90 cm)。

毎日適宜通風乾球湿度を観測し野帳に記録。最高・最低温度計による日最高気温および日最低気温の観測記録。

ウ. 風向・風速

昼間3時間ごとのけい帯用ピラム型風向・風速計による観測記録。

熱式風速計による風速の連続記録。

エ. 気圧

昼間3時間ごとの高度計による気圧の観測記録。

オ. 日射量

ネオ日射計による日射量の連続記録。

カ. 地中温度等

赤外放射温度計による地表面温度の観測記録(適宜実施)。

サーミスタ温度計による地中温度(-2.5 cm、-25 cmの2深度)の適宜連続記録。

キ. その他

サーミスタ温度計による気温差観測(地上0.9 mと5 m、適宜連続記録)。

上記各観測のうち、目視観測は観測員の行動条件のため一部欠測があり、また連続記録は記録計の数に制約があったため交互に記録させたものもあるが、概ね4月末まで観測した。また、当初計画していた高層気象観測(観測気球による上空の風向・風速の観測およびゾンデによる上空の気温の観測)は気球浮揚に必要なヘリウムガスの輸送に問題が生じBCまで到着しなかったためやむを得ず中止した。

(3) ポーロン地区の気象

BCで観測した結果はポーロン地区の気象をほぼ代表しているものと考えられる。観測結果の詳細は別に報告する機会にゆずることとし、ここでは観測結果にみられるポーロン地区の気象の特徴を項目別にとりまとめて示したい。ただし、観測は4月の約1ヶ月間であり、ここに示すのもその間の特徴であることをお断りしておきたい。

i) 天気

天気は大きくずれることはなく、午前中はよく晴れ、午後から雲がやや増えるという明瞭な日変化を示すのが特徴である。

先の図3に見られるとおり、気圧降下期には天気かぐずれることもあり、期間中では4月8日、18~19日、23日は午前中に本曇りとなった。しかしBCでは本格的な降水(雪)を伴うことはほとんどなかった。一方、午後からも雲が増えないのは逆に気圧が急上昇した日に限られているといえる。

なお、山地部に着目すると、午後からの雲の大部分は山地部に発生するものであり、その区域では降雪を伴うことも多い。

ii) 気温・湿度

期間中の日平均気温等は先の図3に付記したとおりである。月平均気温-1.4℃は日本の富士山頂の4月(-9.3℃)よりはかなり高く、長野の1月と大差ない

程度である。ただし気温の日較差は大きく20℃を越えることもある。なお、BC4月の最低気温は初登頂日4月21日の-13.9℃、最高気温は4月3日の13.0℃であった。

気温・湿度の日変化の様子は図4に示すとおりである。気温は日出直前が最も低く、日出とともに急上昇し、14

時~16時に最高に達したのち、ゆるやかに下降する。湿度は夜半から日出にかけてはかなり高く、100%に近くなることもしばしばあり、日出とともに急減少し日最高気温に達する時間帯には20~30%まで下降し、その後増大する。

一般に乾燥地帯であると考えられる当地域で、夜間の

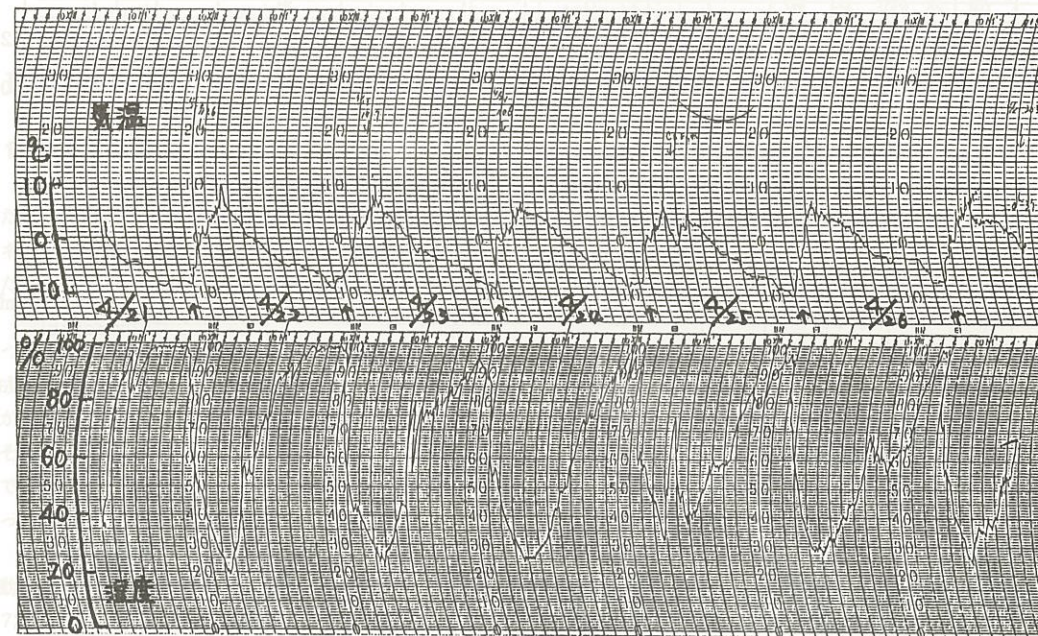


図4. 気温・湿度の観測例
(図中↑印が8時に相当する)

相対湿度が比較的高いことが注目される。植生にとってはきびしい気象環境ながらひとつの有利な条件になっているのであろう。

iii) 地上風

地上風も明瞭な日変化を示すのが特徴である。図5がその1例である。すなわち、風速は夜半から午前中にかけては弱く、午後から夜にかけては強くなる。午前中の弱い風の風向はあまり一定しないが概ね南寄りであり、恐らく南方のシシャパンマ山系から吹き降りる斜面風であろう。一方午後からの強い風の風向は西寄りであり、恐らく午後からは混合が盛んになるために上層の西風が地上まで及ぶためであろう。午後からの吹き出しの始まる時刻は日によって異なり、12時~17時の間に始まる。一般に雲が増えるとともに吹き出しも始まる傾向を示す。

なお、BCにおける風速は強いときで10 m/s程度で

極端に強くなることはなかった。観測された範囲では最大11.1 m/sである。

iv) 日射量

日射量については当地域において、将来太陽エネルギーの利用が検討されるのではないかと興味もあって観測を実施した。

図6が快晴日の観測結果の1例である。日射の強度自体は日本と大差ないが、雲量が少ないため、月間の日射量はかなり期待できる状況であろう。

v) 地中温度等

地表で受けた太陽エネルギーがどの程度地中に蓄積されるのに関心があったので地中温度の観測を実施した。

日較差は地表付近で約40℃、地中-2.5 cmでは約10℃、地中-25 cmでは3℃以内になっている。また平均温度は地表付近で約10℃、地中-2.5 cmで約5℃、地

ランタン・リと蘭塔山

横山 宏 太 郎

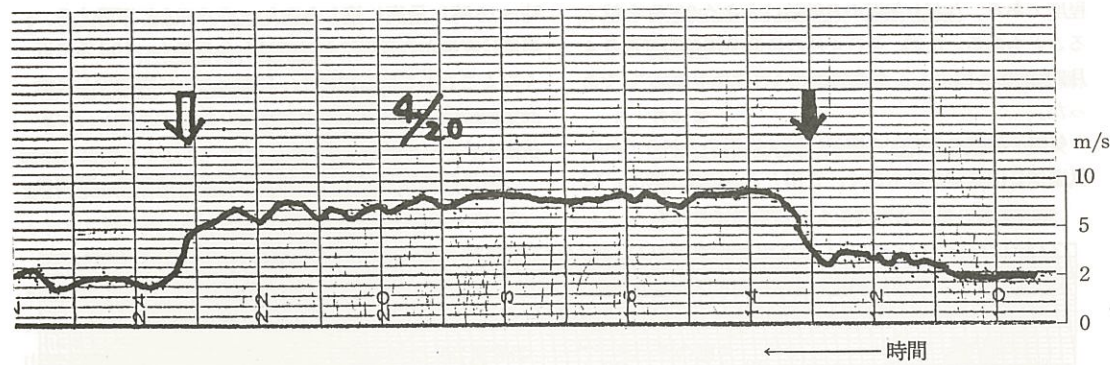


図5. 風速の観測例
 図の風速スケールはノンリニアである。
 原記録は打点レコーダであるが見やすくするために太実線でなぞってある。
 図中↓印は風速急増, ↓印は急減時刻を示す。

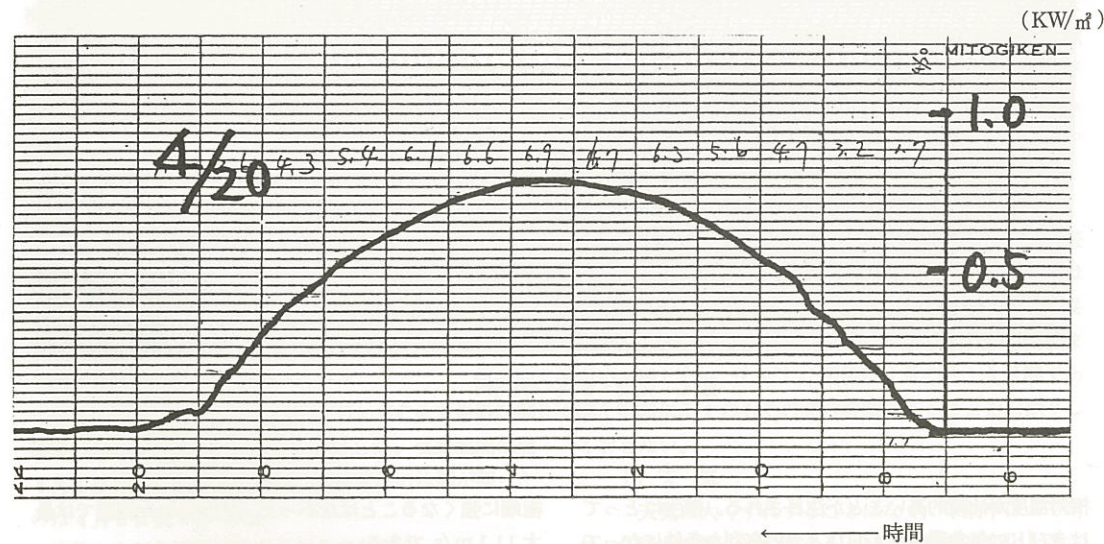


図6. 日射量の観測例
 原記録は打点レコーダであるが、見やすくするため太実線でなぞってある。
 当日の天気は快晴のち晴であった。

中-25cmで約2°C程度である。

現在観測データはまだ十分に整理がついていない状態である。個々の資料については、周辺の既存統計資料と合せて資料編として集約したいと考えています。また、現地気象現象の特徴として各種気象要素の日変化の相互関係と地表付近のエネルギー授受の解析とをテーマに今後更に検討を進めることとしたい。

最後になりましたが、今回の遠征にあたって観測資器材等の提供など大変お世話になった下記各位に厚くお礼申し上げます。

- 明星電気株式会社 (レコーダ, ミニゾンデ等)
- 日本無線株式会社 (ファックス受画装置)
- 松下電気通信株式会社 (赤外線温度計)
- 名古屋大学 (日射計)
- (財)日本気象協会 (各種気象測器)

I. ランタン・リ ネパールから

1. 新たな計画

1976年4月から8月にかけて、当時、大学院生であった私は、ネパールヒマラヤ氷河学術調査隊の一員として、ネパール東部、クンプ地域、ショロン地域を歩きまわった。

私にとっては前年のカラコルム・ピアフォ氷河踏査につづく、二度目のヒマラヤ行であり、調査もある程度の成果をあげ、ヒマラヤの高峰に接することもできたのだが、満足できない部分が、私の心の内には残っていた。それは、「頂き」であった。“Academic”の行動だけではなく、“Alpine”の行動を求める自分がそこにあった。

そして、夏も盛りの京都へ帰った私を待っていたのは、動き始めたヒマラヤ計画であった。対象はランタン・リ、7239m。ランタン・ヒマール、ランタン谷の最も奥まった所に位置する、秀麗な山容を誇る未登山。この山を選び、計画を進めていたのは甲斐と森本、二人のヤルン・カン組である。京大大学院在学中であり、ヤルン・カン以来3年、そろそろ落ち着かなくなって来たらしい。

ところで、このランタン・リであるが、これまでも京大からネパール政府に登山許可申請を、当時用いられていた、“ツング・ピーク”という名称のもとに提出したことがある。その時は、この山の許可は得られず、かわりに、ガネッシュ(アンナプルナ南峰)の許可を得て、1964年、京大山岳部隊が初登山に成功した。それから十数年を経て、再びこの山が対象として登場して来たのである。

私より少し遅れて、ネパールの氷河調査を終え帰国した、現地事情に詳しい井上治郎がまとめ役となって計画の具体案が作られた。隊の名は、Kyoto University Nepal Himalaya Expedition, 1977とした。年号は毎年更新される。

それに名を連ねたのは、隊長:中島暢太郎, 副隊長・医師:斎藤惇生, 以下隊員として井上治郎・甲斐邦男・森本陸世・横山宏太郎であった。隊員の内最年少が森本

の28才という、かなりの高令隊であるが、これは、AACKの当時の状況、若手・実働会員不足の一端を示している。京大山岳部の卒業生のうちAACKに入会する者はわずかであり、しかも新入会員のうちで大学院に残って、遠征計画に直接参加できる立場にある者はほとんどいなかったのである。

ともあれ、こうしてできあがったランタン・リの登山許可申請書(アプリケーション)は、1976年秋、ネパール外務省に提出された。

2. ランタン・リ予備踏査隊

さて、アプリケーションは出したが、これですぐに許可が下りるとは、誰も考えていなかった。当時、ランタン・リは、登山許可の対象となる解禁峰には含まれていなかった。しかも、ランタン・リはネパール・中国の国境上に位置する山であり、解禁には両国の国境問題が大きく影響するものとの予想があった。

そこで、ランタン・リの偵察と現地での許可取得交渉のため、ランタン・リ予備踏査隊を現地に派遣することになり、隊長に横山が指名された。隊員は、さきに述べたような事情からAACKの新人養成の意味も兼ねて、京大山岳部から希望者を募った。その前後の、うまくいっているとは言い難い、AACKと京大山岳部との関係を反映して、応募者は少なかったが、今井一郎(当時4回生)、佐治与志也(当時2回生)の2名が隊員に決定した。

国内での準備を終えた予備踏査隊は、1977年9月27日、大阪から空路カトマンズへ向った。

3. カトマンズからランタン谷偵察行

カトマンズでは、郊外、ボーダナート近くに新築されたばかりの、カトマンズ・クラブ・ハウスに居を定めた。これは、北大OBを中心とする、ヒマラヤ地域に関心深いメンバーから成るカトマンズ・クラブが、現地での活動の基地として設けたものであるが、横山がカトマンズ・クラブのメンバーであったため、これを借用できることになった。カトマンズ市中心部からはかなり距離があ

るが、準備作業などには十分なスペースもあり、概して快適な生活であった。

シェルパは、コック兼業で2名を予定し、アンナプルナ南峰、ヤルンカンと二度の京大隊でサーダーを勤めたカルマ・シェルパに、樋口明生氏から手紙で手配を依頼していただいた。近くのチャベルのカルマ宅を訪れたところ、彼の弟のンガッティ・シェルパを紹介された。大柄・骨太の身体、これまでの実績もかなりのもので、満足できる人選であった。もう一人はンガッティの友人、カミ・シェルパを雇った。

カトマンズでの準備を終えた予備踏査隊は、トリスリ経由ランタン谷に入り、ランタン氷河上約5000m地点にベースキャンプを設けた。その後15日間をランタン氷河上部及び登路に予定した南西稜の偵察に費し、予定通りの、ランタン氷河-ニセのティルマンのコール-ティルマンのコール-南西稜-頂上というルートからの登頂の可能性を確認し、カトマンズへ戻った。この間の行動の概要を以下に記す。

10月8日 カトマンズよりチャーターしたバスで隊荷と共にトリスリへ。

10月9日 トリスリ出発、日本人3人、シェルパ2人、ポーター16人。

10月14日 みぞれの降中をキャンジン・ゴンパ着。

10月16日 キャンジン・ゴンパよりガンジャ・ラ方面、約4800mまで高度順化のため往復。

10月18日 キャンジン・ゴンパ発。ポーターは12人。新たに雇った、ランタン村の住人たちである。

10月20日 ランタン氷河右岸の、短いアプレーションバレーが終るところに、一たん隊荷を集積する。これから氷河上の行動となるが、ポーターのうち何人かはこれより先へ行かないという。理由は装備・食糧が不充分のためである。結局、9人のポーターが氷河上の行動に同意したので、ポーターの食糧調達と隊荷輸送を同時に行うように、計画を組み直した。

10月25日 全員ベースキャンプ予定地(5000m)に到着、隊荷も輸送完了。ここにベースキャンプ(BC)を設けた。

10月26日 (快晴)ランタン氷河本流偵察、5400mまで。

10月27日 (快晴)ランタン氷河左岸側を5300m付近まで登り、偵察。

10月28日 (快晴)休養。

10月29日 (快晴)ニセのティルマンのコール方面への行動に移り、ルート偵察とポッカ。

10月30日 (快晴、小雪)5500mにキャンプ(C1)を設け、横山・今井はC1に入る。不調の佐治はこの日

からBCで休養。

10月31日 (快晴)横山・今井でニセのティルマンのコールまで偵察、ルート工作、ンガッティ・カミは荷上げてC1入り。

11月1日 (快晴)4人でニセのティルマンのコールまで荷上げし、C2建設。横山・今井・ンガッティでティルマンのコールまで往復する。

11月2日 (快晴)横山・今井・ンガッティで、ニセのティルマンのコールの東側の小ピークから偵察。

11月3日 (曇、のち風雪)ンガッティ・カミはBCへ下る。横山・今井で、南西稜を試登、約5800mまで登り、天候悪化のためC2へ戻る。

11月4日 (風雪、のち曇り)横山・今井、BCへ下る。

11月5日 (曇、のち晴)ンガッティ・カミでC2の残りの荷を回収。横山・佐治はBCからC1の少し手前まで行って、BCへ戻る。

11月6日 (快晴)ランタン・リの簡易測量。

11月7日 (快晴)ランタン氷河本流上部偵察。

11月8日 (晴)休養。

11月9日 (晴)撤収準備、ポーター5名到着。

11月10日 (快晴、のち曇)BC撤収。

11月13日 キャンジン・ゴンパ着。

11月15日 キャンジン・ゴンパ発。ポーターは10人。ゴサイン・クンド経由のルートを通ってカトマンズへ向う。

11月23日 カトマンズに到着。

4. 偵察を終えて

ランタン氷河を歩む我々の前に、ランタン・リは予想外に早くその姿を現わした。初めに頂上が、次いで進むにつれて次第にその全容が我々の視界に入って来た。美しく、しかも立派な山容を持った山であり、山選びはまちがっていなかった、と感じた。

登路の第一候補、南西稜は、頂上から長くのびる雪稜である。長さもかなりのものであるし、雪庇の張り出ししている様子も見え、いくつかの急傾斜の部分を除けば特に問題はなさそうであり、このルートによる登頂は充分可能と見えた。

南西稜の試登には、充分な日数をあてることができず、しかもこの期間唯一の悪天候の日と一致してしまったため、ティルマンのコールから標高差約200m程度の登攀にとどまった。

写真は各方面から撮影したが、南西稜上部については下から見上げることになるため、情報はやや不充分かと思われた。この点を補うため、後に、カトマンズでチャーターしたピラタスポーター機により、空中からの写真

撮影、偵察を行った。

佐治の不調は、約5300mより高い所で疲労が激しくなるという症状で、高度順化の失敗によるものと思われる。ただし、横山、今井の順化はほぼ順調であり、佐治の体質と今回の行動パターンとがうまく合わなかったための失敗と考えられる。

シェルパ2名は、期待に応え、よく働いてくれた。

5. 許可取得交渉

ネパール王国政府内での、登山許可関係の事務取扱部署が1977年、それまでの外務省から観光省登山局に変わった。予備踏査隊がカトマンズに到着した時は、ちょうど事務移管作業の最中であった。問い合わせると、我々のアプリケーションは、ちゃんと観光省へ引き継がれていることが判ったが、それとともに、ランタン・リはまだ解禁されていないので許可するわけにはいかないと回答も得た。予想通りの回答であり、これから交渉が始まるのである。

ところで、ランタン・リは、当時ネパールではほとんどその名を知られていなかった。ランタン・リルンには、カトマンズや、チベット・キールンに通じるトリスリ街道沿いからその姿を望むことができるためか、ネパールの人との間でも知名度は高かったが、ランタン・リはランタン谷に入っても、一般の人々が生活する範囲からは見えない山であり、知名度の低さも無理ないことと思われた。

それどころか、ランタン谷上流部に関してもほとんど知られていなかったものと思われる。それは、政府関係機関で用いられていた地図が古い1inch=8milesの地図であったことからもうかがうことができる。この地図では、ランタン谷はランシサ・カルカの東で終わっており、ランタン氷河と周辺の間々については全く記されていない。

そのような事情で、交渉はまずランタン・リという山を認識してもらうところから始まったのである。なかなか進展しない交渉であったが、前後4ヶ月にわたり、郊外のカリマティにあった観光省へ何度となく通った甲斐あってか、もしランタン・リが解禁された場合には、AACKのアプリケーションを考慮しようとの回答を得て帰国することができた。

その後毎年、中島暢太郎、樋口明生、上田豊、井上治郎ら会員諸氏訪ネの折毎にアプリケーションを再提出し、登山許可取得にかける熱意のほどを伝え続けた結果、1981年春、ランタン・リの登山解禁と同時に許可を得ることができた。

しかし、同じ頃、中国登山協会からも同峰(中国名:

蘭塔山)の登山許可が届き、さらに我々の計画での登路である南西稜が、最近決定された中ネ国境によれば、中国領内にあることも判明した。

それにより、当初の計画は変更され、中国・チベット側から、ランタン・リの初登頂を目指すことになった。

II. チベットからランタン・リ(蘭塔山)へ

1. ランタン・リのチベット側

さて、この計画がAACKにとって、初めての中国における登山活動となるわけであるが、これまでの中国登山協会との接触や、会員、西堀栄三郎(名誉会員)、斎藤惇生、甲斐邦男、横山らの、日本山岳会チョモランマ登山隊への参加などを通じて、中国での登山活動やチベットの状況についてはすでにかなりの情報が得られていた。

だが、肝心のランタン・リのチベット側についての情報はわずかであった。そのうちの一つ、中国科学院、シヤパンマ調査報告の中に付近のパノラマ写真があるが、ランタン・リはその中央、はるか遠方に小さく見えているだけである。

地図も大縮尺のものなど望むべくもなく、概念図程度であり、頂上から東、北、南西に稜線がのびていることがわかる位である。

このような資料だけでは不充分であり、1982年春の本隊派遣に先立って、1981年秋に偵察隊を現地に送ることになった。

偵察すべき予定ルートとしては、北稜と東稜には含まれた、ダジ(達曲)氷河から東稜に達し東稜伝いに頂上へ、というものが第一候補とされた。

南西稜北面、北稜西面、北稜自体は、ランタン・リ予備踏査隊や、大阪市大隊による写真から非常に困難と考えられた。また、そこまでのアプローチも不明な点が多かった。それに比べると東稜上部は、ネパール側からの写真で、登攀可能と見られること、ダジ氷河は、シヤパンマ峰へのルートとして用いられているヤボカンチャロ氷河のすぐ西隣であり、アプローチには、ラサからBCまでの車輛による輸送が期待できること、などから判断されたものである。

偵察隊の計画の大筋としては、日本出発から帰国まで約1ヶ月、ダジ氷河末端付近にベースキャンプ(BC)をおき、そこで偵察活動にあてる日数は2週間、となった。

この偵察隊長の役目が、また私にまわって来た。ネパール側からの偵察の時は、金はなくとも時間だけは余る

ほど、一も二もなく引き受けた私だったが、今回はいささか事情がやっかいで、特に翌年春の本隊への参加が危ぶまれたこともあり、おいそれ、というわけにはいかなかった。しかし、結局は引き受けることになり、隊員には牛田一成・中川潔の2名を選び、「蘭塔山偵察隊」ができた。

1977年当時とちがって、AACKにはその後新たに加わった若手会員がかなりあり、そのうち数名は、大学院在学中で、この計画には積極的に参加して来ていた。そのため、募金など本隊の準備と並行しての偵察隊の準備も順調に進み、9月29日、日本を発つことになった。今回もまた、例の如く前日の晩に荷物をまとめ、といっても、下宿をかきまわして要りそうなものを選び出すだけのことだが、ルックザックとダッフルバッグにつめ込んで自分の準備を終えた。

2. 偵察隊、ラサへ

9月29日昼、京都を発つ。近藤会長はじめ数人の見送りを受けて大阪から空路、北京へ。便が遅れたため、北京空港で、中国登山協会の金俊喜・陳尚仁両氏の出迎えを受け前門飯店に着いた時にはすでに11時であった。北京空港税関も次第に態勢をととのえつつあるらしく、手続きは来るたびに複雑になっている。

翌日30日、登山協会の許競氏、我々に連絡官として同行する金俊喜氏らと打ち合わせ。横山にとっては、チョモランマ偵察・本隊以来の顔なじみ、中国流に言えば老朋友である。許氏は中国シシャパンマ隊の隊長でありその後も外国隊連絡官として現地へ何度か行った経験がある。この機会にと現地の情報をいろいろ教えていただいた。昼食は登山協会の招待で、秋の北京の名物料理、羊肉のしゃぶしゃぶに舌つづみを打つ。

国慶節10月1日はどこもかしこも大変な人出である。故宮も、全国各地から上京した人々でごった返している。夕食を北京空港でとって、夜中に成都に着く。

翌10月2日、例によって早朝の便で成都からラサに向かう。眼下に、そして機体の左右に広がる風景は何度見ても圧巻である。

三度目のチベット。4年前、ティルマンのCOLからチベット側の山々を眺めた時には、思いもよらなかったことである。

ラサでは、荷物の整理や、宿舎裏山へのトレーニング登山の合間に、八角街も少しのぞいてみた。そこには、以前よりさらに活気を増した、人々の生活があった。

3. ランタン・リの麓へ

我が隊の車輛は、人員用にランドクルーザー1台、貨

物用にトラック1台。メンバーは、日本人3人と金連絡官のみ、これでも余裕がある位だ。おそらく、チベット入りした各国の隊の内、最小規模ではなからうか。

10月4日朝、6時半にまずトラックが荷を積んで先発する。朝食をとった我々も出発しようという時に、パスポートのチェックが必要とわかり、連絡官は我々のパスポートを持ってラサ市街へ。この宿舎は、ラサ市街からは遠く、こんな時にはいっこうに様子がわからず、いらいらしながら待つことになる。

12時頃やっと手続きがすんだので、少々遅いがシガツェへ向かう。タゾ・ラから澄みきった空のもと、ヤムドク・ツォ(湖)、レンリカンサン峰を望む。ギャンツェからは沈みゆく秋の陽を追うようにひた走り、夜8時、シガツェに着く。

シガツェの朝食はおかゆとパン。この宿舎のパンは以前と変わらず、なかなかいける味である。食後、出発までのわずかな時間に、街へ出て見た。デパートから露店市場へ。市場は店の数も増えたとし、野菜など商品の量や種類も豊富になったようだ。

シガツェを出て、ツォーラへ。峠にはチョルテンが立ち、旗飾りが吹きぬける風に鳴っている。そういえば、途中の村の、家々の屋根にも飾りの布が目立った。1979年、1980年頃はあまり見られなかったものだ。チベットの文化が復活しつつある兆であろうか。

カツォ・ラを越えて少し下るとチョモランマが見える。相変わらず遠く、高いがふと懐しさも覚える。日本山岳会チョモランマ北壁隊の協力員として活躍した金連絡官も想いは同じようだった。シガールでは町の入口に新しい宿舎ができてあり、我々にも新しい室が割り当てられた。しかし食事には従来の宿舎まで向いた。

6日は朝食後、シガールの町の北の、毎回登っている山へ標高差500mのトレーニング登山。頂上からはこれも例によってマカールからシシャパンマまでの大パノラマが展開する。牛田、中川にとっては初めて見る巨峰群興奮しないはずがない。2人とも体調はよさそうで、牛田は畜産学専攻、羊の大群に夢中でカメラをふりまわし、中川は中国語会話の勉強の成果を発揮している。

7日、シガールを出る。車はやがて南へ、ロンブク寺・チョモランマ方面への道の分岐するのを見つさらに西へ進む。1時間半ほどでティンリー(定日)の町である。以前はこの地方の政治・経済の中心地として栄えていた町であるが、今はシガールにその座を譲っている。

ティンリーの名は、ヒマラヤの南、ネパールに住むシェルパ族の人々との話によく登場していた、親しみ深い名である。南側には、チョモランマやチョ・オユーといった山々が並んでいるが、その少し西へ、広く開けた谷

がゆるく上って行く。クンプのシェルパたちは、ヤクの背に荷を積んでナンパ・ラを越えこの谷を下って交易にやって来る。昔、ティンリーには私のお父さんの大きな家があったのだけど……と嘆く老婦人もいた。多くの人たちがこの地を追われ、ネパールへと亡命したという歴史もある。

道はさらに続く。羊の大群を追って行く人々がいる。小さな村をいくつかすぎると、日本などちがって、標識も何もない分岐点に着く。ここで、我々は、これまでラサから辿って来た蔵尼公路(チベット-ネパール・ハイウェイ)と別れ、さらに西へ進む。蔵尼公路はここから南へ、ニエラム、ザムー、国境にかかる友誼橋を経て、ネパール・カトマンズに至る。

しかし、ここまで来れば目的地は近い。シシャパンマが見えて来た。その右手の白い、どっしりとした山はカンペンチンである。やがて眺望がひらけて、平原のはるか南に、ランタン・リが見えた。遠い山、というのが第一印象であった。キールン(吉隆)あたりまで通じているのか、枯れ草の高原をわだちがさらに西へのびている。シシャパンマBCへの道を入れればよいとのことで注意しながら行くうち、右手に、ペク湖の青い水面が見える。カンペンチンの北側まで来ている。どうも来すぎたようだ、と引き返すこと約30km、ようやく草の中にそれらしいわだちを見つけた。結局、スーロン(色尤)人民公社の近くまで戻ってしまったので、足をのばしてヤクの手配をたのみに行ってから、いよいよBC予定地へ。このあたりの標高は約5000m。100万分ノ1の地図でもそれとわかる、広い平原の中で、なかなかルートを把握するのは難しい。

ダジ氷河の谷に入りなるべく氷河末端近くまで進んでBCを設ける予定であったが、平原から斜面にかかると、そこはモレーンで、大小の岩石が散在し、しかも積雪があるため車は思うようには進んでくれなかった。日暮になってしまい仕方なく、平原の端、斜面にかかるところでキャンプする。

冷たい風は吹くし、事態が思うようにならなかったこともあってなんとも情ない気持ちでテントをはる。酒でも飲んで気をまぎらすに限るのだが牛田、中川にとっては初の5000m滞在、酒はがまんして、かわりにさし入れの高級チョコレートを開ける。そうこうしているうちに、グランドシートを縫いつけたオンボロ夏用テントも快適に思えてくるから不思議なものである。

4. 偵察活動、そして予期せぬでき事

10月8日、空はよく晴れている。BCが確定していれば休日にしたいところだがそうもいかず、午後ダジ氷河

方面の偵察。ランドクルーザーで出かける。約2km、ダジ氷河右岸のサイドモレーン上で車を下り、歩き出す。このあたり、サイドモレーンと谷底との比高は約200mほど。谷はゆるく、開けており、氷河末端まではほとんど比高はない。しかし距離は少くとも5km以上はあるだろう。2時間半ほど歩いたがなかなかかどらない。モレーンに少し登って様子を見る。ここからのランタン・リは、南からと同じように、白い三角形の美しいピークである。ダジ氷河下流部には氷塔群が発達している。中ほどで大きな三本の支流に分れるが、登路に予定している南へ向かう支流の大部分はポーロン・リからの尾根にかくされて見えない。しかし、最上部はなだらかな雪面が東稜の稜線まで続いている。東稜は全体雪後で、雪庇の張り出しはあるが特に問題となる部分はなさそうである。プラントン・コンパスで簡易測量をして戻る。帰路中川不調。

車輛をこれ以上前進させるのは無理と考え、昨夜のキャンプをBCと決め、五星紅旗、AACK旗をたてた。10月9日 休養、荷物整理
10月10日 朝、アメリカ・シシャパンマ隊の連絡官王振華氏来訪、我が隊のトラックを貸してほしいとの申し出を了承する。

氷河末端から左岸側を1.5kmほど進み、キャンプ予定地選定して戻る。3人とも脱水気味、BCでXL-1や茶など1人1ℓほど飲む。

10月11日 前日から不調の牛田はBCから車で谷の左岸側の偵察。横山・中川はC1(5400m)に入る。地面はアースハンモックであり寝心地はよくないが、水がとれるので助かる。荷はヤク3頭(ヤク工1人)でC1まで運んだ。

10月12日 このところ連日快晴。上部の写真測量作業のためモレーンリッジに上る。氷河の奥は残念ながら見えない。作業に約4時間かかった。C1に戻ると牛田がBCから上って来た。測量機材などはヤクの背でBCへ下ろす。

10月13日 左岸のアブレーション・バレーの中を遡り、半日分ほど進んでC2とする。約5500m、広い河原状のところ。ここからなら1日でBCまで下山可能である。牛田・中川でC1のデポ回収。横山はさらに先に進み約5600m地点、アブレーション・バレーが終るあたりまで行って戻る。東稜のCOLへの氷河が正面から見えた。チョモランマ、ノース・COLへの氷河とよく似ている。技術的には問題は特になさそう。今日はランタン・リの頂上付近に雲がかかった。水蒸気はプレブー谷方面から来るように思われる。

10月14日 今朝はまた快晴、上部の偵察に出発。昨日

の最高到達点で写真撮影。東稜コルへの斜面は日当りの悪いところで12時すぎによく全面に日が当たる。

あわよくば、氷河を横断してABC位置選定、と思つて氷河上に出てみたが、左岸側は氷塔群で時間がかかる。中ほどから表面が平坦になり歩きやすくなったが、時間切れで、C2に戻る。

10月15日 昨日から、大分疲労がたまって来た様子が認められるので、ひとまずBCへ下ることにした。しかしこの日の朝、牛田が発熱し、予定変更。高所障害によるものと判断し、酸素を吸わせる。初め30分間は毎分2ℓ、その後毎分1ℓとしテント内で安静にさせた。39.8℃にまで上っていた体温が約2時間で37.5℃になったので一応危険は去ったものと考えた。横山・中川で余分の荷を氷河末端まで運び、デポする。2人とも軽いむくみがみられたのでラシックスを服用したところ、小便が大量に出た。

10月16日 キャンプを撤収し、BCへ下る。牛田は不調のため酸素を毎分1ℓ吸わせる。末端モレーンの丘の間に、放れヤクが1頭。右岸サイドモレーンの斜面の下から、うまい水がわき出している。

出発後8時間半、夕方暗くなるところで車の迎えに会ってBCに戻る。BC付近はずいぶん雪が減っていておどろいた。とっておきのコルドン・ブルーうまし。牛田は当然、禁酒。

10月17日 休養。ラシックス、DX 250を服用して、皆むくみがとれる。

夕方、アメリカ隊の輸送を手伝っていたトラックの陳運転手が戻って来た。驚いたことには、彼の言によれば、我々がラサから成都へ飛ぶはずの25日日曜日には、ラサ・成都間の便はないという。なぜ今ごろこんな問題が出てくるのか、と腹も立つが、とにかくこのままではどうにもならないので、金連絡官と相談する。その結果、連絡官がシガツェまで行き、24日又は23日の便を手配すること、帰路はシガールに泊らずBCからシガツェへ直行して一日うかすこと、とした。

10月18日 金さんがのってシガツェへ行くはずのトラックは夜間の冷え込みでエンジン始動せず、かわりにランドクルーザーで出かけることになる。今後の行動には痛手だがしかたなし。

今日は牛田・中川でデポ回収、横山はダジ氷河右岸を偵察する。雪の少なくなったモレーンリッジを地下足袋でとばす。だいがんばつたつもりだったがせいぜいC2の対岸あたりか。帰路、牛田・中川と合流してBCへ戻る。ランタン・リ方面の偵察活動はこれで終了とする。残り2日間で、カンペンチン方面をどれだけ偵察できるだろうか。

今回主食に用いている、ワンクィックライスという加工米、圧力鍋で炊けばよいことを発見して以来、皆の食欲はかなりのもので、主食はどれも辛うじて足りる、ということになりそうだ。

10月19日 夜中、陳運転手が何度もトラックのエンジンをかけ、暖機運転をしていた。前日朝、エンジンが始動しなかったので南極の経験を思い出してアドバイスしておいたのである。南極では、-50℃になろうという8月、冬あけの内陸旅行時、夜中2時間毎に、ホロ張りのKC 20型雪上車のキャビンにもぐり込んで暖機運転をしたものだった。それからすでに8年。ということは、ヤルンカンから8年、K 12から7年。いろいろな想いがうかんで消える。

本日からカンペンチン方面の偵察に向かう。朝食を終え、トラックに荷を積み、荷台に乗って出発。カンペンチン目ざし、草原の中を走る。野生馬や、兎などが群をなして走って行く。

この平原は、一見すると平坦にしか見えないが、その実は、何本かの、ペク湖に流入する谷が刻まれている。もちろん橋などはないので谷壁の斜面を下り渡河してまた斜面を上ることになる。そのようにして何度目かの渡河をするべく谷を下ったところで、右ドライブシャフト折損。予備部品があったので、30分ほどで交換し、修理完了。ここまではよかったのだが、少し下流にまわって渡河にかかったところ、水中の大石に阻まれてトラックが立往生してしまった。

車輪をジャッキアップしたり、2時間ほど脱出を試みるが失敗に終わる。そのうち、轟音と共にアフタースーンフラッドがやって来て水位が数十cm上昇しトラックの床を洗いそうになる。水のひくのを待っているうちに暗くなってしまい、ここで泊まることになった。

10月20日 減水した川からジャッキを発見し、再度脱出を図るが不成功。今日はシガツェへ行った2人がBCに戻る日なので中川を伝令に出す。陳運転手もその後を追って行ってしまった。

羊の群れを連れて、チベット人が通りかかる。もの珍しそうに我々を眺め、近寄って来る。プラスチック登山靴が興味を中心のようで、ためつすがめつしている。会話を試みるが、なにしろ語彙が乏しいため、「デ・ヤクポ・ドゥ」といった程度に終わる。

右前輪の前にあって脱出の最大の障害となっている大岩を、ジャッキを使い、半日かかりで排除した。しかし、運転手はいないし、車のキーもなくどうしてみようもなし。全くバカバカしいと思いながらヤクの糞を燃して食事を作る。石を三方に立てるチベット式のかまどが、風がよく入り、うまく燃えることがわかり、ヤク糞の炊火

も上手になった。

夕やみ迫る夜7時、ランドクルーザーが対岸に姿を現わした。中川が扱げてよこした缶詰などを食べながら待ったが、車が下流をまわって到着するまでに1時間かかった。

この晩はトラックを引き出せず、陳運転手をトラックに残してBCに戻ったのは深夜であった。

10月21日 牛田をBCに荷物整理と番人役に残し、トラック引き出しに向かう。前日の工事が効を奏し、引き出すことができた。カンペンチンの写真を撮影しながらBCに戻る。付近には、テントで生活しながら、ヤクの放牧をしている人々が多い。すでに夕方になろうという時刻、あわててBCで物品を整理、梱包する。

夕食は、中日互いに料理を持ちよって、あまり無事だったとは言えないながらも、ささやかな宴を張った。

10月22日 撤収の朝も快晴、-11.5℃となかなかの冷え込みである。モルゲンロートの写真を撮ろうと待っていると、8時15分まずシシャパンマが、そして東から西へ次々に、その最後をかざってカンペンチンが、黄色に染まった。

撤収を進めて行くうちに、ホエーブスの缶が2コ足りないことがわかった。どうも付近に出没する連中にやられたらしい。

わずか2週間の滞在ではあっても、いささか名残惜しい気のするBCを立ち、帰途につく。今日はほとんど雪のない、ニエラムへの分岐をすぎ、シガールに寄る。日干しレンガは大分できたようだが建物の方はいっこうにはかどっていない。夜7時半、シガツェ着。

我が隊は皆、至って食欲旺盛で、よそのテーブルの残りをいただいてやっとな満足する始末である。

10月23日 朝日とともにシガツェを立ちラサへ向かう。ヤムドクツォの湖畔で昼食をとる。湖の対岸はるかに見えるのはブータン国境付近の山々だろうか。8時間でラサに帰着。

5. ラサ、成都、北京、帰国

10月24日は成都空港で事故のためラサ・成都便は欠

航。翌25日は日曜日では便はない。従ってこの2日間、思いがけないラサの休日となった。

街へ遊びに行つて、ポタラ宮の正面の屋台店のおばさんからチャンをごちそうになった。すっきりした味の、なかなかうまいチャンであった。

26日成都へ飛び、四川料理に皆、心身共に満足を覚えた。この日、西山事務局長との国際電話で、ランタン・リがネパール側から登頂されたことを知る。ある程度予想してはいたものの、現実となると、その衝撃は大きかった。巡って来たチャンスをうまく捕えることのできなかった自分に腹立たしさを覚える。

翌27日北京着、斎藤惇生、上尾庄一郎両会員と会う。対象がカンペンチンに変更になったことを知る。

一種の結果論であり、現地で発生した不測の事態のためとも言えるが、こうなると、カンペンチンに関しては十分な情報を得られなかった点が悔まれる。

牛田・中川は時々不調になった。2人とも高所は初めてであり、行動期間の制約から日程に余裕が少なかったことから、特に前半は高度順化が不十分だったようである。横山は途中で一時むくみが出たがすぐ回復し、他の期間は順調であった。

この偵察隊の、中国登山経験者を養成するというま一つの目的については、まず一応の成果は上がったと言えよう。

中国登山協会は、終始、我々に対し好意的であった。そのため、一、二の問題を除いて我々の活動はスムーズであった。問題の一つは、前出の、ラサ・成都間の航空便予約の件であり、もう一つとして、登山協会によるレギュレーションの実施が現地の人々に対しては不徹底な場合があり、貸与装備の返却が行なわれなかったことがあった。

10月29日、斎藤・上尾両会員とともに偵察隊は空路大阪に到着、その行動を終えた。

チョモランマ登山をふりかえって

斎藤 惇生

へん有利でないかと言う。

一週後の13日の土曜、第一回のチョモランマ委員会を開くから顔を出してくれとのことで出かけてみた。西堀会長、渡辺兵力、宮下秀樹、浜野吉生などチョモランマ計画の推進、実行の中心になる人達が、JACルームに集っていた。私の来るのが遅いのでいららしていた様子だった。驚いたことには、私が西堀先生にまだ確答はしていなかったのに、もう偵察隊長になるのは決まりきったことのように話が始まった。

ルートは北東稜と未登の北壁直登の二つのルートの同時アタックが予定されていた。その他にこれまでのネパール・カラコルムの遠征に経験してない問題点が三つあった。一つは成都から空路3700mのラサに到着、ラサからチョモランマの5200mのBCまでトラックが入る。僅か3日間の行程だが高度順応をどのようにやればよいか。第二はこれまでと違って社会主義の国の人達と一緒に登ることになるが彼等との関係はどうなるのか、同志なのか、シェルパのように完全に雇傭関係になるのか、そして中国登山家の実力はどうか。もう一つは中国、特にチベットに関する情報が全く不足しており現地に行ってみなければならぬ。

私は17年前に北京語を勉強したことがあり、まだ若干しゃべれる。5ヶ月前には吉川幸次郎、桑原武夫先生達と一緒に2週間中国を旅行している。AACKの遠征に2回参加していて医者でもあるということで偵察には適任でないかということになったらしい。私はもうゴチャゴチャ言っても始まらないと覚悟を決めた。戦前わずか9人の日本人が艱難辛苦のはてやっと入国できたチベットに入れるのである。偵察隊はJACのナンダ・デヴィ縦走隊の隊員を中心に4名が選ばれていた。報道は後援の読売より2名、日本テレビより1名。私には初対面のものばかりなのでAACKよりもう1名入れてもらうことにした。すぐ岩坪に連絡し13日の日曜の夜、近藤会長以下に集ってもらった。相談の結果、横山宏太郎が参加することになった。横山も突然のことで驚いていたが専門のロンブク氷河の調査もできるのですぐ決心してくれた。その後1ヶ月の準備中東京へ往復を重ねた。横山

1. はじめに

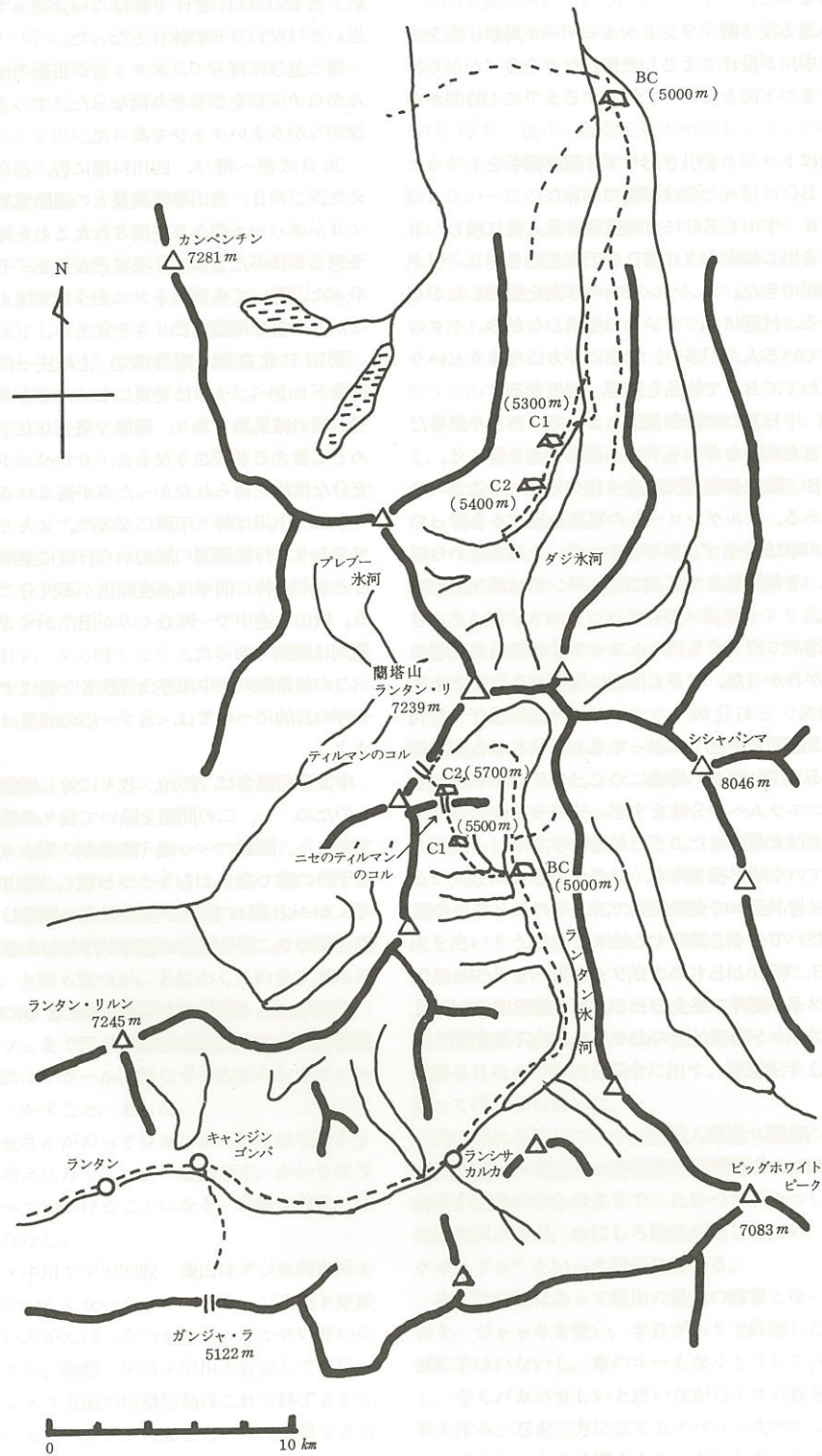
1979年7月、中国は世界十三ヶ国から申請のあったチベット側からのチョモランマ登山を、まず日本山岳会(JAC)に対して許可した。1938年のティルマンを隊長とする第7次の英国エベレスト隊以後、実に41年ぶりに外国隊がチベットに入るようになったのである。

このJACのチョモランマ登山隊に、79年秋の偵察隊には横山宏太郎と私が参加した。そして翌80年の春の本隊には西堀先生は総隊長、横山と甲斐邦男が北東稜隊員、私は医療責任者として参加した。学術調査では、横山が氷河と気象、甲斐は地質、私は高所医学を担当した。JACの公式報告書のチョモランマ・チベット(講談社版)に調査結果を報告しているので参照されたい。この文が一応AACKの歴史の一こまを書き残すことを目的とすれば、横山と甲斐と私がこの登山隊に参加した経緯を、まず書かねばならない。

2. 8月3日の電話が始まり

79年8月3日金曜の夜、私の夜の診療所に日本山岳会会長の西堀先生から突然電話がかかってきたのが始まりだった。「ワイさん、中国から日本山岳会へチベット側からエベレストへ登る許可がきた。今年の秋に偵察隊、来年春に本隊を出すことになった。そこで急な話だが秋の偵察隊長として君に行ってもらいたい。出発は9月中旬だからすぐに決めてくれ。偵察は2ヶ月、本隊は3ヶ月の予定だ。これはヤルン・カンの時に世話になった私のお礼だと思ってくれ。」

電話を聞いたとき、西堀大先輩にお礼など言われても、新河端病院の責任者、自分の診療所、それにもう一つ労災診療所の応援診療と三つの医療機関を駆けめぐっている状態では、そんな長期間の留守は全く無理なことで、と答えるのがやっとだった。しかしそれから後は、もう坂を駆け始めた石のように、どんどん話は進み出した。AACKの智慧袋の岩坪五郎に相談すると、本隊だとその他大勢になってしまう恐れがある。偵察隊は人数も少ないし、隊長だと中国側に名前も顔も必ず覚えられて親しくなれる。それは将来のAACKの中国遠征にたい



は東京に釘づけになった。河端院長には偵察は2ヶ月、本隊は3ヶ月なので短期間のほうに参加するということが理解をとった。留守中の医師は京大外科から派遣してもらうことができた。9月15日9人の偵察隊員は無事成田を出発した。

偵察中にノースコル斜面の雪崩事故で中国人隊員を3人失ってしまったことは後で書くが、偵察を終えて東京に帰ったのは11月15日だった。私はまたまた西堀先生から本隊参加の強力な要請を受けた。遭難事故は言葉が通じなかったことが大きな原因だった。私のつたない中国語でもかなり役に立つだろう。中国人にとって中国語の分る医師がいれば心強いはずだ。また偵察隊長として事故を起してしまった責任を考えると本隊に参加するのが義務に思えた。私は再び覚悟を決めた。西堀先生は京都に来て面会をしる河端院長に強引に会い説得に成功した。

本隊隊員の選考は自薦、他薦が入り乱れてたいへんだった。ほとんどが8000mの経験者で、名のある連中ばかりだった。選考は協調性が重視され、個性的で癖のあるものははずされた。横山の再度の参加はあまり問題がなかった。8000mの経験はないが、偵察隊中の活躍と気象が分ることが強味だった。甲斐が隊員に選ばれるまで紆余曲折があった。支部推薦が問題になったが関西支部は既に候補者を出していた。そこで岩坪が考えて甲斐を岐阜支部へ入会させ岐阜推薦にしてもらった。甲斐は東京に泊りこんで準備を手伝った。準備を手伝うことが隊員になる最低の条件である。しかし結局第一補欠候補になってしまった。だが正月にネパールヘトレッキングのガイドのアルバイトに行った隊員決定者の2人が肝炎にかかってしまい参加できなくなった。甲斐は文句なしに隊員に繰上げられた。滑りこみセーフというところであった。

3. 読売丸がかえ隊の費用節約

チョモランマ登山隊の一切の費用は読売新聞と日本テレビが折半して出した。いわゆる丸がかえである。隊員の負担金はわずか15万円であった。読売がチョモランマを後援するに至ったいきさつは詳しくは知らない。チョモランマの許可がきて間もなくJACに対し読売の接触が始ったらしい。そしてJACの主脳が中国大使館に挨拶へ行つた時、大使が読売新聞はいい新聞だと3度(?)も繰返えしたとの噂であった。朝日は中・ソ両国に対し等距離、読売はうんと中国寄りの姿勢をとっているのだから、中国は読売により好意を持っているのではないかと言う人もいた。私は両方の新聞ともここ数年読んでいなかったのだから分らなかった。

それで私が偵察に出発する時、金は全く心配しなくてよいと聞かされた。だからといって何もやたらに贅沢をした覚えはない。4月に吉川先生たちと成都の芙蓉餐庁で美味しい四川料理を食べた。最高の料理が一人前20元(2800円)、酒代10元(1400円)であった。その味を是非みなに味わってもらおうと思い、日中双方計25人で宴会をしたぐらいである。(本隊の時にもう一度行ったら一人前がなんと50元に値上げされていた。)だが遭難のための費用が増えたりしたが偵察隊の使った金は予算の2倍近くになってしまった。

中国の登山は中国に入学してしまえば、特別に自分の買物をしなければ1円も持たなくても過ごせる。出発前に中国内で使う費用の概算をCMAに払込んでおく。そうすると交通、宿泊、食費、人件費一切をCMAが立て替え払いする。そして北京に帰ってから規定に基づいて清算する仕組みになっている。だから毎日いくら金が必要なのかあまり分らない。会計が毎日必死で計算しているネパールやカラコルムとは気分的に違ってくる。

偵察隊で予算超過の原因の一つにラサの宿泊費があった。80年の本隊から以後は一泊240元に値下げになったが偵察の時はまだ一泊400元(約60,000円)と目をむくような値段であった。これは宿泊設備を造るのにも建設資材を、食糧品も酒もすべて飛行機で成都から運んでくるので高くなっているという。この宿泊費には空港往復の交通費、バス・トイレ付きの部屋、到着時の医師の診察料、必要なら酸素吸入、そして三食の費用を含んでいる。しかしバスはほとんど水しかでない、診察は脈と血圧だけ、酸素は各室パイプが来ているのかと思ったら違った。大型ボンベから大きなゴム枕状のものに酸素を移してふくらます。ゴム枕の口金にゴム管をはめ、その一方を鼻に入れる。最初は勢よく酸素が流れてくる。半分も吸うと酸素袋を両手で圧迫しないと出なくなる。面倒でかえってくたびれる感じだ。

北京到着時の会談でCMAの提案があった。チベット族の高所協力員は、議定書ではシガツェより合流し雇傭することになっているが、偵察隊にかぎりラサからにしてくれということだった。シェルパはカトマンズから雇っても、特別にカトマンズの宿代など払ったことはない。チベットの協力員はラサのどこかに住んでいるのだから3~4日分余分に日当を払えばよい。ラサで荷物の仕分けやらパッキングを手伝ってもらえば助かると考えて承知した。ところがこれが間違いのもので、チベット族の協力員も含め中国側全員が私たちと同じラサ賓館に往復とも滞在し、みな1人宛400元を請求されたのである。しかし一方ではその他をチェックしてみても、食費や人件費など遭難した人の分は遭難の日の翌日から請求

してない。

このようなことがいろいろ積み重なって予算を大幅に超過したのである。これを見て読売のチョモランマ会計担当者の人は、いくら社運をかけて後援するといっても予算が2倍になってはと青くなってしまった。本隊も予算の2倍になったらたいへんなことになる。JACで金の問題の矢面に立った宮下、浜野の両副隊長は不愉快な思いをしたようだ。それで本隊では経費節約にできるかぎりの努力が払われた。テント、食糧、装備など、極力寄付を集めた。ついには夏の海浜レジャー用テントがBCよりC1まで使われた。だがチョモランマおろしの強風にたちまち無残にも吹き飛ばされてしまった。現地では北京、成都、ラサなど金のかかるところの滞在はできるだけ短くし、チベット族協力員を荷上終了後すぐ解雇するなどの手が打たれた。経費節約にもっとも真剣だったのは宮下副隊長だった。東京で準備中きつと一番いやな思いをしたためだろうと同情した。

4. ノース・コル斜面の遭難のこと

10月12日に発生したノースコル斜面の雪崩遭難事故は、C3から夜を徹して下りてきた日本テレビの中村によってBCに伝えられた。王洪宝、ニマタシ、ロラン、長谷川の4人がクレバスにたたきこまれ、長谷川は自力脱出した。胸痛と呼吸困難があるがC3に収容した。他の3人は絶望であるという報告だった。

1922年英国隊がこの斜面で雪崩のため7人のシェルパを失っているがその後はない。北京でこのルートを検討したとき、中国隊は60年、75年とも一度も雪崩の発生に会わなかったと聞いた。張俊岩連絡官もどうして起ったのか分らないという。ともあれ張さん、李俊光通訳たちと相談してすぐ全力をあげて救援態勢をとることにした。中央ロンブクのC1にいる高見、尾崎、磯野、曾曙生に行動を中止して東ロンブクへ至急くるように連絡を出す。チョゾン村から来ているペマ以下3人にヤク5頭を上げる。高所協力員3人、岡島、中村と私がC3へ向う。私はC1や近くの山に高度順化のため3回登っていた。しかし一挙に6500mまで登るのは少し不安だったが行くことに決めた。

11時BC発、C1(5500m)14時着昼食をとる。東ロンブク合出より道は右岸につけられている。それが左岸に移ったところにC1がある。C1からC2(6000m)へは左岸のガラガラのサイド・モレーンを上下し中央モレーンへと移る。長くてたいへん疲れる道である。両側に50mぐらいの水塔群がざらりと並ぶ珍しい景色も感じている余裕などない。休んでは歩き、休んでは歩き続けた。苦しくなると六神丸を服用した。

中村はC2にある酸素ボンベをC3に届けて長谷川に吸わせたいと先行する。彼はその日のうちにボンベをC3に届けたのである。昨日夜を徹して下りてきて、今日またこのような行動をする彼の責任感とたくましさに頭が下った。

C1を15時に出発して岡島と私がC2へ到着したのは20時だった。驚いたことには23時中央ロンブクの3人がC2へ到着した。一度尾崎がC2まで往復したことが幸いして、夜道をやってこれたのである。

翌14日なんとかC3に到着した。一度に3人の仲間を目の前で失って傷心のためか呆然としている尚子平を慰める。長谷川を診察する。右の肋骨が数本は折れているだろう。しかし幸い気胸は起してないようだ。肺が傷ついて破れ気胸を起すと肺はベジャンコになりガス交換ができない。この高度では多分死に結びつくだろう。湿布をし胸の固定バンドをはめる。3日もすれば痛みも軽くなって歩けるだろうと判断した。

遭難現場の状態は雪崩の亀裂も彼等が落ちたクレバスもよく見えた。中国隊の正面ルートより左側のチャンツェよりのルートだった。下から見ると6800mの遭難地点までまず問題はない。そこからトラバースして正面ルートと合流するのだがそのトラバース地点で雪崩が発生した。先導した王がなぜこの新しいルートをとったのだろう。ペマたちのヤク隊の活躍で、ノースコル用の荷物はC3よりさらに上方に運ばれ、チャンツェ寄りの斜面の取付き付近にデポされた。王はここより登り始めたのだ。上を見ると困難に見えない。75年には彼とニマザシは失敗したが第二次アタック隊に選ばれて8650mに達している。39才で小柄だが精悍な顔付き、誠実で積極的な好漢である。彼の心に新しいルートを拓く衝動が起ったに違いない。長谷川も横山もルートが違っていると思いつながら、言葉が通じないで検討することもできずまたルートに問題がないように思えたのでそのまま登った。中国人は中国語しか知らず、日本側は中国語を知らない。トラバースにかかった時、長谷川は行手にクレバスがいくつかあるのに気付いた。長谷川はザイルをほどき王の傍へ行きルートの変更を相談しようとした。残念ながら意志が通じないうちに王が動きだし、その途端に雪崩が発生したのである。

ラサ、北京での中国側との合同反省会では、第一にルート選定の誤り、第二に日本側のリーダーシップ、第三に言葉の問題が原因に数えられた。王が違うルートをとった時、日本側は断固阻止すべきであった。恐らく英国隊が遭難したルートと同じだろうと推定された。しかし言葉が通じないと断固を通じさせるのが難しい。しかしこれらの検討、反省により、少しあいまいであった日本側

のリーダーシップがよりはっきりされ、言葉の問題は隊員が中国語を覚える努力をすること、BCだけでなく前進基地にも通訳が必要だと結論された。

10月17日、C3撤収、高見・中村・横山と私で長谷川を護衛しながらBCへ帰った。長谷川には鎮痛剤を服用させて頑張らせた。BCに着いた時、中国人が繰出で出迎える。感極まって長谷川が泣くとみな別哭(ピエクウ)泣かないでと慰める。10月25日BCを撤収し29日にはラサへ帰った。このあと私たちにはまことに辛い行事が待ち受けていた。

30日の午前二にマザジ、ロランの家族と対面し遺品を贈呈した。私が代表してお詫びを言ったのだが涙がでてもとに言葉にならない。本当に短い期間だったが長年の山の友人を失ったような気がしたのだった。他の隊員も同じ気持なのだろうみな涙ぐんでいる。

北京語がしゃべれるのは電報局に勤めているニマザシの奥さんだけだった。代表して挨拶した。彼女は悲しみを押えた顔で下を向きながら恨みごと一つ述べなかった。主人たちは好きな山を通じて日中友好のために犠牲となった。私たちはこれを誇りに思う。子供たちを大事に育てて一層社会主義建設に努めたい。このような内容であった。私はその立派な言葉にほっとし、感動もしたが、日本であって夫が戦いで死んでもとり乱さないことが賞揚された武士の妻、軍国の妻があったことを思い出してよけいに辛い思いがした。

その日の午後、人民政府内講堂で3人の追悼会があった。3人の遺影が正面に高く掲げられ、きっと成都から運んだと思われる菊の花輪が両脇にたくさん飾られていた。遺族がその前に並んでいる。スピーカーから葬送曲が流れる。レコードが古いのか、スピーカーが悪いのかザラザラとした音だった。中国の追悼会は故人の経歴を読み、遺影に分れを告げ、そして家族に激ましの言葉をかけて順次退出していくのが普通だそう。この追悼会では異例のことが行われた。私が偵察隊長としての弔辞、岡島が読売の社長の弔辞を読んだ。午前中の対面するとき、あれほど健気に見えたニマザシやロランの奥さんは泣きくずれて左右から抱きかかえられ、やっと立っていた。

王洪宝の遺族には北京で対面した。王さんには2才になる阿毛(アモウ)ちゃんという女の子がいた。彼はいつも目を細めてその子の話をしていた。会ってみると奥さんは知的な美しい人だった。阿毛ちゃんも利発そうな可愛い子供だった。私は2人を見ているとだんだん辛くなって挨拶を始めたが絶句してしまった。王さんの奥さんは少し恨みごとを言った。北京空港にみなさんを出迎えに行ったが私の夫の姿が無くていへん淋しく思った。あとはニマザシの奥さんと同じような言葉だったが、最

後に私たち親子の生活は国家がみてくれるから心配なされないでくださいと述べた。そして最後分かれるとき、私に不要難過(プヤオナクオ)どうか悲しまないでください、と逆に励ましたのだった。

遭難以後、中国の人が滅多に悲しみを現わさないことに気がついた。張俊岩などどんなに辛かっただろうと思う。死んだ3人も中国登山始って以来の仲間である。大声をあげて慟哭したかったのではなかったろうか。遺族の対面の時も中国の人で涙を見せた人は1人もいなかった。日本側がすぐ涙ぐむのと対照的であった。中国の歴史書、小説など読むと、中国人の喜怒哀楽の極めて卒直な表現と実行がある。しかし今度のことを通して私が見たところ、中国人は決してそうではないと感じた。中国は革命、戦乱、異民族との抗争が続いた。あまり喜怒哀楽を卒直に表現することは身に危険を及ぼすことが多かったのではないか。そのため喜怒哀楽の表現を慎む習慣が身についているのではないかと思った。

5. 北東稜にて

<村上の靴>

本隊に参加した横山も甲斐も北東稜の隊員になった。隊員を北東稜と北壁に分けた時、AACKのものは岩壁や氷はあまり得意でないと判断されたようだ。雪国生れの横山の耐寒力は誰にも負けない。体力、高度順応力は偵察隊で証明済みである。甲斐については、ヤルン・カンで森本と2人で上田を救出に向った時、トランシーバーから聞えた彼の声を忘れることができない。「隊員のみなさん、どうか御期待ください。」彼等はその言葉のとおり、8200mで彷徨していた上田を無事救出して下りてきたのである。横山も甲斐も年は33才、登山家としてはもっとも強く油のりきった年ごろであり、2人のどちらも登頂隊員になれる実力を十分持っている。欠点と言えば、2人とも相当の飲み助ということだろうか。

3月17日、私が渡辺兵力隊長たちの後発組と一緒に、ロンブク氷河のツングに近い大本営(BC)に到着した時には横の川はまだ厚い氷に被われていた。宮下副隊長以下の北壁隊員は残っていたが、浜野副隊長のひきいる北東稜隊はもう東ロンブク氷河にあるC2(6000m)に達していた。

横山も甲斐も順応に問題なくよく動いている報告がBCにもたらされた。横山は偵察隊員であったため、いつも先行してルート作業をしていた。甲斐は30kgにもなったテレビ用の資材を荷上げしたりして頑張っていた。

3月25日、早稲田出身の山下とパーティを組んだ横山は、ついにノース・コルへ最初に到達した。その日の夕方、交信で横山はノース・コルの広さは50m四方ぐら

い、風力は6であったと報告した。北東稜のABCとBCの通信は、ノース・コル・チャンツェに遮られて困難である。中国側は苦勞して電話線を設置し有線連絡をした。今度の隊は強力な出力の器械を使いアンテナを工夫することにより無線連絡を可能にした。

私は私ども3人の高所靴を精魂こめて造ってくれた村上栄次さんに、次のたよりで早速報告した。「横山があなたの造った靴をはいて、日本人で始めてノース・コルに立ったのです。ありがとうございます。」この靴は外見は決してスマートでない。しかし頑丈で絶対凍傷にならない工夫をこらしてあった。高所靴は個人で準備したので、内外のメーカーの品評会のような感じ。その中でわれわれの村上の靴は、異彩を放っていた。

<ABCよりノース・コル>

3月31日、私はBCを出発、ABCに向った。道連れは信州白馬出身の降旗と炊事員の闇の2人だった。降旗は肺炎になりふらふらになってC2からBCに下りてきて治療静養していた。一週間ですっかり回復し、戦列にまた復帰するのだ。私は彼の主治医として、最後まで責任があることを理由にして同行した。出発の朝BCでは昨夜降った雪が25cmぐらい積っていた。スキー好きの渡辺隊長は、スキーをはいて歩き廻りチョモランマをバックに写真を撮って御満悦である。しかしBCからC1まで、サイドモレーンの石が雪にかくれてしまいたいへん歩きにくく、普通の倍近くの6時間もかかって消耗した。

4月3日、ABCに到着する。中国解放軍の暗緑色のテントを中心に、周囲に10張ほどのブルーやオレンジのテントがあって賑やかである。偵察の時以来おなじみの解放軍テントは10人ぐらいいきに寝て立て歩ける。居住性がよく炊事、集会などのびのびとできる。到着して早速このテントに入り、横山に餅を焼いてもらう。細やかで料理の上手な横山は、みなに重宝がられているようだ。

隊員の健康診断を試みる。3、4人体調の悪いものがある。特に登攀隊長の浜野は、心窩部痛、嘔気があって食欲が全くない。時期を見てBCに下ろさねばならぬだろう。7500m付近に猛烈に風の強いところがある。昨年この風のすさまじさについて、中国の連中から耳にしたことができるほど聞かされた。隊員たちはここでほとんど顔面凍傷にやられている。一橋出身の通訳の神谷は、山の経験が少なく、ヒマラヤも6500mの高度も始めてである。私はこんな所は無理ですとこぼす。彼は山が終るまでテントの外15m範囲内しか動かなかったことは語り草になっている。実際辛くて動けなかったのだ。しかし最後まで頑張りとおし、日中双方の意志の疎通とい

う大役を果たしたのだった。甲斐はC2あたりから痔の調子が良くない。ガネッシュで島田が登頂できず、ヤルン・カンで浅野が最終のC5からサポートに出れなかったのも痔のためだった。甲斐に酒を慎しみ、尻を清潔にして便秘しないよう注意する。

4月5日、私は横山の装備一式を借りてノース・コルへ登ってみた。降旗と日本テレビの新井と一緒に出かけた。ABCから斜面直下の取付きまで約1時間平坦な氷河をクレバスに注意して行く。ルートは中国隊とほぼ同じで、完全にフィックス・ロープが張ってある。6900m附近のクレバスには梯子、最後の雪壁にはワイヤーの繩梯子が吊下げてあった。ユマールというものも始めて使った。途中で昨年、王洪宝、ニマザシ、ロマンを飲みこんだクレバスが右手に見える。彼等の顔、姿、そして声を思い出して涙が思わず出てしまう。ABCに来てから脈膊は70代で、食欲はまあまあであった。しかし年をとったせいか夜足がなかなか暖まらずよく眠れない。そしてむねやけ、顔の浮腫があって体調はあまり良くなかった。だが、ノッシ、ノッシとマイペースで登って行ったら、へばることもなく5時間ほどで到着した。残念なことにガスで視界は悪く、北壁が時々見えるぐらいだった。BCや眼下に見えるはずの北壁隊のABCからの交信で50才の老頭児のノース・コル到達を祝福された。自分ではそれほど年をとっているつもりはないので、たくみに人を感心させるような返答がでてこない。内心7000mまで登れたのだから、機会があれば8000mまで、いや少なくとも33才で登ったサルトル・カニリの7742mまで登ってみようと思いつつながらABCに戻った。

<病院になった大本営>

4月7日、私はチベット人協力隊員で調子の悪いザンプを連れABCを発ち、8日BCへ帰った。そのころからBCでは病人が多くなり、しばらくは医者の仕事に専念しなければならなかった。高度順応が遅れてシガツェの第八陸軍病院へ入院していた読売の島田、日本テレビの智片がやっと到着した。智片はBCの高度にもまだ十分順応しきれないでいる。北壁から神崎は胸痛と呼吸困難、尾崎は咳で下りてくる。心電図を撮ってみると驚いたことに神崎は心筋梗塞のパターンである。よくぞC2からBCまで歩いて来れたものだ。一日中O₂を吸入しないと苦しがる。O₂がどれだけあっても足りない。シガツェの病院へ下ろすことも考えたが、中国語が全く分らない神崎がそんな所に1人でいたら、心細くてよけいにストレスになってよくないだろうと判断した。王富洲連絡官と相談し、ラサから大型ボンベ3本とレギュレーターを運んでもらった。東北稜からは心窩部痛発作が止らない松野、そして心配したとおりの隊長の浜野がつい

に食べられなくなって下りて来た。渡辺隊長と「大本営もいよいよ野戦病院になりましたね」と顔を見合せて苦笑いしたような状況だった。

<甲斐は痔、宏太郎は膝>

4月18日、北東稜隊はC6(8000m)までのルート工作、アタック態勢完了のため行動を開始した。甲斐は痔が悪化してABCで休養という交信が入る。俺の言ったとおり治療しているのか! 糞は気張って出すな! あとおはちゃんとぬれなふきんで拭いているのか! とトランシーバーでどなりたくなる。4月20日午前、甲斐と交信する。痔は大分良くなったと言う。BCで休養中の浜野は、甲斐を登頂隊のサポートのリーダーにする予定なので、痔を早くちゃんと治すように言ってくださいと心配している。夕方、ノース・コルとの交信で、横山がC5への行動のあと膝が痛くなったので、明日は休養と言ってくる。南アルプスで捻坐した膝が悪くなったのではないかと心配になる。2人が故障と聞いて、心中面白くないことおびたしかった。

<チョモランマの夕焼と星座>

このように4月8日BCに戻ってから4月22日まで大本営附属病院に勤務して、故障者の治療と看護にあっていた。一日一日と暖かさが増していくのが感じられ晴天がよく続く。しかしチョモランマ頂上の英国人が貴婦人の羽根飾りと名付けた旗雲が出ない日はない。これは天気が晴朗だが強い風が吹いている証拠なのである。アタックの時このように稜線に出てからがたいへんではないかと話合う。

夕刻、条件の整った時だろうと思うが、チョモランマと空がものの10分ぐらい夕日に燃えるように染まることがある。日によって黄金色、ピンク、真赤と微妙に色調が違ふ。貴婦人の羽根飾りをなびかせて、どっしりとうずくまっているような大地の女神チョモランマ、そしてそこから光背のように空一杯に放射状に広がる雲、それらの山と空が時には黄金色、時には真赤に染まる様子は、何度見ても我を忘れ、息をするのも忘れてしまいそんな神秘的で荘厳な光景であった。

まだ4月なので夜の帳がおりてしばらくは獅子座などの春の星を見ることになる。夜半になると夏の星たちの素晴らしい競宴が始まる。もっとも印象的だったのはさそり座で、チョモランマの西の肩を踏み台にして、それこそ踊り上るように昇ってくる。東の肩のほうにはそれを狙う射手座、頭の上にはロンブク谷に沿って天の河、白鳥、織女、牽牛、北斗七星などチベットの澄んだ空に深遠な光を放って輝いている。もちろん日本でも見慣れた星たちなのだが、舞台も背景も変ると何か違ったことを語りかけているように感じるのだった。

<大本営の電報局と気象観測>

BCにはラサの電報局の分室が設置され、4人の局員が派遣されてきていた。東京から来る電報を受信し、こちらからはBC詰めの読売の島田記者が書く日々の原稿を、夜中の2時ごろまでかかって打電していた。ラサ、北京経由と聞いていたが大体5時間ぐらいで東京に着いていた。中国人の電報局員はもちろん日本語を知らない。受信も打信もローマ字である。たとえば我々がローマ字で書かれたルーマニア語を一つも間違えずに書き写すなど、たいへんな作業になることだろう。電報局員の仕事はそれに似た苦勞の多い作業だったと思う。

4月の上旬からだったと思うが東京から天気予報が送られてくるようになった。もちろん電報を使ってである。これはチョモランマからは気象係の横山が北東稜の行動地で、隊長がBCで観測した天候、気圧、風向、風力、雲量、気温などを東京に打電する。東京では気象庁の成田さんと中島暢太郎教授が気象衛星のひまわりの写真と較べて予報ができあがる仕掛けになっていた。これはひとえに中島教授の尽力によるものである。中島教授は登頂の前から西堀総隊長の要請を受け、東京に缶詰になって資料を分析し予報を送る作業をされたのである。

毎日夜、横山がああ独特の低い声で隊長あてに観測データを送ってくる。数字の読み方が特別で、たとえばイチをヒトと読む。多分間違わないようにそうするのだろう。それが私たち門外漢には非常に珍らしく、神秘的なひびきを持って聞こえた。それはどうも横山の低音の声のせいでそのように聞こえたのだろう。

<英国隊のC1跡>

4月23日、私は再びABCに向けてBCを発った。尾崎は北壁に戻ってもう8000mまで達していた。智片も北東稜のABCに登った。重症だった神崎も浜野も落ち着いてきたがもう戦列復帰は無理である。BCにそのままいて貰うことにした。

今度の道連れは心窩部痛が治った松野と、ボッカに王富洲が選んでくれたチベットのツゼンザジである。ツゼンザジには心電計と私の個人装備の若干を持って貰う。渡辺隊長もC1の途中まで同行する。隊長は心臓の興奮の伝導障害である左脚ブロックの持主である。これは西堀先輩の右脚ブロックより危険性が高い。年令も65才だ。しかしBCの高度にもすぐ順応し、何回か撮った心電図にも別に危険な徴候は見られなかった。

東ロンブク氷河に入って右岸につけられた道を1時間も行くと、英国隊のC1の跡がある。石を積み重ねて造った囲いが幾つかある。その中に英国製の錆び果てた缶詰の蓋があり、拾って記念にする。発掘上手の平井のボコさんがいたらもっと面白いものを見つけたかも知

れない。拾いものと言えば北東稜の8000m附近ではいろいろのものが見付かっている。中国隊の残したピッケル、アイゼン、酸素ボンベ、プロパンボンベ、まだ真新しい気圧計、それに混じって英国隊のものと思われるドレーガ社製のボンベが拾われていた。隊長は英国隊のC1まで来れて、記念品まで見付かったので満足し、ひき帰して行く足取りは軽そうに見えた。

<50才の7600m>

4月30日、私は長谷川と横山、読売の江本とまたノース・コルへ登った。長谷川は有力な登頂隊員候補であった。彼が偵察の時、九死に一生を得たことは前に書いたとおりである。肋骨の骨折も完全に回復している。死んだ3人の中国の友人たちの弔合戦をしたいと心に決まっていたはずだ。私もできるだけそうさせたかった。しかしABCで撮った心電図で、いつ頻脈発作が起るか分らないW-P-W症候のパターンが出現していた。仕方なく私は彼を説得して諦めさせた。彼と膝の調子の良くない横山はC5要員となった。

アタック隊員に選ばれた加藤、中村進、中村省爾、三谷の4人と、サポート隊の甲斐、山下、降旗の3人は昨日ノース・コルへ登り、今日はC5に入っている。ノース・コルでは小原が咳をしながらか交信連絡にあたっている。夜はみなO₂を0.5ℓ/分吸って寝る。これは中国隊が残したもので、王富洲連絡官の好意で使えたのである。明方O₂が切れて目を覚ます。そのあとは足が冷たくて寝苦しい。

5月1日、起床時の脈膊数64、O₂のおかげだろう。今日はC5のアタック隊、サポート隊はC6に入る。いい天気である。長谷川と横山はC5に入る。報道の江本と新井と私はC5往復をすることにした。ここもフィックスがべた張りにしてある。面倒なのでユマールはかけずに登る。休憩して腰を下ろすと正面に7580mのチャンツェ峰に向い合う。チョモランマの横になければ堂々としていて困難な山である。プロメリ、ギャチュンカン、そして北壁のC3、C4が岩壁にひっかかったように見える。7500mぐらいで雪稜が切れて岩場になる。さすがにしんどい。この付近は風が強くて通過がたいへんな所だ。しかし今日は風が無く幸いだ。岩はスレート状でアイゼンをつけては歩きにくい。とうとう7600mのC5に着いた。先に到着した長谷川がオバルチンをごちそうしてくれる。なるべく格好よくにっこり笑って写真を撮ってもらおう。年や記録のことを言って申しわけないが、50才の日本人の到達最高記録は渡辺隊長の7100mだった。東大のバルトロ・カンリの時登られたものである。それ以外は寡聞にして知らない。これで多分私が50才の最高記録保持者になったのではないだろうか。

自分ではまだ体力に十分余裕があるように感じ、もしO₂が使えたら8000mまで大丈夫行けそうに思えた。しかしもうアタック態勢に入っており、調子をくずして迷惑をかけるわけにいかない。ここで満足して止めることにした。新井と2人でゆっくり下りる。C4までずいぶん長い道のりだった。

<アタック隊を見守る>

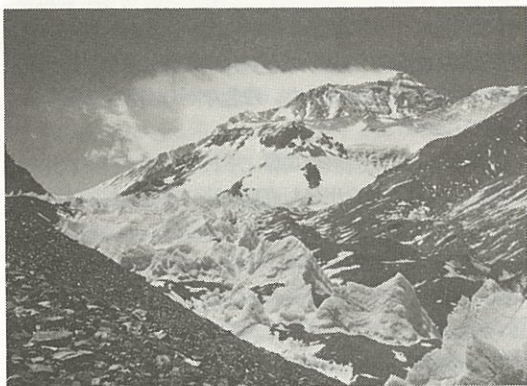
5月2日、昨夜8時ごろより雪が降り出したが、たいした降りではなかった。東京からの予報では2日、3日も天気は良好である。宏太郎は朝の交信で積雲が発達する恐れありと言う。C6を出たアタック隊とサポート隊から中国人の遺体を見付けたと言ってくる。75年の時、鄔宗嶽隊員が東北稜の稜線に出てから転落、行方不明になっている。その遺体は彼の間に間違いがない。そうすると彼等は中国隊のルートの稜線よりかなり低いところをトラバースしていることになる。あとで聞いたのだが、このルート選定はC6より上が逆層のスレートで雪が積っていて、たいへんスリッパしやすかったためのようだ。そのままトラバースを続ければノートンのクロワールに達する。このクロワールに入った英国隊も中国隊も、結局稜線に出れず失敗している。彼等はクロワールの手前にC7(8250m)を設営した。翌日C7より第Iステップ方向に向って直登気味で登ったが、ずいぶん時間をとられてしまった。

トラバース中の動き、設営の様子、そしてサポートの甲斐、山下、降旗が夕闇の中を膝までの雪にうもりながら、C6へ帰って行くのが単眼鏡で観察された。この5月2日、北壁のホーンバインのクロワールの中を登っていた宇部、小林の両名が雪崩に会い、小林は助かったが宇部はユマールのロープが切れて滑落、遺体は翌日北壁取付点付近で発見された。残念ながら本隊でも犠牲者が出てしまった。

5月3日、アタックの加藤、中村進、サポートの中村省爾、三谷はC7を出発し直登気味に登る。英国も中国も通ってない新しいルートだがかなり難しい。右に左にルートを求めて時間がどんどん経っていく。第IIステップの手前でサポート隊は分れる。第IIステップには中国隊の梯子が残っているが固定が危なくなっている。午後7時ごろ第IIステップを越したアタック隊より交信が入る。中村のスピードが遅く加藤のペースについて行けない。頂上は加藤1人でアタックしたいと言う。BCは協議して加藤単独アタックを許可した。中村はVTRを持ち、撮影しながら登るので疲れたのである。VTRを捨てれば頂上に行けるだろう。しかしカメラマンとしての彼はそれはできなかった。加藤はトランシーバーを持たず、分れて振向きもせず頂上に向った。

その夜、中村を一晚中トランシーバーで激ますことにした。江本、岩下が中村に呼びかける。横山が今夜はチョモランマで一年に何度かあるかなしかの無風に近い日だが、夜の気温はマイナス30℃になるだろうと例の重々しい声で予報する。4日になり明方になった。中村の声は弱々しくなる。身体がこわばってきた。第Ⅱステップを下りてデポした酸素を吸いたいという。「中村、身体のコわばりは手足を伸ばして体操しろ。1人で動くな！加藤がくるまで動くな。」と厳命する。このような時身体のコわばりに体操など無茶なことだが医者として何か答えてやらねばならない。空は今日も青く晴れている。必死に単眼鏡をのぞいていた小原が加藤と中村を確認する。加藤はスキーストックをつきながらスタスタと歩いている。ストックが時々キラリと光る。アタック前に撮った彼の心電図は徐脈で高度の影響はほとんど見られなかった。ほんとにタフな心臓の持主である。11時、加藤は中村と合流した。しかしそのあとも決して容易でなかった。視力と気力の落ちた中村をつれて加藤は危険な第Ⅱステップを下る。中村省爾が必死に酸素ボンベのデポ地点を指示する。もう面倒なのか加藤はその呼びかけに答えない。ボンベのある柱状岩のところで暫らく見えなくなる。酸素を吸っているのだろう。ガスの中また2人は動き出した。足取りが少しは軽く見える。救援の山下、三谷がC6をでて第Ⅰステップ近くまで登り2人に出会う。全キャンプに一齐に歓声があがる。その夜22時ごろ加藤も中村も無事C6に帰着した。

5月5日、天候は悪化、風雪となる。昨夜C6まで強



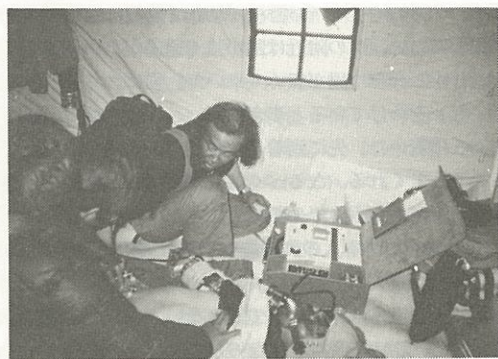
(上) 東ロンブク氷河より
チョモランマ

行しておいてよかった。17時、ノース・コルではホワイト・アウトに悩まされながらC4に到着した。眉に、鼻につららを下げた加藤は、「ワイさん、なんとか帰えて来れた。」と言う。凍傷を調べる。指は右のⅡ、Ⅲ指末節、趾のない両足も若干やられているが、趾趾側の小部分である。加藤は元気なので甲斐たちと一緒にC3へ下ろす。中村はもう疲れ果てているのでC4へ泊ませ、明日下ろすことにした。頸が痛くて曲がらぬという。ヤルン・カンの時、上田も同じようなことを言っていた。鎮痛の坐薬を入れてやる。むかついて食欲がない。

5月6日、風が弱くなり暖かい。C4を撤収。長谷川、横山、小原と一緒に中村を連れて下る。C3についてびっくり仰天。中村の個人テントに今朝落石が直撃、テントの中のカメラなど木端微塵になった。昨夜C4に泊めておいてよかった。もし強行して下りてそのテントに寝ていたら、きっと即死が大怪我したことだろう。夜、宏太郎がとっておきの新潟加島屋のモズク、シャケ茶漬、アミなどを出す。残り少ない大関とサントリーオールドで登頂祝い。久しぶりに熟睡。

6. 一応擱筆

この原稿を書きながら、改めて偵察隊、本隊の時の日記を見ると、まだまだ書いておきたいことがたくさんあるのに気付いた。しかし与えられた紙数が尽きたので一応擱筆するが、許されれば次号にまた書いてみたいと思う。もう時期遅れになってしまうだろうか。



(下) BCにて心電図を
測定する齊藤

ピサン・ピーク登頂

—1980年京都大学山岳部ネパールヒマラヤトレッキング
チームに参加して—

太田 岳史

AACKと京大山岳部(KUAC)との交流によって、計画が具体化し、実現へと向った一例としてこの山行の報告をする。

1. 出国までの経過

1977年、AACKのランタン・リ偵察隊に今井、佐治の2名が山岳部より参加した。彼らの帰国後、佐治が中心となって山岳部有志によるヒマラヤ山脈の勉強会が行なわれるようになった。この勉強会を続けるなかで、現役メンバー4人(太田はこの会に参加していなかった)の心の中に、「実際にヒマラヤへ行くんだ!」と、いう思いがふくらんできた。そして、彼ら4人での行動が始まろうとしていた1979年10月、太田がメンバーに新たに加わった。この時点では、メンバーと出発は80年3月のタイムリミットがあるのみで具体的目標は決まっていなかった。当初、我々の頭の中は、「登山」でなく「広く歩く」ということだった。しかし、計画を何回か作り先輩たちの意見を聞くうちに、「6000m峰の登山」へと変化していった。ちょうど、ネパールではトレッキング・パーミッションズで登山許可を得られる18座を、先年よりオープンしていた。これらの内に、クスム・カングルという未踏峰も含まれていたが、ちょっと我々には手強そうなので全員登頂が可能な山としてピサン・ピークを対象とした。あわせて、登山終了後トロン・パスを越えアンナプルナ山群を一周する事とした。そして、ベースキャンプ以上での行動は、シェルパ・ポーターの力を借りず我々だけの力で登る事を決定した。

1980年に入ると、登山許可の取得、エージェントの決定、食料・装備の検討・購入等具体的な準備が開始された。また、これと平行して中島(暢)先生への計画説明、「水曜会」ならびに先輩諸氏を招いての「拡大水曜会」での検討が重ねられ、計画に改良が加えられていった。

最後に資金の問題。計画の初期段階では1人35万円ですべて賄えると考えていた。しかし、検討が進められていく間に少しずつ加算され、最終的には1人45万円と

なり、AACK遠征基金より太田の個人名義で10万円の援助ならびに予備費としてKUAC、AACKより合計30万円を借用する事となった。

そして、我々の不手際から種々の問題を起こしながらも、なんとかか形を整え1980年3月14日、大阪空港より部員、友人の見送りを受けてネパールへと出発した。

2. メンバー構成

太田岳史(リーダー、23才) 農学部大学院修士課程に在籍。最後に、このパーティーに加わったが、一番年寄りでありリーダーとなる。

伊藤健一郎(サブリーダー、22才) 経済学部の三回生。メンバー中唯一の運転免許保持者で、国内での準備が一番広く走りまわる。(1980年12月、赤谷尾根で遭難死亡)

青木小太郎(会計・薬品、22才) 工学部の三回生。キャラバン中いつもザックに金庫代りのトランクを入れて歩く。小使い銭を少ししかくれず、タバコを吸う者はつらかった。

近藤裕史(食料、22才) 工学部の二回生。バンコクに入ってから常に捕虫網を持ち歩き、チョウチョを追いまわす。

井垣正光(装備、21才) 農学部の二回生。現地の子供たちといつも一番仲良しになり、ネパール語、日本語のチャンポンで話す。

3. 活動報告

i) 行動概要

- 3月14日 インド航空機でバンコクへ向う。
- 3月16日 カトマンズ着。カトマンズ・クラブハウス(以下K・C・H)に入る。
- 3月17~20日 カトマンズにて出発準備。
- 3月21日 カトマンズを発ち、ドゥムレに着く。
- 3月29日 ピサンの村に着く。
- 4月1日 ベース・キャンプに入る。
- 4月7日 ベース・キャンプを撤収し、全員C1へ上

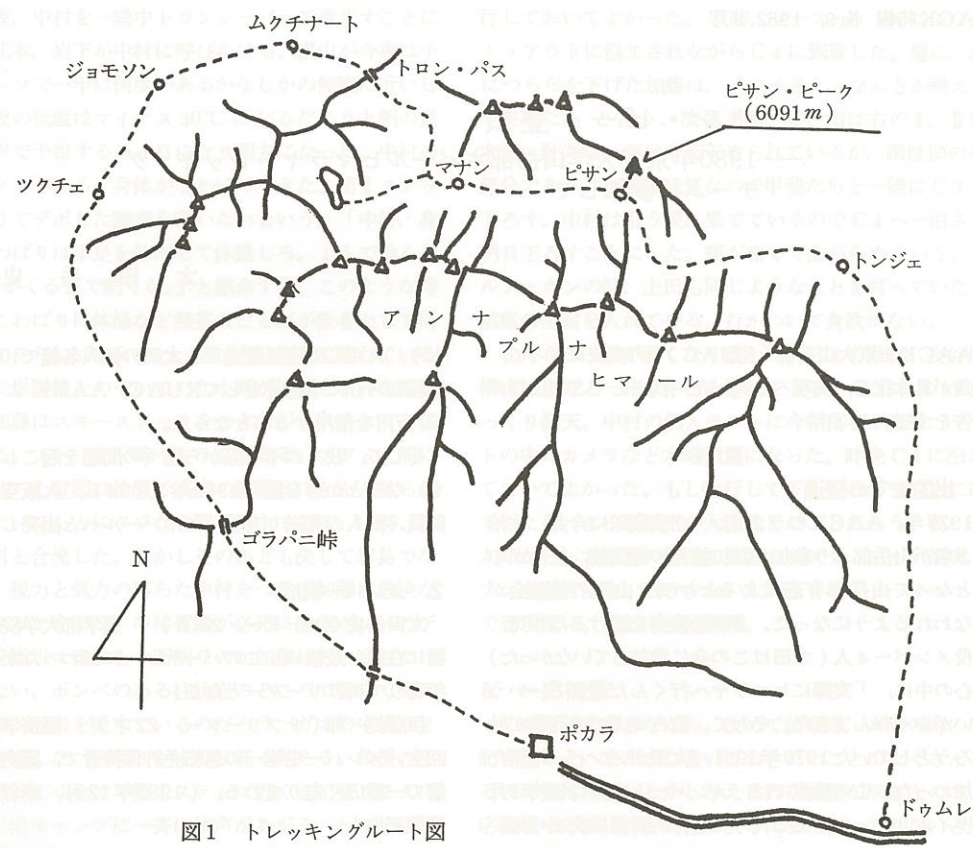


図1 トレッキングルート図

- がる。
- 4月10日 5850mに達する。
 - 4月11日 ピサン・ピーク登頂。
 - 4月13日 マナンに入る。
 - 4月14~16日 ティリチョ湖へ3名。他2名はマナン滞在。
 - 4月18日 トロン・パスを越える。
 - 4月23日 ゴラパニ峠に着く。
 - 4月26日 ポカラ着。
 - 4月27日 太田, シェルパ, ポーターがカトマンズに戻る。
 - 4月28日 他4名, カトマンズに戻る。
 - 5月5日 「串藤」で解団式。
 - 5月7日 伊藤, 青木, 井垣がインドへ発つ。
 - 5月11日 太田, 近藤が帰国。
 - 6月1日 伊藤, 青木, 井垣が帰国。
- ii) カトマンズからベース・キャンプへ
- 3月21日 シェルパ3名, ポーター10名(シェルパニ4名を含む。)と共に, 11:00にカトマンズをローカル

バスで出発。文字通りのオンポロバスで、カーブのたびに車体がきしむ。17:00キャラバンの出発地デムレに着く。我々がグッタリとなったが、シェルパ達はひどい乗り物酔いになった様子だ。荷をおろす間に多くのポーターが集まってきた。新たに2名を雇う。明日から総勢20名の旅だ。ここで、我々と一ヶ月以上寝起きを共にするシェルパ達を紹介しておこう。アン・ナムギャル：サーダーを勤めてくれる。少々ビール腹だが体力バツグンで、いつもニコニコしている。アン・カミ：コック。登山経験が豊富でAACKのヤルン・カン隊にも参加している。アン・ダワ：キッチンボーイ。「悪ガキ」そのもので、よくアン・カミにお灸をすえられていた。

3月22日 8:00, いよいよ出発だ。標高が400mしかないため猛烈な暑さだ。バナナ等の木を見ながらパテパテで歩く。夕方、雷雨におそわれバイサンガルの民家に泊る。さっそく子供達にとりかこまれ、チョコレート等をせがまれるが貧乏パーティーのためほとんど何もやらない。

3月23日 朝起きると、全員からだ中がかゆい。どう

もシラミにやられたようだ。今後民家に泊まらない事をサーダーに伝える。昼食はタルコットで。今回も子供達にとりかこまれての昼食となる。どうも食べづらい。井垣は、子供達とはやくも仲良くやっている。ウドゥーにテントを張りおわる頃、また雷の洗礼をうける。

3月24日 そろそろ、ポーター達にも強い者と弱い者の差がはっきりしてくる。昼食時やテント地では、先頭とラストの差が1時間以上になる。特に、ドゥムレの2名が遅くサーダーがこぼしている。今日はクディでテントを張る。

3月25日 クディからマナスル三山を正面にマルシャンディ河沿いに歩く。我々が初めて見るヒマラヤの美しさは言葉では表わしきれない。とにかく最高の気分。途中、すれ違った人に聞けば我々の一日前をラムジェン・ヒマール北壁をめざす法政大隊がキャラバンをしているらしい。今日は、バウンダナが宿泊地となる。これで、ピサンまでのほぼ半分来たことになる。

3月26日 我々も一日の行動にからだ慣れた。毎日、6:00頃モーニングティーで目をさます。そして、7:30頃三々五々出発。のんびり歩いていると11:00頃に昼食地に着く。ここで2時間程かけての昼食となる。そして、17:00頃には一日の行動が終わる。今日の昼食はジャガート。ここからマルシャンディ河は一転して大峡谷帯となる。兩岸は大岩壁となり、支流は巨大な滝となってマルシャンディに落ちている。あいにくの雨と相まって陰惨な雰囲気だ。ここを通過しタールまでくると再び広大な河原となる。牛などが放牧され、遠くにはカン・グルーが姿を見せている。雨あがりのタールは、「桃源境」という言葉がピッタリだ。今日の宿はこの河原である。

3月27日 高度もかなり上り、今朝はかなり冷えた。途中ダラパニで一回目のトレッキング・パーミッションのチェックをうける。午後から、いよいよヒマラヤ山脈の北面へと入る。民家の様子も変わり、タルチョーがはためいておりチベット文化圏に入った事がわかる。バガルチャップからは、ラムジュン・ヒマール、アンナブルナII峰北東稜が見える。我々が目ざすピサン・ピークも明日には拝めるかもしれない若干緊張する。テント地のラトマングでは、サーダーが温泉に案内してくれる。こんな所に温泉があるとは知らず、大喜びでこれまでの汗を流す。

3月28日 午前中この辺りでは大きい村であるチャーメに着く。ここで、食料の買い出しをする。マルシャンディ沿いではマナンまで、まとまった買い物ができるのはここだけだ。米は必要なだけ売ってくれるが、砂糖はあまり売ってくれず近藤とコックが四苦八苦している。

今日のテント地からは、法政大隊ベース・キャンプの火が見えた。明日はいよいよピサンである。

3月29日 朝方は曇っていたが、ついに雪が降ってきた。ピサンの部落へかけ込む。ここは標高3300mである。午後、天候が回復したので、太田・井垣で4000mの科尔まで行く。本来科尔まで道があるのだが積雪のため発見できずヤブを直登し科尔に達する。科尔から広い尾根が連れている。この頃より再び雪となり、2人がピサンに戻った時は雪まみれとなる。

3月30日 今朝ポーター4名を解雇する。昨日よりの雪は、10:00頃にやんだが積雪は30cm位になった。11:00からメンバー全員で高所順応のため4000mの科尔へ向う。太田・井垣は4300m、他3名は4100mより下山する。はじめての高度に登った夜は、皆少々脈が上ったり軽い頭痛がする。

3月31日 サダー、ポーター5名、メンバー全員でベース・キャンプの決定と薪の荷上げを行う。4400mにカルカがあり、ここをベース・キャンプとする。ここからのアンナブルナII峰の眺めは格別だ。特に、北東稜は我々の心を引きつける。2時間程滞在の後下山。

iii) ピサン・ピーク登山報告

4月1日 全員でベース・キャンプへ上がる日だ。ポーター8名には、靴とサングラスを支給するが、ほとんどの者は支給品よりいいサングラスを身につけている。ポーター達も重荷のせい「ハア、ハア」と、荒い息をしている。昼過ぎカルカに着く。積雪は20~40cm。本来の計画では、明日ピサンに入る予定であったが皆の体調が割合良いのでベース・キャンプに一日滞在中上部へ向う事とした。ここより見たピサン・ピークは近く見える

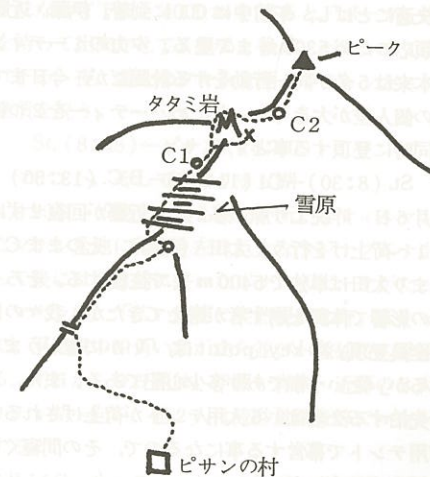


図2. ピサン・ピークルート図

が、まだ標高差が1700m程ある。頂上直下は、ずっと雪壁になっており所々ブルーアイスになっているのがわかる。ルートは、この雪壁と左手の岩稜のコンタクトラインとなろう。

St. (8:00) - B.C. (12:30)

4月2日 カトマンズを出て以来、初の休養日。テント地の整地、食料・装備の整理をすませ、後は絶景を満喫する。上市峰窓会がアンナプルナⅡ峰を登攀しており、ベース・キャンプから双眼鏡で彼らの行動を見ることができた。15:00頃より雪となる。

4月3日 全員でC1の決定に登る予定であったが、井垣が不調を訴え他の4名で出発する。ベース・キャンプより100m程登ると広大な雪原となる。ただ歩けばいいのだが、ヒザ下程度のラッセルがしんどい。これも高さの影響だろうか。5000mより岩稜となり、C1を5100mの岩稜上に作ることにする。ベース・キャンプでは、井垣がコックにスパゲティを伝授したそうだが、うまいとは言いがたい。

St. (8:00) - C1 (11:45) - B.C. (13:00)

4月4日 C1への荷上げを行う。井垣は、今日も不調で沈溺する。昨夜よりの雪で、トレースがすべて消されラッセルをやり直す。雪原に出てから青木が遅れだす。4900mで彼の荷をデポし、彼は単独でベース・キャンプへ下る。12:10にC1へ到着。伊藤・近藤は、デポ回収のため4900mへ下り、太田はC1の整地及びデポ用テントを設営する。15:00より再び降雪。

St. (8:30) - C1 (12:20) - B.C. (14:40)

4月5日 今日は、青木・井垣の体調も回復し全員での行動となる。特に、井垣はベース以上で始めての行動に張り切っている。昨夜の雪はたいした事もなくトレースを快適にとばし、午前中にC1に到着。伊藤・近藤は、高所順応のため5300mまで登る。夕方のミーティングで、本来は5名が同一行動をする計画だが、今日までに行動の個人差が大きくなったためパーティーを2つに分け、同時に登頂する事とする。

St. (8:30) - C1 (11:30) - B.C. (13:30)

4月6日 昨夜より脈の多かった近藤が回復せず4名でC1へ荷上げを行う。太田・伊藤は、そのままC1にとどまり太田は単独で5400mまで往復する。そろそろ高度の影響で体調を崩す者が増えてきたが、我々の目ざす「全員登頂」のkey pointは、「いかに皆がうまく順応するか」という事であり多少心配である。また、これから先泊する2名は、6人用テントが荷上げされるまでデポ用テントで暮らす事になるので、その間寝るらしい生活をする事になった。

St. (8:30) - C1 (11:30) - 青木・井垣 (13:20)

4月7日 C1の2名は、休養日であったが調子が良いのでC1上部の偵察を行う。5400mの岩峰(我々は、タタミ岩と呼んだ。)までは、問題のないⅡ級程度のスラブをたどる。タタミ岩の通過は、はじめ右手の岩場にルートを求めたが岩が脆く、左側の雪壁をfix 65mで通過する。この後、C2が作れそうな雪面までの八ツ峰上部のような岩稜が続くが、岩が脆いため少々緊張させられ



図3. タタミ岩よりピサン・ピーク

る。半日行動の予定であるので、5450m拠点にハーケン類をデポしてC1へ下る。青木・近藤・井垣は、シェルパ・ポーターを下山させベース・キャンプ撤収後C1に入る。

太田・伊藤: St. (8:20) - 5450m (12:00) - C1 (13:20) 青木・近藤・井垣: St. (8:30) - C1 (12:00)

4月8日 青木が、頻脈と頭痛でC1に沈溺。4名で、C2の決定と荷上げを行う。5450mからも岩稜が続くがロープを用いる程でもない。尾根が左へ曲がると、5550mの広いコル状の雪面となる。伊藤・井垣で上部を偵察するが、良いテント地がないのでここを最終キャンプC2とする。17:30頃より降雪。

St. (8:20) - C2 (11:50) - C1 (14:00)

4月9日 全員でC2へ荷上げを行う。太田・井垣はC2に滞在し他3名はC1へ下る。C2の2名は、テント設営後上部の偵察を行う。雪壁の取り付けまでは、C1~タタミ岩と同様のスラブが続く。雪壁は、下から見

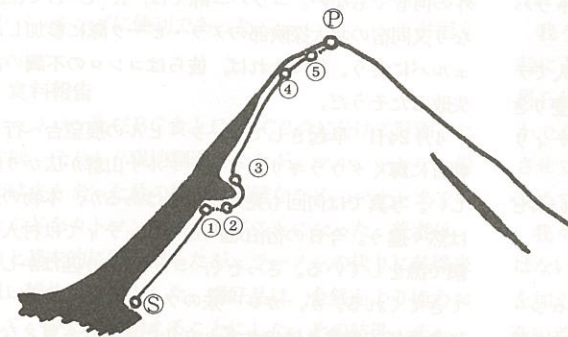


図4. アタックルート図

- ① 雪壁 fix 190m
- ② 雪のバンド
- ③ ブルーアイスの壁 fix 65m
- ④ 雪壁 40m 5ピッチ
- ⑤ ブルーアイスの斜面 40m 3ピッチ
- ⑥ 緩い雪稜

るほど傾斜もなくステップもきまり、そう悪い状態ではない。7mmロープを65m fixしてC2へ下る。

太田・井垣: St. (8:10) - C2 (10:50), 偵察 (11:45~14:00) 伊藤・青木・近藤: St. (8:10) - C2 (10:50) - C1 (12:00)

4月10日 太田・井垣は、昨日のルート工作の続きを行う。昨日の終了点には8:15に到着する。左手の岩稜とのコンタクト巾10m位は、氷壁の上に10cm程の雪が乗っており、その右はブルーアイスがむき出しになっている。ルートは、この雪のあるラインを選び7mmロープを合計130m、9mmロープを60m fixし岩壁下の雪のバンド(5850m)に達する。今日は、手持ちのロープがなくなったのでC2へ下る。伊藤・青木・近藤は、C1を撤収してC2へ上がる。この撤収の際、調子の良いストープを谷底へ落してしまう。これからの数日は、テント内で生ガスに悩まされる事になる。彼らは、タタミ岩のfixを回収してくる。5850mまでのルート工作が終り、いよいよ明日がアタックだ。青木が再び不調を訴える。

太田・井垣: St. (7:25) - 5850m (12:30) - C2 (14:00) 伊藤・青木・近藤: St. (8:30) - C2 (12:30)

4月11日 青木は朝になっても体調がすぐれず、残念ながらアタックを断念する。アタックパーティーは、太田・井垣、伊藤・近藤の2つに分け、伊藤パーティーが先行し太田パーティーはfixを回収しながら荷上げを行う形をとる。昨日の最高到達点である雪のバンドを右へ30m程トラバースすると、岩壁は終りここよりルート工作をはじめる。10m直上の後左上気味に岩稜とのコンタクトへ戻るのだが、ブルーアイスになっており苦労させられる。65mのfixで岩壁上の小台地に出る。ここからは、下部同様の雪壁が続いている。ここで、両パーティーともone-at-timeに切り変える。40m 5ピッチで小雪庇を乗り越すと雪壁は終る。この上部は、再び

ブルーアイスとなり、トップはダブルマックスで、セカンドはロープをひつつかんで40m 3ピッチで登る。もう6000mを越えているが、4人とも調子はすこぶる良い。ブルーアイスをめけると緩い雪稜が頂上へと続き、問題なくピークに立つ。時間はちょうど12:00だ。青木がいけないのは残念であるが、皆で「エイノエイノオーッ!」を叫ぶ。ヒマラヤの中では、ほんのちっぽけなピークだが、これまでにない充実感だ。写真をとったり、お茶を飲んだりして40分程すごし下降する。太田・近藤、伊藤・井垣にパーティーを組み変え、すべて下級生をトップとしてone-at-timeで行動する。C2では、青木が熱いミルクティーを作って待っていてくれた。

伊藤 P.St. (5:30), 太田 P.St. (6:10) - 5850m (8:10) - ピーク (12:00~12:40) - C2 (17:00)

4月12日 青木は今日になっても回復せず、再アタックを諦め全員下降する。一気に荷もおろすためザックが猛烈に重い。タタミ岩で再びfixを張り、その後はバラバラになって下る。4000mを下ると、ポーター達がお茶を持って出向かえてくれる。後は、ピサンまで空身でかけ下る。夜、盛大なタキ火を囲んでチャンとヒツジ肉で登頂を祝う。

St. (8:45) - ピサン (14:30)

IV) マナンへ、そしてティリチョ湖

4月13日 「地上で最も美しい所」とティルマンが言ったマナン盆地に行く。左は巨大なアンナプルナ山群、そして後には2日前に登ったピサン・ピークがたっている。マナンは、「広い盆地に突然現れた町」といった感じで、平屋根の四角い家が立ち並び一種独特の雰囲気がある。明日から3日間は、伊藤・青木・近藤の3人はティリチョ湖へ向い、他2人は流砂量調査等でマナンに滞在する。

4月14日 サーダー、キッチンボーイ、ポーター1人と共にティリチョ湖へ向う。マルシャンディ最奥の部落

カンサールで食料を調達。テント地直前のガレ場トラパスは非常に危険だった。

4月15日 ポーターはテントの留守番。残り5人でティリチョ湖へ向う。1100mをフラフラになって登りきると、真白なティリチョ湖(5750m)が現れる。ティリチョピークと相まって非常に美しい。

4月16日 往路と同じ道を引き返す。ものすごいスピードでアツという間にマナンに着く。

V) トロン・パスを越えポカラへ

4月17日 ティリチョの3人も元気なので、トロン・パス越えへ向う。今日の泊り場は薪がないので、木を拾いながら荒涼とした谷を歩く。トロン・パス下の4400m台地に泊る。

4月18日 今日はトロン・パス(5400m)越え。我々の旅の最後のヤマ場だ。4時起きの6時出発で、まだ寒い中を歩きだす。トロン・パスへは、うねりくねった地形の中をトレースに導かれて登ってゆく。ポーター達の歩みは、今までにも増してゆっくりしている。トロン・パスを越え、カリ・ガンダキ流域に入るとほとんど雪がないのには驚かされる。ムクチナートではラマ寺を見学。シェルパ・ポーターはお参りをしている。今日は、ここにテントを張る。

4月19日 今日はジョモソンへ。ここまできると、トレッカーも多勢いてにぎやかになる。カリ・ガンダキを徒歩している隊商のロバがおぼれそうになり助けてやる。ジョモソンでは、近藤が牛に足をけられ大層怒っている。

4月20日 朝、山岳部へ電報を打つ。「ブジゲザン」と打ったが、日本に着いた時には、判読不可能な電文になっていたそう。昼すぎにツクチュに着く。もう少し足を延ばしてラルジェンで泊る。

4月21日 カリ・ガンダキを吹き上げる風が強烈だ。砂ボコリの中を、岩陰にかくれながら前進することもしばしばある。ダウラギリI峰が見えだす。南東稜は印象的だ。紅色に染まるダウラの麓、カプチャパニにテントを張る。

4月22日 カリ・ガンダキもだいたい下り、再び暑くなってくる。服装も、Tシャツにジョギングパンツに変わる。午前日タトパニに着く。時間は早い。今日はここまでと有名な温泉でこれまでの汗を流す。太田が、発熱とひどい下痢に悩まされる。

4月23日 今日は、最後の大きな登りでゴラパニ峠へと向う。暑い中の1600mの登りはきつい。皆、「チャン、ディノス(酒くれ)」と、一登りしてはパティティに入って一服の繰り返しだ。峠に近くなるとジャクナゲの林の中だ。日本の小さなジャクナゲのイメージしかない我々には、「高木」となったジャクナゲの林は、驚き以

外の何者でもない。ゴラパニ峠では、K・C・Hで世話になり又同宿の北大探険部のメラ・ピーク隊に参加したシェルパに会う。話によれば、彼らはコンロの不調の為に失敗したようだ。

4月24日 早起きしてプーン・ヒルの展望台へ行く。朝日に輝くダウラギリ、アンナプルナ山群が広がり素晴らしい。写真では何回も見た景色ではあるが、本物の迫力は然々違う。今日の宿泊地、ビレタンティでは村人が投網で漁をしている。さっそく、コックが30匹ばかり買ってきてくれる。が、カレー味のフライには、カレーの味に食傷気味の我々は少々ガッカリだ。贅沢も言えないが…。今日は、途上近藤がカメラを置き忘れるという騒ぎがあったが、サーダーの活躍で、無事彼の手に戻った。

4月25日 もうポカラは目前だ。昼すぎには山中を出て、いよいよ平野に入る。精一杯歩いてスケットにテントを張る。サーダーの話によれば、ネパール初の国民投票が行なわれるそうで、町の治安が悪くなっておりポカラ・カトマンズ間のバスも近いうちに止まるとの事。若干、不安になる。そう言えば、2,3日前も村で何か演説をぶっていた。

4月26日 歩きだしてすぐ電柱が現れる。ポカラは、もうすぐだ。昼食をとって1時間程でポカラに着く。5週間の我々の旅も、ここで終りだ。今考えると、アツという間の5週間だった。

*後日談 国民投票のため、我々がポカラに入った時は、町には青と黄色の横断幕が目立った。そして、ポカラ・カトマンズ間のバスも、4月29日より数日間ストップ。5週間ぶりに戻ったカトマンズは、横断幕が町にあふれ、軍隊が5人1組でパトロールを行ない、宣伝カーも走り回っていた。また、バザールも多くの店が閉じられ、入国時との余りの違いに驚いた。

(太田・伊藤)

4. 装備報告

登山用個人装備は、冬山で使用している物をそのまま用いた。寒さに関しては、それ程でもなくオーバーボーン・オーバーシューズ等、使用しなかった装備もある。

登攀用具では、fix ロープとして工業用φ7mmを用いたが、非常にキンクしやすかった。支点は雪壁でも雪の層が薄くすぐ氷になった為、スノーバーは一回の使用でほとんど先が曲ってしまった。したがって、アイスハーケンが有効であった。

幕営用具では、ダンロップ6人用は快適で、キャラバン・登山中ともメンバー用として用いた。夏用テント、軽テントは、K・C・Hで借出し前者はシェルパ・ポーター用、後者をデボ及び先泊パーティー用とした。コンロは、2機種用具したが火力調節ツマミのあるオブティマ

ス111が優れていた。また、ナイロン製土のうは、野菜等のパッキングに便利であった。(井垣)

5. 食料報告

キャラバン及びBC食とC1・C2食に分けて計画した。前者は、ほとんど現地調達としたが、マルジャンディ沿いではまとまった量の補給は困難なため、マナンまでのほとんどをカトマンズより運ぶことになった。後者は、冬山と基本的に同じだったが、ラーメンの代りに乾燥米を用い雑炊を主食とした。嗜好品は、金銭面より極力おさえて、ひたすら耐えることにした。その結果、チャンがその90パーセントになった。燃料は、C1・C2以外はすべて薪である。南部では、一泊分20~30Rs.であるが、北部になると70~100Rs.と高騰した。

反省として、キャラバン中はコックにまかせきりとなり、日本人向けの味付けにしてくれるのだが、メニューが限られて半は食傷気味になった事だ。これは、事前にいろいろ工夫すべきであった。また、C1・C2食は、登山期間が短かいのでほとんど変化をつけなかった。しかし、5日程度で飽き飽きし、ラーメン・モチ等も持参すべきであった。(近藤)

6. 会計報告

表に示す通り。(青木)

会計収支報告

収入科目	金額(千円)	備考
個人負担金	2,250	45万円/人
AACKより	100	遠征基金より
借入金	100	KUACより
カ	200	AACKより
ン	24	
バ		
合計	2,674	

支出科目	金額(千円)	国外支出科目	金額(千円)
渡航費	900	登山料	75
食料費	19	交通費	64
装備費	34	食燃料費	266
保険費	169	装備費	78
写真関係費	100	人件費	252
医薬品費	8	事務費	80
事務雑費	41	雑費	188
返済金	300	インド旅行費	100
国外持出金	1,103		
合計	2,674	合計	1,103

(ネパールでは、1Rs.=21.25円)

7. おわりに

我々5人の旅は、以上のようにして終わった。この山行によって、メンバー各自は新しい世界への手がかりを得られたと思う。そして、ネパールの人々の生活にわずかでも接した事で、我々自身が忘れていたものを思い出させてくれた気がする。また、我々の山登りについても改めて考える良い機会となった。

我々5人の旅は、決して我々だけの力でできたものではない。山岳部長の中島暢太郎先生、「水曜会」で検討を加えてくれた山岳部員の皆、暖かい助言をいただいた西山孝、井上治郎、横山宏太郎、甲斐邦男の四氏や医療関係でお世話になった斎藤惇生氏をはじめとするAACK会員諸氏、そして我々のために交渉し荷を運んでくれたシェルパ・ポーター達、これら多くの方々の協力での旅を行うことができた。その他、我々の計画にご協力下さいました方々に、あらためて感謝いたします。

* * *

1980年12月、我々のメンバーであった伊藤健一郎君を、剣岳赤谷尾根で失った。今後、他のメンバー4人は、彼の遺志を引き継いでいこうと考えている。

22回目の南極観測

井上治郎



4600mより仰いだピサンピーク



ピサンピークへの登攀(四九〇〇m付近)
(背後はアンナプルナII峰)

1. はじめに

京大に極地研究会が出来て、南極で登山をやろうという動きがあったのは、私が山岳部に入ったころだから、もう15年以上前になる。その後何人かが観測隊に参加し、AACKの南極経験者は既に10人を越える。輸送・生活一般・内陸旅行などについては、すでにこれらの人々から報告されているし、そこに書かれている姿は、10年以上たった今日でも、本質的には何ら変わらない。しかし表に現われる活動には、この間様々の変化が見られるので、今回の私の経験(第22次越冬隊:1980年11月~1982年3月)を書いてみるのも何らかの意味があろう。

2. 昭和基地を知らない越冬隊員

1981年1月4日、みずほ基地補給隊員7名は、昭和基地沖40kmに停泊した「ふじ」からシコルスキーS61ヘリコプターで直接南極大陸へ向った。2トン積のヘリ2台はのべ17回飛来し、その日のうちに32トンの荷物を大陸上にデポした。一年分の食糧、観測機械、設営機材などである。8月までの内陸旅行で使う50本の燃料ドラムは既に21次隊によって大陸上にデポされていた。あわただしい空輸の後、ようやく内輪だけになって、ゆっくり荷物を整理した。南極にはシェルパが居ないので、そりへの積みこみが終わって出発体制が整ったのは3日後だった。このうち少くとも2人は昭和基地へは帰らないことになる。雪氷・気象関係の調査がみずほ基地を中心に行なわれるようになった18次隊以後、毎年こんな隊員が1~2名は出てくる。彼等にとって昭和基地に用事はない。13台のそりに分けて積んだ24トンの荷物を4台の雪上車でけん引し、単調な雪面上を時速10kmで走って、みずほ基地についたのは12日だった。

3. みずほ基地

雪氷調査のために内陸にキャンプが作られたのは、11次隊の時である。17次以後は通年越冬が行なわれるようになり、気象・地磁気の観測も始まった。18次以降は、気象通報のための国際地点番号がつけられて正式の基地となった。22次では文部省の施設に昇格した。基

地には4つの棟があって、それぞれ居住、観測などに使われている。今回新たに1棟を持ち運んだので、全部で5つになった。当初は雪面上に建てられたのだが、現在では天井の上に2mのドリフトがついて完全に雪面下に没している。各棟間は雪洞の通路で結ばれている。プレハブ棟以外にも、発電機室・物品庫・食糧庫・避難小舎・実験室等、約20の空間があり、雪面下の基地の全長は100m近くになる。雪面上には、各種の観測器材のセンサー、高層気象用のラジオゾンデのレードーム、気象観測用の30mタワーなどがあり、基地内に入りきらない食糧・装備・器材も外で高床式にデポされている。さらに基地内のみで1年間に消費される燃料ドラム100本も外にデポされている。みずほ高原周辺は1km走って高低差が3mとまったくの平らな所だが、これらの施設のため、基地周辺だけドリフトがついて周囲より10m以上盛り上り、遠くから見ると丘のようになっている。

4. みずほの生活

みずほでの生活は、朝9時の気象観測から始まる。すべての要素は日記々録されているが、天候と視程だけは目視である。同時にエンジンのワッチがある。基地内では16KVAの発電機が常時稼働しており、観測機器・照明・炊事・工作等のすべての電力をまかなっている。予備機として12KVAがあるが、基地の心臓であるため、毎日4回メータ類の点検は欠かせない。エンジンの冷却水を循環させて部屋の暖房、造水、風呂わかしを行っている。居住棟内は常時+15°C前後に保たれており、水は使い放題、風呂はいつでも入れる。15時に昭和基地との定時交信があり、同時に気象通報を送れば、あとは観測関係の記録計の点検、1日3回の目視気象観測以外には生活一般の雑用しかない。これ以外の時間は自分の仕事に費せるわけだが、みずほでは平均してメンバーが4人位なので、この生活雑用にかなりの時間がさかれる。例えば食事だが、昭和基地のようにコックさんが2人居て毎日旨いものを食べさせてもらえるというわけには行かない。食事の材料は殆んど同じだが、みずほでは輪番制の素人料理である。当然バラエティも少くな

るし、味も落ちる。しかし食事は基地の生活では最大の楽しみなので、何とか凝ったものを作ろうと努力する。何よりも食事当番がまわってきた時が一番苦勞する。雪面下に基地があることも悩みの種のひとつである。ゴミ類は袋に入れて外へ出すが、汚水は雪洞内のクラックに流していた。しかしこのクラックは時々凍結してつまってしまう。そうすると新たなクラックを求めて空間を広げたり、時にはボーリングで人工穴を作ったりした。

5. みずほは南極だ

一般にはあまり知られていないが、昭和基地の年平均気温は -10°C 程度であり、最低気温は -40°C 位である。旭川でもこれ位の記録はある。夏には $+10^{\circ}\text{C}$ まで上ったこともある。一方みずほでは年平均が -30°C 以下、最低は -55°C 位になる。みずほ基地の標高は2230mだが、極域にあるため、平均気圧が735mbと低く、中緯度の2800m位の標高に相当する。風も年平均で13m/sと昭和の位近くになる。みずほの周辺は、南極高原で冷やされた空気が斜面に沿って滑り降りて来るいわゆるKatabatic Windの地帯である。年中強風が吹きまくっている。最大風速は30m/s位でさほど強くないが、10m/s以下になることはまれである。建物がすぐドリフトで埋ってしまうのはこの強風の為である。基地への入口は毎日除雪しなければならないし、外にデポしてある燃料ドラムも月一度位は掘り起さないと雪に埋もれてしまう。内陸でKatabatic Windの地帯にある基地は南極でも少く、自然条件では極点より厳しいと言える。

6. 冬前の内陸旅行

我々は、21次隊からみずほ基地の引き継ぎをうけると、2人だけ残して1ヶ月の予定で内陸旅行に出発した。我々の観測は極域気水圏観測(Polar Experiment;略してPOLEX)といわれるもので、要するに極域の雪氷から対流圏全体の気象観測を集中的にやりましょうという国際共同計画の一環で、3年計画の最終年度に当る。初年度はみずほ基地に30mのタワーを建て、いろんな測器をとりつけて大気境界層の観測を集中的に行った。2年目は、みずほでゾンデを揚げたり、音波レーダーを使って接地逆転層の構造を調べた。我々はそういった仕事を継続すると、みずほ以外の場所で同じような調査をして広域の現象をつかもうというのが目的だった。その目玉は内陸の3000m以上の高原部での観測で、本番は冬明けに行くけど、冬前に一度行って地形の調査しておくのと、夏の気象データを取ることがこの旅行の目的である。このあたりは正確な地図がなく、コンターラインもまちまちで、何km走れば目的のリッジ部に出られる

のかわからないが、片道500kmは走れるだけの用意はした。偵察といっても荷物は2トン積り5台に満載し、雪上車2台でけん引した。基地から100km南に行くルート標識は全くなくなる。ここからは自分達で方向を決めて行く、地磁気の伏角が大きいのでハンドベアリングコンパスで方向を決めるのだが、目標物が全くないので、先頭車は雪面上のサスツルギの方向、遠くの雲などを目標に1km走り、後続車の測角で方向を修正する。視程が悪い時はしばしば500mになり、300mになるが、100m以下の時は能率が悪いので停滞した。みずほから350km走って、3200m位の高度に達するとそれ以後はいくら走っても高度を稼がなくなり、そのうち明らかに下りはじめた。我々は今、世界最大の氷河であるランバート氷河の源頭部に立っているとでも思いこまなければやりにきれぬほどの単調な風景であった。この付近で10日間観測を行い、周辺の地形調査に200km程走りまわってみずほへの帰途についた。基地で油の補給をしたのち、メンバーの一部入れ替えを行って今度はみずほ基地の等高線に沿って東の方へ200kmの旅行に出た。この方面は積雪量が多く、4年後にルート標識が埋ってしまっただけで確認できなかった程である。この旅行はボーリング等雪氷関係の仕事が主だった。3月末日には冬前のすべての旅行を終え、みずほ基地周辺での測器のセットも完了して越冬体制に入った。通常この時期は、昭和基地では夏の建設作業期間に当り、殆んど全員が土方に狩り出されるため、1人でも人手が欲しい所である。今回初めてこの期間に内陸旅行を行うために例年より多い6名を内陸にはりつけることにはいろいろと批判もあったが、無事に2つの旅行を終えて所定の成果をあげられたことと、その間2名で基地を運営できたことで、南極初見参の私としては肩の荷がおりた思いがした。

7. 交代旅行

みずほ基地の人員は通常4名で、内訳は観測者2名と機械隊員そして医者である。南極観測で最も頼りにされるのがこの機械担当隊員であろう。現在はエンジン、電気、雪上車などの分野から専門家が5名来ている。当初一番懸念したのは、機械隊員が旅行に出てしまっただけで、基地でエンジン関係のトラブルが起きた時のことであって、さすがに全国から人材を集めた観測隊だけあって、ドクターが元エンジニアであることがわかり、彼には気の毒だったが基地の留守番をお願いすることになった。みずほへは昭和基地から年3回の物資補給・人員交代のための旅行がある。物資の主なもの油である。みずほの発電機は4~5日でドラムカン1本分の軽油を食うし、雪上車は1ℓで500mしか走らない。今年は内陸で、約50

ℓの軽油を使う予定である。第1回の補給旅行は通常4月に行われるが、昭和基地から20kmほど海の上をわたらねばならない。去年は駐機してあった2台の飛行機が流されてしまうという事故があったほど海氷の状態が悪く、4月の旅行は8月まで延期された。燃料は9月末まで持ちこんでいるので心配はないが、人員交代の方は少し微妙である。観測者にとっては内陸が研究の場であるため少しでも長く居たいと思うが、設営の人間にはやはり昭和基地の快適さは魅力である。それに冬明け内陸旅行の準備は昭和基地でないとできないし、これには観測者も協力しなければならない。従って、観測が2名昭和へ帰り、機械が交代することになり、海氷の状態がまだ悪いので5月に行くことになった。こうなると4月中にもう1つやっておかなければならないことがある。みずほの南にある無人気象観測装置の点検である。往復200kmの小旅行だが、もうかなり条件が悪くなってきている。最低気温は -40°C 以下だし、地吹雪も連日高く、日照時間も短くなってきたので早速でかけることにした。現場へは2日で着いて、保守点検後帰途につこうとしたら、雪上車が1台動かない。気温は -55°C まで下がりがり15m/s以上の風が吹いて地吹雪も高い。用心してエンジンはかけっぱなしにしてあったのだが、キャタピラーが雪面に凍りついてしまったらしい。もう1台の雪上車でけん引してようやく脱出。ほうほうの態で基地へ帰った。補給隊はこの後まもなく昭和基地を出発した。彼等の苦勞も大変なもので、毎日視程数百mの中を右往左往しながら10日かかってみずほへ着いた。ルート標識の竹ざおを探しあてるのにレーダーが活躍した。4台で出た雪上車は、基地手前で1台がクラッチが戻らなくなって、そのまま別の雪上車でけん引してきた。もう野外で作業できる時間はほんのわずかしかなくなり、補給隊の持ってきた資材を基地内へ入れるだけで4日かかった。7日後人員交代を終えた補給隊は視程100m位の吹雪の中を5台の雪上車をつらねて帰途についた。一時は13人にふくれ上ったみずほ基地も4人になってしまった。このまま8月まで過すことになる。故障した雪上車は基地に残置された。

8. -50°C の暗夜

5月も末になるとみずほではもう太陽が出なくなる。昭和基地では太陽と別れる儀式だとか、転がる太陽の撮影だとかいろいろ遊ぶタネがあるが、みずほでは連日の高い地吹雪のため、太陽がみえなくなったのはずっと早かった。そして6月中旬になると、正午頃によく新聞の活字が読める程度の明るさになる以外はずっと暗夜である。もう戸外での作業はできない。ブリザードで測

器が破損されても、それを修理に行くには1~2日風の弱まるのを待たねばならない。顔を風に向けると瞬時に凍傷になる。どうしても戸外へ出なければならぬ時は、つぎはぎの羊毛で皮膚を露出しないようにする。フルフェイスのヘルメットやダンボール箱をかぶったりもした。戸外での行動はせいぜい10~15分が限度である。もう一度外に出る時は室内で30分位暖房をとらないと動く気がしない。2~3回外へ出ただけで1日の仕事を終えたような感じになる。昭和ではミッドウィンター祭りを3日間盛大に行うが、みずほでは静かなものである。穴ぐら生活なので睡眠のサイクルがずれ始める。動きまわれない生活ほど嫌なものはない。人間関係にも気を使うようになる。みずほでは4月から9月まで平均気温はほぼなべ底状であまり変化しない。8月に -58°C とこれまでの最低を記録した。

9. 旅行に出たい

8月になると次の交代旅行の詳細が昭和基地から知らされてきた。これが来ると我々はみずほから解放されて待望の旅行に出れる。みずほでも冬明け旅行の準備を始めた。もう戸外での作業もできるようになってきた。そして、待望の補給隊は9月になって、雪上車4台をつらねてやってきた。1月に「ふじ」で別れて以来、久々に見る顔である。このあとみずほ基地は通信・定常気象(観測隊には我々のような研究気象とは別に定常気象観測の隊員が4名いて昭和基地での高層観測を主として行っている)・機械等の入達が短期間交代で保守してゆく。この交代は航空機で行う。飛行機はピラタスポーターで、ネパールで飛んでるのと同じやつである。ちがうのは車輪の下にそりをつけてるのと、切符が要らないことぐらいだ。運転手はもともとセスナ機のパイロットで、去年も来たけどセスナが海氷が割れて沈没してしまっただけで涙をのんで帰国し、今年こそはと張り切っている。彼の話では視程さえ良ければ風は問題ではないとのことだが、低い雲と地吹雪にはお手上げのようだ。みずほの天候が良くても、昭和の方で向う6時間晴れる見通しがないと発進しない。結局地上で来るのと同じだけの日数がかかるのはネパールでも南極でも同じであった。

10. 冬明けの旅行

補給隊が持ってきたドラムと観測資材を積んで、気水圏3名と機械1名は9月末にみずほ基地を後にした。目的地は前回の旅行と同じだが、今度は本観測であり、途中でも数日の観測を何回か予定しているため計画日数は60日である。もうみずほではかなり暖かくなっていたが、100km南へ向うとまた -50°C の世界に逆もどりに

た。さらに南へ向うにつれて気温はどんどん下り、観測目的地では最低気温は -60°C を越えるようになった。ここでは16日滞在したが、最低気温は -66°C を記録した。日本隊ではこれまでの新記録である。しかし既にもう陽が高く、内陸高原部であるため風が弱いので、いくら気温が下がっても全く苦にならない。最低気温の世界記録は、ポストーク基地(ソ連)で8月に得られた -88°C だが、ここも風が弱いので、それほど厳しいとは思わないのではなかろうか。とにかく風の強い方がはるかに厳しいことは確かである。 -40°C でも風速が 15m を越えるとかなり作業が困難だが、今度は -60°C でも風速は $4\sim 5\text{m/s}$ なので全く楽であった。しかしこういった低温は車輻・測器にどんな影響を与えるかわからないので、保守にはかなり気を使った。

11. 南極は広い

予定した観測を全部終えていったみずほ基地へ帰るわけだが、同じルートを引き返すのはばからしいので、少し方向を変えて基地の 100km 東へ出るルートをとった。これは南極のようなただ広い所ではかなりふんぎりを要する。我々は大陸上をもう 1000km 以上にわたって足跡を残しているが、全く雪以外には何も無い。傾斜も目でみただけでは感じられないし、従って目標というのが全くない。自分の現在位置は方角と雪上車の走行距離、そして最終的には天測で求めるしかない。現在は人工衛星からの電波を受信して位置決定をするJMRという器械がある。我々も持って来たのだがどうも振動に弱いらしく前の隊でこわれてしまった。今度のメンバーには天測の得意なのが1人いたので、ややこしい計算は彼にまかせることにして新しいルートに踏みこんだ。こういった方法で旅行するのは、山歩きばかりしていた私には何となく不安であった。天測はへたをすると十数キロの誤差が出る。ところがみずほ基地はせいぜい数キロまで近づくかないと視認できない。まあ燃料は節約したおかげで十分にあるし、わからなくなればみずほ街道(みずほ～昭和間は 300m おきに標識が立っていて、トレースもいっぱいある)を横切ればなんとかならう。230 km 走ったところで雪氷ボーリングをやるといので、雪上車1台で、来る時に通った無人観測点を見に行つた。約60 km 離れてると計算されたが、ドンピシャリで目的地についた。ところが次がいけなかった。350 km 走ってそろそろみずほの方への転向点と思われたが、3月に来た時目標のために2重に積んだドラムが見当らない。トレースも一冬を越してるので勿論ない。周囲を50 km ほどメッシュ状に走ってみたが、あるときは雪面の凸凹の影であったり、蜃気楼であったりして仲々みつからず、ようやく

15 km 房った所にルートの竹ざおを発見した。そこから基地までは冬前にたてた標識沿いに2日をついた。55日ぶりのみずほだ。

12. やまと山脈へ

基地でそりの修理をして、燃料と食糧を補給したあと最後の旅行であるやまと山脈へ向う。やまと山脈はみずほの西約300 km にあつて、5つの山塊からなる。周辺は裸氷帯で、10次隊がここで数個の隕石を発見したため、殆んど毎年調査隊が出ている。もう総計では3000個以上になる。世界で一番隕石が見つかる所だ。なぜやまとにこんなに多いのかということについては、氷の下から湧き上がるとか、表面がよく融けるとかいろいろの説があるけど、我々の仕事は氷の融けるメカニズムを気象学的に調べることにある。行き帰りは地学班と同行動になっていたが、我々が修理に手間どっている間に彼等は一足先に出発してしまった。3日遅れて我々もみずほを後にする。すでに先導班のシュプールがあるので、後をたどってゆくのは楽なものだ。相変わらず単調な風景に時々居眠りをしてしまうが、このへんのサスツルギやドリフトはものすごく大きく、いったん変な方向へずり落ちると、けん引しているそりはずして脱出せねばならない。もうやまとが見えだすころ地学班がクレバスにはまったという連絡が入った。やまと山脈周辺は氷河の流動方向が変るため、氷に歪が出来てクレバスが多い。我々もそりを置いて現場を見にいったが、すぐ手前で別のクレバスを踏み抜いた。ヒマラヤなどちがって、まっ平らなどこにあるのでたちが悪い。しかも殆んどはヒドンクレバスで、よくみると表面にクラックがあるが、似たような亀裂は他にも一杯ある。クレバスの壁には霜がいっぱい発達していて深さは見当がつかない。久方ぶりにぞっとした。地学班はその後クレバス帯を右往左往したが、我々はそりのデポから南へ迂回し、やまと山脈には同時に着いた。観測器材を設置してしまうと、自由な時間にはスノーモービルで山脈内を走りまわって、久しぶりの岩の感触、白以外の世界を味わった。やまとの主な山は全部登られているが、有志は最高峰の福島岳(2360 m)を登頂した。氷床からの比高は約500 m で、ふもとまで雪上車で行ける。そりに積んでいたスキーは、止め金がかわれてしまつて使えず、その分スノーモービルで楽しんだ。

13. もう帰ろう

やまとに居る間に「ふじ」が昭和基地に近づいてきた。今年は浮氷帯で大部苦労したようだが、年が明けると第1便が飛んだ。家族からの便りや新聞・週刊誌、新鮮な

野菜・果物などはすぐピラタス機でやまとへ運ばれた。もう我々の仕事は殆んど終わったが、25次隊以降の調査目標になっているセルロンダネ山塊の航空写真撮影のため、ピラタスがやまとをベースに飛んでいる。航空機は下に人が居ないと着陸しない規定になっている。そのフライトも期限がせまったので我々はやまとのベースを撤収した。荷物は少く、トレースははっきり残っているので、帰りは楽だ。暑いので夕方起きて夜中に走る。太陽は1月下旬まで沈まない。5日で見ずほへ着き、帰りの荷物をまとめにかかる。いつの場合も帰りの梱包というのはなんとなく倦怠感があふれてくるものだ。23次隊がみずほ基地へ来るまでの間だらだらとそりへの積みこみを行っているうちに、みずほ基地の写真を殆んど撮っていないことに気がついて、これも熱意なく適当にシャッターをおす。23次隊は雪上車のエンジンにトラブルが出て1日2 km しか進めない日もあったが、何とか基地についた。23次隊も我々と同じように冬前に2つの内陸旅行をやる予定だ。7人のメンバーが来ている。狭い基地なので人間がたくさん居ると動きづらい。引き継ぎをすますと早々に退却した。みずほ街道は20 m 位の中にわたってキャタピラのトレースだらけだ。途中半日雪氷ボーリングに費したが3日後にはヘリコプターのピックアップ地点に到着した。あとはJARE-PACK Tourに従うのみだ。けだるさが一層ましてきた。

14. 内陸旅行の Logistics

内陸旅行の要は雪上車である。18次隊からSM50型雪上車が登場し、現在10台搬入されている。昔のKD60型より少し軽い、索引力はさほど違わない。最も大きな違いは車輻がタイヤになったため、走行性がよくなった。このため空車で雪面状態が良ければ、 $30\sim 40\text{km/h}$ 位は楽に出る。6トン程度の索引ならば $10\sim 15\text{km/h}$ で走行できる。KDでは数 km/h である。もっともタイヤになったため、低温下でパンクが異常発生し、 -50°C 以下での使用は不可と言われていたが、今回の経験では、使い次第で -60°C でも問題ないと思われる。最大の欠点は居住性の悪さである。もともとが自衛隊の兵員輸送用に作られたものであるため、キャビン内の構造は長距離の旅行や炊事には向かないようになっている。今ひとつの問題は室内の暖房である。 -50°C 位になるとフロントガラスには霜や飛雪がついて殆んど前が見えなくなる。一方ではエンジンがすぐ過熱し、エンジンルームへの外気孔はすべて全開で走行するというような状態である。この排熱をなんとか室内暖房にとり入れられないものか。小さな問題はいくつかあるが、SM50型への切り換えで、今後の内陸旅行の距離は飛躍的にのびてゆく

だろう。今回試験的に持ちこんだもので特筆すべきものは観測用カブスである。これまでの旅行では荷物ぞりの他に居住用カブスを持って行つて。これはその上に断熱材で作られた居住小舎がのっているもので、中に炊事設備と灯油ヒーターがある。我々のはこの中に観測器材と発電機を積みこみ、暖房は発電機の排熱を利用したものである。低温と振動に弱い計器類を保護するため、目的地についてすぐ観測体制に入れるようにとの目的で設計されたものである。もちろんいろいろと細かいトラブルは出てきたが、結果的にこのアイデアはすばらしいものであった。発電機からの騒音の問題は最大の難点なので、将来は発電機カブス、居住・炊事カブス、観測・工作カブス等を併せて用いれば、かなり長期の内陸旅行が快適に行えるだろう。

15. 南極に Pioneer Work は残っているか— 組織の問題(1)—

南極の最高峰が登られてから一般的なアドベンチャアはもっぱら極点到達を旨としているようだ。最近スノーモービルでというのがあったが、そのうち気球で、グライダーで、歩いてなんていうのも出てくるにちがいない。こういったアンチ探検的発想は別として、未知の領域はまだ残っている。沿岸部の山塊は大部分がそうであるし、内陸4000 m の高原での越冬なども前述のカブス部隊で行けば十分実現性はあつた。問題は観測の枠内でいかにこういうものを対象としてとり入れるかということだ。一体日本の南極観測は政府がやっているだけあつて慎重そのものである。南極大陸の地図を広げてみると昭和とみずほの間は情けないほど近いし、日本隊がカバーした内陸のトラバースの地域はこれまたあきれるほど狭い。外国隊が何年間かの観測を終えると平気で基地を閉ざしてしまうのに対して、日本隊では昭和やみずほの基地としての重大欠陥点がわかっていながら毎年大量の物資が運びこまれ、規模はふくれあがる一方である。近い将来やまと周辺に新内陸基地を作る計画があるが、これも恒久化するおそれがないとは言えない。みずほ基地も当初は雪氷ボーリングのための拠点であったのがいつの間にか観測設備が増えつづけ、とうとうみずほの定常観測までできてしまった。自然現象の測定技術は近年飛躍的に進歩し、新しい測定器械がどんどん南極へ運びこまれる。現地で扱う隊員は器械のお守りにせいで南極にいるのか研究室にいるのかわからない。南極観測を統合する偉い先生方は、まったく未知の地域を調査するより、狭い所でルーチンデータを休みなく作り出す方がはるかに立派な事であると考えておられるようである。主基地が島にあつて夏は大陸との交通が途絶え、また内

陸補給のできるような大きな航空機の発着ができるような滑走路の建設ができない限り、内陸旅行隊は小人数で独自の行動はできない。この問題は当分解決されないだろうから、最初の空輸の段階で全物資を大陸上に揚げてしまう必要がある。幸い22次から就航する新船「しらせ」の貨物量は2倍の1000トンになり、さらにヘリの搭載能力は4倍になると聞く。今後内陸旅行の距離はかなり伸ばせるだろう。しかし人員の問題は未解決である。「しらせ」の隊員収容数は60人と増えているが、増員の話は出ていない。みずほを維持して旅行隊を常時出すというのは現状(22次越冬隊は34名、夏隊10名)ではかなり難しい。

16. やっぱり山岳部はいい—組織の問題(2)—

南極観測は国家事業であるから隊員は国家公務員でなければならないというのは、隊員の選考に当って非常に大きな制約である。もっとも民間でも一時的に公務員の身分にするという便法もあるが、定員の枠が限られており、殆んど機械・医療等の設営にとられて観測の方ではまわってこない。結果的には公務員ならば誰でも良いということであり、現実的にもそうなっているようだ。従って山の経験は必要ない。実際昭和基地に居る限り全く危険性はない。この小人数で医者が2人もおり、専門の調理師も2名いてバランスのとれた食事ができる。私は出発前に一応生命保険に入ったが、あまりにその掛金が安いのに驚いた。政府は25年の間に南極観測を安全な国家事業にするのにみごとに成功したようである。しかしこの安全な場所に居ても責任ある人々にとっては、隊員の行動というのはまだ不安である。これまで2名の犠牲者が出ているが、その一つは全く考えられないような事故であるだけに隊員の行動を監視し、しめつけるようになる。しかし指導者にとって最も大事なものは、個々の隊員の能力を適確に把握し、できる限りの自主性を与えることであろう。こういう環境での画一性というのはどうしても低い基準に合わされがちで、その結果才能ある者の芽をつんでしまう。たった半年位の街のつきあいでもそこまで判断できるかという考えもあるが、私はずっと内陸にいても、この人間ならば、すべてをまかせることができるというメンバーを何人か見出した。その殆んどは山岳部出身者であった。彼等には自分の安全のことは自分で考えるということが本質的に備わっているし、常にチーム全体の中での自分の役割というのが思考の中心になっている。こういう人達が何人かでもいてくれると仕事も生活も本当に楽しくなるし、何か新しいことをやろうという気力も充実してくる。

17. 南極行の算術

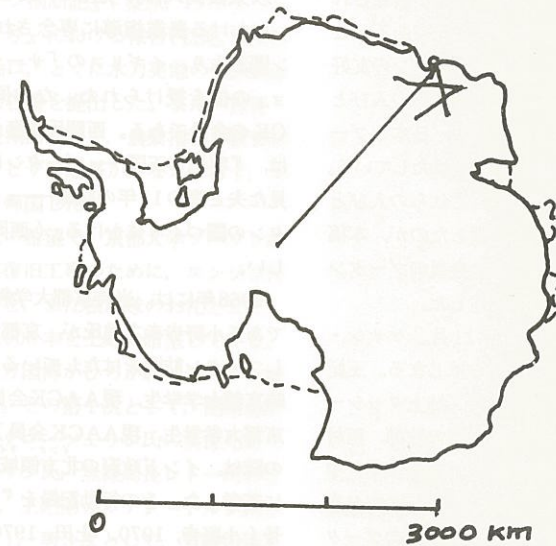
南極観測隊は設営部門は割合希望者が多いが、観測部門では毎年人集めに苦労している。希望者が居ないのである。公務員の資格という厚い壁が民間の希望者をしめ出している大きな原因だが、公務員の中でも殆んど居ない。長すぎるというのが大きな理由であろう。出発から帰国までの16ヶ月のうち、往復の船の中の3ヶ月は全く無駄である。冬の3ヶ月は殆んど仕事にならない。それに出発前の準備、帰ってからの後始末がある。後者は人によるが、前者の場合何か新しいことをやろうとすれば、1年以上前から専念せねばならない。南極観測を伝統的に行っている研究機関以外の人間にとってはこれはまことに歩合の悪い仕事だといわねばならない。それでも金が貯るだろうとよく言われる。そういう風に誤解して人達の為に一言書いておく。南緯55°Cをこえると極地手当というのが支給される。しかしこの額はここ何年か殆んど増額されていない。最近前小屋氏にお会いしたら、昔の手当は給料の倍以上あったそうだ。この間インフレで給料そのものは数倍になったが極地手当の方は変わらない。つまり南極観測は政府の管理がうまく行き届いたため、もはやしんどい仕事ではないということだろう。人によっては他の諸手当が一律にカットされるため減収になる。食糧も期待ほどではなかった。15年前にくらべて食費は2倍にしかくなっていない。この間物価は何倍になっただろう。しかも現在寄贈は殆んどない。普通の研究者にとって南極行は仕事の面でも収入の面でもメリットはない。思いつきで行くところではないが、私にとってはいつかは登らねばならぬピークのようなものであった。正直言って終ってほっとした。南極観測事業費は毎年約25億円位でこれは京大の年間予算の約1割に当たる。隊員1人頭に直すと大変な額である。大部分の研究者にとってこんな巨額の前算を使える機会はずうざらないであろう。それでも希望者は少ない。

18. おわりに

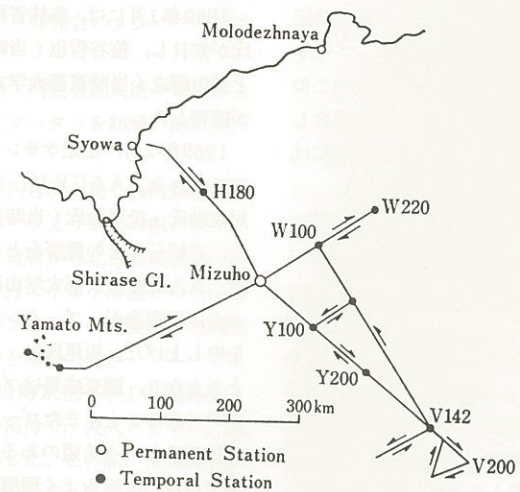
最近南極大陸周辺は領土権や資源の問題でかなり注目を集めているが、日本は全く局外に立っているようだ。領土権を放棄して学術調査に専念しているのは日本位しかない。プランニングの主体性は完全に研究者側にある。殆んど有用な鉱物資源もなく、接近が非常に困難な地域を対象に行っている観測、そこから生じてくる諸問題の根源はこの研究者側のリーダーシップと長期展望の欠如にあるのかもしれない。しかし研究第1というのはやはりすばらしいことである。計画立案から準備の2年間は面白くもないし、しんどかったが、やはりやっただけの事はあった。計画さえしっかりしておれば研究の為なら

ば何でもできるという事がわかったのは終ったところであった。今から考えればもっと大旅行の計画を作るべきであったというのが1つの悔恨だが、計画段階ではあれでせい一杯だったろう。南極へ行きたいと思っている人のために一言書いてこの雑文を終る。現在の観測計画が殆んどプロジェクト主義なので、早い段階からこのプロジェクトにもぐりこむのが一番有効な方法である。しんど

いことも多いが人も多く使えるし大きな計画も遂行できる。グループの中で無視できない存在になってしまえば、学生でも何とか行ける。別に何もしたくないただ行ってみたいという人は、かなり自由にふるまえるような立場の公務員になるのが手っとり早い。行ってみただけの値うちはある。富士山のようなものだ。



南極大陸と日本隊のこれまでの旅行ルート



22次氷水圏旅行ルート

日本ブータン友好協会の成立をめぐる

— AACK会員とブータンとの交流の歴史 —

栗田靖之

1981年1月25日、日本ブータン友好協会が設立された。会長は、AACK会員である桑原武夫氏である。この協会の設立にいたるまでには、日本とブータンの友好を望む数多くの人びとの努力があった。それらの人びとの中には、本会会員も数多く含まれており、日本とブータンの友好の上に、はかり知れない功績をはたしている。日本ブータン友好協会の成立を機会に、これらの人びとの親善の歴史を記録にとどめたいと希望したが、本稿の目的である。本稿では、もっぱら本会会員のブータンとの友好親善に関する活動を中心に記述した。

日本とブータンとの関係は、1957年11月、ケサン・ウォンチュック王妃(当時)の来訪からはじまる。王妃は、母上ラニー・チュニー・ドルジ夫人、姉上タッシー女史とともに非公式に来日された。滋賀県の牧師、西村関一氏の仲介で、AACKから桑原武夫、芦田謙治、中尾佐助の各氏がお目にかかった。この王妃一行の来日を契機に、中尾佐助氏(当時大阪府立大学教授)のブータン訪問が実現する。この間の事情は、『秘境ブータン』(中尾, 1959), 『ブータン横断紀行』(桑原, 1978)にくわしい。

日本人としてはじめてブータンを訪問した中尾佐助氏は、1958年5月から11月の6ヶ月にわたって、ブータン西北部を中心として調査をおこなった。中尾氏のこのブータン調査は、当時の日本人の知らない秘境を紹介したという意味で、貴重な探検紀行であり、また同書にはエッセイリスト・クラブ賞が与えられたのである。

さて中尾氏は、ブータンにおける調査を了えた後、1962年のネパール調査の際にカリンボンのブータン・ハウスにおいて、西岡京治氏・里子夫妻を当時首相であったジグミ・ドルジ氏に紹介した。西岡京治氏は、大阪府立大学農学部出身で、中尾氏の教室の学生でもあった。彼は1958年、川喜田二郎氏(AACK会員)を隊長とする西北ネパール学術探検隊に参加するとともに、1962年中尾佐助氏を隊長とする大阪府立大学東北ネパール学術調査隊の副隊長として、里子夫人とともに参加している。そして、1964年からコロポ・プランの専門家として夫人とともにブータンに滞在した。

以来西岡氏は、現在にいたるまでの18年間をブータンにおける農業指導に専念され、1980年には、ブータン国王より、イギリスの「サー」の称号にあたる「ダシヨ」の位を授けられた。なお同氏は、1970年以来AACKの会員である。西岡氏夫妻のブータンにおける活躍は、『秘境の王国——ブータンに“日本のふるさと”を見た夫と妻の11年の記録——』(西岡, 1978), 「ブータンの国づくりにかける」(西岡, 梅棹, 1982)にくわしい。

1968年には、当時京都大学教授であり、AACK会員である小野寺幸之進氏が、京都大学山岳部の学生を組織しブータン訪問をはたしている。隊員は、上田豊氏(当時京都大学学生、現AACK会員)、市川光雄氏(当時京都大学学生、現AACK会員)の二名である。しかしこの隊は、インド政府の北方領域通過許可書の延長に大いに苦勞した。その行動記録を『京都大学山岳部報告』15号(小野寺, 1970, 上田, 1970, 市川, 1970)に見ると、彼らは、1968年1月25日から1月31日までと、つづいて6月3日から6月12日までの2回にわたって、ブータンに1週間ずつの滞在をはたしている。

1969年1月には、農林省副大臣ペマ・ウォンチュック氏が来日し、笹谷哲也(当時上田貿易, AACK会員)と栗田靖之(当時京都大学大学院学生, AACK会員)が接待した。

1969年2月、王妃ケサン・ウォンチュック一行が再び来日された。AACKは、桑原武夫氏・芦田謙治氏・中尾佐助氏・松尾稔氏(当時京都大学助教授)を接待役とし、王妃一行との親善をとり結んだ。この機会に松尾氏は、AACKと京都大学山岳部を母体とする京都大学ブータン研究会が、ブータンを訪問したい希望のあることを申し上げた。松尾氏は、この調査隊が今までの遠征隊とことなり、調査成果はブータンの人びとに還元されるものであること、またブータンと日本の末長い友好をとり結ぼうという希望のあることを説明申し上げたところ、王妃はその主旨をよく理解され、その入国に対し内諾を与えられた。

1969年11月、京都大学ブータン研究会が主催するブ

ータン学術調査隊が出発した。この隊は、総裁桑原武夫氏、隊長松尾稔氏、副隊長吉野照道氏(当時無職, AACK会員)、隊員笹谷哲也氏、松田隆夫氏(当時京都大学大学院学生, AACK会員)、山本清司氏(当時京都大学大学院学生, 現AACK会員)、米本昌米氏(当時京都大学学生, 現AACK会員)、田中達吉氏(当時京都大学学生, 現AACK会員)で組織された。この隊は、日本人としてはじめて、ブータンの東端の町タシガンまでの調査を行い、貴重な資料を得ている。これについては、この隊の報告書『ブータン横断記』(桑原, 1978), 松尾氏の『AACK時報7号』における報告(松尾, 1972)を参照されたい。松尾氏は、とくに水力発電の資源調査をおこない王妃あての報告書を提出した。また、吉野・山本両氏はブータンに長期滞在して、農業指導と教育指導をはたそうとしたが、ビザの延長がかなえられず、本隊から1ヶ月ほど遅れて帰国した。

1970年には、西岡氏の希望で、京都大学ブータン研究会は、パロ周辺の水害復旧工事のために、エンジン付きベルト・コンベア2台を、また松尾隊のお礼として、ノート2,000冊、鉛筆2,000本を王妃に贈呈している。

1970年には、大阪で万国博がひらかれ、ブータン政府要人の来日が相つた。その第1次として、開発省副大臣ダゴ・ツェリン氏、ダゴ・ツェリン氏の異母兄弟でパロ県の知事ダゴ・ツェリン氏、無線局長レトロー氏および同夫人、第2次として、王妃弟カルデン・ドルジ氏と同夫人(当時の国王の妹)、第3次として、当時の国王秘書長シンカ・ラマ氏と内務省副大臣が来訪した。それぞれの来客に対して、松尾氏から引きついで代表となっていた谷泰氏(当時同志社大学助教授, AACK会員)を中心とする京都大学ブータン研究会のメンバーが接待をおこなった。

1970年10月、栗田靖之は、開発省副大臣ダゴ・ツェリン氏の招待で、妻とともにブータンを訪問、約1ヶ月にわたって滞在した。

1971年7月には、谷泰氏と河合明直氏(当時京都大学学生)は、開発省副大臣ダゴ・ツェリン氏の招きでブータン訪問を試みたが、インド政府から北方領域通過許可書の発給を得られず、約2ヶ月のインド滞在中のうちに帰国した。この間に、京都大学ブータン研究会は、西岡氏の要請に応じて、製材機1台を贈呈した。

1971年9月、西山孝氏(当時京都大学工学部助手, AACK会員)は、西岡氏の招待で、夫人とともに、地質調査のためブータンを訪問した。この際、京都大学ブータン研究会から風力発電機を持参し好評を得た。西山氏夫妻は、約1ヶ月間ブータンに滞在した。

1972年、前国王の義弟トブケ・リンポチェ氏が来日、

運材機の購入と山林経営の見学を希望した。とくに同研究会のメンバーである、小林直人氏(山林経営, AAC K会員)の経営する山を見学し、運材機の据付のために小林氏の派遣を要請した。

1972年7月、ジグミ・ドルジ・ウォンチュック国王がケニアにおいて、心臓マヒのため客死、43才であった。京都大学ブータン研究会は、桑原武夫氏、松尾稔氏、笹谷哲也氏名で弔電を打って弔意をあらわした。

1973年4月、小林直人氏は、トブケ・リンポチェ氏の要請でブータンにおもむき、ガレフーに運材機を設置した。

1973年5月、開発省林野庁長官チェンケップ・ドルジ氏が日本政府の招待で来日した。京都大学ブータン研究会は同氏を接待し、同氏の希望する運材用ワイヤー・ロープを、谷泰氏らが仲介して神鋼鋼線株式会社より寄贈を受けられるよう、取りはからった。それとともに、チェンケップ・ドルジ氏を小林氏の経営する山に案内し、山林経営について資料を提供した。

1974年3月、小林直人氏は、トブケ・リンポチェ氏の要請で再びブータンを訪問し、林業に関して、種々アドバイスをおこなった。

1974年5月、首都ティンブーで、ジグミ・シンギ・ウォンチュック新国王(当時18才)の即位式がおこなわれた。京都大学ブータン研究会は、桑原武夫、松尾稔、笹谷哲也、谷泰、栗田靖之の連名で、祝電を打った。

なお戴冠式に、東郷文彦氏(当時外務次官、現日本ブータン友好協会副会長)、小方全弘氏(日本山岳会会員、現日本ブータン友好協会常任幹事)が招待され出席した。

1974年以降、AACK会員とブータンとの関係はやや疎遠となり、これといった接触はおこなわれていなかった。1979年、栗田はニューヨークで国連大使を勤めているダゴ・ツェリン氏(前開発省副大臣)と再会し、旧交を暖めている。

このような疎遠となった関係を残念に思う人びとの間に、ブータンとの友好関係を強固なものにしたいという希望がおこって来た。

中坪皓氏(日本山岳会会員、現日本ブータン友好協会理事)の記述によれば(中坪, 1982), 日本ブータン友好協会の設立への動きは、1979年9月に西堀榮三郎氏(AACK会員)が小方全弘氏に電話をかけ、協会設立の必要性を強く説いたことから始まるという。そして、1979年12月17日、京都都ホテルでおこなわれた今西錦司氏の文化勲章受章祝賀会の席上で、桑原武夫氏、中尾佐助氏にこの意向が伝えられた。そして、協会設立には、ブータンとの親善に今日まで大きな役割をはたしてこられた東郷文彦氏(当時駐アメリカ大使)のご意向

を聞くべく、その帰国を待ち、1980年6月26日、桑原・東郷・小方各氏の三者会談がおこなわれて、協会設立へと動き出したのである。

1980年11月1日、東京の津村順天堂で、「ブータンを考える会」が開かれた。このときの出席者は、宇山厚氏（元インド大使）、大槻広氏（高砂香料顧問）、小方全弘氏、川喜田二郎氏（筑波大学教授）、桑原武夫氏、栗田靖之、高田仁覚氏（高野山大学教授）、津村重舎氏（順天堂会長）、東郷文彦氏、中尾佐助氏、西岡里子女史、西堀栄三郎氏、原実氏（東京大学名誉教授）、八坂伝郎氏（国際協力事業団理事）、中坪皓氏の15名であった（肩書はいずれも当時のもの）。

この会の出席者の中で、いろいろと協議がおこなわれた結果、今後の日本とブータンの親善関係を促進するために、ぜひ協会を設立することが望ましいとの結論に達した。そして、設立されるべき団体は、あくまで両国の友好関係の促進を計るためのものであると、日本ブータン友好協会の名称であることとした。また発起人に関しては、現在もブータンに滞在している西岡京治氏の立場を考慮し、西岡里子女史は発起人となることを辞退された。また当日は欠席されたが、芦田譲治氏、中根千枝氏（東京大学教授）を加えて、合計16名の発起人で、日本ブータン友好協会の設立が呼びかけられたのである。

そしてその結果、1981年1月25日、日本ブータン友好協会が、会長桑原武夫氏、副会長東郷文彦氏で発足したのは、文頭で述べた通りである。

1981年10月6日から15日まで、日本ブータン訪問団が組織された。団長は、同協会会長の桑原武夫氏である。団員は西堀栄三郎氏夫妻、23年振りにブータンを再訪される中尾佐助氏、同じく10余年振りにブータンを訪れる松尾稔氏、笹谷哲也氏、栗田靖之など、16名であった。この訪問団は、まさしく1957年以来、日本とブータンの友好のかけ橋をきざされた人びとであり、ケサン・ウォンチュック皇太后は、この一行の来訪をいたく喜ばれ、国賓の待遇でもって迎えられたのであった（中尾、1982、栗田、1982）。

参考文献

上田 豊、1970、「入国交渉経過のあらまし」『報告』第15号、11-15頁、京都大学山岳部。

上田 豊、1970、「第1回ブータン訪問」『報告』第15号、13-20頁、京都大学山岳部。

市川光雄、1970、「第二回ブータン訪問」『報告』第15号、20-24頁、京都大学山岳部。

栗田靖之、1982、「ブータン 1981」『会報』No.1、7-8頁、日本ブータン友好協会。

桑原武夫編、1978、『ブータン横断記』講談社。

松尾 稔、1972、「ヒマラヤの王国ブータンを訪ねて」『AACK時報』No.7、3-14頁、京都大学山岳部。

西岡京治・梅棹忠夫、1982、「ブータンの国づくりにかける」『月刊みんぱく』1982年7月号、2-9頁、国立民族学博物館。

西岡里子、1978、「神秘の王国——ブータンに『日本のふるさとを見た夫と妻の11年の記録——』学研社。

中尾佐助、1959、『秘境ブータン』毎日新聞社（1971『秘境ブータン』現代教養文庫727として、社会思想社より再版）。

中尾佐助、1981、「23年ぶりのブータン」『会報』No.1、5-6頁、日本ブータン友好協会。

中坪 皓、1982、「協会の歩み」『会報』No.1、10-13頁、日本ブータン友好協会。

小野寺幸之進、1970、「ブータン遠征雑感」『報告』第15号、京都大学山岳部。

この他に、下記の文献を資料とした。

京都大学山岳部・ブータン研究会 1974「京都大学山岳部・ブータン研究会によるブータン国との交渉について」（未刊行）

* * *

なお、日本ブータン友好協会の住所は下記の通りである。

日本ブータン友好協会・〒210 川崎市幸区中幸町4-47 富士印刷内
電話 044-511-9901

日本登山医学研究会の紹介

中 島 道 郎

私は今、全く不慣れな仕事のために大変忙しい日々を送っています。それは日本登山医学研究会の第二回の学術集会を来たる82年5月28日に控え、その準備に大重なるのです。この研究会を作ることを最初に提案した者として、学術集会のお世話を引受けたまではよいのですが、大学の先生方と違って市中病院の勤務医である私にはとても時間が足りなくて、これも同じように、或は私以上に忙しい斎藤惇生君を仲間引きこんで、二人三脚よろしく「当番幹事」として活躍中なのです。

会の景気づけのため、特別講演者としてDr. Houstonを招請しました。この先生は1953年アメリカK2隊の隊長で、その著「The Savage Mountain」は伊藤洋平さんの翻訳で「非情の山」として、日本ではかなり有名です。私はこの人の最近の著書、「Going High」を翻訳することになっており、その宣伝を兼ねる意図もあつたわけです。

余談はさておき、この研究会が発足した経緯について、日本山岳協会々報「登山月報」第149号（昭和56年8月

登山月報

日本登山医学研究会の発足について……1
主 告知……1
な 登山協会の56年度計画……2
記 スクラップブックから……3
事 医学研究会発表テーマ……5
道 道対ニュース……5
第1回参加報告……5
事務局日誌、編集後記……7

先般記の研究会が発足し、昭和56年7月5日（日）、その第1回学術集会が、北摂正東京医科歯科大学名誉教授を会長として、東京慈恵会医科大学において開催された。この研究会は日本における、登山のための医学の発展と普及を希って生まれたもので、医師・看護士その他の医療関係者ばかりでなく、広く一般登山家でも参加して欲しいと呼びかけている。

日本における高所登山医学発展の歴史は昭和27年頃まで遡るが、昭和43年のメキシコ・オリンピックに備えて、その前年に日本生気学会の中に高所医学研究班が結成された頃の活動が一つのピークであった。しかしその活動は登山のためにとくくらい役に立つたか判らぬうちに下火となつてしまった。ところが、その頃から我が国の海外登山人口は増加し続けるのであって高山病のニュースも多くなって来た。またヒマラヤを体験した医師の数もかなり増えて来ていた

るに違いないが、その人達が自分の体験を後の人に伝えたくても、それが出来る場が今の日本にはない。折角山で苦心して調べた事がそのまま埋もれてしまつていく。海外登山ばかりでなく、国内の登山でもいろいろ医学的な問題は多い。またそのような話は医学関係者が集まつて話し合うだけでは登山界に於ける効果の範囲は限られるのであつて、実際の登山家達が直接討論の場に加わってもらう方がより望ましい。そういった考えからこの研究会は出発している。学術集会は今年も東京であったが、57年度は京都で、58年度は松本で開催される予定である。集会での議題は、高所登山のための医学から原住民の診療、国内の登山者の診療から事故対策など、広範囲にわたって募集される。発表された講演内容は本にまとめて出版される予定であるが、今後とも定期的に刊行される方針にしている。それは日本の登山医学の中心の文献に発展するであろうことは間違いない。

『日本登山医学研究会』の発足について

中島道郎

ゴアテックスについて

安田 武

1. まえがき

最近、ゴアテックスと呼ばれる透湿性防水布が、登山界で注目されている。あとで詳しく説明するように、ゴアテックスとはポリテトラフロロエチレン(テフロン)を高温でひき伸して造った多孔性材料で、このフィルムを布に貼り合わせたものがゴアテックスファブリックスである。この布は多孔性のために水蒸気を通すが、テフロンが高い撥水性をもっているため水を通しにくい。このように透湿性がある、防水性のある布は登山者に待望されたものであったので、注目されているわけである。

世間では、この布と他の類似の布とをJISの規格等で比較して、細かい数値を並べ比較したり、それぞれのメーカーの説明を並べて紹介したりしているものは多いが、JISの再検討や詳しい実用経験の分析はこれからの問題である。実用性能をわかり易く解説したものは少ない。

私は現役の頃に、白頭山遠征のレポートを読んで、また当時(焼失前の)ルームにグレンフェル防水布のテント等の装備が残されているのを見て、京大の装備研究の進歩に興味を持ち、一年上級の林一彦さんの紹介で医学部の衛生学教室に出入りしたりして装備係の勉強をしたが、その後繊維工場に勤務しているとき、たまたま、マナスル隊、アンナプルナ隊の合繊維一切の受注をして、当時の技術水準から考えて、「何で、こんなものを発注したのか」と大変に不満足で、これは工場現場を知ったものが発注しないとけない、商売人に注文したのではダメだと考えたことがあったりして、装備に興味をもち続けたが、軽量化が一応達せられてみると、残された問題として、快適さの研究が大切だと思われる。このことは、登山装備だけでなく、一般衣料にも言えることで、近い将来の大きい研究分野となるにちがいない。幸い、最近、気候学の専門家である横山宏太郎講師を迎えたので、同先生の御協力を得ながら、ここでは透湿性防水布について、ゴアテックスを中心に、周辺の話も混えて、登山者の基礎知識となるようなことを記してみたい。多少、初歩的な話から始めることをお許しいただきたい。

2. 雨衣と凍死

医学者と文献の教えるところによると、雨にうたれて凍死した例は数えきれないほど多い。夏山でも凍死は起る。凍死は凍傷とちがって、0°Cにならなくても起ることに注意する必要がある。第二次大戦中にドイツ人医師団が強制収容所で行った非人道的な実験によると、人間を0°C近くの水中に浸したときに、体温が25°C位になると死に至るとのことである。わたしたちは、37°C付近に、体温を保ち続けなければならないが、もし、体温が3°Cも上昇すれば、うわ言をいい、障害を残し、ときには重大な事態につながる。同じように体温が3°Cも下がれば、登山は危険な状態となる。体温が35°C以下になった場合を低体温症と言っているが、脳機能の障害によって、判断や活動がにぶり、歩行が無器用になり、応答がまともでなく、不可解な言動がみられる。冬山遭難者が、裸になって異常な状態で死んでいる例があるが、このようなことは体温が40°Cになったときの状態と大変によく似ている。体温30°Cぐらいになると意識が失われるが、回復し難い。死は、体温26°Cぐらいで防れる。もし、同伴者がいて、雨にうたれた遭難者を危険な行動から守ってやれたとしても、ぬれたまま停止しておれば活動中のように産熱によって自分の体を暖めることができないから、どんどん体温が低下して、2時間ぐらいで死に至る。かつて富士山で元気な若者たちが雨の中をテントから出て下山をはじめ、まもなく大量凍死したことがあるが、極めて当然の事故である。夏山でも雨中の登山は極めて危険である。

3. 不透気性防水布

ナイロンが市場に現われてから20年以上の年月が経つが、合繊維物の透気性防水は、ついに成功しなかったといってよい。そのために、コーティング加工が盛んになって、織物の目を合成樹脂でつめて、防水性だけを高めた製品が普及している。内部から汗ばんでぬれるということだけでなく、不透気性防水布は、テントや寝袋に用いられたときに、酸欠や一酸化炭素中毒の危険がある。1953年の冬、アメリカK₂隊の8月1日の夜が明けた。

太陽があたり一面を照らしていた。しかし、ギルキーとシェーニングは惨めであった。激しい頭痛がして、吐き気があり、シェーニングは物が二重に見えた。彼らは不透気性ナイロンテントの半窒息状態が原因だと非難した。8月4日には、嵐のために布が裂けてしまった。8月10日、雪崩におそわれ逃げこんだテントの中で、その夜、隊長のハウストンは、精神が錯乱し、胸の苦しいのは、テントの中の酸素の不足によるものだと信じ「僕はちゃんと調べてあるんだ、もし僕にテントに穴をあけさせないなら、みんな3分間で死んでしまうぞ」と繰り返し、繰り返しテントに爪で穴をあけようとして虚脱におちいっていった。アメリカはそのころ、コーティング加工の輝かしい発展を誇っていたが、ヒマラヤ登山史における栄光の機会を失った。

1958年7月中旬、アラスカのある山陵で、透気性テントと不透気性テントに、それぞれ2人ずつの登山者が入っていた。吹雪にとじこめられて3日目の朝、不透気性テントに眠っていた1人は、酸欠、炭酸ガス充満によって意識を失い、1人は死亡した。

そのほか、寝袋の上に不透気性シートをかぶっていて死亡した例もある。また、不透気性テントの中でストーブを燃やして、一酸化炭素中毒死した例もいくつか知られている。しかし、実は現在、日本で市販されているテントの大半が不透気性ナイロンコーティングテントであって、その中で炊事をしたり、寝たりすれば、頭痛や吐き気にはいたらぬまでも、翌日の行動に目に見えない影響を及ぼしていることは、容易に想像し得る。このような、いろいろな意味で、透気性透湿性防水布の出現が待望される。

1961年7月に、京都大学探検部が「知床半島無名湖学術調査隊」を出した。ここは、霧の多い所で、雨の対策が重視され、ビニロン長繊維の織物に、ウレタンコーティングをした不透気性完全防水のテントが試作されて携行された。そのときおもしろい体験をした。冷たい雨が降り、激しい風が吹いて、テントにとじこめられていた日に(気温は15°Cだったが)テントの天井を眺めていた。ドド……と風がテントをゆさぶると、パラパラ……と水滴が落ちてくる。それが、隊員の寝袋に降りかかる。若い隊員の体温で、寝袋の表面からは水蒸気が立ちこめている。夏だというのに、寒さにふるえながら、その水蒸気のゆくえを追っていると、テントの天井に、まるで草に着く露のように、水滴が生じているのが目についた。テントは完全防水である。縫目でもないところに水滴が目に見えてできていく。これは「結露」ではないか、テントは雨を防いでいるが、テントの内部で、天井に結露し風でテントがグラグラ……とゆすられ、布

がバタバタと激しくはためくと、パラパラ……と雨のように降って来るわけである。これではいつまでも乾くわけではない。まるで人工降雨である。換気孔を全開にして、内部の水蒸気がいくらでも出ていける状態にしてみても、結露は防ぎきれず、内部の温度を下げる以外に方法がなかった。不透気性テントの内部を換気で冷すと、大変に寒い。テントの役目をしない。

4. 透気性防水布

ひと昔前に、高校時代、東北の飯豊山の梅花皮沢で、7日間、雨に降りこめられて停滞したことがあった。当時はポータブルラジオが無かったので、よくわからなかった異常気象で梅雨末期の豪雨が続いたものだったと思う。この時には、1日に1度くらい(衣類をぬらさないために脱いで素裸になって)テントの外に出て小便をしたり、張り綱を補強したり、木を伐って豪雨の中で焚火をして(ガソリンストーブなど無かった)米を炊いたりしたが、ブルブルふるえて小便をしながら、うらめしげにテントを眺めたときに、東洋紡200番の木綿ポリンのテントの天井から一面に湯気のように、水蒸気が立っていた。透気性防水の木綿のテントは、豪雨の中でも水蒸気を通すのである。湯気が立っていたのは、内部の水蒸気の温度が高くて、それが布目を通して寒い外気に、ふれて、霧になっていたわけである。木綿のテントは天井裏を頭や背中であふれてこすると水が通るので、内面にさわらないように注意していると、防水性は保たれたし、蒸れるようなことはなかった。

ビニールレインコートの内部が、汗のために水蒸気を増して、高湿度になると不愉快な状態になるので、小さい穴をあけて水蒸気を外部に出してやれば、快適さがとりもどせると考える人が多いようである。これまで透気性防水を特長にしていた製品を実用してみると、雨に遭って、初めはうまくいくようだが、布の表面が無数の水滴に覆われ、やがて全面が水の膜で覆われるようになると、地下水がにじむように毛細管現象のようにして、内面に水がしみ込んでくる。このようにして内部の衣類がぬれてしまうと、防水布はベトトリとはりついて、どんどんと雨を通してしまふ。山で、雨足の激しいときには、ほんのしばらくの間に完全にぬれてしまうこともある。このように透気性は気やすめにすぎないことがわかると、いっそうのこと、塩化ビニルやゴム引き布のレインコートの方が完全防水でよいと思うようになる。

蒸れない防水布にはいくつかの型があるが、従来の加工法から大別すると、①コーティング膜のような耐水膜に穴をあけるもの、または②布のように穴のあるものに防水するもの、の2種になる。しかし、実用結果として、

明らかに最も優れているのは、第3の種類のゴアテックスである。これは上記の①と同じと思われている人が多いが、これは上記の2種の方法のいずれでもなく、その合成されたものであることに注意を払うことが大切である。

5. 透湿(通気)性防水性の条件¹⁾

防水性能について適当な測定方法が見出されなかったため、あらかじめ透湿性を期待して、多数の穴のある材料の防水性について理論的に検討してみる。

一般に模型的に無数の毛細管を束ねて水面に立てたような場合を考えてみると、液体中に管を立てた場合の液面の位置は重力と表面張力とのつりあいによって定まり、液体の表面張力をT、この液体と管の素材との接触角を θ 、管の半径をrとすると単位長さ当りの、管壁が液面を引く力はTに等しいが、その方向は完壁と θ の角をなすからこの管壁方向の成分は $T \cos \theta$ であり、これを全周 $2\pi r$ について考えれば、管壁方向に液面を引く力fは、

$$f = 2\pi r T \cos \theta \quad \dots\dots ①$$

となる。

いま、大気圧を p_0 、液面から管の底までを h_0 、管外と管内の液面の高さの差をh、液面の密度を ρ 、重力加速度をgとして管の底で力のつりあいを考えれば、

$$(p_0 + \rho gh_0)\pi r^2 = (p_0 + \rho gh + \rho gh_0)\pi r^2 - f \quad \dots\dots ②$$

hについて、管内の液面が管外の液面より高い場合を正、低い場合を負とすれば、②式はFig. 1-a, 1-bの両方の場合に成立する。①, ②式より

$$\rho gh \pi r^2 = 2\pi r T \cos \theta$$

$$h = 2 T \cos \theta / \rho gh \quad \dots\dots ③$$

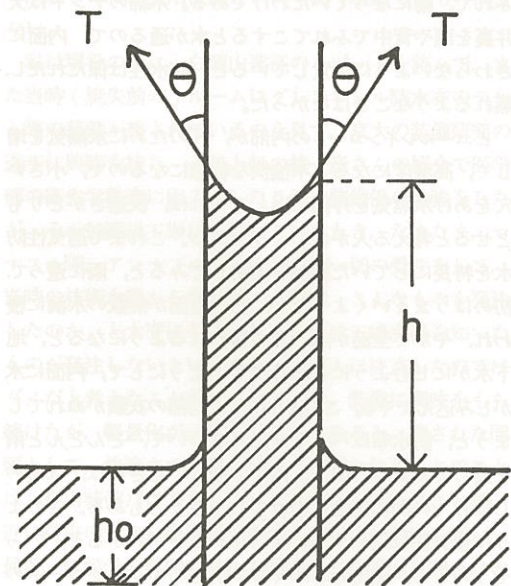
となる。すなわちrが小さい場合、管内の液面は毛管現象で上昇または下降する。 θ (接触角)について③式を吟味すれば、

$$\theta < 90^\circ \text{ のとき } h > 0$$

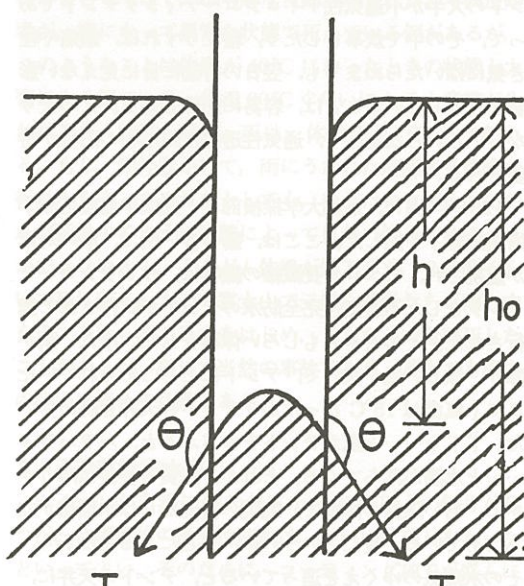
$$\theta = 90^\circ \text{ のとき } h = 0$$

$$\theta > 90^\circ \text{ のとき } h < 0$$

となる。h>0とは、毛管中へ液体が(表面張力によって)入り込んで行くことを意味する。h<0とは、圧力をかけてやらない限り液体は入れないことを意味する。毛管の集合体と見なせるような衣服素材と水の場合について考えると、 $\theta < 90^\circ$ なる物質の衣服素材では水が浸透し、 $\theta > 90^\circ$ なる物質の衣服素材では水をはじき、一定の耐水圧を有することになる。このことから布や多孔性フィルムに水がしみこまないためには、材料の接触角 θ が、 $\theta > 90^\circ$ でなければならないことがわかる。結局、透湿性防水布の決め手となるものは、網状膜の材料の、水の接触角 θ である。文献(Table 1)によると、多孔



$\theta < 90^\circ$
Fig. 1-a



$\theta > 90^\circ$
Fig. 1-b

Table 1 市販高分子皮質膜の滴形法による接触 θ
(測定温度 35°C)

高分子名	接触角 θ
6 ナイロン	52
ポリカーボネート	42
ビニロン	54
マイラー(PET)	69
軟質塩ビ	73
ネオプレン	73
高圧ポリエチレン	81
シリコンゴム	90
ポリプロピレン	91
ポリ4フッ化エチレン	104
パラフィン	104

性防水層の材料としては、例えばシリコン、ポリプロピレン、テフロンが用いられねばならないことがわかる。

ところで、網状膜の材質の $\theta < 90^\circ$ のときには、孔径が小さいほど、しみこみは大きくなる。なお、Fig. 1-bの場合、fと等しい力を上向きに加えてやれば管内の液面は管外の液面と同じ高さに達することができる。すなわち、毛管を液面が通過し得る。ここで、その力を単位面積について考えると、

$$F = -f / \pi r^2 = -2 T \cos \theta / r \quad \dots\dots ④$$

となる。(F>0とするために負号を付けてある。)毛細管の集合体と考えられる物質については、それに接触する液体に、④式で表されるF以上の圧力を加えれば液体が浸透し、Fより小さい圧力では浸透しないことがわかる。すなわち、④式のFが耐水圧となる。ここで、Gore-Tex フィルムを毛細管の集合体とみなし、④式を用いてFを計算してみると、

$$T = 72.5 \text{ dyn/cm} \quad (20^\circ\text{C})$$

$$\theta = 104^\circ$$

$$r = 0.2/2 = 0.1 \mu$$

の場合

$$F = -2 T \cos \theta / r$$

より

$$F \approx 3.58 \text{ kg/cm}^2$$

の値が得られる。実測値は最大孔径 $0.2/\mu$ の場合ほぼ、 4 kg/cm^2 付近の値が得られていて、計算値と大略一致する。

6. ゴアテックス

6-1 歴史

ポリテトラフルオロエチレン(テフロン)のフィルムを研究していたロバート・ウォルトン・ゴアは、テフロンのフィルムをタテ・ヨコに引き伸ばしてそのまま、それを少なくとも 327°C まで加熱して後に冷却すると、平方インチ当り90億個の穴があいたものができることを発

見し、1973年6月14日にW・L・Gore社によって、米国特許が出願された。この製品はフィルターバック、マイクロフィルター膜、紐、スフ、縫糸、接着シール材、人工血管、ラミネート織物等が工業化され、いろいろな分野で実用され、このうち、ラミネート織物は4年間の研究の後に、1976年1月1日から主として戸外用素材として市販されている。最近、第二世代と呼ばれるものが主として販売されるようになったが、これはゴアテックス膜の内側(裏側)に油脂質を吸収し、水分は透過する膜をコーティングしたもので、人体からの油脂分によってテフロン膜の撥水性が低下するのを防ぐ効果をもったものである。また防風性もよく、そのために保温性にもすぐれている。但し、このものは、通気性が無いのでテントに用いると酸欠等の事故を起こすおそれがあり、テントには第一世代を用いなくては行けない。

6-2 電顕写真

ゴアテックス(ラミネート織物)を電子顕微鏡でみると、ナイロンやポリエステル糸の織り目の間に、ゴアテックス(フィルム)が見える。Fig. 2は表面側から見た

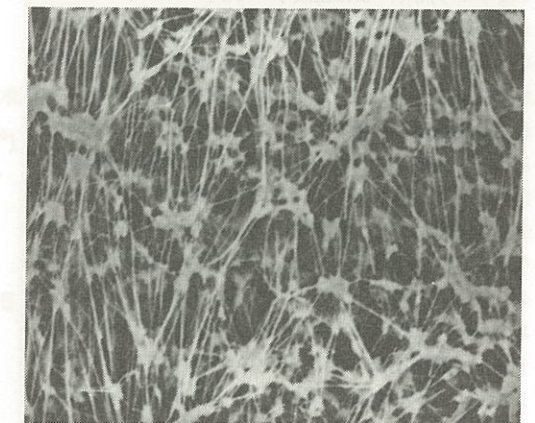


Fig. 2 ゴアテックス第一世代
表面から見た図($\times 10,000$)

ものである。これをナイフで切断して側面から見てみると、網状構造が立体的になっていることがわかる。だから、90億個の穴といっても、実際は非常に複雑で曲りくねったトンネルになっているわけである。ゴアテックスはフィルムだけでは強度が不足するので他の織物または不織布と二層または三層のラミネート構造になっている。これをゴアテックスラミネート、またはより消費者にわかりやすいようにゴアテックスファブリックと呼んでいる。

7. 透湿性について

問題は、透湿性の原因となるdriving forceである。どのような力によって水分は膜や布を通るのか、そのdriving forceに対して透湿性の値を評価しなければならない。一般に、JIS等の透湿性の測定では、このdriving forceを一定にするように条件が設定されていて、特に注意を引かない。そのために、透湿性の値の高い材料は、どんな条件でも蒸れない、と考えられている場合が多いようである。透湿性のある材料は、それ自身でまるで電気を通じた換気扇のように、水分を一方向に排出すると考えることはできない。このような問題を考えてみると、自然界には、膜を通して物質の移動する現象がたくさんあることに気がつく。例えば、人間の膜の中では、肺胞を満たしている空気と、肺の組織を流れている血液との接触によって、酸素が肺胞から血液中に拡散して赤血球中のヘモグロビンと結合し、一方、静脈の血液からCO₂が肺の空气中に放出されている。このような拡散が一定方向に行われるのは、肺胞の空气中の酸素分圧(110 mmHg)が、血液中の酸素分圧(60 mmHg)より高く、また血液中のCO₂の分圧(47 mmHg)が肺胞空气中のCO₂の分圧(40 mmHg)より大きいという理由による。この場合、気体の拡散は、肺胞の呼吸膜の毛細管を通じてなされるが、呼吸膜を通り抜ける気体の拡散速度は、膜の厚さ、膜の表面積、膜内外の気体の分圧の差などに支配される。(例えば気体拡散速度は膜の厚さに比例するので、肺水腫で膜の厚さが増すと気体交換機能は著しく阻害される。)ゴアテックスの水蒸気の透過性(透湿性)も、この肺胞の呼吸膜と同じ原理によるものと考えることができる。同様に、テフロン網状体膜の毛細管を水蒸気が一方向的に通過するのは、膜の両面の水蒸気分圧の差がdriving forceであり、それ以外には膜の表面積、膜の厚さ、膜の面にラミネートされた布の性質等に支配されるものと考えることができる。即ちいま、

$Q = \text{水蒸気移動量}$

$S = \text{面積}$

$t = \text{時間}$

$\Delta E = \text{水蒸気圧の差}$

$K = \text{定数(布の条件や測定条件による値)}$

とすると、一般に Q は S 、 t 、 ΔE の関数と考えられるので、

$$Q = f(S, t, \Delta E) \quad \dots\dots ⑤$$

と表わす。ここで、 Q は S および t には比例するものと考えてよいので、ある素材について、単位面積、単位時間あたりの水蒸気移動量を q とすれば、 q は ΔE の関数であり、

$$q = Q/S \cdot t = K \cdot F(\Delta E) \quad \dots\dots ⑥$$

と表せる。実験によると、単位面積・単位時間あたりの透湿量は ΔE と原点を通る直線関係にあることがわかる。

例えば、いまレインコートの中の温度が20°C・湿度52%で、外気の温・湿度が5°C・60%のとき、水蒸気圧の内側は9.118 mmHg、外気は3.925 mmHgとなり、その差は5.193 mmHgとなる。これがdriving forceとなつて、水分は内から外に透湿することとなるものと考えられる。また、衣服内が20°C、75%のとき、外面が一面に5°Cの雨水に覆われたとしても、水蒸気は内から外に出てゆく。だからゴアテックスファブリックの表面に撥水性を持たせることにはあまり意味がない。

7-1 実験方法

実験はカップ法の要領で行った。内部直径7.2 cm、高さ約6.5 cmのポリプロピレン製の保温カップ(サーモス社; スナックジャー220 ml容量)に各種の温度の水を入れ、水温を測定したのち、あらかじめ温・湿度を調整した人工気候室に一昼夜放置したのち、人工気候室内に、風の影響を除いて放置し、15分間経過後再び重量を測定し、水温も測定した。なお、一定気候条件下では、時間と重量変化は直線関係を与えることを確かめておいた。人工気候室内の温・湿度は、アスマン通風乾湿球温度計で測定した。保温カップ内の温度は実験中殆ど変化しないが、測定開始前と後の平均値を用いた。試料はゴアテックスファブリックの第一世代、第二世代それぞれ一品種を選び試みた。いずれも登山用パルカに普通用いられるもので、表面ナイロンタフタ、裏面ナイロンニットである。ジャーの温度、約4°C~30°Cで、人工気候室の温・湿度は15°C・46%~38.2°C・80%の範囲であった。

7-2 実験結果

カップの内部よりも外部の方が水蒸気圧が低いとき、水蒸気圧差(ΔE)は+(正)とし、逆にカップの内部より外部の方が高いときを-(負)とした。また、カップの重量が減少したとき、つまりカップの水が外部に出ていったとき、透湿量(Q)は+(正)とし、逆にカップの水の重量が増したとき-(負)とした。この場合に、布が十分に薄くないときは、布中の水分の透過抵抗が大きくなることが考えられる。また、布の水分が人工気候室の湿度と平衡していないときや、布の内外の空間の水分の差が著しいときには、布の面で結露や、乾燥、吸湿等が起こると考えられる。これらはカップ法では避け難いことであるが、測定に当たって注意をはらった。実験結果をFig. 3(ゴアテックスファブリック第一世代)、Fig. 4(ゴアテックスファブリック第二世代)に示す。

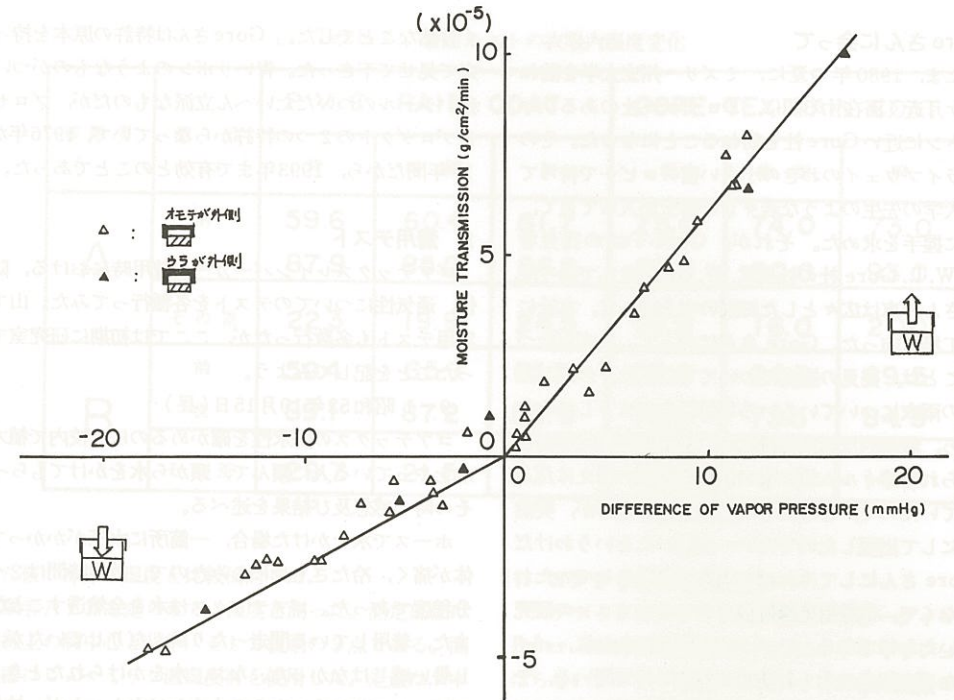


Fig.3 水蒸気圧の差と透湿量の関係(ゴアテックス第一世代)

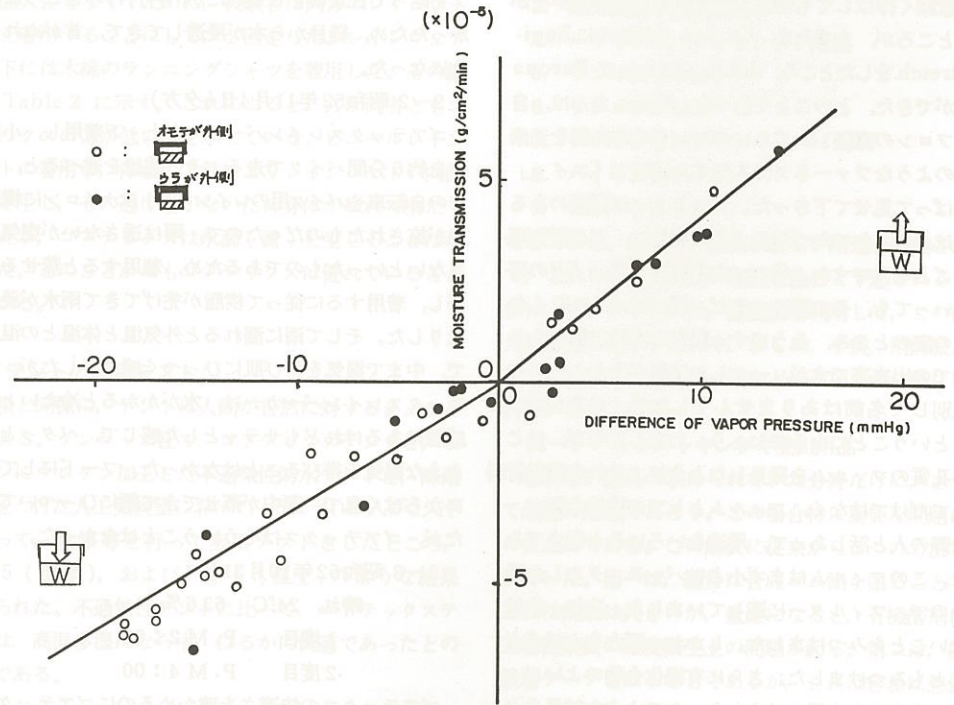


Fig.4 水蒸気圧の差と透湿量の関係(ゴアテックス第二世代)

8. Goreさんへ会う

たまたま、1980年の夏に、ミズリー州立大学を訪ねて、1ヶ月近く滞在する間に、Du Pont社のあるウィルミントンに近いGore社を訪ねることになった。その朝、ドライブウェイのわきの小さい宿のロビーで待っていると大学の先生のような若々しい紳士が入ってきて、親しげに握手を求めた。それが、Gore-Texの発見者であるW. L. Gore社の社長R. W. Goreさんであった。Goreさんの車は広々とした田園の中を走って、本社に寄り、工場に向った。Goreさんに会って、まずおたづねしたことは、発見の歴史についてであった。わたしは登山用の雨衣についていろいろな材料をテストしてみた経験から、理想的な雨衣材料には、撥水性の多孔性物質でつくられたフィルム状のものがよいかとの考えにたどりついていたので、まさにその結論に近いものが、突然のように出現したのでたいへん驚いたというわけだが、Goreさんにしてみれば、雨衣の研究をしていたわけではなくて、電線用絶縁材料としてのテフロンの研究をしていたわけである。テフロンの商品のなかに、パイプのつなぎの部分の水もれ防止に巻きつけて用いる、テフロンのフィルムがあって、それを延伸するために、中央部を電気炉に入れて、両手で左右に引き伸ばす実験をしていたが、たいへん難しく、高い温度にして、ゆっくり注意深く伸ばしても切れてしまつてうまくいかなかった。ところが、たまたま、「エイッ」とばかりにRapidly stretchをしたところ、much strongでPorousなものができた、とのことであった。Goreさんは、自分でテフロンの直径1cmぐらゐのロッドの中央部を元素分析用のようなファーネスに入れて、両手で「エイッ」と引っぱって見せて下さった。ヒストリーに興味のあるわたしは、かさねてたづねる「その発見は、どの研究所のできごとなのですか」Goreさんは答える。「どの研究所といっても、その頃は、まだ、Newarkの近くのわたしの家のところ、そうです、現在の本社工場のあるところでの出来事ですが、一つしか工場がなかったのが、特に区別して名前はありませんでしたが、まあGore Plantということになるでしょう。わたしたちが、はじめて多孔質のフィルムを発見したときに、これを電気材料としてだけではなく、フィルムとしての性能を調べ、他の分野の人と話しあって、用途をいろいろと考えてみました。このフィルムはまず小さいパーティクルしか通さないで、フィルターに適していました。次に、水は透らないことを見つめました。しかし、圧力をかけると透ることも見つけました。さらに有機化合物のよいフィルターであることも見つけました。このような結果をレインウェアに適用したのはアメリカのドクターにはご

く自然なことでした。」Goreさんは特許の原本を持って来て見せて下さった。青いリボンのようなものがついて、赤いシールのついたたいへん立派なものだが、プロセスとプロダクトの2つの特許からなっていて、1976年から17年間だから、1993年まで有効とのことであった。

9. 着用テスト

ゴアテックスレインパーカーの着用時における、防水性、通気性についてのテストを各種行ってみた。山での実用テストも多数行ったが、ここでは初期に研究室で行ったことを記してみよう。

9-1 昭和52年10月15日(昼)

ゴアテックスの防水性を確かめるのに、校内で植木に水をやっている人に頼んで、頭から水をかけてもらった。その時の感想及び結果を述べる。

ホースで水をかけた場合、一箇所に水圧がかかって身体が痛く、冷たさも身にしみたので、放水時間は2~3分程度であった。ゴアテックスは水を全然透すことなく、また、着用している間走ったり跳んだりしていたが、蒸し暑い感じはなかった。なお、水をかけられたとき、ゴアテックスそのものからの水もれはなかったが、衿付けの縫目から水が浸透してきた。その他の縫目(脇、袖付け、ポケットetc)は水がもられないように、裏からテープを貼って目止めをしていたが、衿付けのところだけなかったため、縫目から水が浸透してきて、首がぬれるはめになった。

9-2 昭和52年11月4日(夕方)

ゴアテックスレインパーカーを上・下着用し、小雨の中を約6分間バイクで走る。その感想を述べると、今までの自転車やバイク用のレインコートはナイロンに樹脂加工が施されたものだったので、雨は透さないが空気も通さないといったものであるため、着用すると蒸せる感じがし、着用するに従って樹脂が剥けてきて雨水が浸透したりした。そして雨に濡れると外気温と体温との温度差で、中まで湿気を帯び肌にひっつく感じがしたが、ゴアテックスレインパーカーは、水がかかると冷たいという感触はあるけれどもサラッとした感じで、ベタッとするような湿気を帯びることはなかった。フードにしても、口からはく息で、顔中が蒸せてきて顔にひっついて困ったが、ゴアテックスはそういうことはなかった。

9-3 昭和52年10月31日

晴れ、24°C 63.6%

1度目 P.M 2:00

2度目 P.M 4:00

ゴアテックスの快適さを確かめるのにゴアテックスレインパーカーとビニルレインコートを共に上下着用し、

Table 2 着用テストの衣服内温度変化

被験者	測定	P. V. C. RAIN COAT			GORE-TEX RAIN COAT		
		背	後 胸	胸	背	後 胸	胸
A	前	59.6	60.4	61.7	75.0	74.0	73.0
	後	87.9	85.0	86.2	89.9	90.0	93.0
	その差	22.3	19.9	24.5	14.9	16.0	20.0
B	前	59.4	65.7	65.9	63.0	64.3	69.5
	後	89.1	87.2	88.0	79.0	73.5	84.3
	その差	29.7	21.5	22.1	16.0	9.2	14.8

走った後の身体の温度を比較検討した。

被験者A・Bを走らせて、湿度を測った。測定部位は胸囲線上の胸中心と背中、そして後胸の3点である。測定機器はヒューミック温湿度計を使用した。走量は、本学院第一学舎での本館1~8階の階段の昇降と文学館地下から2階まで行き、中央館に続く渡廊下を通り抜け、中央館1階から繊維化学研究室までで約6分間であった。尚、個人差をなくすために、被験者は両方のレインウェアを着用することにして、2回走った。レインウェアの下には本綿のランニングシャツを着用した。その結果をTable 2に示す。これによると、AB両者ともゴアテックスの方が低い値を示している。ビニルレインコートの着用中、体温の上昇によりレインコートの内面に露を生じ、その逃げ場がないため身体がぬれて冷たくなったが、ゴアテックスは水滴(露)を生じることはなかった。このことからゴアテックスは優れていることがわかる。

10. テントの実用テスト

衣類と同様に、テントは人間が自然に対するシェルターである。ダンロップ社で、ゴアテックステントと、ナイロンにウレタン加工した不通気性防水テントを、降雨装置をつけた人工気候室において、それぞれに人が2人ずつ入って、炊事等を行って実用テストをしたところ、Fig. 5(温度)、およびFig. 6(湿度)のような結果が得られた。不通気性テントに比べて、ゴアテックステントは、高温多湿にならず、はるかに快適であったとのことである。

11. ゴアテックス布の用途

ゴアテックスファブリック部門のマネージャーであるPeter Gilsonさんはたいへんにエネルギッシュな、すばらしいリーダーだが、ゴアテックス布の商業ベースで成功している用途はおよそ次のようなものだという。

1. バックパッキング及びハイキング用品
2. 登山用品
3. 荒天装具(帆走用品)
4. ハイキング、フィッシング用品
5. ランニングウェア
6. ランニングシューズ
7. ファッションブーツ
8. ハイキングブーツ
9. スキーウェア

などである。この他、沢山に新しい用途が開発されていて、これらの中には高い収益を生むと予想されるものも多い。ゴアテックスは、機能性を利用して、この他、例えば病院のマットレスや、おしめ、手袋、消防服、化学工場作業衣、水上スキー服などいろいろの分野に用いられている。

11-1 バックパッキングや登山用品

むれない雨具の求められていた分野だけに、さし当って最適の用途であろう。この場合特に重要な問題は縫目の目止めである。この解決に以来から3つの方法がとられていた。第一は、縫目に合成ゴム糊を塗ることである。これは効果は大きいですが、量産になると、有機溶剤による工場従業員の環境衛生上の問題が起る。第二は、縫目に接着テープをはることであるが、これは容易に想像するように剝離の問題が起る。第三にドイツの製品に今なされている電気接着であるが、これはスキーでドシンと

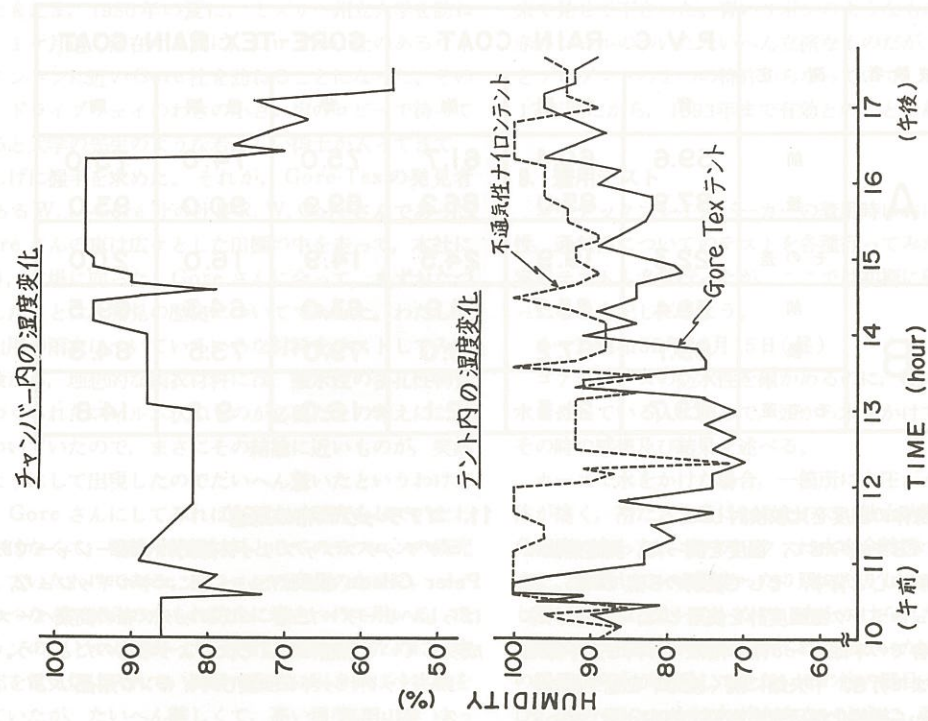


Fig. 6 テントの実用テスト(湿度)

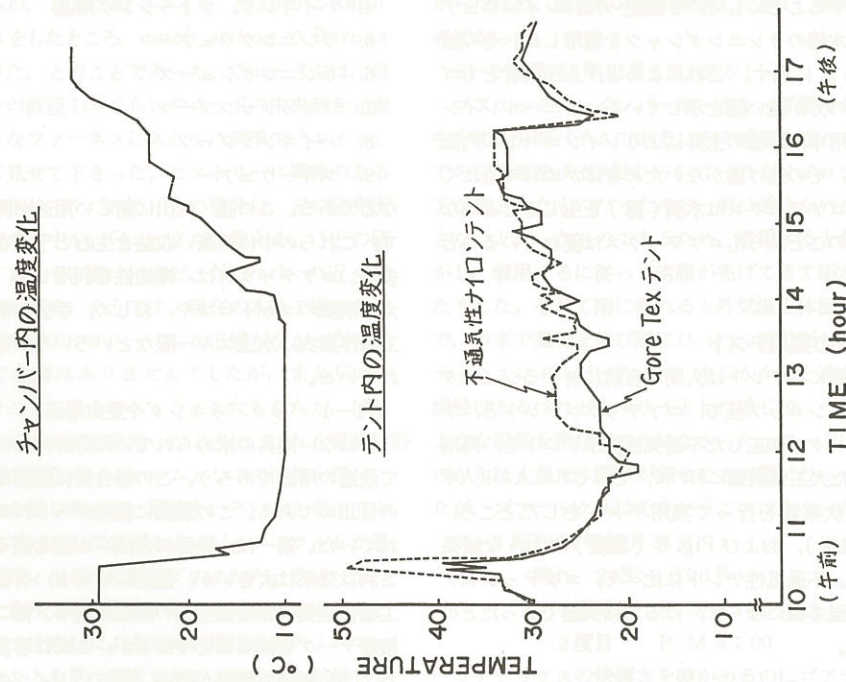


Fig. 5 テントの実用テスト(温度)

尻もちをついたようなときに、縫目に直接かかる引きはがしの力に耐えられないで、パットズボンのうしろが全開するといった事故が知られている。このようないくつかの方法を試みた経験から、Gore社では研究の結果、熱風を用いる特殊なテープ熔着ミシンを開発し、ドイツのミシン会社に製造させて発売している。

このような通気性防水布を用いると、テントと寝袋を一体としても支障はないので、寝袋の頭の部分にだけ帽子のひさしのようなおおいをつけて、寝袋のまま雨の中で寝るようなものが流行している。なお、ゴアテックスのテントの中で煙草をふかすと、煙の粒子は大変に大きいので、ゴアテックスの穴から出ていかないために、不愉快だ。逆にそのことを利用して空気を浄化する装置がつけられている。

11-2 帆走, ハンチング, フィッシング

ヨットの上で船べりに腰をかけて帆を操るときに、すべらないように、砂をまいて座るのだが、そのような手荒い摩擦に耐える防水布が必要になる。ゴアテックスでは三枚重ねのうち、外側の布に特に厚いナイロン地を用いて、このような用途向けのものが作られている。ゴアテックスは、ゴワテックスと呼ぶ人もあるように、ゴワゴワと音を立てる欠点がある。これは相手の動物に、こちらの接近を知らせることになりかねない。この厄介な問題の解決に、ラミネートするナイロン布の薄いものを用いる試みがなされたが、その結果、紙のような性質が出て、かえってパリパリしたものになった。一方厚い肉のある布がラミネートされたが、これはキャンパスのような厚ぼったい感触と、いったん雨にぬれるとぐっしょりと水分を含んで重くなる欠点があった。ゴワゴワと音を立てないゴアテックス布の開発は動物に対してだけでなく、敵に発見されては困る用途、つまり軍用衣服のためにも大きい課題となっている。

フィッシング用衣服には、しばしば魚の油分がなすりつけられる。このような油は、テフロンにとって親和性の成分であるから、ゴアテックスの多孔性の空隙が、容易に油によって埋められてしまい、通気性、防水性能をそこなわれてしまう。同じような問題は、アメリカ人は肌に直接に、防水衣を着用するので、人間の油脂質によって内側が汚れるときにも起こる。このような問題の解決のために、第二世代のゴアテックスと呼ばれるタイプのものが発売されている。その内容は不明だが、第四の層によって油分を吸ってしまっ、ゴアテックスの空隙に入らないようにしたものと想像される。日本人のように、清潔好きで、また、肌にシャツを着る習慣のある者には、あまり重大な問題とは思われない。汚れたものは、洗たく機に入れて、強洗たくをすると、防水性能が

回復するが、この場合に「住いの洗剤」のような、油汚れに適した洗剤が、良い結果を示す。

11-3 ランニング

草原や、ブッシュや森の中を早朝に走るとけっこう朝露が、パンツをぬらすものさそうである。パンツよりもぬれて困るのは、シューズである。朝露のいっぱいある草原や、庭を走れば、木綿のズック靴は、ぐっしょりとぬれて、たいそう不愉快であるに違いない。このような用途に、ゴアテックスのジョギングシューズは、最適である。

11-4 ブーツ

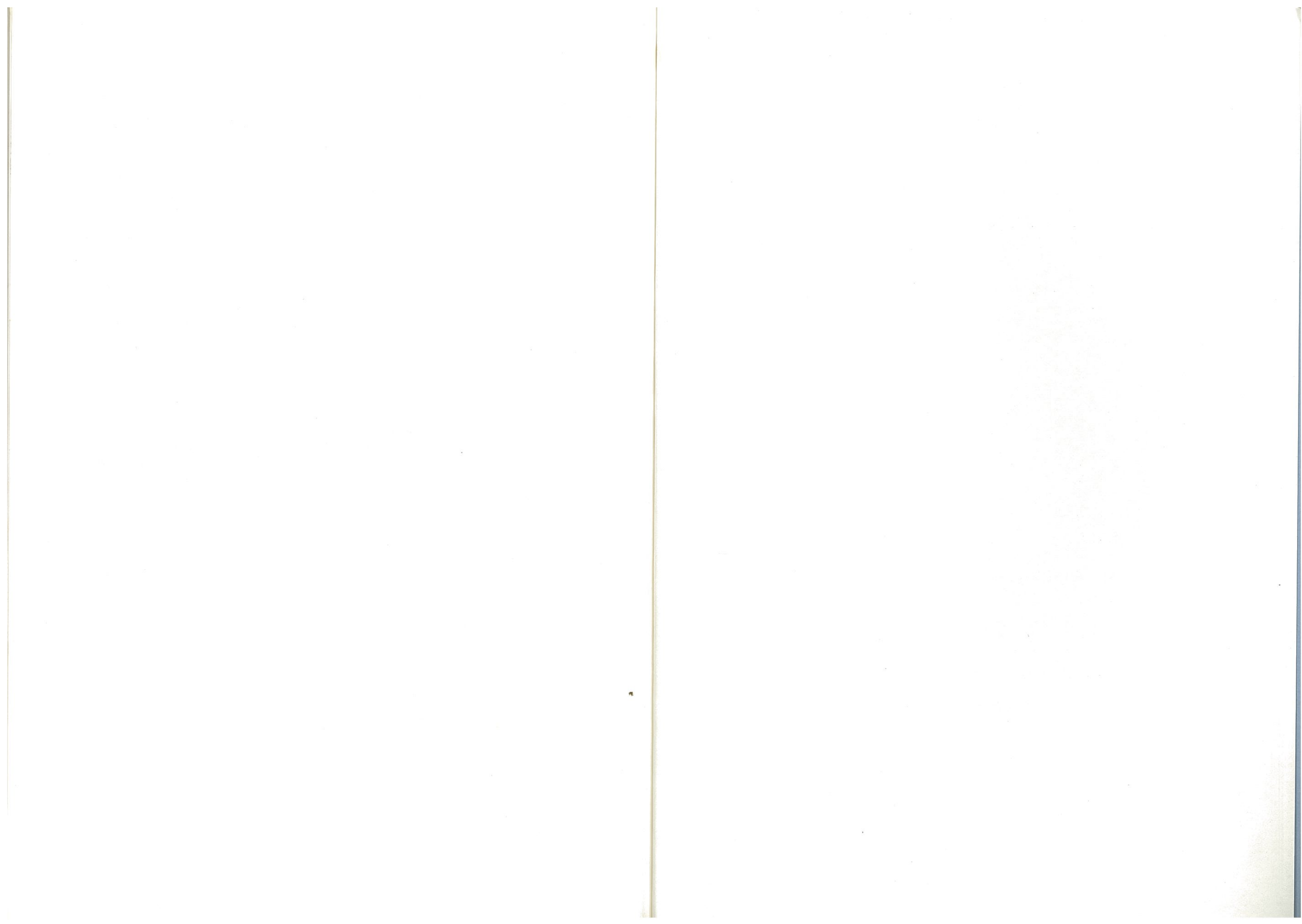
最も興味のあるのは、婦人用のファッションブーツである。ゴアテックスのブーツが、ニューヨークを中心に爆発的に流行している。Gore社は布をヨーロッパに送って、一流のデザイナーに、ファッション性の高いものを作らせて売っている。1足がだいたい60ドルだ。

11-5 スキーウェア

外から雪によってぬれ、内側から、はげしい運動によって発汗し、しかも防寒性と、カラフルで美しい光沢やデザインを要求されるスキーウェアは、ゴアテックスにとって、最も有望な用途で、とくに羽毛を入れているいわゆるダウンクロスは発展するに違いない。同じように、冬山登山の用途にも、もはや欠くことのできない材料となっている。ゴアテックスのダウンクロスを着用して、雪の穴の中で、夜をすごすことは、従来のような、コーティングしたヤッケやありきたりの羽毛服に比べれば、はるかに安全で、条件が許せば雪の中で、眠ることもできる。

参考文献

- 1) 安田 武, 横山宏太郎, 井尻登喜子; 日本繊維製品消費科学会誌投稿中。



編集後記

本号がAACK 50周年記念号として、記念事業の1つチベット高原学術登山隊のカンペンチン峰初登頂の報告で飾れたことはなによりも喜ばしい。

ただこの山はチベットにおける我々の本命の恋人ではなかった。彼女は未だチベットの奥深く処女のベールをまとって聳えている。やがてこの彼女を射止めるためには、今回の遠征の経験を早急に記録しておかねばならない。

とりわけ中国における登山は、マネージメント、輸送、食料、中国側協力員などの点で、今までのカラコルムやネパールの経験とは違った要素が多い。本報告ではとくにこの点に留意して各隊員に執筆してもらった。

また50周年記念号なら誌上にこの会の足跡をたどった記事を掲載すべきであろうが、これは「AACK 50年史」として別に出版の予定である。本号ではヤルンカン以後の会員の動きを酒井敏明氏にまとめていただいた。

さらに50年史の基礎資料として5号のAACK年表をひきついでもらった。正確な50年史編さんのため、会員諸氏の過誤・補充の意見を聞かせていただきたい。

本号はヤルンカン以来5年ぶりの発行である。この間の会員の活躍を出来るだけとりあげたかったが、すでに報告の出ているものは割愛させていただいた。

それにしても情報過多の時代、5年間も当会の情報誌が滞ったことは、50年という歴史と共に大世帯にふくれあがった本会に動脈硬化が兆している一つの証しとれないか？ 創立50周年を機に久恋のチベットに遠征し再びボルテージが高まりつつある今こそ、AACKのつづく半世紀へ向って活力をそそぎたいものである。「時報」が過去の記録にとどまるだけでなく、次期の活動への糧として活かされることを願う。

多忙な中、玉稿を寄せていただいた執筆者諸氏に深く感謝致します。
(前田 司)

昭和57年9月20日 発行

発行所 京都市左京区吉田本町京都大学内
社団法人 京都大学学士山岳会
TEL (075) 771-2500

代表者 AACK会長 近藤良夫

印刷所 (株)土倉事務所
京都市北区小山西花池町1の8
TEL (075) 451-4844

